ソードアート・オンライン　～無刀の冒険者～

KT@ヘタレの人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソードアート・オンライン　～無刀の冒険者～

【Ｎコード】
Ｎ０２６５Ｘ

【作者名】
ＫＴ@ヘタレの人

【あらすじ】
「無理だ。勇者になんかなれるわけがない。俺の人生は脇役街道まっしぐらなのだから」。デスゲーム、ＳＡＯの開始直後のマイナス思考によって、少々特殊な成長をすることになった男、シド。これは、最前線の一歩後ろ、キリト達攻略組を影から支えた一人の男の物語……。※この小説は電撃文庫「ソードアート・オンライン」の二次創作になります。ＩＦ展開では無く、原作の裏サイドのような形式ですが、矛盾があったら申し訳ありません。また、本編の面々もある程度登場し、主人公の強さは「攻略組で平均」くらいの予

定です。１１／２０ＡＬＯ編、開始致しました！

ｅｐｉｓｏｄｅ１　一極化型の憂鬱（前書き）

初めての二次創作となります。よろしくお願いします。

episode1　一極化型の憂鬱

（まいったなあ…）

内心で俺はため息をついた。ＶＲＭＭＯ…いや、今やデスゲームと化したゲーム、《ソードアート・オンライン》。全百層の巨大な空飛ぶ鉄の城、《アインクラッド》からなる、とんでもなく広い世界。

その巨大な世界の中、俺が今いるのは第十八層のダンジョン、『ゴブリンの塔』。上層へと繋がっている迷宮区とは異なる、フィールド上のダンジョンの一つである。今の最前線からはたったの三層しか変わらない上に敵の経験値が同レベル帯ではかなり高いくせに敵のポップの多いダンジョンで、場所によってはパターンさえ見抜けば短時間に大量の敵を狩ることができる、いわゆる『レベル上げ（ファーミング）スポット』だ。

だがしかし、昼間を過ぎたくらいの時間にも関わらず、俺以外の人影は見えない。他の『レベル上げスポット』なら待ちの列が出来ていても不思議はないのだが。その理由も、広く知れ渡っている。一言で言い表そうと思えば、このダンジョンの通称を言えばいい。

（こいつは、思ったよりも大変だ…）

「忍者屋敷」。

何の変哲もない通路から飛び出す針の罠。階下へとプレイヤーを叩き落とす落とし穴。そもそもが複雑な三次元的構成な上に、罠、罠、罠のオンパレードだ。そして出てくる敵であるゴブリン達も、数値的なステータスは低いものの、個体によって弓矢や斧、槍など

で対策が異なってくる。
結果、『レベル上げスポット』である四階の大広間まで達すること自体が大変なために、攻略組は敬遠し、やってくるのは今のところドロップする敵の少ない『弓矢』使いのプレイヤーが、モンスタードロップのアイテムを求めてやってくるくらいだ。

（うおっとっ！ここもかっ！？）

安全地帯と思って隠れていた曲がり角に、ゴブリンアーチャーの放った弓矢が肩に突き刺さる。革製の上着は今現在のプレイヤーメイドでは最高レベルだが、いかんせん革製装備だ。しかも、鎧ですら無い。一発くらっただけで５％くらいが削られる。が、慌てることはない。ソロプレイの基本として、各種結晶も回復ポーションも十分な量を用意してある。

（よっと！）

俺は勢いよく床を蹴って、弓の飛んできた方へと走り出す。鍛えた『索敵（サーチング）』のスキルのおかげで、敵が三体居ることが分かる。相手はこちらがターゲットしたのに気付いて、慌てて逃げようと身を翻し…

「はぁっ！！！」

た、ときには既に、俺の放った単発体術スキル、《スライス》で一体を仕留め、そのまま流れるように強攻撃で一体を怯ませる。慌てて切りかかる剣士型モンスター、ゴブリンファイターを《エンブレイサー》の貫手で貫く。最後に、体制を立て直した一体を蹴り技、《ロール・スラッシュ》の回し蹴りで倒した。

この間、わずか数秒。これは何も、俺が「俺スゲー」と自慢したいわけではない。単純な敏捷補正値のせいだ。勘のいい人ならもう気がつくだろう。

俺は、この世界で恐らく唯一の『敏捷一極型』ビルドのプレイヤーだった。

episode1　一極化型の憂鬱2

ソードアート・オンライン。
このかつて無いハイクオリティのゲームがデスゲームとなって俺が正気に戻った時まず考えたのは、「俺に何が出来るか」だった。一応βテスターとしてある程度の知識はあったものの、現実世界では特に武道の経験も無く、ゲームの才能も「好きこそものの上手なれ」以上のものでは無い。

（どうするか…）

慎重に、考える。このゲームを攻略するために、最前線で戦う。RPGでいうところの「勇者」の役割。それを切り捨てることから俺の思考は始まった。無理だ。柄じゃない。俺は今までの人生、脇役街道まっしぐらで生きてきたのだ。いまさらそんな「主役」になれるとは思えない。

今にして思えば、この思考は少々特殊なものだったらしい。なぜならSAOはVRMMOであり、VRMMOは「決められた勇者がおらず、誰もが勇者となれるゲーム」だからだ。だから後に『攻略組』と呼ばれる面々とは、俺のステータスは大きく異なる。

俺がやらかしたのは、初めてのレベルアップ時。俺は全てのボーナスポイントを『敏捷』につぎ込んだ。初めてだけでなく、次も、その次も。ネットゲームでよくある『一極化ビルド』を考えたのだ。今考えなおせば、結構気が狂った発想だ。このやり直しのきかないデスゲームにおいていわゆる『ビルドエラー』をやらかしてしまえば、文字通り致命的だ。だから他のプレイヤーは皆、大小の差はあれど『筋力』と『敏捷』をバランスよく上げていた。俺はそんな連

中をよそに、ひたすらに『敏捷』を上げ続けた。

結果。俺は、皮鎧すら満足に装備出来ない、超非力キャラとなったのだった。

◆

一気に三匹を仕留めて、その先の通路を確認する。一旦ポップは途切れたらしいが、ここで待っていればまた湧いてくるのは間違いない。今回は三体で済んだが、もっと多数…最悪ＨＰの高い大物が出てこようものなら、ここで転移脱出さえありうる。

（いくしか、ないかぁ…）

先程まで覗っていた、通路の先。次の階へと続くその場所に、上の階への階段はなかった。あるのは、身長を超える程の四角い壁。が、次々と連なる姿。

（これに、飛び乗って、だよなぁ……）

この世界では、目に見えるパラメータは『筋力』『敏捷』の二つだが、それによる動作の演算は非常に複雑だ。単純な直線のランニングなら敏捷値のみの補正を受けるが、敵を殴って与えられるダメージは敏捷値よりも筋力値が大きく影響するし、坂道のダッシュだって若干筋力値の影響を受けるように感じる。

そして今回。

（跳躍、も、筋力値の補正受けるんだよな…）

俺の非力アパターでは、恐らく一息で飛び移っていくことはできまい。縁に掴まりつつよじ登るくらいは出来るだろうが、それは完全に自力で行うことになる。そうなれば体を持ち上げる動作は筋力補正で行うために「よっこらしょっ」にならざるを得ず、もしそこに「弓矢持ち」がポップしようものならいいマトだ。

だが、迷っていても自体は好転しない。

（ええいっ、男は度胸！）

焼け石に水かもしれないが『隠蔽（ハイディング）』を発動する。ついでに『忍び足（スニーキング）』とか『索敵（サーチング）』とか、鍛え上げまくった補助スキルを片端から発動していく。これだけやればどれか効いてくれることを祈りつつ。

完全に無音、息の音すら消すような、慎重に慎重を期した動作。まさしく「忍者屋敷」にふさわしい動きで、壁をにじにじとよじ登っていく。

一つ。
二つ。
三つ。

そして最後の一つを登りきった時。

うろついていたゴブリンの群れと、ばっちり目があった。

episode1　一極化型の憂鬱3

デスゲーム開始当日。

俺は、二つのスキルスロットを『索敵』と『隠蔽』で埋めた。戦闘は、正直とても出来るとは思えない。ならば、それ以外の面で力を伸ばしていけばいい。ならば一つでも多く、ダンジョン探索に必要なスキルをとって、それを生かしたプレイをして皆をサポートする、なんてどうだ、と考えたわけだ。俺の座右の銘は「人のやりたがらないことは、自分が進んでやる」だ。

ちなみに説明書きによれば、この行動ははっきり言って自殺行為だったらしい。この世界の攻撃は、「ソードスキル」というものを軸に組み立てていく前提で作られている。普通に剣で敵を斬るのとソードスキルで斬るのとを比べると、はっきり言って倍ではきかない差がある、ように感じる。そしてそのソードスキルを行うためには、その装備に対応したスキルスロットを入れなくてはならない。たとえば『片手剣』のように。俺は、それを拒否したのだから。

レベルアップで増えていくスキルスロットのほとんどを俺は探索用、ソロプレイ用のスキルで埋めまくっていき、どうしても必要になった戦闘スキルは『体術スキル』を入れた。『敏捷一極化』のビルドだった俺は、まともな武器を装備することが出来なかったために、そうせざるを得なかった、というのが正直なところだが。

そうやって、レベルを上げ、スキルを鍛え、ダンジョンを潜ってクエストをこなし。そのレベルが二十に達する頃には、俺は両手無装備、徒手空拳の格闘家で、『盗賊（シーフ）』クラスとしてかなり特化したスキル構成を持つようになっていたのだ。

◆

（ぬおおおおおっ……！！！）

走る、走る、走る！

『敏捷』一極なめんじゃねえぞおおお！

ダンジョン内の石畳から煙すら上げかねない速度で、俺は空間を走り回っていた。助かったことに、この三階は回廊がぐるりと塔の外周を縁取っており、上層への階段は隠し通路を探すタイプのもののようだ。回廊には妙な上がり下がりがあって『敏捷』のみでは走りづらいが、それでもゴブリン達相手にスピード負けしたりはしない。逃げる間も幾つかの床には落とし穴、剣山、アロートラップがみられたが、俺の『罠看破スキル』はそれらを未然に発見し、危うい床を避けて走る。

前方に、忍者よろしく廊下の石壁を回転させてゴブリンランサーがポップする。そいつを走ったまま使える体術突進技、《ムーブ・アタック》で弾き飛ばす。体術スキルは威力面で武器を使ったソードスキルより格段に劣るが、技後硬直や出の速さはアドバンテージがある。スピードファイター（に、ならざるを得ない）の俺には、おあつらえ向きのスキルだ。

案の定倒すには至らなかったがピヨらせる程度の効果はあったらしく、体勢を崩してゴブリンが一旦停止する。本来ならここでラッシュへとつなぎトドメを刺すのが常識だろうが、今は追われる身。経験値はおしいが、な。

っと、そんなこと言ってる場合じゃない！

後ろを振り返れば、そこにはこちらに向かって奇声を上げて走ってくるゴブリンの群れ。おおー、すげー。十はきかないな、二十近くいるんじゃないか、あれ。先頭を比較的足の速い「剣持ち」が走り、時折その背後から弓矢が飛ぶ。

『トレイン』と呼ばれる非マナー行為のお手本のような振る舞いだが、こんな状況ではそんなこと言ってられないし、そもそも俺に過失はないだろう。ない、だろう？

とにかく、相手をしていては、とても身が持たない。そもそも俺がここに来たのはクエストであって、レベル上げでは無いのだ。無理して相手をする必要は、全く無い。一応ダンジョンである以上、迷宮区ほどの大物ではないにせよボスがいてもおかしくないのだ。

（……よし、逃げよう）

全力で逃走を決め込んで、俺が周囲の石壁に目を向ける。むやみに取りまくった探索関係のスキルのどれかが発動して、それらの内、仕掛けのある壁が分かり、カーソルが浮かぶ。そのうち一つを選んで、とりあえず全力で押す。

回転扉になっていたそれが、ゆっくりと…って重い！？オイオイ、ここも筋力補正いるのかよ！？はやく、はやく、はやく！ゴブリン達の奇声が、どんどん近づいてくる。扉が、ぎし、と音を立ててホコリを落とし、やっと回転し始める…。

（間に合うか…っ！？）

背中に弓矢の数本頂戴するのは仕方ないと諦め、石壁が開いたらぎりぎりで滑り込もうとし、

「へ？」
「え？」

ちょうどその扉を挟んだ向こう側から声がして。
その人物が、ぽかん、と口を開けて、俺を見、俺の後ろを見。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！？」

ゴブリンの大群に、悲鳴を上げた。

ｅｐｉｓｏｄｅ１　ソロプレイ野郎共

そこにいた男の名は。

「キリトおおおおおおおおおおおっ！！？」
「ふざけんなシドおおおおおおおおおおっ！！！」

細い岩壁を挟んで、二人分の絶叫が響き渡った。一人は、キリト。攻略組でも有数の力を持つ剣士であり、俺と同じβテスト経験者のソロプレイヤーだ。ビルドは多分どちらかといえば筋力優位だ（基本的に相手のステータスを訪ねるのはマナー違反だ）が、その圧倒的な反射神経と判断力は他の追随を許さない反応速度を誇る。

今回も、絶叫の直後には腰の剣を抜き放ち、そのまま単発ソードスキル、《バーチカル》を繰り出す。二十層クラスでは反則的とも言える威力の片手用直剣が鋭く振り落とされて、そのまま先頭をきって襲いかかったゴブリンを両断する。

「なんだこりゃあああああああっ！！？」
「キリト、すまんっ！！！」

なおもキリトに殺到するゴブリン達を見つつ、俺は再び『隠蔽（ハイディング）』スキルを発動、そのままゴブリン達のタゲをキリトになすりつける。これで俺は、『忍び足（スニーキング）』さえしておけば、ゴブリン達にちょっかいを出さない限りは再度タゲられることはない。

だが、まあ。

（……このまま逃げたら、まずい、よなぁ……）

不可抗力とはいえこのまま不幸な遭遇者が死んでしまう（ことは、まずないだろうが…）のは寝覚めが悪いし、そもそも俺は既にキリトに顔が割れてしまっている。逃げてもすぐに掴まってしまうだろうし、最悪俺が要注意プレイヤーとして手配されてしまう（なんてことも、キリトならしないだろうが…）も、可能性としてはありだ。

叫びながらソードスキルを連発するキリトは、全く危なげない。攻撃が途切れないように軽めの技を連発し、合間を縫ってのモンスターから突き出される剣や槍を回避する。直後、放たれる横薙ぎの一撃は、《スラント》。横腹に受けたゴブリンの剣があっさりと砕かれる。

（へぇ……。あんなこと出来るのか）

武器に消耗度があることは実際使っていない俺も知っていたが、ああやって攻撃することで意図的に破壊できるとは、知らなかった。あいつが自分で見つけたんだろうか？キリトの奴のゲーム勘は、相変わらず凄い。

（っと……）

そんなことを思いながら、俺はゴブリンにぶつからないようにゆっくりと集団の後衛へと向かう。そこには、キリトに照準を定めようとする、数匹のゴブリンアーチャー。アーチャー相手にここまで肉薄していれば、たとえ攻撃力に不安の残る体術であっても手数で押し切れる。

「やあああっ！！！」

気合いをこめて叫び、最初の一体に強攻撃の正拳突きを叩きこむ。ＨＰバーを三分の一ほど減らしてふらついたところを、蹴り技のスキルで削りきる。続けて、今現在の最も手数の多い右の三連打、《トリプル・ブロウ》を放つ。この技はボクシングで言うボディーの高さを攻撃する技で、真正面と左右斜め４５度にほぼ同時に拳を放つ技だ。

一撃ずつ喰らったゴブリン達が吹っ飛んで、昏倒する。この技は、人間サイズの的であれば三発の内一発しか当てることが出来ないが、今のように上手く位置取りを考えて使えば複数の敵にヒットさせられる。威力も、フルブーストで打てばゴブリンのＨＰの半分は削れる。

続けて一気にラッシュをかけて、三体を次々と殴り倒す。爆散するポリゴンの向こうで、前線…キリトの方を見やる。勿論、心配なんて欠片もしていなかったが。

案の定。

キリトの《バーチカル・クロス》の二連撃が、最後の一体の大柄なラージゴブリンを切り刻み、はじけ飛ぶポリゴン片へと変えたところだった。

ｅｐｉｓｏｄｅ１　ソロプレイ野郎共２

「おまえなあ、シド…なんであんなことしてんだよ！？ＰＫか！？ＭＰＫなのか！？」

「苦しい苦しい、胸ぐら掴むなって。いやいや、ちょっと誤算があってな。そっちこそなんでこんなとこいたんだ？お前じゃなきゃ殺しちまってたぞ」

「……笑えねえぞオイ。今度なんか奢れよな。で、ここにいた理由？レベル上げだよ。多分そろそろ２１層のボス攻略に入りそうだし。レベリングなら、今はここが一番効率がいい」

「過疎ってるしなぁ」

階段の脇に造られた安全エリアで腰をおろしている男の名は、キリト。くたびれたロングコートを着た、盾なしの片手剣。装備だけを見ればスピード型、それも盾も持てない貧乏人にしか見えないが、その実この男は攻略組でも有数の、そして異色の攻撃特化型（ダメージディーラー）だ。

さらに、皮の鎧や盾を装備せず筋力の使用値を制限することで高められたキリトの三次元的な機動力は、全プレイヤーでも指折りのものだ。『ゴブリンの塔』のような立体的ダンジョンでは、その素早さは敏捷一極の俺より速いに違いない。

そうかと思えば装備している片手剣は今のレベル帯では最高級品…たしかドロップ品だったか…で、桁違いの攻撃力の代償に異常な筋力要求値をもつ剣だ。あの剣なら、たとえソードスキルなしでもここのゴブリンくらい一撃死させられるだろう。キリトにとって、ここはまさに絶好の狩り場だ。

だがまあ、そんなことを言うのも癪なので、とりあえずからかっ

ておく。

「そうだな。目立ちたくないキリト君としては、ここは絶好のポイントだよなー！」

「……別に、そういうわけじゃ、」

「うんうん、「装備するのが恥ずかしいから」って、鎧も盾も装備しない位の徹底ぶりだしなー！」

「…っ、それは関係ないだろ！！！」

この冷静な男が顔を赤らめるのも珍しい。なんでも聞いた話では、ボス攻略では鬼神のごとき勢いで剣を奮い、その様子は鬼気迫る形相でとても近寄りがたい程の空気がある…らしいが、俺は見たことはない。こんな顔を見れるの、結構役得かもしれないな。今度映像結晶（クリスタル）で保存してやろう。

「……なあ、シド。お前は、今回も参加しないのか？」

「ああ。だって俺のスキル構成、『盗賊（シーフ）』だし。純戦闘スキルの連中に混じれねーよ」

「シドのスピード、いいと思うんだけどな。確かに体術スキルはスイッチがしにくいけど、出来ない訳じゃない。他の連中が慣れさえすれば、」

「そのための練習時間も、もったいないだろ？トップギルドの皆さんに、俺みたいな風来坊のために時間を取ってもらうのは申し訳ねーよ」

馬鹿みたいにからかうことだけを考えていた俺に対し、キリトは結構真面目に考えていたらしい。最近迷宮区の攻略のペースがだんだんと上がってきている。最大勢力の『軍』の進撃もだが、なんでもかなりの凄腕剣士が攻略組に合流したらしく、怒涛のハイペースで前線を押し上げているそうな。

とにかく、高レベルの人材はいくら居ても多すぎるということはないのだろう。確かにレベルで言えば俺のそれも、目の前のこの男には劣るだろうがそれでも今の最前線のボス攻略に必要なくらいはある。

だが、俺はキリトの誘いを断った。

理由は、キリトが言ってくれたのもあるが、何より俺の性格的なものだ。この『盗賊』という本来仲間の助けが不可欠なクラスで、俺がソロプレイをしている理由は、単純に「パーティープレイが苦手だった」の一言に尽きた。

一度組んだパーティーメンバーに、「一緒にいるとなにか人形を連れて歩いてるみたいで気味が悪い」と言われたのはいつだったか。まあとりあえず俺は「自発的」とか「自己判断」とかが大の苦手だった。要は「なまけもの」だったのだ。

方針は、人任せ。ドロップ分配も、人任せ。その上戦闘もほぼ人任せとくれば、誰もパーティーを組もうとは思うまい。要するに俺は一人でいることで、「一人でせざるを得ない状況」を作りだして、逃げ道をふさいでいるのだ。今ではこれが落ち着くのだから末期症状だ。

そもそもネットゲーマーという連中は、そういった積極的に相手を観察して指示を出したりすることが得意では無い。俺のように「指示待ち人間」と一緒にいるのは、やはり相当のストレスがたまるのだろう。他人ごとじゃあないが。

まあ、今はいい。

さて、そんな俺の些細な楽しみ。

「で、キリト。いつも通り、今日は何か要望はあるかな？鍵開け、鑑定、アイテムの売り買い、なんでもござれだぜ？値段は外と比べてたった二割増し！この鑑定が、お客さんの命運を変えるかも！？他にも索敵…は、取ってたな、罠解除などなど、同行も含めていろいろ取り揃えてまっせ？」

『盗賊』クラスの俺の、もうひとつの顔。

『ダンジョン行商人』として、俺はお得意のキリトに笑いかけた。

◆

要するに団体行動が苦手だった俺だが、そんな俺が曲がりなりにも攻略組……少なくとも、それに近いポジションを維持出来ているのは、一重に俺の成長の方法…経験値稼ぎのやり方に理由がある。

この世界での経験値は、モンスターを倒した際に与えたダメージ量によって分配される。俺のこの『体術スキル』はダメージ量が少ないためにパーティープレイでは獲得できる経験値が少なく、個人でも狩りの速さのせいで効率は下がる。必然、高レベルを維持する方法は限られてくる。

俺が取った方法は、「クエスト攻略利用」だ。

クエストは、レアアイテムや情報を獲得できるだけでなく、かなりの経験値が加算される。俺の感覚的な統計にすぎないが、それは同レベル帯、初挑戦であれば更に高まるように感じた。結論、俺はソロプレイヤーとなり、クエスト攻略を主軸にプレイを始めた。

レアアイテムを獲得できるクエストはやはり人気があるため、ちょくちょく俺を訪ねてきて何かいいアイテムを得られそうなクエストの話を聞きに来る奴は、攻略組にもボリュームゾーンにもそこそこ多い。キリトもその一人だが、こいつは「いい剣の情報があれば頼む」だけだが。

っと、話がそれたな。

そんなクエストの中で俺が獲得したレアアイテムの一つ、『ブレイバー・バック』。「冒険者の鞄」の名を持つこのアイテムは、第十三層の「旅人の忘れ物」クエで獲得したもので、ストレージの容量をかなり拡大させてくれるという凄まじい効果を持つ。これで他のプレイヤーはおろか、パーティー並みのストレージ容量を持つ俺はそれを生かしてダンジョン内…主に迷宮区での商いも行っている。今のところ再度クエスト依頼が生じた様子はないため、もしかしたら一回限定クエだったのかもしれない。

とにかく俺はそうやってクエストの攻略や注意点を体当たりで調べ、それをやりつくしてなお層攻略が進んでいない間は迷宮区をはじめとして前線をぶらぶらして、そこで結晶やポーション、ドロップアイテムの売買を行って日銭を稼…失礼、攻略組をサポートしている、っていうわけだ。

まあ、普通の場合は。

ｅｐｉｓｏｄｅ１　ソロプレイ野郎共３

「いってえな…ぶつことねーだろ…」
「うるせ。ＭＰＫかけときながら金を毟ろうとする奴にそんなことを言う資格はない」

連れだって、歩きながら四階への階段を上っていく。

キリトの暴力を背景とした交渉術により同行を余儀なくされた俺は、結局キリトと一緒に四階へと赴いて、レベル上げ（ファーミング）スポットでのＭｏｂ狩りの手伝いをする、ということで利害の一致を得た。俺はクエストフラグのため、キリトは経験値稼ぎのため、だ。ついでに言うなら、恐らく出現するだろうクエストのボスも手伝ってくれるらしい。ソロのくせに付き合いのいい奴だ。

辿り着いた目的の四階は、これまでのような複雑で立体的な構造はしておらず、ただ広々とした部屋があるだけ。罠の類はいくらかあるものの、俺もキリトも『索敵（サーチング）』のスキルは十分にあり、罠を見抜くことに難はない。

そして、お目当て通り。

「やっぱ、多いな…」
「ま、狩り場だしな」

フロアに出てわずか数秒、周囲の柱の影から、一気に無数のゴブリン達がポップし始める。さすが単純条件で最も効率がいいと思われる狩り場。ポップには事欠きそうにないな。キリトが剣を構え、俺が駆け出す姿勢をとる。

「んじゃあ、手はず通りに」
「おっけー。俺はパリィとタゲ取りに集中して、キリトが仕留める。ボスが出たら、キリトがそいつの相手、俺は周りの雑魚をトドメ含めて」
「経験値は俺、ボスのドロップアイテムはシド、Ｍｏｂドロップは落とした奴が貰う。んじゃ、いくぜ」

クエストボスは、一定数のゴブリンを倒すことによって出現するらしい。
ゴブリン達が俺達に気付く直前、キリトが『隠蔽（ハイディング）』スキルを発動し、ゴブリン達からある程度隠れる。同時に俺が床を蹴って、ゴブリンの一団…特に、弓使いの多い一角へと突進する。

敏捷補正、最大化。

突進の先にいた剣を持ったゴブリンが、俺の衝突にあわせて剣を振りかぶる。その動作が、やたらとゆっくりにみえる。一気に加速する体を感じながら俺は引き絞った右手で、振り下ろされる直前の剣の横腹を、体術スキル、《クラッシュ・ハンド》で弾き飛ばした。

「やああっ！！！」

周囲のモンスター達が、奇声を上げながら俺へと駆け寄ってくる。思い出すのは、小学校のころのどろじゅん遊びで、最後に残った一人を全員で追いかけまくるの図か。

だが、これは俺の得意とするスタイルの一つ。
追いすがり、矢を放つゴブリン達を、俺は鍛えた反射神経でかわし始めた。

ｅｐｉｓｏｄｅ１　スピード＆パワー（前書き）

※１１／１０／３追記
指摘がございました原作との矛盾点を改訂しました。

episode1　スピード&パワー

横薙ぎのソードスキル、《スラント》が、並んだゴブリン二体を一撃で葬る。背後からの一撃はやはりダメージ補正が大きい。攻撃によって『隠蔽（ハイディング）』の効果の切れた瞬間に俺の方にタゲを移そうとしたゴブリンアーチャーが、走り込んだシドによってその弓を弾かれた。

（速いな……）

心の中で、俺は舌を巻いた。ボサボサの波打つ黒髪と、不健康そうな顔。奇妙なほど長い手足に、眠たげな目つきからは想像もつかないが、恐らくは攻略組にもそうそういないだろうスピードファイター、シド。確かに俺のビルドは敏捷よりも筋力を重視したもので、比べること自体が間違っているとは思うのだが、それでも思わずにはいられない。

疾走するシドの速さは、俺が今まで見たどのプレイヤーよりも上だった。剣も槍も弓矢さえも、ヤツの体に追いつくことはない。その戦闘スタイルは、俺のよく知る…つまりはＳＡＯの常識とは大きくかけ離れている。

本来は戦闘は相手の動きを見切ってのステップでの回避やパリィでの防御、その後に攻撃をあてる、というのがセオリーだ。だから基本的にしっかりと相手に正対し、その動作をしっかりと観察する必要がある。だがシドのスタイルは相手を観察することを完全に無視して、ただその段違いのスピードで動き回って的を絞らせない。と同時に、ほぼ硬直の無い小攻撃や単発体術スキルで敵を攻撃していく。

（あの硬直の短さは、すごいな…）

俺の得意とする、というか、好みとする戦闘スタイルは、完全にパワーファイトだ。威力重視の重量級の剣に、必殺のソードスキルで敵を一気に押し切って倒す、つまりは「やられるまえにやる」タイプの戦いだ。だが、だからといって敵もそれにあわせてくれるわけではない。ソロプレイ中、「もっと素早いタイプの技があればなぁ」と思ったことは、一度や二度では無い。

（あのとき咄嗟に取っちまったけど、体術スキルも真剣に鍛えようかな……）

第二層で受けたクエストで獲得した体術スキルだが、取ってしまったはいいが剣での戦闘につきっきりになって、殆ど鍛えていないのが現状だ。だがこうやってその有効性を見せつけられてしまうと、やっぱり頑張ろうかと悩むものだ。というかアイツ敏捷一極でよくあのクエクリアできたな。結構時間かかったろうに。

そんなことを思う俺を尻目に、シドは両手をだらりと下げてフロア狭しと走り回り、俺を狙っている敵を次々と狙い撃ちしていく。その派手な動きは敵の注意を十分に惹きつけ、移動中で『隠蔽』の効果が薄い俺からのタゲを奪っていく。

（ソロプレイヤーには、惜しいと思うんだがな……）

思考に耽りながら、手近な敵を次々とソードスキルで砕いていく。その間に、俺の経験値はソロ狩りのときとは比較にならない速さでみるみる増えていく。ＳＡＯでの経験値は、敵に与えたダメージ量に比例して与えられる仕組みになっている。シドの攻撃は相手の武器や鎧の硬い点を的確に狙っているためほぼダメージを与えておら

ず、経験値はほとんどが俺に入っている。

（なるほど、こうすればパーティーメンバーに高効率で経験値を分けられる。ソロのくせに妙な特技持ってんだな）

もしパーティープレイすることがあったら、仲間のレベル上げの時参考にしよう。ソロプレイヤーの俺にそんな機会はないだろうが。心の中でそう思いながら、力任せに剣を奮う。回避も防御も考えずに繰り出すソードスキルは次々とゴブリンを倒していき、その数が５０に達したときに俺のレベルはまた一つ上昇した。

ｅｐｉｓｏｄｅ１　スピード＆パワー２

キリトの剣が、最後の一体を斬り飛ばす。

……ん？最後の一体？

気がつくと、広間を埋め尽くさんばかりのゴブリン達が、すっかり影をひそめていた。っていうか、明らかに３０以上はいたよな？まだ５分も経っていないと思うんだが、あの男、どんだけのペースで狩り続けてやがったんだ？

「第一波、終了か？」

「いや、違うな」

俺の呟きを、耳聡くキリトが捉えて反論する。なんだ、聞き耳スキルでもあげてんのか？そんなもん上げるくらいだったらもっといいスキルあるだろうに。

ちょっとからかってやろうと見たら、キリトの横顔は、マジだった。

目は、真っ直ぐに広間の天井を見つめている。

と、その天井が、砂埃を起こしながら揺れ始めた。地震でも起こったのかといいたくなる振動の中、天井の一部が、ゆっくりとこちらへと…いや、ありゃ、天井じゃない。

「上の階への、隠し階段じゃねえか！この塔、四階までじゃなかったのかよ！？」

「多分お前のやってるクエストがフラグなんだろう。ほら、クエ

ストボスのお出ましだ」

くい、とキリトが顎をしゃくる。隠し階段が地面へと達し、小刻みな揺れが収まった…かと思ったら、今度はガツン、という大きな揺れがフロアを揺らしだした。ドスンドスンというそれは、明らかに足音。俺が受けた『盗まれた財宝』クエの情報では、「巨大な剣を持った、他とは比べ物にならない大きさのゴブリン」がそれを持っている、ことになっている。

つまり。

「うおお。でけえ」

階段を下って現れたのは、他のゴブリンに比べると一回りも二回りも大きな、褐色の巨人。識別スキルでみられた名称は、「Ｇｏｂｌｉｎ　Ｇｅｎｅｒａｌ」、ゴブリンの将軍、か。軍隊でもないのになんで将軍なんだ、というのは野暮な突っ込みか。レベルは、そこらのＭｏｂより５も高い。

とりあえず、ボスであることを示す定冠詞こそ無いものの、それでも中ボスクラスであることは間違いない。装備も他のゴブリンとは比べ物にならないほど揃っていて、褐色の肌を頑丈そうな黒革の鎧で包み、手足には金属製の籠手と具足。そして。

「片手剣、だぞ。よかったな、キリト」

「まだ落とすと決まったわけじゃない。が、期待は出来そうだな」

キリトが、にやりと笑う。ボスの武器は、右手に握られた巨大な直剣。普通のものよりはかなり長く重厚なそれは、恐らく威力も相当なものに違いない。

キリトがこのクエストに協力してくれた…というか、俺の頼みを聞いてくれたのは、このためだ。街でのクエスト依頼を受けた時に「巨大な剣を持った」という説明があったからには、そのドロップがあるのではないかと考えるのが常識だ。キリトの方は「両手剣だろどうせ」とあまり期待していなかったが、どうやら今回は俺の勘が正しかったらしい。

「周りのＭｏｂのポップはないみたいだな。俺も加勢するぜ」
「ああ。ソードスキルに巻き込まれないように気をつけてくれよ」
「もちろん。俺だって死にたかねえよ」

にやりと笑うキリトに、こっちも笑い返す。
この男の片手用直剣ソードスキルに巻き込まれれば、一撃とは言わずとも一気にイエローゾーンくらいまではＨＰを削られるだろう。言われなくたって百も承知だし、向こうもソロとはいえそれくらいの配慮はしてくれるだろう。

戦闘開始の吠え声を上げるボスに、キリトが真正面から突進する。俺は鍛え上げた敏捷値で一気に敵の背後に周り、そのまま回し蹴りの動作に入る。

赤いフラッシュが生じて、システムによるアシストで体が踊るように動く。

単発体術スキル、《ロール・スラッシュ》。

背後からの回し蹴りの一撃が、ゴブリンの鎧の間隙に突き刺さった。

episode1　スピード&パワー3

戦闘は、十五分も掛からずに終わった。

俺としては中ボスクラス相手の単独戦闘には一時間位を予定していたが、キリトがいたおかげで遥かに速く片付いた。回復結晶も、予定の半分も使っていない。言えば「じゃあその分金よこせよ」とか言われそうだから言わんが。まあ、ドロップ品分くらいの働きは十二分にしてくれただろう。そんなことを思いながら、ボスの爆散したポリゴン片の中、ウィンドウを開く。

「ないな。そっちは？」
「あった」
「ホントか！？」

俺の新規入手のストレージの一番上に書かれた、見慣れない名前のアイテム。ドロップアイテムだ。名前は「ジェネラルブレード」。ちなみにこの段階で既に、俺にはいや～な予感が背筋に走っていた。完全に俺の経験論になるが、剣の名前に関して言えば「ソード」なら片手剣が多い。そして「ブレード」なら…両手剣。

やべぇ。

と、とりあえずオブジェクト化しよう、もしかしたら「アニールブレード」みたいに例外的なのがあるかもしれんし！ウィンドウからオブジェクト化すると、その剣は俺の背中に収まった。装備アイコンは、両手。

ああー。

露骨に顔に出た。いや、背中に収まった段階でキリトにも分かっていたのだろう、その顔はどことなく残念そうだ。とりあえず抜き放……てなかった。

「うおっ重っ！！！」
「おい大丈夫か！？」

あわててキリトが支えてくれたおかげで、何とか落として足に突き刺さるのだけは避けられた。とりあえず地面に置いて指でクリックして、『鑑定』スキルを発動する。…と。

「うお、要求筋力高っ。っていうか威力がすげえな、リーチだけじゃないのか。…おお！これすごいぞ！『十分に筋力要求値が高ければ片手剣としても装備可能』だってよ！」
「ホントか！？」
「ウソ！」
「てんめえええええええええっ！！！」
「冗談冗談ぁ痛ってぇ！！！」

ふざけたらぶん殴られた。とりあえず本当だったのでキリトに報酬がわりに手渡しでそれを渡してやる。一瞬「重っ」といったものの気に入ったようで、満足げに右手でぶんぶんと振り回す。それにしてもとんでもない筋力値だな。俺なら振るのはおろか持つことすら出来んぞ。

キリトはそれで満足してくれたらしく、上の階で手に入れた宝物をＮＰＣに返した際手に入った、スキルボーナスという激レアアイテムは俺に譲ってくれた。正直にその効果を話したら、いくらキリトとはいえ待ったをかけたかも知れんが。

◆

後日談。

その層のボス攻略のＭＶＰは、革製コートを装備した盾なしの片手剣士だったらしい。両手剣と見間違うほどの巨大な片手剣を携えて、その攻撃レンジを生かした鬼神のごときソードスキルの連発で、一人でフロアボスの膨大なＨＰの半分近くを削ったらしい。

ついでにその男は戦闘の終盤、実は耐久度が極端に低いという欠点のあったその剣があっさりと壊れ、武器喪失（アームロスト）でボスの攻撃から必死に逃げ惑っていた、ということも聞いたが、俺の知ったことではない。当然、殴られる筋合いもない。ないんだよ、あ痛え！

ｅｐｉｓｏｄｅ１　スピード＆パワー３（後書き）

エピソード１、終了です。
これ以降の投稿は日に一回になると思います。よろしくお願いします。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　巨大ギルドと風来坊（前書き）

第二章は、オリキャラメインとなりそうです。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　巨大ギルドと風来坊

「……なるほど、ねぇ」

俺は深くため息をついた。

今俺がいる場所は、アインクラッド基部フロア…第一層『始まりの町』中央に位置する、『黒鉄宮』。アインクラッドでも有数の規模の豪華な建造物だが、今現在立ち入るプレイヤーは極々限られている。理由は簡単。ここが今現在、ギルドメンバーが千人を軽く超える最大規模のギルド、かの有名な『軍』の本部だからだ。

そして今現在俺がいるのは、そんな超超巨大ギルドの、その本部の、さらに長たる男の執務室だ。本来俺のような風来坊が、とても立ち入れる場所では無い。だが、今回は特別だ。なにせ俺は今、お客様としてここに招かれている立場なのだから。

「なんとか、お願いできませんか？シド君」

「私からもお願いします。なんとか、なりませんか？」

「うーん、そうは言ってもねえ…」

本部にいる人間は、現在三人。一人は当然俺、シド。さすがに今日ぐらいはきちんと身なりを整えるべきだったかなあ、とは思ったものの、結局いつものぼさぼさ頭に寝ぼけ眼だ。習慣って怖いな。

そして残りの二人はなんと、この『軍』の最高責任者とその側近なのだ。背の高く、きりりと整った顔の女性は、側近であるユリエールさん。軍のユニフォームである戦闘服を格好良く着こなし、腰には革製の鞭。おそらくプライベートではさぞかしあの鞭に憧れを抱いた豚共…ではなく、おかしな野郎共が絶えないことだろう。

もう一人の方の少々太めのにこやかな男は、シンカー。まあ、ユリエールさんに比べれば迫力の無さが否めないが、侮ってはいけない。これでも『軍』のトップ。見かけの人の良さに加えて、前線で戦えるだけの戦闘力もちゃんと持ち合わせている。

そんな二人が、揃って俺なんかに向かって、頭を下げている。

理由は簡単。『軍』の現状が、極めて切迫したものであるからだ。

現在の最前線二十七層の、二層前。あれは天災の類だ、と俺は思うのだが、前層とは比べ物にならないほど巨大で強力な、二十五層の双頭の巨人ボスの猛攻によって『軍』の精鋭が根こそぎやられてしまったのだ。そのために今まで先頭に立って続けてきた前線の攻略に関わることが出来なくなってしまい、さらにその恐怖心によって既に中層フロアでの狩りすら覚束なくなりつつあるのだ。

『軍』の抱える人数は、桁違いに多い。その全員を養っていこうと思えば、最低でも中層フロアでの狩りは必須となる。それも、相応の人数を揃えて専門チームを形成してやっと、といったところ。そのメンツが今、揃わなくなりつつある。

そして話は戻ってくる。

「だからって、そんな急に、「ミスリル素材が入手できるクエストは知らないか」って言われたってなあ…」

『軍』の狩りパーティー全員に、中レベルの筋力値でも装備できる現在最高レベル防具を整える。そのための素材となる金属、『ミスリル』のありかを、俺に教えてほしいと言ってきやがったのだ。

episode2　巨大ギルドと風来坊2

『ミスリル』。

現在は、と注釈がつきはするものの、間違いなく最強クラスの金属。その攻撃力、防御力は最前線でのドロップ品に匹敵するレベルの硬度を誇る。しかも、それだけではない。この金属、異常に軽いのだ。剣はおろか戦槌でさえ、然程筋力パラメータを上げずとも装備可能である、という完全にチート性能のインゴット（しかしそれでも俺はせいぜい短剣止まり、直剣クラスは装備出来ない。相変わらずの貧弱アバターだ）。ドロップしたものを故買屋に売れば、最前線…恐らく『聖竜連合』あたりが目の色変えて飛びついてくることだろう。

しかし。

「まぁあんなん、狩りで手に入れようってなれば何週間単位かかる仕事だし、なぁ…」

『ミスリル』は特定の敵からのドロップ品でしか確認されておらず、その敵というのが。

「『ミスリルラット』。到底今の私達では数を狩るどころか一匹も倒せません」

「俺だって無理だよ。反則だよ、あの索敵範囲、反応速度と敏捷であんな硬さ。完全な運ゲーだぜ」

別のゲームで言うところの、メタルうんたらの扱いなのだ。そんな奴が落とすアイテムを大量にそろえるなど、考えるだけで発狂してしまいそうだ。

剣やら盾やらなら運よく一つ手に入れば作れるだろう。が、プレートメイルやタワーシールドとなれば一個作るのにも数が必要だし、それを複数となれば一体何個必要か想像もつかない。当然、なにか抜け道…たとえば、それが報酬となるクエストなどの存在を疑うのは当然だ。

だが。

「んー。申し訳ないが、今のところクエストで獲得したことはないな」

「そう、ですか…」

露骨にしょんぼりすんじゃねえよ、最高責任者。もうちょっと毅然としてろよな。

「だが、一個思い当たるクエストが、ないじゃあ、ない」

「本当ですか!?」

ウ・ソ!といいたい衝動に駆られるが、そんなことをしたら横の怖いお姉さんに鞭で打たれかねない。そんな特殊かつ特異な趣味は持ち合わせていない俺としては、それは遠慮したい。キリト?あいつはからかっていいんだよ。

「ああ。こないだ最前線、二十七層で一つのクエストフラグを見つけてよ。「炭鉱の通路開通」っていう恐らく未踏破のクエ。そこの炭鉱の壁の色から察するに、そこで取れる鉱石ってのがミスリルなんじゃないか、って俺は思ってる」

「二十七層、ですか……」

「厳しい、ですね……」

二人の顔が、険しくなる。そりゃそうだろう。二人はきっと、『軍』の精鋭の生き残りから何人かクエスト攻略のための人員を出してくれるつもりだったのだろう。もしかしたら、二人自ら手伝ってくれるつもりだったのかもしれない。

だが、それが最前線の、しかも未踏破クエとなれば、気安く人をよこせるものではない。はっきり言ってしまえば、死ぬかもしれない。ただでさえ恐怖心が内部に燻っているだろうに、危険かどうかすら分からない場所に部下を行かせるのはどう考えたって無理だろう。

「まあ、いいよ。俺一人で。ってぇか、何人もいると邪魔だし」

「……っ」

「そう、ですか。すみません。危険と分かっていながら…」

「いいさ。俺もレベル上がったし、そろそろやってみようと思ってたトコだ。んじゃあ、最終確認。俺が仕入れてくるのは、そのクエストの戦利品、及びクエストの攻略法。で報酬は、……まあ、持ってきたときになんかいいもんくれよな」

二人の顔が、申し訳なさそうに歪む。いや、そんな顔しないでも。そろそろ行くつもりだったのは本当だしな。いい機会だし、金属武器や防具なら俺には必要無い。手に入ったところで故買業者…というか商人クラスか職人クラスかに売るしかない。それなら、ここで『軍』に高く、ついでに恩も合わせて売ってやるのも、悪く無いかな。

（んー…。いくらか前金で貰った方がよかったのか？）

ついでに言えば、俺はこの世界での金銭に執着が疎いと自覚している。今まで……というか現実世界で結構切り詰めてぎりぎりの生活費で生きていたせいか、この世界でもどうしても「飯食ってゆっ

くり寝れる分の金があればいーや」と思ってしまうのだ。貧乏性、というのか？

そんなどうでもいいことを考えながら、俺はさっさと「黒鉄宮」を後にした。どうにも危機感が足りない俺は、最前線のダンジョンに挑むにしては暢気な足取りで、二十七層主街区、『ロンバール』へと帰り始めた。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　唐突で強引な出会い

『ロンバール』。
現在の最前線、二十七層の主街区であり、俺が今現在宿を取っている街だ。
アインクラッドの各層にはどうやらそれぞれコンセプトがあるらしく、この層のそれは「常闇の国」。常にうす暗く、幻想的な雰囲気が、もともと明るい所が苦手だった俺には快適だ。そこの君、根暗とか言わない。
先程までいた一層の『始まりの町』と比べれば宿代も高くて冒険に必要な様々な施設はまるで整ってはいないものの、そこそこに稼いでいて武器防具のメンテも殆ど必要無い俺には関係無い。しばらくはここをホームタウンにしよう、と俺はひそかに決めていた。

「ふっふっふ！！！待っていたよっ！！！」

とまあ、俺には随分居心地のいい街である『ロンバール』へと帰った俺を出迎えたのは、厨二病丸出しの笑い声と数人のプレイヤーによる囲い込み…所謂『ボックス』という奴だった。この街の神秘気的な雰囲気を壊す、普段ならブチ切れたくなるようなハラスメント行為、なの、だが。

「バカっぽっ…」

俺は起こるより先に呆れが来てしまった。いや、だって、囲んだって言っても三人だし、隙間縫って全然逃げられるし。そんなスカスカな拘束で、両手腰に当てて高らかに笑われても。
真正面のバカは放っておいて、左右の二人に視線をそらす。

「リーダー、やっぱ無理ッスよ…」
「…バカ、丸出し」

一人は、中肉中背の、チェインメイルを着た男。街で着るにはそこそこの重量だろうが、それを感じさせない自然な動作をみるとそこそこのレベルなのだろう。だが、その顔は、今にも泣きそうで情けないこと極まりない。

もう一人は、女だ。恐らく俺の肩までくらいしか無い小柄な体で、装備も皮の上半身鎧。軽戦士かと思うが、武器は装備していないようでわからない。その顔は無表情。だが肩をすくめて両掌を上にしたそのポーズから、心情は明らかだ。

結論。無理矢理付き合わされたんだな。

「シドくん！私達と、ちょっとお話をしないかねっ！？」
「このバカに」
「なっ！？いきなりバカ言いますかっ！？」

この目の前の、バカ女に。

顔を赤らめて身を乗り出すその動作は、ＳＡＯの感情表現エンジンが随分と大げさなＳＡＯだということもあろうが、この女がオーバーアクションなのも確かだろう。とりあえず身振り手振りで「やれやれ」を全力で表現しつつ、

「まあ、とりあえず話くらい聞いてはいいけどよ。一応座れる場所に移動させてくれよ」

一応転移門は圏内だが、それでもこんな人の出入りが多い場所で話をするのは落ち着かない。特に俺の場合は、最前線の攻略組でさ

え知り得ないようなクエスト情報を数多く持っている。めったにいないが、『聞き耳スキル』なんか持ってる奴らを警戒するのことも必要になってくる。

幸い相手もこちらの言い分は分かってもらえた、というか予想済みだったようで、「こっちこっち！」と手を引かれてそのまま恐らく宿屋兼食事処のような店に連れ込まれる。引き摺って（というほどの力では無いものの）連れていかれているこの状況、悲鳴でも上げれば拉致と思われるんじゃないか、と思ったが、試すのはやめておいた。こんな時世の中、特にこのＳＡＯという世界は、非常に女性に優しく野郎に厳しく出来ている。

「まーまー。ちょっとお願いがあるだけだしね！それに、そっちにも悪い話じゃないと思うよっ！」

ニコニコと笑う女に、それに引っ張られていく俺。その後ろをついてくる、鎧男と無表情女。

どうやら今日は、いつもより長い、というか面倒な夜になるようだった。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　唐突で強引な出会い２（前書き）

日に一回の投稿。そう思っていた時期が、私にもありました。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　唐突で強引な出会い２

「まずはっ、シドくんにプレゼントがありますっ！じゃっじゃじゃーん！！！」

店の席に着くなり、喧し女（俺の中で決定）がウインドウを開いてアイテムをオブジェクト化した。出てきたのは、金属製の手甲。結構レア…というか、珍しいアイテムだが、全く見ないほどではない。それよりも俺を驚かせたのは、女のその右手だった。

（速い）

ウインドウを操作する速さが、桁違いに素早かった。ほぼ全員が重度のネットゲーマーであるこの世界、タイプ速度の平均の速さはかなり高い。かくいう俺も現実世界でしていたバイトのせいもあって、長文を打つのはかなりの得意だ。だが、そんな俺と比べても段違いの操作速度だろう。それが意味するのは、この世界での経験、即ちウインドウ操作の速さが求められるような、ぎりぎりの戦闘をこなしてきた証拠。

「これはねーっ！《スチール・ガントレット》っていってっ、円形盾（バックラー）の派生装備なんだけど、なんとっ！装備したままでも体術スキルが使える、という優れ物なのですっ！」

いや、知ってるけどな。

「シドくんっ、君が体術スキル使いだということは、もう知られているのですよ?そんな君にぴったりのこのアイテム、なんと今ならタダで君にっ、」

「いや、いらん。どうせ装備出来ねぇし」
「プレゼン、て、ええっ!!?なんでなんでっ!!?ワイロにしようと今日苦労して素材取ってきて、友達の鍛冶職人（スミス）に頼み込んでつくって貰ったのにっ!?悪代官様と越後屋ごっこはどうするのさっ!?」
「だって俺、筋力値足りねぇし」
「ええぇー!!!」

ちなみにガントレット、と名前についてはいるものの、これは形状から言えばガントレットでは無く、「手甲」というのが正解だ。ガントレットは簡単に言えば金属製の手袋であって、指まで覆い隠しているのだが、これは前腕から手首にかけてを覆う。ちなみにもっと細かく言えば、「手甲」は手の甲までを覆うので正解は「手筒」…だろうか。

閑話休題。

さっきこの喧し女が言ったように、俺も装備しようと思ったことが無い訳じゃあない。確かにメジャーとは言えない装備な上に、製作難度、必要素材、装備重量の割に防御力が低いと嫌われがちだが、体術使いにとってはこれ以上ない頼りになる防具だ。

だが、俺のビルドは敏捷一極型。そこそこの要求筋力値、という段階でアウトだ。一応レベルアップ自体での上昇があるため筋力値ゼロというわけではないが、この上層で使える程の武器となると無理。一時は装備可能な値まで筋力を上げるかとも考えたものの、俺のスキル構成はダンジョン探索とクエスト攻略を主とした『盗賊（シーフ）』型。戦闘は二の次、という結論になって今に至る。金属防具装備では使えないスキルは、意外と多いのだ。

「というわけで、俺にはそいつは無用の長物、以上。んじゃ、」

「ま、待った待った!!えっと、他に、他には、うーっ!」

突然の事態にテンパッてグルグルと目を回す女を置いて立ち上がろう

「…リーダー、落ち着くッス。とりあえずちゃんとお願いしてみればいいじゃないですか…」

「……その前に、自己紹介……」

としたところを、丸テーブルの両隣からしっかりと肩を押さえられた。悔しい事に、超非力アバターの俺ではそれだけで立ち上がれなくなってしまう。それに、まあ、自己紹介くらい聞いていってもいいか。決して力に屈したわけではない。ない、んだ。

「んじゃあ、オイラから!オイラの名前は、ファー。本当はファーブルって入力しようとして、失敗したんス。スキル構成は壁戦士(タンク)で、武器は片手長槍が主ッス!レベルは今、２８ッス!」

「……レミ。弓戦士。筋力優位。レベル２９」

俺の…正確には喧し女の横に座っていた少年と少女が、順番に自己紹介していく。一人はにこやかに、一人は無表情で。とりあえず流れのままに握手しながら、教えてくれた情報に驚く。情報の中身に、という意味では無い。その情報を教えてきた、という自体に。

この世界で、レベルをはじめとする各種ステータスは生命線といっていいものであり、おいそれと人に話すものではない。ましてや初対面の相手に全部暴露するなど、正気とは思えない。

というのが、顔に出たのだろう。

「ああ、シドくんはあんまり中層エリアに来ないのかなっ？中層のボリュームゾーンでは、その日限りのパーティーを作ったりして狩りや探索をしたりするからっ、結構レベルとかに関してフリーな人はフリーなんだよ？攻略組は、いろいろあるからあんまり明かしたがらないけどねっ」

横から喧し女が説明してくれた。確かに言われてみれば、現在の最前線はここ、二十七層。攻略組のレベルとしては、４０前後といったところだろう。当然、ここでソロプレイでクエストの依頼を受ける俺のレベルもそれなりで、誰にも話したことはないが今で４２だ。

「で、あたしが、一応リーダー、になるのかな？ソラ、っていうんだ。名前スキだから、ぜひ呼び捨てで呼んでねっ！スキル構成は、うーん、簡単には説明しにくいなぁ。レベルは、今で３８だよっ！よろしくね、シドくんっ！」

にぱっ、と笑う喧し女…ソラ。聞いて、「お」と思った。俺も最も経験値効率のいいソロプレイな上、かなりの高度のレベリングをしてきたつもりだが、この女はそれに匹敵するレベルを持っている。それを聞いて、ボリュームゾーンの出身の二人についても納得する。

「んじゃあ、ソラさん…ソラが、この二人にレベリングと情報提供を行いながらプレイしてるってわけだ。ということはこのギルド…じゃないのか、パーティーの方針を決めてんのもソラなんだな。で、今回俺に頼みたいことがある、と」

「おおっ！！？なんで分かったのっ！？大正解っ！！」

最前線と同じ程度のレベルで狩りをするのはかなり危険を伴うが、そのゾーンの危険場所の情報や高価な武器防具を持っていて、しっ

かりとフォローしてくれるパーティーメンバーがいれば不可能ではない。恐らく攻略組の一員なのだろうこの女がいるからこそ、の荒技だが。

で、話をもとに戻すか。

「俺に頼みたいことっていうのは？俺は基本的にビジネスマンなんでね。相応の見返りがあるなら協力してもかまわないが」

「うん。えっとね、あたし達、今この層でクエスト依頼を受けてるんだけどねっ。それのクエストがどうにもクリアできなくって。どうしても敏捷値が高い人の助けが必要になっちゃったんだっ。それで、」

なるほど。確かに俺のスキル構成が敏捷一極…少なくともかなり敏捷値に偏ったものだと知る人間は少なくない。ペラペラしゃべる奴でもないんだが、知られていても不思議はない。

と、ふっと違和感に、気付いた。

今こいつなんて言った？

「…ちょっと待て。この層のクエスト、って言ったな？なんていうクエだ？」

「んっ？えっと確か『炭鉱の通路開通』っていうクエだったけど」

…マジかよ。

数分後、俺は三人に明日協力することを話し、報酬は「そのクエの情報の説明書きの作成、配布の権利」で手打ちとした。一人で行けばクエスト報酬も一人占めだろうが、既に受けられてしまってい

てはどうしようもない。ちなみに今回のクエは一度受けたクエの依頼を破棄しない限り別人が受けられないもので、破棄できるのは受けた本人達だけだ。こいつらは、諦めて破棄、はしないだろう。

この時は、「面倒だな」としか思っていなかった。

だが、後から思えば、こいつは所謂「運命の出会い」って奴だったのかも知れない。

episode2　集団で戦うということ

「やっはーっ！！！」
「でぇっ！！！」
「……っ」

翌日。朝の早い時間から出た俺達四人のパーティーは早速例のクエストのダンジョン、『魔獣の炭鉱』を訪れていた。かなりポップの盛んな場所のようで、入るなり最初のモンスター、『サーベルファング』の一団…おそらく１０匹近い…との戦闘に入っていた。

（なかなか、というか、すげえな…）

戦闘は、はっきり言って俺にとっては初体験といってもいい「集団戦」だった。

モンスターを見つけた瞬間、「いっくよーっ！」と叫んで集団に突っ込んでいったのは、ソラ。装備は盾装備片手剣。戦闘のスタイルは俺とよく似通っており、小攻撃を繰り返しての走り回りながらの戦法で敵の憎悪値（ヘイト）を駆りたて、戦線を混乱させている。

「……っ」

そのソラに、後ろから飛びかかろうとした一体の首筋を、青いエフェクトフラッシュを纏った飛来した矢が的確に貫いた。巨大な牙を持つ狼が、ギャン、と一声鳴いてポリゴン片となって爆散する。

ソラの火力不足を補うのは、後ろからで炭鉱の壁を背にして弓を引くレミ。硬直時間のあるソードスキルを使えないソラの代わりに、一撃の火力のある弓のソードスキルを連発し、駆け回るサーベルフ

ァングを一撃で沈めていく。持っている巨大な弓は確か《ロングアロー・アズサ》。二十六層で見つかったばかりの現在最高峰の威力を誇る長弓だ。

（なるほど、その為の筋力優位、か）

普通この世界での弓使いといえば、連射重視のショートボウ装備での中距離での支援攻撃がメインだ。そんな中「筋力優位」と言い切ったのは、この世界では珍しい威力重視の大弓の装備ためか。レベル的にぎりぎりなのだろう、防具類の重量を限界までそぎ落としての大弓は、流石の威力で敵を減らしていく。

「グルアアアッ！！！」
「させないッスよ！」

そして、最後の一人、ファー。高威力技の連発で上がった憎悪値によってレミへと襲いかかる狼を、単身で抑え続ける。効き腕であるだろう右手には、ボス攻略メンバーの装備でしか見たことの無いようなタワーシールド。

時折の隙をついての盾で捌けない攻撃には、街で着ていたのより遥かに頑丈そうなプレートメイルを装備した体それ自体で止める。時折盾が緑にエフェクトフラッシュを放つのは、恐らくなんらかの盾スキルが発動しているのだろう。

「リーダーっ、ヘルプ！」

そして、ファーが耐えきれなくなったら、またソラが突っ込んで乱戦を演じ、憎悪値を拡散させ、戦線をリセットする。うん、完璧なコンビネーションだ。後から知ったが、この方法はかなり特殊かつ難易度の高い連携で、他の連中はせいぜいスイッチのタイミング

を計るくらいらしい。

と、感心していたところに。

「もちょいで終わるっ！頑張ってファーちゃんっ！」

「ええっ！！？ヘルプ、ヘルプっ！」

「あー、シドくん、お願い！」

いきなりチームワーク崩壊。いや、ファーにも笑っている余裕のあるところをみると、恐らく本当にヤバい訳ではないのだろう、三匹の狼を同時に捌きながらもＨＰゲージも緑色を保っている。だが、俺に助けを求めたところを見るに、永遠と大丈夫ってわけでもないのだろう。

「了解」

幸い、俺のスキルならこの役割はうってつけだ。

タワーシールドの隙を縫うように走り抜け、そのまま出の速い体術スキル≪スラスト≫を発動。盾に噛みついていた二体の狼を弾き飛ばし、戦線を押し上げる。そのまま噛みついてくる別の狼の牙を身を翻してかわし、そのまま回し蹴りを入れる。

超非力アパターのおかげで三割ほどしかＨＰを削れていないが、ここでは問題無いだろう。

「なーいすっ！」

「助かったッス！」

「……ぐっじょぶ」

三人が繰り出したそれぞれの大技ソードスキルが、俺が怯ませた

三匹を残らず爆散させた。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　集団で戦うということ２（前書き）

思うままに書いているので、文字数に凄まじくばらつきがあります。申し訳ありません。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　集団で戦うということ２

素晴らしい連携をこなす三人のおかげで、探索は何の問題無くすすんだ。
あえて挙げるとすれば。

「『索敵（サーチング）』よろしくっ！」

「ねえねえ、シドくん、『鍵開けスキル』あげてるー？」

「おおっ、この罠って外せるのっ！？」

この三人、ダンジョン探索に必要とされるスキルを殆ど持っていなかったのだ。俺から言わせれば、自殺志願者としか思えない。そもそも未踏破ダンジョンを行って罠かもしれない宝箱を見つける機会も多いだろうに、なぜ鍵開け、罠解除を誰も出来んのだ！？そもそもパーティーに一人も『索敵』持ちがいないって本当に大丈夫なのか！？

これもやっぱり顔に出ていたらしく、ソラが頬を膨らませながら「そんな言ったって普段は中層ゾーンのプレイヤーのファーちゃんとレミたんにそこまでの余裕はないよっ。」と説教された。ああ、そうか。最近は一人でしかダンジョン潜ってなかったからこういうスキルはあるのが普通と思っていた。俺が普通じゃなかったんだ。

ともあれ、俺は結局普段の探索と同じように罠の解除や宝箱の解錠、アイテム鑑定を主としたサポートを主に活動することになった。幸いソラはこの世界では珍しい人に指示を出す…というか、リーダ

ーシップをとるのが得意な（というか、人使いが荒い）性質のようで、逐一偉そうに俺に指示を出してくれる。

あえて普段と違う点を挙げるなら、『隠蔽（ハイディング）』をしなくていいことか。俺しか持っていないのであれば隠れても意味はないし、そもそも俺が普段隠れているのは一人ではさばききれない量のモンスターに一挙に襲われるのを防ぐためだ。パーティープレイでこれだけ乱戦に習熟しているなら、なぎ倒していけるので問題はない。

つまりは。

「すっごいッスね。ソロプレイってそんなに探索系のスキル上げられるんスか？」

「いや、俺は、クエスト中心でのプレイだから、使う機会多いんだ。無踏破のダンジョンとかいくこともあるし」

「……すばやい」

「ま、俺は『敏捷一極型』だからなぁ。このくらいないと困るんだよ」

本来息詰まる探索を続けるべきダンションで、ささやかに談笑しながら進むことが出来る、ということだ。ちょくちょく聞き出すに、やはり俺のスキル構成と戦闘スタイルはかなり特殊なんだな。一極型とかは中層エリアにもやっぱり殆ど見かけないらしい。

「うんうん、仲良くなってるねっ！おねーさんは嬉しいよっ！」

「ぬかせ、喧し女。さっきのアラームトラップ、忘れたとは言わさんぞ」

「まあまあ、みんな無事だったし、使ったのも回復結晶一個だけじゃんっ。過去を悔んでいては先にはすすめないぞっ、若人よっ！」

にこやかに、というか馴れ馴れしく肩を叩いてくるソラを、ジト目で睨んでおく。普段から寝ぼけ眼のせいで迫力に欠けると言われる目だが、ジト目の粘着性には定評がある（現実世界での友人談だ）。

「……阿呆。代わりに、二つ教えてほしいことがある」

「おおっ、交換条件っ！なになに、何が聞きたいのっ！？身長体重？スリーサイズ？ま、まさかもっと、きゃー！！！」

「……そんなことには微塵も興味はないから安心しろ。一つ目、あの二人の装備品だ。あれはどこで手に入れた？ファーの方の装備はあのまま一式攻略組に出しても恥ずかしくないレベルだし、レミの弓に至っては製作レシピこそ公開されたが、竹とか木材とかやたら妙なアイテムを大量に必要とする上に、鍛冶スキルも相当必要だったはずだが。恐らく、」

「うん、正解っ！全部私が用意したんだよっ。二人に無理して最前線まで来てもらうからには、安全を保証できる装備をあげたいしねっ」

「つまりはオマ…ソラは、最前線…少なくともそれに近い位置で攻略を行っているプレイヤーで、結構なレベルの鍛冶屋の知り合いがいる、と」

「おおっ！すごい、大正解っ！鍛冶屋はかわいい女の子だから、そのうち紹介したげるよっ！」

これだけの素材をそろえているということから前線近くで攻略を行っているとは容易に想像できる。それに、タワーシールドや大弓、手甲など、あまり使い手のいない装備を頼めるということは、相当に親しい鍛冶屋がいるのも推測できる。

問題は、もう一つだ。

「二つ目。お前、さっきの乱戦で『両手剣スキル』を使ったな？

さらに、レミが壁際に張り付くまでの間の援護、『短剣スキル』を使いながらも『投剣スキル』で安物の投敵短剣（スローイングダガー）を投げていたろう？普段使っていた『片手剣スキル』と合わせて、ここまでで四つ。お前のスキル構成は、どうなっている？」

彼女の顔が、また笑う。

それはそうだろう。スキル詮索はマナー違反、というのは、既にこの世界では不文律を超えて常識となりつつある。それでも、尋ねずにはいられない。この女、さっきの戦闘、両手剣と短剣を使い分けていた。本来は、戦闘中に変えられないはずのそれを。

「おおっ、よく見てるねっ」

「昨日の宿屋で見せた、ウインドウ操作の速さ。普通は敵のいない場所でゆっくり操作するのがふつうだ。それをあのスピードで操作できる。上達、ってのは大概必要に迫られるから起こるもんだ。たとえば、戦闘中に装備を変える、とかな」

「うん。正解だよっ。そーだね、ＶＲＭＭＯの言葉で言えば、ビルド、って言うらしいね。私のそれは結構変わってるらしいよ。えーと、片手剣でしょ、両手剣でしょ、短剣、槍、あとは何があったっけ？とにかく、全部戦闘系、特に武器スキルだけで埋めちゃってねっ」

「……」

「それで、戦うときに合うような装備をいちいち選択するようになって、いっぱいのモンスターと戦うときに途中で変えられるように練習して、ってしてるうちに上手になってねっ」

「うん、まあ、分かった。ソラはバカということがよく分かった」

「なっ！！？」

予感…特に、嫌な予感はしっかりとあたってしまった。この女、あろうことか戦闘以外…更に言えば攻撃以外のことを一切考えずに

スキルスロットを埋めやがったのだ。この時俺が思ったのは、「よく今まで生きてこれたなコイツ」という呆れと、一つの戦慄。

この女の戦闘のセンスは、一体どれほどに鋭いのか、と。

普通はどんなプレイヤーでも、『武器防御スキル』や『盾スキル』といった防御系のスキルを最低でも一つはもつものだ。さもなければある程度の金属鎧を纏うか。

俺自身はそのどちらも持たないが、それを補うだけの敏捷性を持ち、それ以前に『隠蔽』で集団に囲まれないように細心の注意を払っている。鎧、盾を持たないキリトは『武器防御スキル』の達人だし、最近噂の『狂戦士』も、盾無しの細剣スタイルだがアーマーは確か現在最硬で超軽量のレア金属製の高級品と聞いた。

だがこの女は、そのどれも持たずにここまで登ってきた。おそらく、パリィとステップだけで。

βテスト経験者では無いにも関わらず、いやたとえβテスターだったとしても、その戦闘能力と環境適応力、そして戦いのカンは、間違いなく一線級。

（この女は、死なせてはならない）

この女は、きっと将来ゲーム攻略のカギとなる。『血盟騎士団』や『聖竜連合』そしてキリトや『狂戦士』と共に。こんなところで死なせてはいけないし、その腕を磨き続けなければならない。この世界に囚われた、全てのプレイヤー達のために。

…思えばこの時駆りたてられた、庇護欲って奴のせいで俺は道を踏み外したのかもしれない。

episode2　集団で戦うということ3（前書き）

お気に入り登録とか感想とかが増えて嬉しいので更新。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　集団で戦うということ３

「と、いうわけなのだよっ。大丈夫かなっ？シドくん」
「……問題無いんじゃね？たかがレベル３０くらだろ？」

ダンジョン最深部、とうとうやってきた俺の見せ場。
というか、ここまでで既に一時間以上が経過している。にもかかわらず、俺の手持ちの回復アイテムは一切減っておらず、他の三人にもさしたる疲労の色は見えない。
俺いらなくね？と思いはじめたあたりで、恐らくこのクエストの山場であろうポイントへと到達した。壁に無造作に立て掛けられたレバー。そしてさっきまでよりやや広い道幅の道とその先の広間、そして重厚そうな大扉。

先に挑戦した三人の話によれば、このレバーを起こせば、アラープトラップ並みの敵の大群がやってくると同時に広間の大扉がほんの数分だけ開くらしい。その間に扉の向こうにあるレバーを動かして固定することで、先に進めるようになる…だろう、とのことだった。
だろう、とつくのは、そこまで彼女らではそれが出来なかったからだ。なんでも敏捷性が一番高いソラでも、とても間に合わなかったそうだ。というわけで、名前がそこそこ知られている人間のなかで敏捷値自慢の俺を探していた、というわけだ。

まあ、そのくらい。もともと大群の隙間を縫っての敵集団スルーは俺の得意技だ。そこ、「非マナー行為だろそれ」とか言わない。

「んじゃ、たのんますよっ！さーん！にー！いーち！ごー！」

カウントと同時に、俺が数々のスキルを同時展開する。『隠蔽（ハイディング）』、『忍び足（スニーキング）』、他にもいくつものをスキルを組み合わせ、敏捷値の補正を一気に引き上げ、走り出す。恐らく三人からはまるで俺が消えたように見えたことだろう。

同時に、狼が、まるまると太った蝙蝠が、巨大なトカゲが一気にこちらに殺到してくる。だが、俺をターゲット出来るものはごく少数。それも最初の一撃を俺が避けたらもう追いすがることすら出来ない。他のモンスターたちは後ろの三人へと向かっていくが、ファーと重量級のガードランスを装備したソラが二人がかりで前線を支えている。

ほんの数秒で通路を駆け抜け、そのまま壁際へと飛ぶ。この広間、当然クエストボスが現れるに違いない。このゲームは、ストーリーは基本的に王道。依頼の最後にボス、というのはお決まりだ。

「うおっと！」

殺到したのは、獣の群れ、では無く、狼の頭の獣人の賊だった。次々と繰り出される剣戟を、転がるようにして回避しながら、敵を見る。数は五匹。武装は剣だの槍だのまちまち、防具は革鎧だ。

「さて、どうしたもんか、ねっ！」

うまい具合に一匹で突っ込んできた奴にカウンターの回し蹴りを叩きこむ。体術スキル、《ロール・ブレイク》。俺の持つスキルでは有数の威力を誇る技だが、それでもＨＰバーは三割も減っていない。もともと体術スキルは、他に比べて極端に威力が低い。

流石に五匹全部相手をしていたら、時間が足りないだろう。だが、

敵は特殊なＡＩを組まれているらしく、必ず一匹が扉の前に張り付いて守っている。短剣だの片手剣装備だったらそいつだけを突進技で倒して駆け抜けていいのだろうが、なんの武器も無い俺では流石に一撃で沈められはしないだろう。脇をすり抜ける、というのも、中ボスクラスに対して行うのは若干賭けになるしな。

「ま、しゃーない、っ！」

迷っても仕方ない。

俺は八割に制限していた敏捷値を一気に最大まで引き上げる。突然の加速についてこれなくなった四匹を置き去りに、扉を守る一体に真正面から突っ込み、

「…ふっ！」

最近スキルスロットに現れた、俺の奥の手たるエクストラスキル、『軽業（アクロバット）』スキルの一つ、《ファントム・ステップ》を発動する。敵の目の前で有効な防御スキルで、スキル熟練度が十分に高ければ、相手が一瞬俺を見失うスキル。これで、駆け抜けて！

（ちぃっ！）

一瞬狼剣士の目が泳いだが、見失うには至らなかった。

脇を駆け抜ける俺をにやりと見つめ、その剣を肩より上に振りかぶられ、ソードスキルのエフェクトフラッシュを帯び、

「ガルルッ！！？」

飛来した紫の光の矢に砕かれた。

弓スキル、《パワフル・ショット》。威力を激しくブーストするそれが剣の横腹に命中したのだ。驚いて後ろをみると、はるか後方に弓を構えたレミ、そして彼女を守るソラとファー。

（おいおい、ここまでは３０メートルはあるぞ…）

確か《パワフル・ショット》は威力をブーストするのみで、矢の速さ、命中精度に補正はなかったはずだ。現実世界でも弓道だかアーチェリーだかやっていたのかと思わせる射撃力だ。驚く俺の目線の先で、三人が笑う。ソラが、ぐっ、と親指を立てる。

「よっし！」

武器を失って狼狽する一匹を、追い縋ろうとする四匹を振り切って、一気に扉を駆け抜ける。

細道の左右の壁にさっと目線を走らせ、無造作に突き出たレバーを見つけ、すぐさまガチャリと作動させる。それだけの動作で、重厚そうな音を立てて閉まろうとしていた扉が止まった。

やったーっ！という歓声が聞こえたが、とりあえずはモンスターを排除するのが先だ。

俺は広間に戻り、憎々しげにこちらを見つめる五体のモンスターと正対する。名称は『フェンリルシーフ』、レベルは３４。さっきは余裕が無かったために見ていなかったがこの二十七層にいるにしては、ハイレベルなモンスターだ。さすが中ボス。

だが、俺のレベルは今４２。五体まとめて倒すのは難しいだろうが、逃げ続けるのだけなら余裕をもって対応できるレベルだ。次々と繰り出される攻撃をいなしながら、広間を駆け回る。

時間さえ、稼げばいい。

俺はもう、三人が通路のモンスターを殲滅して援軍に来てくれることを、疑っていなかった。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　風来坊の止まり木（前書き）

エピソード2、終了です。次回からはまた一日一話の投稿となります。時間は今のところ２４時ですが、時間的に読みにくければ変更も考えています。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　風来坊の止まり木

「まさか、本当にこんなに早くこなしてくれるなんて。あなたにはいつも驚かされます」
「本当に、ありがとうございます」

再び『軍』の本部を訪れた俺の報告書を読みながら、シンカーが言った。まあこいつらも俺が死ぬと思っていた訳ではないだろうが、この速さで依頼をこなしてくるとは思わなかったらしい。尤も確かに俺一人では確かに無理だったろうが、協力者の名前は伏せておいた。今の『軍』の現状は予断を許さない。下手に関わらせても碌な事が無いだろう。

「んで、こいつは餞別。二つしかねーから鎧とかは作れないだろうがな」
「っ、『ミスリル・インゴット』！？そ、そんな、受け取れませんよっ、」
「いや、俺もつかわねーし。いらんなら捨てるよ」
「で、ですが、」
「……ユリエールさん。分かりました。ありがとうございます。報酬は、」
「今はいいや。欲しいもんもないし。なんか『軍』クラスの人数が必要な時は頼むよ」

そう言ってさっさと席を立つ。クエスト報酬だろう、鉱山の奥で見つけた希少金属素材『ミスリル・インゴット』は合計四つ。恐らくパーティーメンバーに一つずつなのだろう。俺はいらないと言ったのだが、なんか二つも押し付けられた。なんでだろうな。

「書いてあるが、多分クエスト再発生は二週間だと思う。ＮＰＣが「これで坑道は半月は持つだろう」とか言ってたしな。クエスト情報は一ヶ月後に公開するつもりだから、攻略は二週間後に勝手にやってくれ」

「分かりました。二週間あれば対策も十分出来ると思います。危険な場所もモンスターの性質も、すごく分かりやすくまとめてあります。これなら人数を揃えれば何とかなるでしょう。他の情報屋ではこうも行きません。いつもシドさんの報告書の読みやすさには驚かされます」

「よせやい」

アラームトラップの場所は書いてあるし、細道の対処法も書いておいた。というか、あのレバーの仕掛けはよく考えれば普通にパーティーを二つに分けて、片方を広間に待機させておけば無問題だ。要するに俺が身を呈してダッシュする必要など全く無かったわけだ。ソラのアホめ。

報告書に関してはユリエールさんが褒めてくれたが、正直このくらいは俺にとっては何でもない。

母親が過保護で、俺を案じて幼いころからやたらと童話やら絵本を読み聞かせられ、ちょっと育ってからは毎日読書の練習を義務づけられたせいで日本語力は相当に鍛えられている。情報収集力も、高校に入ってからは地方紙にゴシップを投稿して小遣い稼いでたりしたのだ、それなりに自信がある。

「んじゃ、頑張ってな～」

「なにか必要なものがあったら、」

「いやいや、下層のフロアの治安維持と警護、よろしく頼むわ。それが一番だろ」

下層フロアの治安維持。少なくない犯罪者（オレンジ）プレイヤーの存在するこのゲームだが、攻略組にもそいつら全員を取り締まる余裕はない。それが出来るのは、巨大な構成員数を誇るこの『軍』だけなのだ。倒れて貰っては困る。

とりあえず今日は朝はダンジョン、昼から報告書作りで疲れた。さっさと帰って寝てしまおう。

なんか言いたげな二人を背に、俺は転移門へと歩き出した。

◆

「ふっふっふ！」
「デジャヴだなぁ、ったく」

二十七層の転移門へと帰ってきた俺を出迎えたのは、どこかで見たことある様なんちゃってボックス行為に、どこかで聞いたことある笑い声。とりあえず、

「うるさいから店にいくぞー」
「あっ、首締めないでっ、自分で歩くよっ、」
「はいはい、いいからいくぞー」
「おっ、すごいっ、コードが発動しないぎりぎりの苦しさっ！！！」

やけに偉そうなソラをさっさと引き摺っていく。
うしろでファーが苦笑いを浮かべ、レミが両手をヒラヒラさせる。
とりあえずため息一つ。はあ。

「ま、待って待って、今日はそんなにかからないからさっ！」
「なんだよ全く。そういって前はそこそこかかったろうが、今回も、」
「今回は賄賂が一つと、お願い一つだからっ！すぐすぐっ！」
「そんな言って前回も、っ！」

突然表示された交換ウインドウ。そこにあるアイテムは一つ。
《ミスリルド・ガントレット》。
希少品である『ミスリル』。それを、使い道など殆ど無い円形盾（ガント）派生防具（レットなんぞ）に使う奴など、ほぼいない。当然どこかに売っている訳もない。オーダーメイドだったのだろう。

「えっとねっ、知り合いの鍛冶屋の子に怒られちゃったよー！」
「いきなり来てすぐ作ってとは何事かー！」って。でもちゃんと作ってくれてねっ！根は真面目ないい子なんだよねっ！」
「これ、よかったのかよ？」
「うんっ！出してみてみてっ！」

言われるままに実体化してみる。
現れたのは、薄緑色をした、前腕をすっぽり覆うサイズの金属製の手甲。手にとってみたが、その重量は驚くほどに軽く、俺でも装備するのは容易いと思われた。手にとった瞬間の俺の顔を見て、ソラがニコリと笑う。

「よかった。これなら装備出来そうだねっ！」
「いや、だが、っ！」

急に顔を覗きこまれて、驚いて仰け反る。
ソラは、『狂戦士』のような絶世の美女というわけではないが、

下からのやや見上げるような笑顔は、なにか健康的な、無防備な魅力を持っていた。正直に言おう。ちょっとだけ、くらっときた。

「お願いが、あるんだっ」

笑顔が、上目遣いに変わる。

「あのねっ、わたし達、ギルドを作るんだ。それで、シドくんにも、ね」

困ったように、はにかむ。

「入って、くれないかなっ！きっと、楽しいと思うっ！ううん、楽しくするっ！絶対楽しくなるっ！だから、さっ。シドくんがソロなのは知ってるし、邪魔はしないからさっ！」

一瞬だけためての、満面の笑みでの説得。

俺に、抗う術はなかった。男というのは、先天的パラメータで劣るものなのだ、と悟ったのはこの時だったかもしれない。

◆

後日談。

『軍』は、俺のアドバイス通りに二週間後に大人数で攻略に乗り出していて、無事にクエストを突破したようだった。誤算があったのは、報酬が『ミスリル』ではない、その若干劣化版というべきインゴットに変わっていた事か（おそらく人数制限があったのだろう）

。だがそれでも強力な装備であることに変わりはなく、その鈍色の金属を使った防具は、『軍』をある程度は支えてくれたようだ。

……それが、『軍』の指定ユニフォームとなったことを聞いた時には、ちょっと複雑な心境だったが。

そして、ソラに誘われて俺が入ったギルドの名は、『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』。四人きりの零細ギルドで、活動は様々なクエストの攻略とその情報の販売。とはいっても日々の活動は一切無い放任主義のギルドで、ギルドリーダーであるソラが偶に「やりたいクエがあるから集合！」って言った時のみの活動するという何とも適当で、俺にとって居心地のいいギルドだった。

ちなみに、ギルド名。

初めはなんだと思ったものの、考えてみるとメンバーが「レミ」、「ファー」、「ソラ」、そして俺が「シド」。気付いた時にはしっかりソラにチョークスリーパーをかけておいた。

episode3　戦姫（＋α）、襲来

「うんまいっ！！！」
「すっげー！」
「……ぐっじょぶ」

三者三様に歓声を上げる皆を見るのは正直、悪い気はしない。
俺が今いるのは、ギルド、『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』のギルドホームだ。ちなみにここの費用を出したのは、殆どが俺。というか、俺の余った金の使い道がやっと見つかった、というべきか。耐久と『隠蔽（ハイディング）』ボーナスだけしか考えず、高価な装備品を殆ど必要としない俺のプレイスタイルでは、今までクエストやら商売やらで稼いだ金を使う用途が無かったのだ。
場所は、三十二層の小さな村にある二階建ての家。転移門の無い村で、主街区までもそう近くないせいか、値段も他の部屋に比べてそれほど高く無かったが、部屋が四つ、さらに二階にかなりのストレージ容量をもつ倉庫があるという、まさに俺達向けの物件だったのだ。

「《ブラック・ピッグの肉》！あんな複雑なクエ、よく解けたッスね！」
「ま、ファーが料理スキル上げてくれてるから食えるんだがな。俺だけなら売っ払ってたしな」

鍋に入った肉をつつきながら、ツンツン頭の少年…ファーがハイテンションに言う。普段会うときは完全装備の鎧姿（アーマー）のため、今の姿は妙に新鮮だ。ファーの今の格好は、簡素な白のシャツに緩い長ズボン。季節は既に冬の足音が聞こえ始めているが、生来頑健な性質なのか寒そうには見えない。

「……頭、いい」
「まーな！もっと褒めたっていいんだぜ？」
「……でも、バカ」

箸を片手にビシッ、と俺を指差すのは、無表情娘、レミ。こちらはモノトーンのワンピースで、普段も幼く見えるその外見を更に幼く見せる。ワンピースの胸元にあるのは、虹を背景とした大きな音符…ギルドのエンブレムだ。

とりあえず一言俺の心を抉った後、レミが唐突にウインドウを操作し、アイテムをオブジェクト化する。カタリ、と軽い音を立てて転がったのは、薄緑色に輝く片手用円形盾派生装備である、手甲。俺の数少ない装備品の一つ、《ミスリルド・ガントレット》。

「お、もう出来上がったのか？」
「……ぶい」

アホなセリフを言いながらも相変わらず無表情だが、手に取ったそれにはきちんと注文通りに、

「ん、ちゃんとギルドのエンブレム入ってるな。『細工師』も便利だなぁ。俺も欲しいわ」
「……趣味、だし。絵とか、描くの、すき」
「いやいや、シドさん探索系スキル殆ど一人でカバーしてるんスよ。さすがにそんな余裕はないッスよ。俺やファーは早くからビルド絞ってたからスキルスロットに余裕があるからできるんス」

言う通り、確かに俺には職人系のスキルを入れる余裕はない。昔取った激レアアイテムの効果や、こっそりと取得したエクストラス

キルのおかげで他の同レベルプレイヤーよりスキルスロットは多いものの、それでもこのゲームのスキルは無数に存在するのだ。一人で出来ることには限界がある。

「そーそー。出来ることは出来る人に任せるっ！これも大事だよっ！」

「さすがに戦闘しかできないヤツは言うことが違うなあ」

「まーねっ！助け合い助け合いっ！」

「ほめてねえよ！」

はぐはぐと肉をほおばりながら笑うのは、ソラ。ダボダボのズボンにゆったりしたＴシャツ。その上にはいつもと全く変わらない、花が咲いたような笑顔。俺のスキル構成も相当おかしなものだが、この女は『戦闘系スキル全取り』を言う更に訳のわからないビルドだ。スキルの余裕の無さは俺より深刻だろう。てゆーか、はっきり言ってここまで生きていられるのが不思議なレベルだ。

とにかく。

なんだかんだ言いながら、適当に楽しみ、適当に頑張る。それが、影ながら攻略の連中の助けになるというならそれでいい、と思いながら、俺はそれなりに平和な日々を過ごしていた。

だが、いつの時代もどこの世界も、平和というものは唐突に崩れるものだ。

夜中に響いた、ドアをノックする音。

「夜分遅くに申し訳ありません。私はＫｏＢ所属、アスナと申します。お話があってきたのですが、あけて頂けないでしょうか？」

とびきりの来客が、平和を崩しにやってきた音だった。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　戦姫（＋α）、襲来２（前書き）

書きだめがあると、つい投稿しちゃいます。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　戦姫（＋α）、襲来２

「いらっしゃいませっ！どうぞお掛けくださいっ、すぐにお茶出しますよっ！」

いつもどおりに振舞えたのは、ソラだけだった。鍋を抱えて台所へと向かい、代わりに人数分のコップを持ってくる。レミとファーは気押されて完全に固まってしまっている。かくいう俺も正直かなり驚いていた。だって。

「……ヒースクリフ、団長。……アスナ、副団長」

「け、ＫｏＢの、だ、団長と副団長ッス…」

ＫｏＢ。この世界で、百人が百人認める最強ギルドの一つ、『血盟騎士団』の略称だ。人数自体は三十人もいない程度の中規模で『軍』などとは比べ物にならないが、その全員がハイレベルな剣士であり、実質フロアボスの攻略の方針決定の中核を担っている団体だ。

そしてここに来たのは、その中でもさらに上位…いや、トップに君臨する人間だ。

「夜分遅くに申し訳ありません。こちらに、シドさんという方がいらっしゃると聞いてきたのですが」

「…シドなら俺だ」

口を開いたのは、三人の先頭に立つ、栗毛色の髪の少女。驚くほど整った顔はしかし、今は張り詰めたような緊張感…いや、責任感と強迫観念で硬質な表情を保っている。なるほどこの表情なら『狂戦士』のあだ名も頷けるな。答えた俺の方をじろりと値踏みするよ

うに見つめる。初めて知ったが、美人の顔ってのは結構な迫力が宿るもんなんだな。

とりあえず。

「……キリト。ゲロったな？」

「いや、ゲロった、ていうかな…」

ＫｏＢの二人の後ろに、困ったように佇む一人の男…キリトを睨みつける。『血盟騎士団』や『聖竜連合』といった有力ギルドは、基本的に迷宮区の攻略のみに関心を示すため、俺のようなクエスト攻略の情報屋とは接点がない。

あるとしたら、迷宮区以外にも足を運ぶ暇人、そして攻略の合間にクエストやらなんやらで遊ぶような不真面目野郎だけだ。

例えばキリト（こいつ）のような。

俺の睨みに怯んだわけでもなかろうが、キリトが目をそらしてがりがりと頭の後ろを掻く。顔にはしっかりと「やっちまったな」と書かれている。

「まあ、少々落ち着いてくれたまえ。今日は話をしに来たのであって、なにも君たちをとって食おうというわけでもない。とりあえず聞くだけ聞いてみてくれ」

なんだか早くも険悪ムードになりかけた場をとりなしたのは、深紅のローブをまとった、背が高く細身の、学者風の顔つきの男。真鍮色の瞳を持つこの男こそ、このＳＡＯで知らぬものはない、最強の男、『神聖剣』ヒースクリフ。

第一印象は硬くて怖い男だが、こうしてとりなしてくれたところ

をみると案外いい奴なのかもしれない。まあ、ギルドホームに上げたくないのは変わらんが。

「ささっ！三人とも入ってくださいっ！寒かったでしょうしねっ！」

…。

まあ、言ってしまったら仕方がない。

にこやかなソラのセリフによって、俺達の…いや、俺の逃げ道は防がれてしまった。

episode3　戦姫（＋α）、襲来3

（まいったね……）

テーブルに着いたのは、俺、そして右隣にキリト、対面に『狂戦士』アスナ殿、そして左隣がヒースクリフだ。真正面の視線が痛い痛い。

「……で、俺にボス攻略パーティーに加われ、と」

「はい」

とりあえずキリトを睨みつけておく。「てめえ俺がボス攻略関わりたくねーの知ってんだろコノヤロー」。帰ってくるのは「いや、まさか『狂戦士』が本気にすると思わなかったし、「誰か適任者がいないか」ってとっさのことでつい」。アイコンタクトでそこまで出来るのが、攻略組不真面目ツートップと言われる所以かもしれん。

あんまり無言の会話を続けていても怪しまれるので、ため息をひとつついて目の前の『狂戦士』を見つめる。笑えばさぞかしかわいいだろうに、ここまで硬い表情では威圧感しかない。またため息をひとつ。

状況は、俺に不利だ。アスナの語る理屈はとても正論であり、俺には反論の余地が一切ないのだから。

いや、あるにはあるが、それは俺のスキル構成が盗賊（シーフ）クラスだとか集団戦は苦手　（というか嫌い）だとかの、子供のいいわけレベル以上のモノではないのが正直なところだ。

「……まあ、俺がそれに適任なのは、分かった」

「そうですか」

いや、分かりにくけりゃお断り、でもよかったんだが、『狂戦士』と言うあだ名に似合わず頭の出来も相当のものらしく、話は理路整然とまとまっていて、納得せざるを得なかった。天は二物を与えずって言ったな。あれは嘘だ。反例がこうして目の前に来れば嫌というほどよくわかる。

「……攻略組は、納得してんのか？その、プライドとか、ドロップアイテムとか」

「個人や一ギルドの意見、いえ、我がままで攻略ペースを変えるなどは、あってはならないことです。少なくとも今回合同パーティーを組むメンバーは納得してくれています」

ははあ、なるほど。反対している奴、ギルドもいるにはいるわけだ。まあどうせ『聖竜連合』あたりだろうが、それを押し切ったってわけだ。流石『狂戦士』と呼ばれるだけあって強引なもんだ。まあ、攻略組といっても男は男であって、美人がこの迫力で迫れば嫌とは言えまいだろうな。

（まあ、ね…）

ちなみに俺は、今回の攻略パーティーには、別に参加してもいいと思っている。アスナの懸命の説得にあったように、万全を期しての攻略だろうし、彼女自身も最大限協力してくれるだろう。断っておくが美人の色香にやられた訳ではない。では、ない。

問題は、その後だ。

今回このような事態…「職人クラス」の人間を無理矢理に攻略に

駆りだす、という事態が今後も続くようなら、間違いなくその中から死者が出るだろう。職人クラスのメンバーのレベルは、実は皆それなりに高い。なぜなら、彼らは鍛冶屋なら『鍛冶』、細工師なら『細工』でスキル熟練度だけでなく、経験値それ自体も入手できるからだ。

だが、たとえレベルは高かろうとも、戦闘経験が無くてはそれは単なる見せかけ…ハリボテの強さに過ぎない。何をしてくるか分からないボスモンスター相手に、到底相対出来るものではない。そのことは、しっかりと分かってもらっておかないといけない。

まあ。

「……俺が言いたいこと、分かりますよね？」

「勿論。アスナ君も当然理解していると思うよ。職人クラスを無理にボス戦に駆りだすような真似はしないさ。戦闘に慣れていない普通の職人なら、ね」

「当然です。私達は、そのために攻略組剣士クラスとしてボス戦をしているんですから」

「なら、いいや」

ちらりと目をやった先のヒースクリフが、間髪いれずに答える。おれの考えなどお見通しだったのだろう。攻略組で最も厚い支持を持つギルド、『血盟騎士団』のナンバー1、2が分かっていないはずはないとは俺も思っている。それが確認できれば、俺から言うことはない。あるとすれば。

「では、報酬についてです。攻略組でのドロップ品の分配は、」

「いや、いいや。俺は分配からは除外で。その代わりアスナさん、一つ条件をつけたい。あんた今スキルスロットいくつだ？」

「……？今８つですが？」

アスナの顔に、露骨に嫌な表情が浮かぶ。まあスキル詮索はマナー違反だし、当然だろう。それにこの美貌、セクハラまがいのことをされたことは一度や二度ではあるまいし、「条件」というのは嫌な響きがあるのだろう。だが、今回はそうではない。嫌がらせ、という点で考えれば然程違いはないかもしれないが。

「あんたのスキルスロットを、一つ貰う」

「……。どういうことです？」

「あんたのスキルスロットを一つ、何か戦闘に関係の無いスキル…そうだな、裁縫とか料理とかかな。それで埋めて貰う。それを鍛えて…そうだな、俺に会うときには前回より上げておくこと。これが俺が協力する条件だ」

「……。なぜ私がそんな攻略に無駄なことをしなくてはいけないんですか」

「嫌なら協力を断るだけだが？」

「っ…」

理由は、ある。

あるんだが、まあ説明するのは面倒だし、理解してもらえるとも思えない。ならば実力行使の拒否権発動だ。遊んでいるように見えるのかもしれないが、かなーり内心ガクガクだ。憎々しげに歪むアスナの顔は、怖くて直視できない。

「ああ、俺がボス戦で死んだら別にしなくてもいいぜ？」

ここで、もうひと押し。手のひらは、汗でぐっしょり。

案の定、アスナが顔を真っ赤にして怒鳴る。

「あなたは死にません！！！私達がしっかり守りますから！！！」

なんというアヤナミ、とか言う余裕はない。

激昂した表情の迫力は、『狂戦士』の名にふさわしいもんだ。

「そ、そもそもどうやって鍛えたのを確認するつもりなんですか！？私が誤魔化せば、」

「誤魔化すつもりなのか？」

「～っ！！！わかりました！そこまで言うなら受けましょう！！！」

勝った。

閃光が、「話は済んだ」とばかりに立ちあがり、真っ赤な顔のままカツカツと去っていく。玄関口にはなぜかソラが控えていて、アスナのためにメイドさんよろしくドアを開いてあげていた。キリトが立ち上がって、そのあとを追っていく。一人で行ったのを心配しているのだろうが、一応この街も保護コード圏内だし大丈夫だろう。

最後に立ちあがったのは、ヒースクリフ。

「集合は明日の昼、一時に四十七層主街区、《フローリア》の転移門前、だそうだ。私も参加して構わない、といったのだが、彼女をはじめ他のメンバーに猛反対されてしまってね」

「まあ、無理すんなよ。あんたのその剣と十字盾はどうせ再取得（ワンド）不可品（ロップ）だろ？」

「そのようなものだ。では、協力、感謝する。私もこれで失礼するよ」

『狂戦士』の相手で既に疲れ切っていた俺は、立ち上がることも出来ずにそのままひらひらと手を振る。よく言えば慈しむような、悪く言えば憐れむような視線と微笑を残して、ヒースクリフが身を翻す。そのまま玄関口のソラと一言二言かわして、帰って行った。

「はあああああ～」

最後に特大のため息をひとつついて、ぐったりと椅子に沈み込む。

ため息で幸せが逃げていくと言ったのは誰だったか。それが本当なら正直一生分の幸せが逃げて行ったんじゃないかと思えるくらいの疲労を感じて撃沈する俺に。

「おつかれさま、シド」

ギルドリーダーであるソラが、優しく笑いかけてくれた。

episode3　夜の会話ととあるフラグと

「シド、頑張ったねっ。今日のキミは満点だよっ！」
「……何がだよ。頑張ったのは確かだがよ」

ソラは、ギルドメンバーになって以来俺のことを名前で呼ぶようになった。他の人間に妙な接尾語　（ファーちゃんだのレミたんだの）がついているのを知っている俺としては、無難な呼び捨てであって有難い限りだが。

「シド、アスナっちに何か息抜きになることを覚えさせたかったんでしょっ？ああいうタイプの人って、気遣われると意固地になっちゃうからさっ、あんなふうに言うのが一番効果ある、って思ったんでしょっ？すごいなー、って。おねーさんちょっと感心しちゃったよっ！」
「……別に、そんなんじゃねーよ。単に嫌がらせなだけだ」
「手際が良かったねっ。ひょっとしてっ、どこかで経験でもあるのかな？」

そういって、ソラがにぱっ、と笑う。ちっ。妙なところで鋭い奴だ。

「知りたいなーっ。シドがどうやってそんなことを覚えたのか」

ついでに誤魔化されてくれる気は無いらしい。
黙秘権を行使してやろうかと思ったら、目の前でカップをオブジェクト化され、そこにコーヒーを注がれる。思いっきり持久戦の構えだ、このやろー。

「ねえねえっ。おねーさん知りたいなーっ！」

テーブルに両肘をついての上目遣いでの笑顔。なんだ色仕掛けまで覚えたのか。あの『狂戦士』の美貌を見た後では、どうにも効果が薄いがな。

とりあえず、話すまで解放してくれる気はないらしい。現実世界での話をするのがタブーといわれているのは常識だが、この女にそんなものが通用しないことは俺もよく知っている。

まあ、いいか。

別に、隠すようなことでもないしな。

「かーさんが、な」

「んっ？お母さん？」

「おんなじ表情してたんだよ。アスナと。張り詰めたっつーか、思いつめたっつーか。アタマ限界で倒れる寸前の表情だよ。その経験があるから、どうすれば俺の言うことを聞いてもらえるか、休ませられるかを考えたことがあった。それだけだよ」

意識してぶっきらぼうに答える。まあいろいろと省略した部分はあるが、嘘ではない。普通の奴ならこれで十分満足してくれるだろう。だが、こいつは普通の奴ではない。

「……おかーさんは？」

つくづく、無駄にカンが鋭い奴だ。ここまですごいと思わず苦笑いが漏れてくるな。

「さあ？俺があっちにいた最後の日は、入院して点滴してたよ。

仕事は…行ったり休んだり。病院にも、行ったり出たりでね。今は知らね」

「心配してる、だろうね」

「さーな。もしかしたら一足先に、三途の川で俺を待ってるかもな」

不謹慎で、ふざけた返答。『狂戦士』や、今のキリトの前では言えないセリフだな。人より生に執着が少ない（正確には生きていくのに感情の起伏が少ない）、と言われたこともある俺だが、言っていい時と悪い時くらいはわかる。

だが、どうやら今回はそれを分かっていなかったらしい。ソラの眉が顰められる。どうやらこいつもそういった不謹慎ネタはＮＧらしい。怒られるかと思ったが、叩かれることもわめかれることも無かった。ただただだ。

「そっか。辛いこと聞いちゃったね。ごめん」

代わりに、謝られた。いや、そこまで悪いことでも辛いことでもないと思うがな。

だがまあ、人の心遣いが分からないというわけでもない。ここは神妙に頷き、コーヒーをすすり。

「じゃあ代わりに、現実世界での私の話をしてあげよう！」

「ブハッ！？おいっ！」

盛大に噴き出した。ふざけんな、せんでいいわ、と言おうとしたのだが、むせてしまって…いや、一瞬迷ってしまって言葉に詰まってしまった。正直に言おう。どういう人生を送ればこういった人間が育つのか、若干の興味があった。

その一瞬の逡巡の間に、ソラが語りだす。

「わたしはねー。こう見えて実はなんとっ！病院暮らしなのです！」

自分の、現実を。

「もう十年くらいかなー。小児科病棟のヌシでねっ！看護師さん達と一緒に他のちびっ子たちの面倒を見たり、一緒にゲームしたりして遊んでるんだっ。病院の外には出られないし、激しく体を動かすのは厳禁だけど、それくらいはできるからねっ。でもやっぱりおねーさんとしては、ガキんちょ相手のゲームだけでは物足りないのよっ。それでいくつもゲーム買っててねー、人気ゲームは親に無理言って並んで買って貰ってっ。そのうち一つがこれだった、ってわけなのですっ！」

その、過酷な現実を。

「わたしねっ。不謹慎かもしれないけど、この世界にこれてすっごく楽しかった…。ううん、今もすごく楽しいよ。こんな広い世界で、こんな元気に動き回ってさっ。そんでみんなに…レミたんやファーちゃん、もちろんシドに会えて、毎日すっごい楽しいんだ」

本当に、楽しそうに語る。

「毎日が、夢みたいでさ…。ははっ、ホントに不謹慎だねっ。…そうだねっ、わたしが言いたいのはさ。大事なのは、この世界を楽しむことだと思うんだ。茅場晶彦が言ってたじゃん？『これはゲームであっても、遊びでは無い』って。でも、『遊びじゃなくても、

ゲームなんだ』って、わたしは思う。だから、楽しまないといけないと思うんだ。精一杯、目一杯、この世界を楽しむ。それが、それを出来る人こそが、このゲームをクリアして、みんなを助けられるんだ、って」

その目が、すっと細くなる。

いつもの笑顔が、急に大人びたようになって、不意に心臓がドクンと鳴る。

「シド。行ってきなよ。やっぱりこのゲームの醍醐味は、ボス戦だと思う。いっぱい頑張って、いろんなことしてさ。それをいろいろ話して聞かせてよっ。わたしは、ちゃんと待ってるからさ」

そういって、いつもの幼い笑顔に戻って、にぱ、と笑う。

その笑顔が、なんだかくすぐったくて。

「……なんかそれ、俺の死亡フラグっぽいよなー、なんか」

「なっ!?それはちょっとおねーさん傷つきますよっ!?結構渾身のいい話だったのにっ!っていうかそれはちょっと笑えないよっ!?」

だから俺は、そんなふざけた言葉しか返せなかった。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　『攻略組』の実力

四十七層主街区、『フローリア』に俺が降り立ったのは、既に一時まで秒読み段階の時間だった。見回せば、アスナのブチ切れ具合も秒読み段階だった。俺が最後の一人だったらしい。今にも怒鳴りつけそうな『狂戦士』殿は見ないふりをして、キリト他数人の知り合いに軽く挨拶をしていると、出発の号令がかかった。

今回諸事情によってヒースクリフをはじめ大手ギルドのトップ連中の参加率が低いため、指揮を執るのは『狂戦士』アスナ。凛とした口調で迷宮区のマップ構造を説明しているのをぼーっと眺めていると、横からキリトが耳打ちしてきた。

「今日はいつもより装備が多いな」

「そこそこにな。いつもなんて俺、上着（レザーコート）だけだし」

「そりゃ安上がりだな」

そう、今日は俺も正装というわけではないが、いつもよりも装備が多い。手には両手とも黒革製の、指の部分を切り取ったグローブ（スズメの涙ほどの体術スキルにボーナスが入る）。ブーツもいつもの耐久度だけが取り柄のボロ靴では無い、移動補正と防御増強効果のある（こいつもほんのちょっとだが）高級品に履き替えているし、極めつけは昨日、レミがエンブレムを入れ終えたばかりのガントレット。

前腕のみを覆う形状で、手までは包まないために体術スキル（貫き手とか）を妨げない片手盾の派生防具で、それなりの耐久度と防

御力を有するが、普段は俺はそれを装備していない。ソラに言ったら「えーっ!?」とか言われそうだが、こいつを装備すると金属防具装備とみなされて『忍び足（スニーキング）』をはじめとする幾つかの『隠蔽（ハイディング）』スキルが使えなくなるのだ。

普段はモンスターを避けつつの探索がメインのため、フラグＭｏｂ戦でもない限りストレージでの無用の長物だったが、今日は存分に活躍してもらわなければならない。いくらボスの攻撃力が低めとはいえ、生身でまともに攻撃食らうのは危険…っつーか、嫌だしな。

なんてことを考えている間に、最後の簡単なオリエンテーションは終わったらしい。アスナ達『血盟騎士団』の数名が迷宮区へと向かい始め、皆がそれに続く。キリト達もそれに続いて歩いていく。

（……うーん。初めてのボス攻略、ね…）

どうにも現実感が無い。いや、緊張感が無い。

よく無いなぁ、とは思うものの、こればっかりはどうにもならないか。

ぼりぼりと寝ぐせのついたような頭を掻きながら、俺は集団の最後尾を歩き出した。

◆

攻略組の移動は、徒歩だ。別の手段としては『回廊結晶（コリドークリスタル）』を使ってボス部屋の前に全員を転移させるという手段も無くはないが、結晶自体の希少価値を考えればそうそう毎度使えるものでもない。今回はボスの攻撃手段も分かっており、メンバーのレベルも十分高い（らしい）。迷宮区を歩いても特に危険はないとの判断だ。

そこで俺は、βテストを除けば初めてとなる、攻略組の戦闘を見ることとなった。

感想は簡単。

「凄まじい」の一言に尽きた。

「イヤアアアッ！！！」

気合いの声を上げての攻撃は、戦闘で戦う『狂戦士』のものだ。凄まじいスピードで繰り出される連続突きが、巨大な植物型モンスターの、花の下部分の弱点をまるでミシン針のように正確に貫いていく。大きく腕を引き絞っての最後の突き技のあと、

「スイッチ！」

叫んでバックステップし、モンスターから距離をとる。先の一撃で喰らった攻撃で仰け反り（ノックバック）を課せられたモンスターがそれを追おうと動き出すが、硬直解除前に飛び込んだ斧使いの男の一撃に進路を遮られる。

「おおおっ！！！」

エフェクトフラッシュを纏った、横薙ぎの大ぶりな一撃。先程までのアスナの攻撃とは大きく異なる戦い方をすることで、モンスターのＡＩに負荷をかけて行動を抑えるという、完璧なスイッチだ。

ここまで、一発も攻撃を喰らっていない。

「トドメっ！！！」

再度のスイッチで飛び込んだアスナの一撃は、《ニュートロン》。片手剣の派生、『細剣（レイピア）』スキルの高位技で、現在確認されるソードスキルで最速の発動速度をもつと言われている技だ。一瞬の隙も与えない一撃がモンスターのＨＰバーを吹き飛ばし、爆散するポリゴン片へと変えた。

「大丈夫ですか？」

そしてさらに驚くべきことに、ここにいる全員が同じようにまるでモンスターから攻撃を受けることなく敵を倒している。いくらレベル差があるとはいえ、なかなか出来ることではないのではないか？

（さすがは、『攻略組』、ね……）

完全に計算され尽くした、連係動作。一撃でモンスターを怯ませるだけの威力を持つ、強力な武器。全く無駄のない、フルブーストされたソードスキル。そして何より、この狭い通路でモンスターに囲まれても、全く動じない精神力。なるほどこりゃ強い訳だ。

「ＯＫ。もう近くにモンスター反応はない」

「ありがとうございます。では、進みましょう。ボス部屋までもう少しです」

俺は今回の戦闘には参加していない。連携が出来ないのもあるし、ヒットアンドアウェイの戦闘スタイルの俺はこんな狭い場所ではとことん戦いにくい。『索敵（サーチング）』で後続のモンスターのポップを警戒していたが、正直いらなかったかな、とも思う。

アスナが再度の行軍を呼びかけ、部隊がまた歩き始める。

それにしても。

（みんな表情が硬いねえ……）

『狂戦士』といわれるアスナ程ではないにせよ、皆多少なり表情に緊張と切迫感が見られる。正直、あまりいい兆候ではないように思うのだが、どうだろう。一説では適度な緊張感は人の能力を高めるらしいので、全く緊張していない俺もよく無いのだろうが。

「シドさん？行きますよ」

「はいよ」

後ろを振り返って、俺を促すアスナ。その表情が、やはりなんとなく母親とかぶる。

（まあ、いいや）

だがまあ、俺は勇者では無い。適当な一プレイヤーにすぎない。切羽詰まったお姫様を助けるのは、分不相応って奴だろう。確かにこのままでは彼女はプレッシャーに押しつぶされてしまうかもしれないが、助けるのはやっぱり選ばれた奴らだろう。

（そこに、もしかしたら俺が入れさせたスキルが、役立てばいいなー、くらいのものか）

そんなことを考えながら、俺は若干小走りで、皆の後を追い始めた。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　『攻略組』の実力２

俺も、もう一年このゲームをプレイしていることになるが、まったくやればやるほどにその設定とゲームバランスの絶妙さに感服させられる。製作者たる茅場晶彦はまぎれもない狂人だが、同時にまぎれもない天才であることを認めざるを得ないほどには。

そしてそれは当然、ボス攻略においても例外ではない。ボス攻略が始まって間もない頃はさまざまな裏技…いわゆる「ハメ技」が考案されたものの、そのすべてが巧妙に不可能にされていた。

その機構の一つで、ボス部屋の前で長時間待機していると、異常にレベルの高い（おそらく普通の迷宮区のモンスターより十は高いだろう）Ｍｏｂが後ろからわんさかポップするというものがある。恐らくはボス部屋の前での『投剣スキル』でのハメ殺しや、交代要員を大量に待機させての物量作戦を防止するための調節（カーディナル）機械の考えなのだろう。

ついでに言えば、例えそんな姑息な手段をする気が無いとしても、機械はそんなことを加味してはくれない。結果、俺達はここでそこまで長いこと休憩をとることはできない。……のだが、今回の面々の精神力は、こんな程度の探索で参る様な貧弱なものではないようで、全員が支給されたポーションを飲んだ後は、数人が武装を変えただけで座り込むようなものはいなかった。

そう、俺達はもう、ボス部屋の前まで来ていた。いくらマップがあるとはいえ、とんでもない速さだ。それに、クリスタルはおろかポーション類すら碌に減っていない。俺ここにいていいのかと本気

で心配になる洗練度の高さだ。

「皆さん、準備は出来ましたか？……では、行きます」

びびっている俺をよそに、アスナが皆の準備を確認する。扉に張り付くように布陣していた皆が、緊張した表情で頷く。

ボス部屋の前で、扉の前にほぼ全員が張り付くようにしているのは、今回のボスが部屋の中央から動かないタイプのボスであることと、部屋が開く前からポップしているタイプだからで、ファーストアタックとベストの足場を確保するためだ。

そして、「ほぼ全員」に含まれない男が、二人。

「キリト。数えとけよ？勝負だからな？」

「余裕があったらな。お前こそ、そんなのに気を取られてヘマすんなよ？」

俺。と、キリト。

今回俺達は、前線でのボス攻撃とは別行動を任されている。いや、その別行動を任せるために俺が呼ばれた、ということだ。キリトは、まあ、保険みたいなものなのだろう。俺としては、こいつさえいれば俺はいらないとも思うのだが。

最後の無駄口のあと、キリトが顔を引き締めて前を向く。俺も、なけなしの緊張感をかき集める。

その視線の先で、アスナが触れたドアが、ゆっくりと開いていく。

前衛の面々が鬨の声をあげ、一気に部屋へと突っ込んでいく。

その先に鎮座する、巨大な……、とてつもなく巨大な、頂点に紫のバラの花を冠した、異形の植物。
カーソルを合わせた先の、「Ｔｈｅ　Ｂｉｏ－ｒｅｔ　Ｒｏｓｅ」…ボスの証たる定冠詞付きの文字。
紫と毒の名を持つ巨大な薔薇の戦士が、先陣を切った前衛の攻撃を受け、ゆっくりと起きあがり。

「！！！！！！！！！！！！」

声とも機械音ともつかない奇声で吠え。
その体から生えた四本の茨の鞭を、前線のプレイヤーたちへと叩きつけた。

同時に、俺とキリトが部屋の中に突入していく。

こうして俺の、初めてのボス攻略戦が始まった。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　薔薇の王との戦い

「はあああっ！！！」

放った体術スキル、《ロールスラッシュ》の上段回し蹴りが、飛来する人の拳大もあろうかという大蜂の顔面を捕えて吹き飛ばす。空中を飛行するタイプのモンスターは、ソードスキルこそ当てにくいものの防御力、体力共に低い。このモンスター、「ポイズンホーネット」もレベルこそ４５と低くは無いが、俺の放つ貧弱な体術スキルでも一撃で落とすことが出来る。

「あ、ら、よっと！！！」

硬直が解けると同時に走りだし、背後から前線部隊へと襲いかかろうとする一体を殴り飛ばす。

そう、これが俺が呼ばれた理由。

ボスの放つ攻撃の一つに、「蜂召喚」があったのだ。ボスモンスター自体の攻撃力、防御力は然程でも無かったものの、この攻撃のせいで皆がボスを叩くことに集中できず前線を維持できず、結果後方での待機・回復が難しくなってしまう。

ボスの体を揺すっての合図で、蜂型の５～８体のＭｏｂを召喚するこの厄介な技の対策として、俺とキリトは正方形の部屋を縦横無尽に走り回っている。幸いポップしたＭｏｂはすぐそばのプレイヤーを襲うのではなくしばらく周囲を旋回するため、そこを一気に二人でかたずけていく。

「はあああっ！！！」

ボスを挟んだ反対側から、キリトの気合いの声が聞こえる。今回は向こう側に半数以上が向かったが、あいつは大丈夫だろう。駆け抜けながらちらりと目をやった瞬間、足元のツタを踏みつけてしまって体が大きく傾く。

「っと！！！」

その一瞬の隙に放たれた蜂の毒針を、左手でかろうじて防ぎ、『軽業（アクロバット）』のスキルの一つを使って素早く立ちあがり、単発体術スキル、《エンブレイサー》の貫き手で技後硬直中の蜂を貫く。一瞬の嫌な感触の後、ポリゴン片を残しての爆散。

俺が雇われた理由、その二。この足場の悪さだ。

四十七層は別名「フラワーガーデン」と呼ばれるだけあって、植物の楽園の層だ。当然ボスが植物型なのは予想できたが、それに加えてボス部屋の床それ自体に、太くて微妙なやわらかさの蔦や根が張り巡らされており、ソードスキルをブーストするための足運びの難度が高まっている。おまけに二、三分おきに地面が揺れて足元の蔦や根が配置を変えるせいで、いわゆる「安置」が無い。

これは前線でボスを叩き続ける面々がソードスキルをうまく使えないというのもあるが、俺のような遊撃部隊が走り回るのを難しくもしている。俺の場合は『軽業』のスキルがあるからこそ素早く体制を整えられるが、それが無ければキリトレベルの攻撃力が無ければ遊撃は無理だろう。

「！！！！！」

ボスが、再び吠える。

「っ、来るぞっ！毒液だっ！！！」

「前線、距離をとってっ！！！回避しながらパターンが変わるのを待ちます！！！」

そして俺が雇われた理由その三。この毒液攻撃だ。

ボスがその体を捩じる様に回転しはじめる。直後、薔薇の下にあるカリカチュアライズされた顔から勢いよく吐き散らすこの毒液は、ステータス異常系の攻撃の中でも最高峰のもののようで、「ＨＰ減少毒」、「麻痺毒」、「金属腐食毒」などの同時に複数のステータス異常をもたらしてくる。

今回はきちんと対策が練られており、ボス部屋入口で配られた耐毒ポーションのおかげでＨＰを減少させたり麻痺したりする者はいない。

ただ、厄介なのは「金属腐食毒」だ。

今回、ヒースクリフを始め大手ギルドのメンバーで参加していない者がいるのは、この「金属腐食毒」を嫌ったせいだ。確かにボス戦に耐えうるような頑丈な金属鎧は、製作するのもドロップを狙うのも非常に大変だ。そもそもこの階で強力な壁戦士（タンク）が軒並み防具を喪失（ロスト）してしまっては、この先のボス攻略に多大な支障を来すことになる。

だから今回の選抜部隊は革製装備の攻撃特化型（ダメージディーラー）中心で、ボスの防御力の弱さをついての短期決戦を目標に組まれている。前線メンバ

ーもそれを理解しており、今回全員が飲んだ耐毒ポーションの効果、一五分の間にケリをつけようと大技を連発する。

ただし、革製装備中心とはいっても武器や盾は大半が金属製だ。武器喪失（アームロスト）は、攻撃の効率を著しく低下させる。そのため、この毒液攻撃の間は全員距離をとることに前もって計画してあった。

「！！！！！！」

「シド！」

「おう！」

再びのボスの声無き叫びが響いて、体を震わせる。Ｍｏｂ召喚の合図だ。キリトと俺が短く互いを呼び、足場の動作を確認してＭｏｂの連中の襲来に備える。キリトが素早く牽制と惹き付け用のピックを抜き出し、俺はポップ位置周辺を駆け回ってモンスターのタゲを集める。

吐き出された大蜂は、最大数の八体。今回は俺の方に五匹が飛んでくる。

「まじ、か、よっと！！！」

タイミングを見計らって放つ、《トリプル・ブロウ》。自分でもガッツポーズしたくなるくらいのドンピシャの瞬間に放たれた三連の拳が、飛来する五つの影のうち三つを爆散させた。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　薔薇の王との戦い２

（いけるっ！）

細剣の十八番である手数の多い連続技を放ちながら、アスナは確信していた。

戦線は、思った以上に押していた。

確かにこちらの攻撃ではボスを仰け反らせるには至らないが、ボスの辺り判定の部位が大きいために、いつもなら難しい「多人数で取り囲んでのソードスキル攻撃」が可能で、既に相手のＨＰゲージの八割近くが削れている。集まった攻撃特化型（ダメージディーラー）達は、流石の火力で敵のＨＰをがりがりと削り取っていく速度は、賞賛に値する。

しかし、それを差し引いたとしても、最も貢献しているのは、背後の二人に間違いないだろう。

不定期にポップするモンスターの群れをかき集めて、殲滅する。

言葉にすれば簡単だが、実行するのは…特にこの場所でそれをするのは、言うよりもはるかに難しい。まず第一に、足場が悪い。大蜂のタゲを取るにはキリトのように『投剣スキル』などの遠距離攻撃で惹き付けるか、シドのように疾走して引っかけるようにタゲを取るしかない。飛行型のモンスターに、この悪い足場では、どちらも容易ではない。

しかしあの二人は、それを完璧に成し遂げている。なんと、ここまでに前線を構成していたメンバーが、大蜂から攻撃を受けた回数は、まだ片手の指に数えるほどなのだ。前に偵察隊が同じ作戦をと

ったときには、遊撃部隊は倍の四人もいたにも関わらずにうまくタゲを取れず、あっさりと作戦失敗に追いこまれていたのに。

（シャクだけど、言うだけのことは、あるわね…）

走り回る眠たげで不健康な痩身の男をちらりと見やりながら、最後の一撃をしっかりとクリティカルポイントへと叩き付ける。と同時に、その威力を確認するために目線をボスのＨＰゲージへと走らせる。先程の一撃によって、とうとうモンスターのＨＰは残り二割、レッドゾーンに入った。

（……いける）

鞭のように振り回される蔦の動きを見て、それが自分に向かっていないことを確認。硬直が解けると同時に、続けてもう一セットの連続技を放つために腕を引き絞る。Ｍｏｂ召喚の体制に入って体を揺するボスに、その最初の一撃を加えるべく狙いを定め、

「アスナ！！！耐毒ポーションを飲め！！！来るぞっ！！！」

他の面々の放つソードスキルの轟音の中に、キリトの声が聞こえた気がした。

◆

「シドっ、もう一五分だっ！耐毒ポーション飲めっ！」

「おうっ！」

Ｍｏｂの波を捌いたインターバルの間に、キリトの指示でポーチから耐毒ポーションを取り出して煽る。既に戦闘開始から十四分が

経過しており、このままでは戦闘終了まで耐毒効果が持たないだろう。確かにボスのＨＰも、もうレッドゾーンに入る。

と。

「シドっ、気をつけろ！！！なんかくるぞ！！！」

キリトがさっきよりも大きな声で怒鳴った。

一拍遅れて、俺もそれを感じた。別にそれは『超感覚（ハイパーセンス）』でも何でもない。

床だ。

さっきまでは定期的に動いていた床が、ボスのＨＰバーが二割を切った瞬間、それまでより激しく動き出したのだ。何かが来る。キリトが前線のメンバーに呼びかけているが、絶え間ないエフェクトフラッシュと轟音で聞こえていないのか、呼びかけに答えた奴はいない。

と。

「！！！！！！！」

植物の発する奇声が、ボス部屋全体を震わせた。中央では無い、部屋の四隅からの。

「おいっ！」

四隅から地面を突き破って現れたのは、ボスよりも若干小さい、だがボスと同じ形状をした、ちょうど人間大の植物型モンスター。

名前は「バイオローズスウェル」。外見でボスと異なるのは、頭上にあるのが美しい花ではなく、膨らんだ蕾であるところだ。

その蕾は、花を開く以上に大きく、まるで…そう、まるで。

「っ！みんな、毒液が来るぞ！！！伏せろっ！！！」

まるでスプリンクラーのように、部屋の四隅から一斉に毒液を噴き出し。

中央に向かって扇状に放たれる、霧のように広範囲を覆う攻撃が、耐毒ポーションの効果の切れたアスナ達前衛の面々へと降り注いだ。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　乱戦、混戦、総力戦

ボス部屋は、一瞬で騒然となった。

タイミングが悪く途切れた耐毒ポーションのせいで、戦線は毒や麻痺を受けて呻く人間が出ている。毒を食らったのに解毒結晶をポーチに入れておらず、慌てて助けを求める者。麻痺を受けて動けず、茨の鞭で打たれるままになっている者。

続けて、ボスが体を揺する。Ｍｏｂのポップは五体。数こそ少ないが、この状況では致命的だ。他の面々が倒れ、転げているこの状況では、今までのように走り回ってタゲを取れない。それ以前に、毒液の噴出を止めないことにはどうにもならない。

（くそっ！）

胸中で毒づく。どうすればいい。どうすれば。どうすれば。

「こっちだ！！！」

全員が逃げ惑う中、キリトが叫んだ。その顔に浮かぶのは、焦りを何千倍にも凝縮したかのような、鬼気迫る形相。食いしばった歯は唇が裂けんばかりで、目は瞳孔が限界まで収縮して小刻みに揺れる。例え命の危機であったとしても、ここまではならないだろう。

恐らく何かが、奴のトラウマを刺激したのだろう。

「頼むキリト！こっちは俺が！」

ポーチを探って、非常用のアイテムを取り出す。

こんなものを持っていると知ったらキリトやアスナ、そしてギルドのみんなも怒るだろうが、今回は役立つのだから使わせてもらおう。大きさは拳大、球形のそれを空中に放り、体術スキル基本技、《スラスト》でたたき割る。

アイテム名、《ネペントの果実球》。

特定の植物型モンスターが偶にドロップするこのアイテムの効果は、「周辺の敵の憎悪値（ヘイト）を自分及びその周囲に集中させる」。ＭＰＫ御用達の最低なアイテムだが、ここで使えば虫たちのタゲを自分に一気に集中させられる。これは植物、昆虫型モンスターにはさらに効果が高まる特性がある。後は俺がひたすらに逃げ続けるのみだ。

「オオオオッ！！！」

一瞬だけこちらを見た後、キリトが手にした剣で、四隅の一角のモンスターへと突進する。剣が強力なエフェクトフラッシュを帯び、間合いに入るや否や凄まじいスピードでソードスキルが繰り出される。片手剣の中では恐らく最高ランクの連撃数を誇る攻撃がガクン、ガクンとゲージを削る。

その間に、まだ動ける者が麻痺した者を支えながらキリトの攻める一角へと走り出す。あのモンスターはキリトの凄まじい攻撃力で仰け反り（ノックバック）が生じたようで、毒液もその一角だけは飛んでいない。このままキリトが沈めれば、あそこで一旦体制を立て直せる。

「ヤアアアッ！！！」

逃げ行く面々を捕えようと、四本の蔓の鞭をしならせて襲いかかるボスを牽制するのは、アスナ。たった一人で戦線を支え、毒液を避けながらレイピアの切っ先で鞭を弾き続ける。なんとまあ、神懸かり的な反射神経だ。

だが、その体も無傷では無い。アーマーには腐食酸で所々から煙が上がり、レイピアも目に見えて耐久度が減っているのが分かる。ＨＰバーは、もう既に黄色の注意域に入りこんでいる。顔に焦りを浮かべながら、逃げ惑う他の攻略メンバーを誘導する時間を必死に稼ぐ。

「オオオオッ！！！」

聞こえた咆哮は、キリト。四隅の一角で繰り出された、片手剣の恐らくは相当の上位スキルだろう六連撃の最後の一撃が、モンスターのクリティカルポイントに強烈に決まる。

敵モンスターのＨＰバーが、一気に減少して、減少して、

残り一割程を残して、止まった。

キリトの顔が歪む。高位のソードスキルに課せられる、長時間の硬直時間。

モンスターが、一瞬笑ったように、見えた。と同時に、キリトの後ろで必死に仲間を運ぶ面々の顔が絶望と恐怖に歪む。ここで毒液散布の直撃を受ければ、数人は、ＨＰバーが消し飛ぶかもしれない。既にＨＰバーがレッドゾーンに突入している男の顔から、恐怖による涙が流れる。

そんなプレイヤー達を嘲笑うように、モンスターの頭上の蕾が膨らみ、毒液を散布する、

「キリくん、伏せてっ！！！」

その直前、一人の女の叫びが響き。

飛来したエフェクトフラッシュを纏った槍が、モンスターの体を深々と貫いた。

episode3　乱戦、混戦、総力戦2

「！！！！！」

慌ててしゃがみこんだキリトの体を掠めるように飛来した槍は、角のモンスターの顔面に深々と突き刺さった。薔薇の兵隊がボス部屋中央の巨大花よりも一オクターブ甲高い悲鳴を上げて大きく痙攣し、直後爆散してポリゴン片へと化した。

『投剣』スキルのエクストラスキル、『投げ槍』スキルだ。一撃の威力を重視するなら遠距離攻撃系でも有数の威力を誇る技にも関わらず、人気が少なく上げている人間の少ないスキルだ。

理由は簡単。確かに一発の威力はピックやスローイングダガーよりも数倍高いが、なにせ投げるのは値段が数十倍してもおかしく無い専用の投げ槍（ピラム）だ。まともに考えるのが馬鹿らしくなるくらい燃費が悪すぎる（ちなみに弓スキルを使うプレイヤーが少ないのも同様に、一本の矢の値段が張るのが理由だ）。

そんな物好きなスキルを上げている奴なんて、俺は知らない。ただ一人を除いて。

「ソラっ！！？」

開いた扉から駆け込んできたのは、皮鎧を着て両手用の長剣を携えた、我らがギルドリーダーだった。キリトの前の一体が爆散したのを確認した後、すぐに別の角の一体へと踊りかかる。毒液の雨が

ＨＰバーを削るが、耐毒ポーションをきちんと飲んでいるらしくそのＨＰバーにステータス異常特有の表示は見られない。

「さあさあっ！雑魚はおねーさん達に任せて、シドは本丸を叩くのですっ！」

両手剣の一撃を叩きこみながら、ソラがこちらを見て笑う。おねーさん、達？

一瞬訝しいんだ答えは、すぐに分かった。後ろから飛来した矢が、俺を襲っていた数匹の大蜂を打ち抜いたからだ。考えるまでもない。レミだ。ということは、ファーも一緒だろう。

「バカっ、そんなレベルでボス部屋に来てっ、」
「……入って、無いから、だいじょーぶい」
「バ、バ、」
「こちらなら心配無いッス！俺が抑えるッス！」

打ち抜かれた蜂は、しかしＨＰバーは三割も減っていない。理由は、すぐに分かった。彼女の装備している弓が、いつもの弓より一回り小さい。彼女が好んで用いる威力重視の大弓とは違う、連射性能に特化したショートボウ。

ＨＰを消し飛ばすには足りない、しかし憎悪値（ヘイト）を煽るには十分なそれを連発して、蜂たちを惹きつけていき、ファーがそれを迎え撃つ。さっきはスキル構成が盗賊（シーフ）の俺でも支え切れたのだから、フル装備の壁戦士（タンク）であるファーなら、前の蜂たちは何とか支えられるだろう。

問題は。

「後ろを考えろっ！ボス部屋前で中を攻撃すると、後ろから高レベルＭｏｂのポップがっ、」
「こちらなら問題ないよ、シド君」
答えは、次々と弓を放つレミの、更に後方から帰ってきた。
見えるのは、キリトに負けずとも劣らない強力なエフェクトフラッシュ。そして聞こえた声は、
「っ、ヒースクリフ！？」
「こちらは私が支えておこう。君たちはボスに集中したまえ」
なんとあのＫｏＢ団長、ＳＡＯ最強の男と名高い『神聖剣』ヒースクリフが二人の後方を支えているらしい。既に数匹のモンスターがポップしているようで、敵のものと思われるソードスキルの光が時折漏れるものの、その声には全く焦りはない。レミとファーはボス部屋には入ってはいないため、ボスの鞭も毒液も届きはしない。
（いけるっ！）
ポーチから回復結晶を取り出し、自分にヒールをかける。先程五体の蜂をまとめて相手にしていたせいでレッドゾーンぎりぎりまで迫っていたＨＰバーが一気に端まで全回復する。体は疲れで重くなりつつあるが、まだまだ動けないほどじゃない。
「いくぜ…っ、くらえッ！！！」
俺は地面を蹴って、キリト達を狙い続ける巨大なボスへと飛び掛かった。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　乱戦、混戦、総力戦３（前書き）

１１／１０／１０　ボスの攻撃を一部変更しました。

episode3　乱戦、混戦、総力戦3

アスナは、必死だった。

相手を攻めることに集中するあまりに周囲へ耐毒ポーションを飲む指示を出すのを怠った。それはアスナだけのせいではもちろん無いのだが、彼女の責任感と焦燥感がそれに拍車をかけていた。その瞳に強すぎる意思の炎を燃やし、剣を振い続ける。

結果、彼女は一人でボスの攻撃を引き受けていた。

周囲から降り注ぐ毒液の雨。繰り出される四本の棘のついた蔓の鞭。蜂たちこそシドが一手に引き受けてくれているものの、それでも長くは持たないのは明白だ。既にアスナの耐毒効果も切れている。一撃でも喰らえば。

喰らってしまえば。

「ッ！！！」

恐怖が一瞬だけ体をよぎった所為で、背後からの毒液をまともに食らってしまった。ＨＰバーが一割の半分ほど減って、その横にステータス異常が表示される。『麻痺』。

「あっ……っ！」

この状況下では最悪のステータス異常に、アスナの体から、急速に力が抜けていく。そのままがっくりと膝をつき、前のめりに倒れ…

「あっ、あああああっ！！？」

る前に、鋭い棘が無数に生えた蔓がアスナを締めあげた。蔦の腕を持つ植物モンスターがよく使う、こちらを拘束するタイプの攻撃。その効果は、対象を縛りあげることで継続したダメージを与えるというものだが、発動の隙が大きい上に相当にレベル差が無いと成功しない。本来アスナのレベルなら十分回避できる、恐るるに足りない技。しかしそんな欠点も、麻痺状態の相手には関係ない。

「くっ、あああああっ！！！」

蔓が締めあげられるたびにアスナのＨＰバーが減少していく。成功率が低いだけにその威力はアスナの想像以上のもので、ＨＰゲージがイエローを割り込み、赤の危険域へと突入し、

（し、死ぬ…？私、ここで、死ぬの…？）

アスナがぎりぎりに迫った死の恐怖に、眩暈に似た意識の濁りを自覚した瞬間、

「アスナあああッ！！！」

一人の男の叫びが、彼女の耳に響いた。

◆

無我夢中だった。

四隅の一角に生えたモンスターを切り殺して振り返った瞬間、二

本の蔦で締め上げられ、高々と掲げらるアスナの姿が目に映った。
なんの偶然か、虚ろになったその視線が、俺の視線と交錯する。

俺を見つめる視線。
アスナのその視線が、俺の記憶の中の、最も痛みを発する部分を呼び起こす。

――痛々しい程の信頼の視線。俺に向けて伸ばされる手。
――そして、爆散するポリゴン片。

途端、世界が真っ赤に染まったように意識がスパークした。

「アスナあああッ！！！」

狂ったように叫びながら、剣を構えて走り出す。数歩も行かないうち敏捷値の限界がもどかしくなり、筋力値を全開にして一気に跳躍する。先程のダッシュを遥かに上回る速度での、飛ぶような大ジャンプ。そのまま空中で体を引き絞って、ソードスキルを放つ。出の速い三連撃の技、《シャープネイル》。素早く振りぬかれた剣が二本の蔦を弾き飛ばし、締め上げていたアスナがするりと落下する。空中で何とか受け止め、ポーチから回復結晶を取り出す。

「ヒール！！！」

叩き付けるようにアスナの胸に手を当て、叫ぶ。

一瞬既にＨＰゲージが消えて、回復することなくその体が爆散するイメージが頭によぎったが、直後に回復結晶が弾けてアスナのＨＰが端まで回復していく。だが、アスナの顔色は蒼白で、目は閉じたまま。

「アスナ、アスナッ！！！」

絶叫しながらの呼びかけに、アスナがかろうじて目を開ける。痛々しいほどの疲労と恐怖を称えたその瞳が、自分を見て儚く揺れる。続けざまに取りだした解毒結晶で麻痺も回復させるが、とても戦線に復帰できる状態とは思えない。

「アスナ、アス、ぐっ！！！」

アスナを抱きかかえる俺の背中が、強い衝撃で打たれた。剣戟の怯みから回復した蔦が、攻撃を再開したのだ。だめだ。ここにいては、また攻撃を喰らってしまう。アスナの体を抱えて走ろうとするが、一瞬の判断の後、その考えを切り捨てる。

だめだ。人一人抱えた状態で走るのでは、防御も回避もままならない。倒れてしまえばまたアスナが。

逃げることは、出来ない。守ることも、俺なんかには、出来はしない。

ならば。

俺に出来ることは、一つ。

「くらえッ！！！」

アスナを背後に庇って、ボスと正対する。間を置かずに襲いかかろうとしたボスの顔面を、エフェクトフラッシュを纏った一つの影が横から飛び込んで強烈に踏み抜くように蹴りつけた。影はそのまま大きく膝を曲げ、バク宙の要領で背後へと大きく飛び退る。その攻撃でボスのＨＰがまた目に見えて削られる。

俺に出来ること。
攻撃特化型（ダメージディーラー）たる俺に出来ることは、敵を倒す、それだけだ。

「おおおおッ！！！」

絶叫しながら剣を振りかぶる。
強烈なエエクトフラッシュが剣を包む。俺が今現在持つ最も強力な技の一つ。特に、ボスモンスターのような巨大な体を持つ敵に対して有効な、三連の重攻撃。

《サベージ・フルクラム》。

突き技と切り技を組み合わせた大技が、ボスモンスターの体を深々と穿つ。
捻じ切らんばかりで引き絞った体によって完全にフルブーストされた必殺の剣が、アスナとシドの連続技で一割を切っていたそのHPを、すれすれのところで吹き飛ばした。

◆

後日談。

こうして俺の初めてのボス攻略は、なんとか犠牲者を出さずに済んだ。足りなかった解毒結晶は後続としてやってきたヒースクリフが配ってくれたらしい。アスナはなんか思う所あったのか、以前のような張り詰めた空気が少し、ほんの少しだけ緩んだように思う。代わりに、キリトの方が妙に思いつめた顔をするようになった。まあ、こればっかりは俺がどうこうできはしないだろう。仮にも俺も情報屋、数ヶ月前にキリトに、そしてキリトのギルドに起こった事

件のことも、ちゃんと知っているのだ。

そして、我らのギルド。

危険を冒して突っ込んできたことを叱って（ソラには鉄拳制裁付きだ）おいたものの、三人とも笑うばかりでまともに聞いて貰えなかった。全く、困った奴らだ。使いまくった槍、矢、そして腐食酸でぼろぼろになった俺やファーの金属防具、そして各種結晶。経費と称してＫｏＢに請求してやろうかとも思ったが、もともと「アスナのスキルスロット一つ」が報酬だった。くそ、高い買い物だったな。

結局アスナは、「料理」スキルをとったらしい。まあ、後はどうなるかなど、俺の知ったことではない。なるようになるだろう。その結果は、きっと誰か別の奴が、見届けてくれるのだから。

ｅｐｉｓｏｄｅ４　とある祭りの全員集合（前書き）

今回はギャグパートで。

ｅｐｉｓｏｄｅ４　とある祭りの全員集合

「ぷっはーっ！いい湯だったーっ！みんなも入るーっ？」
「わわわっ！？何やってんスかギルマスっ！？」
「てめっ、服着てこいやアホっ！！！」

出てきたソラに、ファーがあわてて目をそらして鼻を抑えた。この世界では鼻血はでないわけだが、こういった現実世界での癖は一年以上が経過した今でも抜けないらしい。かくいう俺も見えないように咄嗟に手で目を覆ってしまった。

理由は、一つ。

この世界では珍しい入浴設備を使った風呂を終えたソラが、タオルを巻いただけの格好で浴室から出てきやがったからだ。

「……ソラ、レッドカード」
「痛ったあっ！？あたし退場！？」
「……風呂場、戻る。着替える」
「ああっ、ごめんごめん、装備フィギュアそのままだったね、着替えてくるよっ！」

音も無くするすると歩み寄ったレミがパカンと（コードの発動しない強さで）脳天空っぽ女の頭を叩くと、そのままがっちりとホールドして風呂場へと消えていく。やれやれだ。見やるとファーも同じ心境のようで、顔を真っ赤にしている。

「ギルマスも、好きっすね。二日に一度は風呂入ってるッス。オ

イラどうにもこの世界の風呂はなれないから、相当に疲れた時でもシャワーで済ませちゃうッスよ」

「……まあ、好みってのは人それぞれだしな」

不意をついた言葉に、一瞬だけ反応が遅れてしまった。

俺は知っている。ソラが、現実世界では病院暮らしをしていた事を。いくら最新鋭の再現エンジンとはいえ現実世界には流石に劣るこの世界の風呂も、ソラにとっては現実ではできない贅沢なのかもしれない。まあ、詳しくは聞いていないから想像に過ぎないのだが。

「それにしても、シドさん今日は随分機嫌がいいっすね。なんかいいことあったんスか？」

「お？顔に出てたか？」

「はいッス。シドさん、なんかこの家にいるときには外で見るより表情が分かりやすいッスよ」

お前に言われちゃおしまいだな、とは思うものの、ファーの言うことも的を得ている。ギルドが結成されて、ホームとして購入したこの家で寝泊まりしている間は、俺の心が随分と休まっている。というか、気が緩んでいるのを感じていた。ソロプレイヤーだったころも、そこまで張り詰めていたつもりはないのだが、ここでの暮らしでの脱力具合を見ると自分の思っているより体は参っていたのかもしれない。

「まあ、それも、悪く無い、か」

「そッスよ。多分」

「なになにっ!?男の子二人でなに話してるのっ？私のスリーサ」

「アホ」

「ちがうッス!!!」

突然飛び込んできたパジャマ替わりの長袖Tシャツ姿のソラの問い詰めは、軽くかわしておく。この辺が俺とファーの差だろう。年の功、というやつだろうか。俺ももう若くないしな。

「で、なになにっ？結局なに話してたのさっ？」

真っ赤になって飛び退ったファーは追わずに、ソファに沈んだままの俺へと詰め寄ってくる。ちけえよ、と言いながらその顔をぐいっと押しやるが、負けずに押し返してくる。こいつは小学生か。いや、バカだったか。

「明日だよ。一緒にクエストやろうってお前から言ってきたんだろーが。前回は失敗したからな、ちょっとツテでいろいろと手を打っておいた。明日はちょっとしたお祭りだぜ」

「おおっ！！！お祭りっ！！！それは楽しみだっ！！！」

「まじッスか！？オイラ達も参加できるっすか！！！」

「んー、ちょっとやってもらいたいことがあるけど、参加には変わらん。楽しいと思うぜ」

「……楽しみ」

「おお。やることは説明する。なんとか主役は来てくれることになったんでな」

今日一日走り回った甲斐あって、必要面々は揃った。

さあ、お祭りだ。明日は、ずっと気になっていたことの確認をさせてもらおう。

あの男の、実力を。

ｅｐｉｓｏｄｅ４　とある祭りの全員集合２

「と、いうわけだあ痛ってぇ！！！」
「なにが「というわけだ」だこの野郎！！！俺はエギルに、いいクエストの情報が入ったから四十三層に夕方四時半に来いって言われてきたんだぞ！なんだこの有様は！！！」
「いや、俺は嘘は言っていないぞ？いいクエストの情報があるのは本当だ」
「言ってない情報があんだろ！！？」
「まあ、「キリトと勝負がしたいから」とシドが言っていたとか、折角だから賭け札を配ったとか、かな。大した問題じゃないだろ？」
「大問題だコラ！！！」
「まあまあもうやっちまったことだし、痛っ！叩くな、叩くなって！」
「うるせえ元凶！！！」

第四十三層の、転移門。暴れるキリトを、俺とエギルが抑えている。そしてその周囲には、何重にもなった人垣が出来ており、笑ったりはしゃいだり、中には映像結晶を向けてくる奴までいる。昨日、雑貨屋のエギルに頼んでおいたキリトの呼び出しは、上手くいったようだ。

エギルは俺の行きつけの雑貨屋の店主であり強面の斧使いだが、それとは裏腹に中身はいい奴だ。もっともいい年こいてるだけあってそれも上手く隠しており、店での売り上げが中層フロアの剣士クラスのサポートに使われていることを知る者は少ない。俺はそれを知って以来、使わないドロップやクエストでの報酬アイテムはエギルの店に下ろすことにしている。まあ平たく言えばお得意様ってわ

けだ。そんな俺の頼みとあって、エギルもノリノリでキリトを捕まえてくれた。まあ、本人の悪戯心もあるだろうが。

そんなこんなで、呼び出されたキリト。最初にして最大の関門だった、「目立つのが嫌いなキリトを大人数の前に連れ出す」ことは成功した。ここまでくれば後は何とかなる。エギルと『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』の面々に抑え込まれたキリトがとうとう屈したところで、俺はクエストの説明に入った。

キリトの恨めしげな目が痛い。いやまあ悪乗りしたのは認めるが、これは決して悪くない話だ。そのはずだ。そして、これをこなすことは、きっとキリトのその力を、もっと上まで引き上げてくれる。この男の力は、きっとこの先どこかで必要になるに違いないのだから。

そんなことを考えていたら、キリトの目が一瞬、ふっ、と怯えたように曇った。

「おい、シド。ここまでされてなんだが、俺、パーティー組むのは…」

「ああ、それなら心配すんな。今回のクエは一人用。パーティーは組まなくていい」

「……そうか」

やっぱり。予想はしていたが、流石にまだパーティー組むのは怖いか。

クリスマスの前の鬼気迫るレベル上げの話、そしてたった一人での年イチの大物フラグＭｏｂ攻略。誰にも言わなかったが、俺はそのままキリトが早まったことをしないかとひそかに心配していた。

だが、そのあと何があったのかは知らないが、キリトの顔に若干の光が戻ったのだ。

少なくとも、今までのように振舞おうと、必死に努力するような。

「今日は、お祭りだ。五十層のボスといい、最近は暗いことばっかだったからな」

「……そうだな」

「だから、今日はお前も楽しめ！なんてったって、今日の主役は、俺とお前だ」

まだまだ、初めてあった頃とは程遠い、影のあるキリトの顔。

（今日のこのバカ騒ぎが、ちっとはあいつの気分を晴らしてやれればいいがな）

がらにもなくそんなことを考えながら、俺はにやりと笑った。

ｅｐｉｓｏｄｅ４　とある祭りの全員集合３

「んじゃあ、森の方の準備は整ったな？」
「ああ。ちゃんと知り合いの『攻略組』の奴らが張り込んでＭｏｂを排除してくれてる。駆け抜けて大丈夫だ」
「シド、おまえのギルドの方は？」
「こっちも大丈夫だ。『黒き果実の森』までの道は、あいつらがＭｏｂも人も、どかしてくれてる」
「じゃ、俺は外で待ってる野次馬の交通整理をしてくるぜ」

エギルがそう言って立ち上がり、俺とキリトが座るテーブルを後にする。

俺達二人が座っているのは、極々普通のＮＰＣショップの、喫茶店だ。ここでしか飲めない特製ブレンドのコーヒーはなかなかに美味で、持ち帰り不可のために常連が何人かいるのだが、その内の一人によってとあるクエストが発見されたのだ。

その名称は、『秘伝のコーヒー豆』。
もう最前線から十層近く下の層のクエストであるにも関わらずに、未だ（俺の知る限りでは）達成者の居ない難関クエストだ。そして、俺にはこのクエストの報酬となるだろうアイテムも見当がついている。

「確かに、あれだろうな」
「そっか、キリトも『索敵（サーチング）』上げてたな。だったら見たろ？あのカウンターの後ろ」

『索敵』によって見える、ＮＰＣマスターの後ろの棚に並んだ大

きな酒瓶の内の一本が、カーソルによって示される。そこに浮かぶ文字は。

「《ルビー・イコール》。しかもあの大きさ、十四、五杯分はあるんじゃないか？」

「おうよ。今まで出てきた中でも最大級。アイテムの効果から考えて、多分初回攻略プレイヤーだけしか貰えないだろうし、勝利の景品にはもってこいだろ？」

「……勝負、だな」

「もともとそう言ったろ？」

ステータス上昇アイテム、《ルビー・イコール》。カップ一杯で敏捷値を1上げるこのアイテムは、レベル、ひいては数値的ステータスの存在するこのＳＡＯでは最も重宝されるアイテムの一つといっても過言ではないだろう。そして、この手のアイテムは無数に取れてはゲームバランスが壊れかねないため、基本的に一度しか手に入らない。つまり、先に攻略したもん勝ち、ってことだ。

そして、そのクエストの開始は。

「あああっ！？しまったっ！秘伝のコーヒー豆を切らしてしまった！！！どうしよう、このままでは常連客に出すコーヒーが作れないっ！」

時計が五時を指した瞬間に、カウンターでカップを磨いていたＮＰＣが悲鳴を上げた。その頭には、クエスト回始点であることを示す「！」が表示されている。

「あああっ！あと三十分で常連さんが来る時間だあっ！それに、一時間もすれば夕食を食べにくるお客さんたちも来てしまうっ！ど

うすれば、どうすればっ！」

ゲーム的に意訳すれば、このクエストは二段階の報酬があるタイプで、クリアの制限時間は一時間、そして三十分を切った場合はさらに豪華なアイテム……今回なら恐らく《ルビー・イコール》……がある、ということだ。

「も、もし、そこの旅のお方！お時間がおありでしたら、街をでて真っ直ぐ南に行った先にある、『黒き果実の森』で、《ダークライトビーン》というこのくらいの果実をとってきてくださいませんか？お礼は致します！一時間に間に合わないと、店が、店がっ！」

「任せろ！」

「りょーかい！」

言うが早いか、俺達は店の外へと全力で走り出す。その視界の端にあるのは、クエスト受注が完了したことを示すシステムメッセージ。前回『冒険合奏団』で挑戦した際は、五十分近くかかって報酬はコーヒー一杯だったが、今回はそれで終わる気はない。

「負けねえぜ、キリト！」

「こっちこそ、シド！」

一瞬だけ視線を交わしてお互いににやりと笑い、そのままドアを吹き飛ばさんばかりの勢いでキリトが蹴り空ける。破壊可能オブジェクトだったなら蝶番が吹っ飛んでいただろう勢いだが、俺もそれには突っ込まずにキリトに続く。

俺の一極化で鍛えた敏捷補正の走りと、キリトの筋力と敏捷を組み合わせた驚異的速度。

スピード自慢対決の幕は、こうして切って落とされた。

episode4　RUN!RUN!RUN!!

「おおおっ！はえええっ！！！」
「すげえっ！流石は『敏捷一極化』型だ！」
「うおっ！？もう見えねえぞ！」

久々の俺の敏捷補正全開のダッシュに、周囲に出来た人垣から歓声が上がる。普段は手の内を隠す意味合いもあって必要な時でも七、八割に抑えているが、今日はお祭り。出し惜しみなく全開にして観客にその速さを堂々と見せつける。ちなみに街の出口までの最短ルートは、おそらくエギルの仕業だろうロープで区切られていて野次馬が入れないようになっていた。準備のいい奴だ。

しかし、対戦相手たるキリトは、そのロープで仕切られたコース内には、いなかった。

「どこだよ『黒の剣士』！？」
「上だ上っ！屋根の上走ってんだよ！」
「見なかったのか！？店出てすぐの大ジャンプ！一気に屋根まで飛び乗ったぜ！」

あの男、店を出てすぐに跳躍して屋根に飛び乗り、そのまま道を無視して屋根の上、最短距離を走りだしたのだ。確かにあの店からは道なりに行けば若干の曲がり角によるロスがある。だが、

「んなこと考えっかよ、ふつー！」

ちらりと見上げると、キリトはちょうど屋根から屋根へと飛び移

るところだった。五メートルは優に超える隙間を、全く恐れることなく飛び越えてさらに加速していく。俺も負けじと脚を動かし、その黒い背中を追いかける。

「いったぞ！『黒の剣士』がちょっと早い！」
「すっげー！攻略組って、あんなすげーの！？」
「サンドイッチいかがですかー？手作りサンドいかがですかー？」

どうやらお祭りは中層ボリュームゾーンの面々はおろか、職人クラスの奴らまで広がっていたらしい。キリトにばれなければ情報は広めていい、とは言ったものの、ここまで広まっているとは。まったくエギルのこういった妙な才能には驚かされる。普段は中層というには高く、特に何も無いフロアなために過疎っているのだが、今日は人、人、人、で本当にお祭り騒ぎだ。

「おおおっ！今『黒の剣士』がこの上通った！」
「ちょっとー！？ここ通るって聞いてたのに屋根の上じゃ見れないじゃない！」
「せっかくのお祭りだよ！浴衣はどう！？手作りワンメイク品だよー！」

くそっ、速い！

町中は平坦なため、俺の方が有利だと思っていたのだが、キリトの屋根走りという思わぬ特技で負けてしまっている。このまま街の外に行けば、目的の『黒き果実の森』までは、若干の勾配のある荒れ地が続く。上り坂は、俺にはますます不利だ。

頬に汗が滴るが、足は止めずに走り続ける。どうする。確かに俺も「隠し玉」はあるものの、まだもうすぐ街を出るというところだ。

こんな序盤で使ってしまっては勝ち目はないだろう。くっ、手ごわいな、キリト！

悪態を、心の中でついた、その瞬間。

「うわあああああっ！！？」
「あっははははっ！！！」
「いってえええ！！！」

前方の野次馬から、どわっと歓声が上がった。
走りは止めずに駆け抜けていく際にちらりと見ると、全身真っ黒の男が転がっていた。

どうやら屋根から飛び降りた際、勢いをつけすぎたようで着地に失敗したらしい。あのスピードで転がり落ちたなら、『圏外』ならば結構なダメージ量が入っただろうが、幸いここは主街区、『圏内』だ。まあ不快な神経ショックは生じるので、しばらくは立ち上がれまい。

貰った。

ニヤリと笑って、そのまま前を向こうとして、

「っ！？」

思わず二度見してしまった。
転がっていたキリトが素早く跳ね起きたのだ。さすがに少々は堪えたのか、二度三度と頭を振ってはいるものの、もう走れないほどのダメージを受けたようには見えない。思わず凝視してしまった俺と、ばっちり目が合う。

「ヤベッ！！！」
「まけねえぞっ！！！」

キリトが再びの疾走が始まる前に、俺は前に向き直って全力で走りに集中する。たなぼただが、とりあえず予想通りここまでにリードだ。勝負はまだまだこれからだ。俺は加速する意識の中で、一心不乱に先を目指して走り続けた。

episode4　RUN!RUN!RUN!!2

『圏外』まで広がっていたお祭りの露天商や野次馬の列を一瞬で駆け抜け、そのまま荒れ地のフィールドを突っ切っていく。所々に転がる岩や背の高い草を交わしての疾走。俺だって身のこなしには自信があるが、なにぶん上り坂だ。恐らくキリトが距離を詰めてくるはず。

そして、荒れ地を抜けて、森の目の前まで来れば。

「おーっ!!!勝ってる勝ってる!!!シドっ、がんばれーっ!!!」

「ちょっ、ギルマス、今手離したらＭｏｂがそっちに行くッスよ!?」

「えっ!?わっ、ととっ!!!」

「……不注意」

ここには、俺の仲間である、『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』の面々が控えている。まだフィールド圏であるためにそこまでＭｏｂのポップは多くないが、今は運悪く相手をしている最中だったらしい。助けてやりたいとは思うが、今は男と男の真剣勝負中だ。心を鬼にして駆け抜ける。いや、助けたいとは思ってるんだよ?ほんとだよ?

「すまんっ!がんばれっ!」

とりあえず、手は貸せないが声だけはかけていく。Ｍｏｂも一匹だけのようだし、そもそもこのくらいのレベルの層ならばレベル的には十分以上に安全圏だ。凄まじい速さをキープしたままで『黒き

果実の森』へとそのまま突入する。

「おっけーっ！シドもがんばってねっ！ほらっ、後ろっ、もうキリくん来てるよっ！」

「帰りは任せてッス！！！」

「……ごーごー」

三人の、三者三様の声援を聞いて走る。ん？もう後ろ来てる？

「げっ」

思わず振り返れば、キリトが凄まじいスピードで駆けあがってくるところだった。その差は恐らくもう数秒もないだろう。やばい、思った以上に差を詰められた！森の中央に位置する、クエストを受けた者だけが取れる森中央の《ダークライトビーン》の実っている木までは、勝っていないとこの先が辛い。

森の中は道自体は平坦だから、まだ俺だって取り返しが、

「おいついたあああああっ！！！」

「くっ！！！」

つくが、もうそんなこと言ってる場合じゃないか！

こうなってしまえば、ここはもう反射神経の勝負だ。行く手を塞ぐ茨をキリトが切り裂き、茂った背の低いを俺が飛び越えて先を目指す。ここで問題になってくるのは、ここがフィールドでは無く、ダンジョン扱いの場所だということ。

はっきり言えば、フィールドよりはるかにＭｏｂのポップが多いのだ。

「っ！オイ前っ！！！」

キリトが素早く反応したのは、前方に出現した植物型モンスターだ。確か名前は『ブラックイーター』。真っ黒な全身が特徴的な、足の生えた草が歩いている典型的な植物型で、顔と両手は花をイメージした巨大な口。反射的にキリトが背中の剣に手をやって、

「どおりゃあああああ！！！」

聞こえた大声にその手を止めた。

声の主である特徴的なバンダナを巻いた髭面の男は、そのまま一直線にモンスターへと突進して腰に構えた刀で横薙ぎの一閃を加える。エクストラスキル、『カタナスキル』のエフェクトフラッシュが迸って敵を両断し、爆散するポリゴン片へと変えた。

「おうおうキリト！雑魚は任してお前ェは先に向かいな！！！」

「く、クライン！？おま、なんで、」

「詳しくは後だ！俺はお前ェが勝つ方に賭けてんだよ！さっさと行けっ！ああっ、もう一人が先に行っちまったじゃねェかっ！？」

勿論ここも、エギルに手を打ってもらっておいたのだ。

攻略組で時間のありそうなメンツをそろえて貰って、ここのモンスターを前もって殲滅して貰っておいたのだ。後から聞いた話ではどうやらエギルはギルド一つにまとめて頼んだらしく、あのカタナ使いの男がリーダーらしい。

そしてラッキーなことに、驚いたキリトが一瞬体を止めたおかげでまた差がついた。

『索敵（サーチング）』を発動してさっと視線を走らせると、所々に散らばった、

ギルド『風林火山』の面々が周りのＭｏｂを上手く抑え込んでいるのが分かった。流石は『攻略組』の一角、その名に恥じない働きぶりだ。お代は弾むぜ、キリトの足止めしてくれた分も含めてな。

そんな事を考えて心の中で笑う俺の前に現れる、開けた空間。目的となる、《ダークライトビーン》が実っている木のある広場だ。

「見えたっ！！！」

俺はそのまま足を止めずに木に向かって突進する。体術スキル《ウォーアタック》。単純な肩からの体当たりの一撃が、太い木の幹に炸裂して派手にその枝を揺らす。当然だが、枝になっている身を落とすためだ。以前と同様に落ちてきたのは黒い鬼灯（ほおずき）のような形状をした実。二つ落ちたそれのうち一つを拾い上げて、

「サンキュー、シド！先行くぜ！」

アイテム名称を確認する前にキリトがもう一つを拾い上げて、走り出した。

しまった、硬直時間の僅かな隙に追いつかれたか！？

俺も慌ててそれをストレージにしまって追いかける。くっ、速いっ！

敏捷値自体はレベル差があるとはいえ俺の方が上だろうが、なんというか、道を見出すその勘が俺よりも数段上だ。森を抜ける道が、奴の方だけ草木が避けているようにすら感じてしまう。なおも援護を続けてくれる『風林火山』の面々に見送られながら森を出る。

ここからが、終盤戦。
数秒向こうが先行だが、下り坂なら俺にも勝ち目はある。
先を行くキリトの背中を追って、俺が隠し玉『軽業（アクロバット）』のスキルの一つ『フラッシュ・ステップ』を発動する。敏捷値を保ちつつ硬い足場を飛び移り加速する技。なんらかの気配を感じたのか、振り返ったキリトの顔に驚きの表情が映る。もう勝ったと思っていたのだろう。
まだまだ勝負は、これからだ！

episode4　RUN！RUN！RUN！！3

「ブモオオオオオ！！！」
「っ、なんだ！？」
「止まるなっ！走れっ！」

並んで下りの荒れ地を駆け抜ける俺とキリトを、背後からの吠え声が引き留めた。さらには聞こえるのは、大型のモンスターによる突進の足音。立ち止まろうとするキリトに足を止めないように叫びながら、続けて説明する。

「大丈夫だ！あれは『ビーンイートボア』！このクエストの一応のボスで、森を出たところで追い掛けてくる奴だ！だが今回は俺達は相手をしないで、『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』の奴らが足止めすることになっている！」
「嫁さん大丈夫かよ？」
「ああ、レベル的には十分安全圏だし、ドロップも考えなきゃだしな、ってか誰が嫁さんだ！？そんなんじゃねえぞ！？」

クエストの中ボスだが、ここは四十三層。レベル的にはレミ、フアーでも十近いアドバンテージがある。ソラに至っては現在レベルは六十を超えている。三人がかりなら俺抜きでも十分に対処できるはず。

少し、真面目な話をしよう。
このクエストは俺が一人でたまたま発見したものだが、それからすぐに情報書を書き、中層フロアの面々に注意を呼び掛けたのだ。理由は一つ。このクエストが、限定的とはいえ転移結晶使用を制限

する効果を持っているからだ。『圏外』では、何が起こるか分からない。一瞬で村へと帰ることができる転移結晶は、プレイヤーにとって必要不可欠な保険といえるのだ。

その生命線の使用が、森でクエストアイテムを取ってから村に帰るまでの短い間ではあるが使えなくなる。知らないでその状況に陥って、このボスに出逢って混乱するプレイヤーが出ないとも限らない。

「で、あれはほっといていいんだな!?」

「おお!突進の直線移動はかなりのものだが、小回りは効かないから比較的戦いやすい!そのために森の出口近くで待機してるあいつらがしっかり足止めして、」

…どー……しーどー…

っておい。足止めされているはずがなんでここまでついて来てるんだこの巨大イノシシ。

「ソラっ!?おい、どういうこったこれ!?」

「ごめーんっ!コイツどうやら憎悪値(ヘイト)関係無く《ダークライトビーン》持っているヒトを狙い続けるみたいっ!弓でも槍でもこっちに惹きつけらんないよっ!!!」

「ええっ!!?」

ちらりと目線をやると、昔の名作アニメ映画の巨大イノシシよろしく体に弓矢やら槍やらの突き刺さった茶褐色の巨体が、わき目も振らずに俺らに突進してきていた。

くそっ。

こんな特に何も無いフロアのクエストボス如きに、そんな専用のＡＩが組まれているとは。このイノシシ、見た目通りに突進攻撃の威力はなかなかのものだが、そのほかの牙での突きや噛みつき、踏みつけはそれほどの脅威ではない。だがその分突進のスピードはなかなかのもので、このまま逃げ切るのはちょっと難しいだろう。

そしてなにより。

「おいっ、シド！」

「ちっ、分かった！」

このままいけば、恐らく主街区で俺達を待っているであろう、観客たちを巻き込む可能性がある。さすがに低レベルの面々は『圏外』に出ていることはないとは思うが、なにせあのお祭り騒ぎだ。気が緩んでいる可能性も、否定できない。

そして、正直時間に関してはかなり余裕がある。俺とキリトのスピードは現在の最前線でもトップクラスにあるだろうし、その全力疾走でここまで来たのだ。あのイノシシを叩き潰すくらいの余裕は、十分にある。何より、戦闘は副業である俺とは違って、戦闘に関してもエキスパートであるキリトがいる。

「一気に片づけるぞ！」

「おおよ！大技でいくぜ！」

キリトと瞬時に目配せし、足元から派手な土煙を巻き上げての急制動。直後に反転してイノシシに正対して構えを取る。俺の四、五倍はあろうという巨体は結構な迫力だが、その体にはソラが放ったのだろう投げ槍が数本刺さって貫通継続ダメージを与え続けており、そのＨＰは七割ほど。

「いくぞっ！」

キリトが凄まじい速さで背中の片手用ロングソードを抜き放ち、目一杯に引き絞る。突進を迎撃するための、突進系のソードスキルの構え。その剣が激しいエフェクトフラッシュを帯び、ジェット機めいた轟音が鼓膜を震わせ、

「それには及ばない。任せたまえ、キリト君、シド君」

片手剣重攻撃ソードスキル、必殺の《ヴォーパルストライク》が放たれる直前に、後ろから唐突に涼やかな声が聞こえた。虚を突かれたキリトがぎりぎりで技を止めた瞬間、俺とキリト二人の間を、真っ赤な影が横切る。影はそのまま、眼前で猛るイノシシを左手に構えた盾で真正面から迎撃する。

無茶だ。

突進系のソードスキルならまだしも（それもキリト並みの筋力と武器があってこそだが）、ただの盾一つで体重差のある相手の突進を受け止めるなんて。下がれ、と叫ぼうとしたが一瞬間に合わず、凄まじい轟音とともに二つの影が激突し、

「なっ！」
「おおっ！」

イノシシが、まるで破壊不能オブジェクトにでも衝突したように大きくつんのめった。対する赤い影は、全く押される様子なくがっしりとその突進を真正面から受け止めて、そのままの体勢で振り返った。その男は。

「こういったお祭にも、私も是非呼んで欲しいものなのだがね。どうしてかこういったイベントの類は私には連絡が来ないのだよ。私もプレイヤーの一員なのだが」

「ヒースクリフ！」

あろうことか、攻略組、いや、全プレイヤー中最強の呼び名の高い有名人だった。

俺達の元へと向かおうと必死に足を動かすイノシシの鼻面を、涼しい顔で盾で力づくで押さえつけている。信じられないほどの力と、盾の防御力だ。アインクラッド最硬の称号もうなずける。あっけに取られて固まったままの俺達に向かって一言。

「ここは私に任せてくれたまえ。シド君に、四十七層で助けてもらった借りの分だ。そして何より私自身、あのクエストを君たちがどれくらいのタイムでクリアするのかを見てみたい」

硬質な表情はそのままだが、その真鍮色の目がすっと細められる。俺とキリトが、同時に頷く。

「すまん、ヒースクリフさん！」

「まかせた！」

思わぬ援軍の力を借りて、俺達はまた走り出した。

既に荒れ地を抜け、主街区がはっきりと見え始めている。

レースは、とうとう終盤に差し掛かっていた。

episode4　祭りの終焉

「きたぞっ！！！」
「ええっ！？もう来たの！？みんな出店にいっちゃったままだよ！？」
「接戦だ！二人ともはええ！！！」
「いや、シドがほんのわずかに速い！！！だが最後まで分からねえぞ！！！」
「マジか！？まだ十五分も経ってねえぞ！！！」

街の主街区をくぐった時は、俺の方がほんのわずかにリードしていた。だが、キリトがまた筋力補正を生かして一気に跳躍して屋根に飛び乗る。行きがけのタイムから逆算して考えて、どっちが勝つか正直微妙なラインだ。

「やべっ、もう来たぞ！道開けろ！」
「えっ、きゃっ！？」
「うおっ！？」

流石にこの時間に来るとは思っていなかったのか、ルート上に居る数人を『軽業（アクロバット）』のスキルで巧みにかわしながら更に加速する。隠し玉なのであまり人前で披露したくはない技だが、ここまできたらそんなことにかまってられない。最優先事項は勝利！全力疾走あるのみだ！

「おーっ！きたきたっ！頑張って、シドっ！」
「……ごーごー」
「キリトさんはまだ屋根通って無いッス！いけるッスよ！」

途中、聞きなれた声援を聞く。言うまでも無く『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』の三人だ。いや、嬉しいが、お前らなんで先に帰ってんだよ。馬鹿高い転移結晶をこんなとこで使っていいのかよ、しかも三個も。と、今にして思えば突っ込みどころ満載だが、この時はそんなことを考える余裕はない。声援を糧に更に加速、一定の敏捷値で使用可能となる、装備重量が一定以下の場合のみ使用可能な『軽業』スキル、《ウォール・ダッシュ》でＮＰＣの家の壁を蹴っての全速力のクイックカーブ。

「よし！！！」

更にもう一度、歓声を上げる観衆に壁蹴り跳躍を惜しげもなく披露してダッシュ。拍手喝采は悪くは無いが、今はそんなものよりも勝利を、勝利を！

石畳みを削り取らんばかりのドリフト走行で最後の角を曲がる。顔を上げた先、キリトの姿は、まだない！よし、行ける！勝てる、いや、勝った！

俺が限界を振り絞り過ぎて煙を上げているように錯覚する神経回路に鞭打って最後のダッシュをかけ、勝利の証であるゴールのドアに向かって手を伸ばす。

その瞬間、世界がスローモーションになった。

「うおおおおおっ！！！！！！！」

後ろの屋根からの渾身の大ジャンプをしたキリトの絶叫が響き。

「ぎゃあああああっ！！！！！！！」

咄嗟に振り向いた俺が悲鳴を上げ。

突っ込んできたキリトの体に巻き込まれ、二人がもつれ。

その勢いのまま、エギルが開けてくれていたＮＰＣショップの扉へと転がりこんだ。

結果。三十分でクリアのこのクエストを俺は、俺達は十五分を切るという前人未到、空前絶後のタイムを記録してクリアしたのだった。

ｅｐｉｓｏｄｅ４　祭りの終焉２

「おら、主役。音頭をとるのはお前だ！」
「じゃ、じゃあ、クエストのクリアを祝って…、」
「馬鹿野郎！祝うのはおめーの勝利に決まってんだろうが！」

いきなり乾杯の音頭を任されたキリトのセリフを、既に幾分か酒の回ったクラインが煽った。

クエストを攻略したその日の夜、祝勝会と称してとある酒場の一室に集まったのは、合計で十四人だった。森で手伝ってくれた『風林火山』の八人、そして『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』の三人に、店やらイベントの手配をしてくれたエギル、主役たるキリト、そして俺で十四人だ。結構な人数だが、この世界では珍しい「貸切での宴会」が可能なＮＰＣショップを見つけてくれたエギルのおかげで、全員が大声で騒いでいる。

「いや、だって、」
「気にすんなって、勝ったのはお前だろ？反則まがいの妨害があったかもしれんが」
「……やっぱ怒ってんじゃねえか、シド」

結果は、タイム自体は同時だったものの、先に店に到着したのはキリトと認識されたらしい。景品の特大サイズの《ルビー・イコール》はキリトのストレージに入り、通常の三十分切りの景品としては上質なコーヒーの素材（しかも結構大量）が貰えた。いや、まあ敏捷一極として、悔しく無い訳じゃあないが。

「まあまあ！クエストもクリア出来たし、何より楽しかったよっ！」
「……いい仕事、した」
「すごかったッスよ！」

ギルドのメンバーの異常なテンションの上がり具合を見てると、悪く無いかな、という気もしてくる。特にソラのハイテンションっぷりは、そのまま机の上で踊りだしたりしないか心配になるほどだ。やたらと慣れ慣れしく絡みついて来て、バシバシと肩を叩いてくる。

「にしてもオメェ、あの走りっぷりはなんだよ！？バランス型じゃなかったんか？」
「いや、あれはコツがあって…」
「聞きたい聞きたい！」
「俺も興味あるな！」

ふと見れば、キリトの方はどうやら知り合いらしい『風林火山』の面々とグラスを傾けながら議論していた。今回間近で見て、俺にはあの走りは本来敏捷の補正しか起きない「平面での走り」を、筋力値が作用する「跳躍を使った移動」をしたようにシステムに錯覚させたのではないか、という仮説を考えている。確かにその方法なら単純な移動速度を筋力優位の面々が大きく上げられるだろう。まあ、キリト以外に簡単にできるとは思えないが。

「おう、お疲れさん」
「ああ、エギルか。ありがとな、いろいろと。よかったのか？この料金もお前が持つんだろ？」
「心配ねえぜ。おかげさまで、随分稼がせてもらったんでな」

歩み寄ってきたエギルは、自分で言うように相当に儲けたのだろ

う、笑顔を堪え切れていない。それでもホストらしく皆のグラスの残量を気にかけているのは流石というべきか。俺も取り合えずグラスをカチリと合わせておく。

「どうよ？キリトは」

「……ああ。一時期よりは、随分マシだ。こんな馬鹿騒ぎに参加するなんざ、クリスマス前のあいつからは想像もできんぞ。クラインの奴も、だいぶ気にかけてくれているようでな」

「…そうか。それならいいがな。そういえば、ヒースクリフさんは呼ばなかったのか？手伝ってくれてずいぶん世話になったんだが」

「無茶言うよな、お前も…。一応、誘ったんだがな。なんでも『申し訳ないが、私は代表という立場上皆と説教を受ける訳にはいかないのでね』だそうだ」

「あ？なんだよそれ」

「俺だって知らん。あとはお前とキリトに『いいものを見せて貰った。ありがとう』だそうだ」

「っ、そいつはどーも」

ＳＡＯ最強の男からの思わぬ讃辞に、思わず頬が緩んだところをしっかりと見られてしまった。あわてて顔を取り繕うが、にやりと笑うエギルと目があっただけだった。ちくしょう、やっぱこいつにはかなわないな。

「……よしっ、みんな！今日のクエストアイテム、《ルビー・イコール》！十五人分もあるんだ、ここで開けちまおう！一人一杯ずつ飲もう！」

宴もたけなわになってきた頃に、雰囲気に酔っ払ったのか嬉しかったのかキリトが叫び、ＮＰＣマスターとエギルが二人がかりで皆のカップに酒を注ぐ。敏捷補正が飲むだけで上がるという貴重品だ

が、ここでそのキリトの太っ腹な振る舞いを無碍に断る奴はいなかった。

「やっほーう！」
「まってましたあっ！」
「キリ君太っ腹～っ！！！」
「……いえーい」
「かっこいいッス！」

皆が口々に叫び、乾杯する。
この時の皆の笑顔を俺はずっと、ずっと覚えていた。

◆

後日談。
この宴会の終わりは、唐突にやってきた。

「まったく、何を考えているんですかあなたたちは！平日にダンジョン攻略をほっぽリ出してお祭り騒ぎしただけでなく、一般プレイヤーを『圏外』に出してっ！！！」

どこからか騒ぎを聞きつけて殴りこんできた、『閃光』殿によって。

「だいたいいつも、ふざけてばかりで真面目に、ちょっと、ちゃんと聞いてるの！？キリト君！！！」
「はいっ！」
「誘われたからって考えなく馬鹿なことをしたりしないで、クエストの時はきちんと、」
「いやむしろ俺は巻き込まれただけで…」

「いいから黙って聞く！！！」
「はいっ！」

皆は睨まれただけで解散させて貰えたが、主役だった俺とキリトは正座でのお説教を頂戴する羽目になった。「皆と一緒に説教をされる訳にはいかない」。ヒースクリフのセリフが、キリトとアスナの二人の空間に完全に置いていかれている俺の頭の中で、くるくると回っていた。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　振り回されて、走りけり

「……は？」

「もーっ！何を鳩が機関銃くらったみたいな顔してんのさっ！ちゃんと聞いてたっ！？」

「いや、鳩の身で機関銃を喰らったら流石に顔云々どころじゃ無かろうが……そんなことはどうでもよくて、今なんつった？」

アホの子のお手本のようなボケを入れたソラの突っ込みにいちいち反応するようになってしまったのは、進歩というべきか退化というべきか。いや、そんなこともどうでもいい。

「だーかーらーっ！明日は第一回、『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』レベル上げ大会を開催しまーすっ！って言ったんだよ！」

「いや、違うだろ！お前さっき『炎霊獣の魔洞窟』に行くっつったじゃねえか！」

俺が面喰うのも無理はない。というか、この面々で行くのか！？自殺行為じゃねえか！？俺ならキリトを三人ぐらい連れて行きたいぞ。

『炎霊獣の魔洞窟』。

第五十二層のフィールドダンジョンだが、当初その異常な難易度で一時期話題となったダンジョンだ。五十代の後半のレベルのモンスターがかなりの高率でポップする上に、暑さで触れるだけでＨＰを削る壁や足場の悪い岩石地帯、落ちれば死が見えてくる溶岩。そして何より、ポップするモンスター全てが使ってくる厄介な特殊攻

撃。

「あそこの火炎ブレス、ＨＰゲージ云々以前に喰らいたくねえんだが……。」

十分な範囲を巻き込む大いに不快な神経刺激を与えるそのブレスは、前衛後衛の役割分担、あるいは高機動プレイヤーの一撃離脱戦を許さない。はっきり言えば、俺（ついでに言えばソラもだ）の戦闘スタイルに、相性最悪だ。このメンツでは狩りはおろか命の危険があるぞ。

「ふっふっふっ！それなら問題なしっ、のーぷろぶれむのーぷろぶれむっ！」

「ギルマス、なんか秘策でもあるんスか？」

「……どうせ、ない」

「ちっちっちっ！今日の私はいつもの私じゃないよっ！ちゃんと秘策があーるっ！」

「いつものお前なら無いんだな」

「しゃーらーっぷっ！見せてあげよう、これが私の秘策、だーっ！！！」

ファー、レミ、そして俺の三連ツッコミにもめげずにソラが右手を振う。相変わらずすさまじい速さのウィンドウ操作で現れたのは、人一人をすっぽり覆い被せる大きさを持つ、なかなかにデザインのいいマントだった。一目で高級な素材が使われていると分かる…っておい。

「こ、これ《プロミネンス・マント》じゃねえかっ！？ど、どこで手に入れたんだ！？」

「買ったのっ！ギルドのお金でっ！」

「えええええーっ！！！」

三人の悲鳴が上がった。このバカ、こんな用途がめちゃくちゃ限られる装備品の為に俺達が稼いだ金を…っ！俺も結構な量の貯金があったと思うのだが、このギルドホームの購入や以前のボス戦を筆頭に浪費の機会が増えたせいでもうそこまでの余裕はない。恐らく中層ゾーン出身のレミ、ファーも同様だろう。これからはホーム維持の為に節約を、と考えていた矢先に、この女っ！

「まーまー！これを使ってそこで狩り頑張って、元をとればいいって！レミたんファーちゃんと、私らのレベル、差がついてきちゃってるしねっ」

「それはそうだが。でも《プロミネンス・マント》があっても一人だろ？他の面々まで、」

「それは、もちろんシドの仕事だよっ！」

なおも渋る俺に、ソラがとびっきりの笑顔で丸投げをくれやがった。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　振り回されて、走りけり２

「ぬおおおっ！！！」

走る、走る、走る！敏捷一極化型なめんじゃねえぞおおお！！！

あれ、なんかデジャヴ！！！

俺は洞窟内、入って最初の広間になる足場の悪い岩石地帯を全力で走りぬけていた。ポップしたモンスターは全部で五体。這いずりまわる巨大トカゲが二体、大人の頭ほどもある丸々と太った蝙蝠が二体、直立して鎧と曲刀を持ったトカゲ戦士が一体。五体とも俺をターゲットするが、かみつき攻撃や剣でのソードスキルなどでは到底追いつけないとＡＩが判断を下し、

「グルアアアアッ！」

一声吠えて大きく息を吸い込み、一斉にブレス攻撃を放つ。感心してしまうほど美しいグラフィックで描写されたリアルな火炎。できればじっくりと見てみたいものだが、今はそんなことを言っている場合ではない。なにせその火炎の狙いは俺なのだ。広範囲にわたるそれは、スピードだけでは振り切ることは出来ない、が。

「おらあっ！」

俺ははためく外套（マント）を掴んで体をすっぽり包むように引き寄せる。まるでミノムシのように赤い布切れにくるまった俺の体を、五匹分の火炎が包み込む。だが、俺が纏うのは、炎の攻撃に絶対的な防御力を誇る《プロミネンス・マント》。ダメージどころか耐久度の減

少すら殆ど無く攻撃を受けきる。

「っあちいいいってっくそっ！」

まあ、火炎の熱さまで完全に遮断してくれるわけではないが、そこは根性でなんとかする。ど根性。

広範囲を攻撃するブレス攻撃は、威力、攻撃範囲、そして怯ませ効果と非常に優秀な技だが、流石に難の欠点も無いわけではない。この攻撃、使用後にかなりの長時間の技後硬直が科せられるのだ。

「なーいすっ、シドっ！」

「行くッスよ！」

「……ぐっじょぶ」

当然、後ろに居る三人がそれを見逃すはずはない。

レミの持つ、五十層でレシピが見つかったばかりの大弓、《ロングアロー・ハヤテ》から放たれるソードスキルの光を放つ矢が、床を這う巨大トカゲを力強く貫く。

ファーが攻撃用に装備した両手用の長槍、《ミスティルテイン》で、空中の蝙蝠を薙ぎ払う。四十七層のクエストで獲得した重量級の一閃が、ソードスキルなしでも一撃でモンスターをポリゴン片へと変えていく。

「そりゃそりゃあーっ！」

そして、ソラ。彼女の今日の武器は、やや大ぶりなダガーナイフ、《ソードブレイカー》。中層フロアでＮＰＣが販売していた武器で、背の部分での弾き防御（パリィ）での武器破壊（アームブラスト）ボーナスが入るという珍しい武器だ。ただ、威力・リーチともに彼女の持つ他の武器と比べれば格

段に劣るし、希少価値という点で言えば比べるまでもない。

そんな武器を使っているわけは。

「やあっ！」

新しく手に入れた、もうひとつの装備の使い心地を試すためだ。

トカゲ戦士の前面に走り込んで、敵のソードスキルが放たれる直前の曲刀、その横腹に放った一撃が、モンスターの持つにしては小奇麗だった武器を砕いた。

「うんっ！やっぱこれいいわ！」

そのままバックステップで距離をとった後、満足げに武器を持つ右手を上げる。ナイフを握るその手には、俺には読めない禍々しい呪文のような模様がびっしりと編み込まれた、銀色の布地の不吉な片手用グローブ。名前は、《カタストロフ》。

大破壊、という物騒な意味の名を冠するその手袋は、ソラが何層だったかのフロアボスからのドロップで手に入れたもので、筋力や敏捷、防御値には補正がないものの、「装備した武器に関わらず、武器破壊にボーナスポイントが入る」という凄まじい効果を持っていたのだ。

ああ、そう言えば言っていなかったか。

俺自身は四十七層以来ボス攻略に参加してはいないが、なんの因果かギルドリーダーであるソラは、ちょくちょくとボス攻略に駆りだされるようになっていた。あの時のボス攻略で見せた戦闘センス、そして操る多彩な武器でのバリエーションの多い攻撃手段が、攻略

組の目にとまったらしい。なんでもヒースクリフの旦那が珍しく入れ込んで、一時は最強ギルド、『血盟騎士団』への直接の勧誘までであったのだ。

俺としては何が起こるか分からないボス戦にソラを単身行かせるのはいい気分ではないのだが、ソラ自身が「やっぱりゲームの醍醐味はボス攻略だよねっ！」とノリノリなので仕方がない。

閑話休題。

武器が小型であればあるほど効果の上がる《カタストロフ》で武器を破壊してしまえば、剣術しか使えないモンスターは攻撃が出来なくなってしまう。そう、剣術しか使えない、なら。

「シドっ、あとよろしくっ！」

「ばかやろおおおっ！！！」

剣が使えなくなって、再びブレス攻撃を放つトカゲ戦士。当然、これを受けるのは俺の役だ。

俺は再び、ソラの盾となるべく火炎の中への突進を余儀なくされる。レミの弓が敵を仕留めるまでの数秒間、再び俺は大いに不快な神経刺激を味わい続けることになった。

episode5　火焔の魔窟のカタナ使い

「てめえ！剣砕いたらブレス来るの分かってんだろうが！！？」
「あっ、苦しいっ、ぎぶっ、あーっ、ＨＰが減らないぎりぎりの苦しさっ！？」
「ＨＰ減らなくたって熱いのは熱いんだよ！？」

とりあえず敵のポップが一段落したところで、ソラに抗議の首締（チョークスリーパー）めをかけておく。ソラは何だが妙に嬉しそうで、反省の色は全く見えない。何だこいつそういう特殊性癖か？そういうのは俺は関わらないように生きていきたいんだが。とりあえず効果がなさそうなのでさっさと解放しておく。

「で、そう言えばいつまでやるんだこれ？もう一時間近くやってんぞ？」
「んー、それはねー、んー」

ん？なんだこの反応？

ソラが急にそわそわとしだし、横の二人へと視線を廻らせる。周りを見回していたファーと、無表情にこちらを見つめていたレミの二人がストレージを開いて何かを確認し、無言でいやいやする。なんだかよくわからんが、今回の二人のレベル上げにはノルマでもあんのか？

「まだまだだねーっ。まあまだ結晶とか全然使ってないし、行けるよねっ！」
「いや、俺の精神力は確実にすり減ってんだが…」

「オイラは全然いけるッスよ！」
「……ごーごー」
「おっけっ！そんじゃー張り切っていこーっ！」

ダンジョン内にも関わらず大きな声で気合いを入れるソラ。そして、当然のように無視される俺の意見。いつものことなのでもう突っ込む気力もないが。先へと進み始める三人を追いかけ、追い越す。今回の壁役は俺だ。タゲを自分に集めるため、部隊の先頭を行かなくてはならない。

ため息をつきながら皆を追い越す。

その時、ソラがにっこりとはにかむ様に笑ったのが見えた気がした。

◆

「オオリャアア！！！」

ダンジョン半ばまで辿り着いた俺達を迎えたのは、野太い鬨の声だった。おお、俺達以外にも人がいたのか。意外だ。この『炎霊獣の魔洞窟』を舞台としたクエストは、現在俺が知る限り一つだけ。それもクエストの攻略こそ為されたものの、その本当の報酬たるドロップアイテムの取得方法は未だに分かっていないために検証中で、挑戦する者は今はいない。

だが、今回はどうもそのクエストの挑戦者の先客がいたようだ。

「喰らえっ！！！」

太い声を上げて、腰にさした刀を滑らかな動きで抜き放ち、そのままマグマから突き出した巨大な多頭の巨大蛇の首筋を斬りつける。赤いエフェクトフラッシュを纏ったその斬撃は、エクストラスキル、『カタナ』の何らかのソードスキルなのだろう。十人弱の集団の先頭で果敢に巨体へと斬りかかる。

だが、この高難易度のダンジョンのボスである、「Ｅｉｇｈｔ－Ｈｅａｄ　Ｄｒａｇｏｎ」：通称ヤマタノオロチの強さも、半端なものではない。喰らった頭が怯んでいる間も、他の頭がブレスや噛みつきで絶え間なく彼らへと攻撃を続ける。だが、皆、流石の反応速度で次々と攻撃を回避・弾き（パリィ）して、再度ソードスキルの一撃。

「キシャアアア！！！」

それで勝負は決まったらしく、大蛇は力を失ってマグマの中へと倒れていく。うん、流石はあの『攻略組』、異常ともいえる戦闘集団の一角を占めるギルドだけのことはあるな。うんうん、と納得する俺の後ろから、前の連中に気付いたソラが元気よく「あーっ！みなさんお久しぶりですーっ！」と呼びかけた。

「おおっ！いい所に！！！」
「久しぶりじゃん！」
「ソラちゃん元気してたー？」

呼びかけに応えて俺達に笑いかけた連中はギルド、『風林火山』の面々だ。少数ながらも堂々と攻略組の一員を名乗れるだけの力を持った、正統派で無頼派の奴らで、以前にバカなイベントを開催したときにちょっとした縁でお世話になった連中だ。そして、俺が声をかけるのは、その中の一人。悪趣味なバンダナと、珍しいカタナを装備したひげ面の男。

「ひさしぶりだな、クライン。こんなところで会うなんてな。で、ご注文は？」

「お前ェは相変わらずせっかちだな。…まあ、アイテム切れかけてんのは確かだ。何がある？」

「おう、いつも助かるぜ」

クラインに、さっそく商談を始めていた。

episode5　火焔の魔窟のカタナ使い2

「で、『八つ頭竜の討伐』クエだろ？あれまだ検証中じゃないのか？」

「おお、確証はねェ。だが一つの意見として「カタナ使い」が参加している、っていうのがあるんじゃねェか、ってのがあってな」

「ああ、「ヤマタノオロチ」なら出てくるのは「クサナギノツルギ」ね。確かに筋は通ってるな」

「俺らのレベル上げも兼ねてな。やっぱ俺達もブレス攻撃みてェな範囲攻撃にも慣れとかねェと」

いくらかのポーション類と結晶を売買した（なんかクラインが呻いてたがそんなのは気にしてはいけない）後、小休止を兼ねて話していると、やはりクラインたちはここにクエストで来ていたことが分かった。それに、『攻略組』の先のことまで考えている。見た目の割にいい奴だ。

「へーっ、ソラちゃん、へーっ！」

「うおおおっ！おっさんは嬉しいぞーっ！」

「わーっ、わーっ！あんまり大きな声で騒がないでーっ！」

「ほら、そんなことならこれ。貰ってきな！」

「いやっ、そんなっ！」

ちなみに他の三人、特にソラは攻略に積極的に関わっているだけあって随分と親しげに談笑している。おっさん連中にとってはソラの健康的な（というか、バカっぽい）笑顔はなかなか受けがいいらしく、すっかりアイドルだ。さして美人でも無いくせに。

そんなことを考えながら眺めていると、ソラと目があった。と、ソラの奴が真っ赤になって慌てて目をそらす。なんなんだ。そのままこそこそとレミに耳打ちして、またチラ見、そしてまた俯く。

なんなんだ、何回も言うぞ、なんなんだ。考えてみればここに来るのも、なんとなく誤魔化されてそのままになっていたがはっきりした理由は聞いていない。レベル上げであればもっと効率のいい場所がいくらでもあるってのに。

と。

「……シド。提案が、ある」

「うおっとビビったぁ！なんだよレミ！」

突然背後から掛けられた声は、さっきまで向こうの輪にいたはずのレミ。相変わらず無表情で、『隠蔽（ハイディング）』なんぞ持っていないくせにやけに薄い気配で後ろを取るのは、なんというか数値的ステータスとか云々ではない「影の薄さ」を思わせる。本人に言えば怒るだろうが。

「……『風林火山』を、手伝う」

「手伝いたい、ではなく？」

「……もう、報酬、貰った」

「それは提案とは言わないだろうが！」

思わず突っ込みを入れてしまうが、レミにそれを言ってもしょうがないだろう。なにせその約束を取り付けたであろう本人は、俺達から離れた場所の談笑の中でこちらをうかがっている。その顔にあるのは、「にへへ」とでもいう効果音が合いそうな、ばつの悪そうな笑み。続けて、許してね？とでも言いたげに両手を合わせる。

「はああー…」
「ふぁいとーおー」
「…おー」

分かってやってるのかレミの力の抜けた掛け声に、こちらもどっと疲れの増えた掛け声を返す。それで満足したらしくレミはまたトコトコと談笑の輪へと帰っていく。何故か拍手喝采をもって迎えられた彼女は、無表情にVサインをして座る。まったく、なんなんだ。

「…お前ェも、大変だな、なんか」
「…おお、まあな」

残ったクラインが、しみじみとつぶやく。

「んじゃあ、大変ついでに買い取りもお願いすっか。これ、いくらだ？」
「ん？なんだこれ？指輪、か。よっと」

そう言ってクラインがストレージから取り出したのは、一つの指輪。金色に輝くリングに、紅く輝く美しくカットされた紅玉が嵌っている。『鑑定』でクリックしてみると、《ブラッド・ティア》のアイテム名、そして製作者の銘はなし、ドロップアイテムか。効果は、

「筋力補正が五、武器攻撃スキルの取得経験値補正有り、か。全武器に働くのはおいしいな。結構な値で買い取ってもらえるんじゃねえか？」
「いや、お前ェに買い取ってもらうんだよ」
「ん？いいのか？」

クラインの一言に、俺が確認する。直に言いこそしないが、俺は『ダンジョン行商人』だ。本来は出来ないダンジョンで売り買いが出来る代わりに、値段は大分客に厳しく設定してある（命がかかってたらみんな金は払ってくれるものだ）。それを、クラインも知らないわけではないはずだが。

「いいんだよ。前祝いだ。使ってもいいし、やってもいい」
「なら買い取るが…。俺は使えねえぞ、武器は持ってないし」
「ハッ。使えるぜ、お前ェが。ま、せいぜい有効に使ってくれや、若人よ」
「？」

そう言ってにやりとオヤジらしく笑うクライン。まったく、なんなんだ。こいつもなんか事情を知ってやがるのか。なんか俺だけ偉いアウェーだな。

この短時間に何回「なんなんだ」といったか分からん。
そんなことを考えながら、これももう何回目か分からないため息をついた。

episode5　クエスト・八つ頭竜の討伐

戦闘は、格段に楽になった。『風林火山』の面々は流石の実力で敵をなぎ倒していく。しかも、レベル的に劣るレミとファーを気遣ってくれているようで、ダメージを庇いながら積極的に二人にダメージを与えさせて獲得経験値を増やしている。それもこれも。

「やっぱりこうかあああっ！！？」

俺の犠牲有っての話だが。俺の役目は、四人でいた時と全く変わらずにマントでブレスを惹き付け、逃げ惑うことのままだった。ちっとも楽ではない。前言撤回だ、戦闘自体は楽になったかもしれんが、俺はちっとも楽じゃねえ！

「まあまあ慌てんなって！」

ブレス攻撃と同じような範囲攻撃を放つ、浮遊する石の連結体のようなモンスター、「フレアエレメント」にクラインが斬りかかりながら言う。怯んだ隙にレミの弓矢が突き刺さり、削りきれなかった分を後詰めの『風林火山』メンバーが吹き飛ばす。

同時に出現した他のモンスターも、次々にハイペースで狩られていく。あっという間に敵は減っていき、戦闘が終わったソラが嬉しげにストレージを見ている。また俺仲間はずれ。まあ、もういいや。

「なんか寂しげだな、シド」

「……うるせ。ほっとけ」

「まあいいや。ほら、次のスポットだ。気合い入れてかかるぞお前ェら！」

一旦ニヤニヤ笑った後、クラインがリーダーらしくメンバーに気合いを入れ、面々も「オー！」と威勢よく応える。ソラ達もノリノリで拳を振り上げている。やれやれ。俺も力無く拳を持ち上げる。アインクラッドでも有数の力を持つと自負している拳も、ここでは何の役にもたたないものだな。

◆

この『炎霊獣の魔洞窟』は、数多くのダンジョンを見てきた俺から見ても珍しい構造をしていた。ある深さまで入っていくと、そこからまるで飛び石のように開けた空間が続くのだ。まるでドーナツのように真ん中がマグマに満たされた空間が、八つ。

「なるほど、広間毎に順に首が増えていくわけだ」

「おもしれェだろ？ま、戦ってみると笑ってばかりはいられねェけどな」

その変わった空間は、ボス戦用のものなのだ。『八つ頭の竜の討伐』クエストを受理したプレイヤーが入った場合に、その中央の溶岩地帯から蛇竜が首を出すのだ。最初の空間には一つ。それを倒して奥に進み、次の空間では二つの首を出して。そうやって最後の空間でとうとう全身を現してプレイヤーと決戦となる。

「そりゃまた、長丁場なクエだな」

「おお。だからここでお前ェに会えて結構マジで助かったぜ。もしかしたらポーション類ガチで足りなくなるかもだったんだ。入りなおせばまた最初からだからな」

「次で、七つ目、か」

「うーん、燃えるねっ！」

「うおっ！？」

突然後ろからのしがみつきに悲鳴を上げた。当然、ソラだ。先程の「六つ首」を倒す際に、敵の牙をいくつも《ソードブレイカー》で圧し折るという離れ業で、早々に敵の噛みつき攻撃を使用不可にしたのだ。一撃の威力の大きい噛みつきを封じれば、あとはブレスと薙ぎ払いしかない。それなりの高性能防具を持つ『風林火山』の面々なら、近寄ってのソードスキルの連発が可能だ。

「おうおう、ソラちゃん！次もよろしく頼むぜ！」
「任せてクラインのおっちゃんっ！」
「ぐっ、だからおっちゃんはやめてくれよ…」
「いやっ、威厳あるって褒めてるんだよっ！」

露骨に肩を落とすクラインの背中を、ソラが爆笑しながらバシバシと叩く。うーん若干哀れだ。俺もクラインくらいの年になればおっちゃんと呼ばれるのだろうか。そしてそれに傷つく様になるのだろうか。うーん恐ろしい。
いや、今はそれより。

「ソラ、お前が全部歯を圧し折ったらまたブレスが増えて、防ぐために俺がとんでもない目に遭い続けるんだがな…」
「頑張ってっ！頼りにしてるよっ！」
「てめーそれで誤魔化せると思ってんのか？」
「うーんっ。えっとっ、誤魔化されて？」
「っ、っ！」

上目遣いでのはにかむような笑み。くっ、こいついつの間にこんなスキルを。っつーかどんどん色仕掛けが上達してねえか！？誰だこいつにいらんこと吹きこんどる奴は！？

そんなことを必死に考えるものの、ソラの笑顔の大安売りが、とうとう俺の理性を押し流す。くっ、これが敗北か、と心の中で舌打ちするが、心の別のところでその「頼りにしてるぞ」発言にどうしようもなく喜んでしまっている自分を自覚してまたため息をつく。

結果。

次の大広間、「七つ首」での戦闘でも、俺は炎に巻かれながら走り回ることになるのだった。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　クエスト・八つ頭竜の討伐２

到達した大広間は、以前の七つの広間よりも更に一回り以上大きかった。更に足場も悪く、今までのようなドーナツ状では無い、三人も乗れば定員限界になりそうな面積しかない飛び石が無数にある場所だ。レミやソラのように遠距離攻撃持ちは困らんだろうが、そうでない連中は攻撃の手段を大きく制限される。特に、零距離でしか攻撃できない俺とか。

さらに悪いことに、その飛び石の間を満たしているのは当然、澄み切った水などでは無く見るだけで顔を顰めたくなる様な泡を吐き出す、煮えたぎる溶岩なのだ。

「なあクライン、『風林火山』でロープ何本持ってきた？」
「…残りは二本だ。一本はもう耐久度が大分ヤベェな。そっちは？」
「まだ新品だが、一本だけだ」
「……ヤベェな」
「ああ。気をつけてな」

この世界では、有難いことにマグマに頭から突っ込んでも即死する訳ではない。だが、それでも凄まじい勢いでＨＰバーが減少していく事になり、脱出しなければあっという間にそれはゼロになってしまう。足がつかない場所に落下した場合は、近くのプレイヤーにロープで引き上げて貰うしかないため、このダンジョンではロープが必須なのだ。洞窟の入り口にいるＮＰＣが、警告をしてくれるほどに。

今までは落ちないように注意すればよかったものの、ここでの戦いではロープは必須だろう。まあ、敏捷一極の俺の貧弱アバターでは誰一人引き上げることはできんだろうし、人を頼るしかないのだが。

ぼんやりと考える俺の横で、クラインが顔を引き締める。黙って上げた右腕に、後ろに続く面々が頷き、各々の武器を構える。索敵係として前を行く俺も何かするべきなのかもしれないが、ガラでも無いので辞めておく。ちなみに振り返った時にちらりと見たソラの顔は、「ワクワクしてまっせー！」とばかりに輝いていた。全く、暢気な奴だ。

「そろそろ、だな…」
「ああ、来たぜ」

クラインのセリフと同時に、目の前のマグマから吐き出される泡が一気に激しくなる。ここのボスは雰囲気を出すためか、普通の大型Ｍｏｂの様にごつごつした巨大なポリゴン片からの出現とは違ってマグマの中から突き出すようにして現れるようになっている。と、その泡が一瞬だけやんで。

クジラでも跳ねたような音を立てて、

「ゴアアアッ！！！」

吠え声を上げるクエストボスがマグマからその体を晒し出した。蛇のように長く伸びた首の先には、獰猛な顎と鋭い牙を持つ竜の頭。最後の広間で、とうとうその八つの首全てを晒した、「Ｅｉｇｈｔ－Ｈｅａｄ　Ｄｒａｇｏｎ」。先程までよりも激しくその首を動かし、最後の戦闘への戦意を示す。

「っ、どーよシド。あれ、今までの時と一緒か？」
「…いや、喜べ、多分アタリだ」

訪ねてくるクラインに、口元に笑みを浮かべて応える。根拠は、巨大なボスモンスターの頭の上に漂う、室内にも関わらずに広がった黒々とした雷雲。以前の大規模討伐隊の時には、そんなものは無かった。そして俺はその存在も知っている。

スサノオ伝説では、クサナギノツルギをその尾から出したヤマタノオロチは、常にその頭上に暗雲を漂わせていた、との記述があったと思う。全く、このゲームを作った奴は神話の知識まであるのか。

とにかく。

「んじゃあ、期待して行くぜェ！」
「おお、気をつけてな。ソラっ！レミっ！出し惜しみはなしだ！好きなだけ遠距離武器使えっ！ファー！慣れないかもしれんが、中距離支援を頼む！」

クラインたち『風林火山』の面々、特にその中でも前衛を受け持つ壁戦士（タンク）が、最も近い足場へと果敢に飛び移っていく。俺も慣れない口調で指示を出した後、ブレス攻撃をを引き受けるべく前線へと飛び込む。後ろからの「おっけーっ！」とか「おー。」とか「わかったッス！」との心強い声援。

先程までより更に大きい咆哮を上げる八つ頭の巨竜が、その首を大きくうねらせ、こちらへとその八対十六個の視線をこちらへと向ける。その目に明確な戦意の炎が宿り、口からは火炎の混じった吐息が漏れる。

そんな恐ろしいボスを相手に。

「うおりゃあああ！！！」

怯むこと無く声を上げて、クラインが先陣を切って斬りかかり。

八度に渡る戦闘、その最後のボス戦が始まった。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　手に入れたモノと二人の一歩目

十人以上の大人数でのボス戦だったが、その戦闘はなかなかにいい連携を見せた戦いとなった。ボスの攻撃パターンはそれほど多くなく、火炎ブレスを筆頭に、強靭な顎での噛みつき、長い首を生かした薙ぎ払い、そして新しいパターンである頭上の雷雲からの雨でマグマを固め、それを尾で弾き飛ばす岩石攻撃の四つだ。

だが、俺達はそのそれぞれを得意分野の面々が絶妙のコンビネーションで捌く。

火炎のブレスは、専用ともいえる防具、《プロミネンス・マント》で俺が敵の口元を掠めて飛ぶよう跳躍にして遮る。噛みつきは、襲いかかる直前その足場に飛び込むソラが、その手にした《ソードブレイカー》で牙を的確に砕いて使用不能にしていく。全く、とんでもない反射神経と戦闘センスだ。そして薙ぎ払い、岩石攻撃は重装備の壁戦士（タンク）達がその重厚な鎧で受け止める。

他の面々も負けてはいない。

ファーは武器をストレージに仕舞って、代わりにその手に長いロープを持っている。足場を踏み外したメンバーにすぐにロープを投げて引っ張り上げてやっている。元は壁戦士だけあって、流石の筋力値だ。レミの弓は、言わずもがな。俺やソラが追いつけない攻撃を放とうとする首を威力重視の弓ソードスキルで射ぬいて怯ませている。

そして。

「喰らえやオラぁ！！！」

最前線で剣をふるうクライン達数人の攻撃特化型達（ダメージディーラー）が、凄まじい勢いでそのＨＰを削り取っていく。その身のこなし、スキルのブースト仕方、スイッチのタイミング。以前よりも更に洗練されたその連携で、巨大な竜を攻め立てる。

（以前より、腕を上げたな……）

『風林火山』の面々の、この足場の悪い環境での素晴らしい攻撃の応酬。動きも以前に見たときよりも格段に鋭く、敵の攻撃を予想する『先読み』も、死角の敵の動きを耳で聞き分ける『聴音』も、その精度が比べ物にならないほど研ぎ澄まされている。

マントで火炎を遮りながら、ちらりと見やる。

奴らも、思う所があるのだろう。『攻略組』は、（ソラのような特殊な例を除いて）随分と閉鎖的なものだ。それぞれが隠し、騙している部分が、少なからず存在する。そうでなければ、攻略組足りえないからだ。手の内全てを見せてしまえば、いつ寝首をかかれるか分からない。言い方は悪いが、そういう雰囲気があるのは確かなのだ。

（それを、なんとかしたいんだろうな……）

なんだかんだと言って、クライン初め『風林火山』の面々はいい奴らだ。なんとかそういった雰囲気を打開したいと思う所があるのだろう。だが、それはそう簡単に出来ることではない。だからこそ、強さがほしいのだろう。まったく、本当にいい奴らだ。

「うおらあああっ！！！」

日頃の憂さを晴らすかのように刀を振りまくるその姿は、さながら夜叉のようだ。バンダナで逆立てた髪は、いわゆる「怒髪天を突く」ってやつか。

「うらあっ、とどめっ！！！」

そして、最後の一撃。首筋に吸い込まれるように入った紅いライトエフェクトを纏った一撃が、ボスのＨＰの最後の一ドットを消し飛ばす。瞬間、巨大な竜が、七つ目までの溶岩に吸い込まれるような倒れ込みとは異なる、激しい痙攣をおこす。

ひとしきり暴れた（ちなみにこの時飛沫となって飛び散った溶岩にはダメージ判定があった。最後っ屁、ってやつだろう）後、苦しげに一声呻き、直後、無数のポリゴン片を残し、派手な音を立てて爆散した。

おおー、とか、よっしゃー、とか、ぶらぼー、の歓声が上がる。ひときわテンションの高い声は、間違いなくソラだろう。若干棒読みなのはレミか。俺も、大きく息をつく。うん、今回の戦闘は文句なし、百点満点だろう。それぞれの特徴を生かしての完璧な戦闘、そしてアイテムも無駄な消費は一度もなかった。毎回こうならいいんだがな。まあ、ありえねーけどな。

「おおっ！！！」

しみじみと感慨にふけっていた時、一人の歓声が上がった。爆散したポリゴン片の中から、一本の剣…いや、カタナが出現したのだ。

おお、初めて見る演出だ。今まではドロップするというクエストはあれども、それは撃破後に普通にストレージの新規入手欄に入っていたのだ。

「よっしゃああっ！！！」

輝きながら一つの飛び石の中央に漂うそのカタナを、クラインが意気揚々と掴む。皆がそれを盛大な拍手で迎える。クラインも、「やー、どーもどーも！」とかノリノリで、ファーは指笛まで吹き鳴らしていた（ちなみになかなか上手かった）。

とにかく。こうして俺達の『炎霊獣の魔洞窟』探検は、ハッピーエンドで終わりを告げたのだった。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　手に入れたモノと二人の一歩目２（前書き）

じっくり書こうと思ったらテンポ悪くなってしまったエピソード５、ラスト。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　手に入れたモノと二人の一歩目２

その夜、俺は一人でメニュー画面を開き、クエスト説明書を書いていた。勿論クライン達の許可を得てだが、なかなかの威力と速度を誇る武器であるカタナは、ドロップ自体が少ない武器だ。最前線、攻略組で使う者はそうそういないが、たまたま手に入れたアイテムを欲しがる中層フロアの面々に卸してやる奴もいる。この情報も、需要はきっとあるだろう。

ギルドホームの寝室で一人ホロキーボードを打っていた俺の耳に、控えめなノックの音が響いた。

「…シド？まだ、起きてる？」

聞こえるのは、いつに無く落ち着いたソラの声。ちょうどいい。今日の一連の仲間はずれ疑惑を問い詰めてやらにゃいかんからな。まあ隠し事くらいだったら誰だってあることだし、そこまで俺も詮索する気はないのだが、今回は俺以外の全員が知っている、つまりは俺だけに内緒にしているというわけだ。これはいただけない。いや、別に寂しいとかじゃねえよ？

「おう、今開ける。ちょうど聞きたいこともあるしな」

書きこんだメモを一時保存して立ち上がり、入口のドアを開ける。

そして、驚いて息を飲んだ。

「お、おお、どうしたんだ？その格好」

「えへへ」

ソラは、いつもの普段着であるラフなTシャツ姿では無かった。なんというか、実に女の子らしい、純白のワンピース。浮かべる笑顔も、いつもの元気印のそれではなくて妙に恥じらうような色合いのもの。見慣れない「可愛らしい」モードのソラに、俺は自分の頬が熱くなるのを感じる。

一瞬固まったものの、気を取り直して部屋に招き入れる。俺はさっきまでキーボードを打っていた机の椅子を反転させて座る。ソラの方は、壁際のベッドに、いつもならバフン、といい音をさせて飛び乗るのだが、今日はまるで借りてきた猫のようにちょこんと座った。顔は、俯いたままだ。

やっぱり変だが、一応俺の方の目的を果たそう。いや、別にソラと二人で無言になるのに耐えられなくなったわけじゃないよ？

「んで、分かってんな？説明してくれるんだろ？」

「ちょっと、ちょっと待ってねっ。今、落ち着くからっ。今っ、ちょっと、ねっ、」

「わ、分かった分かった！分かったから深呼吸しろ深呼吸！」

「う、うんっ！すーっ、はーっ！すーっ、はーっ！」

まるでマンガみたいに慌てふためいて目を回すソラをどうどうと宥める。大げさな身振り付きで深呼吸する様子を見るに、どうやら今日のソラのおかしな様子と、俺の仲間はずれの件は根っこの部分で繋がっているらしい。

まあ、今日は時間もゆっくりあるからな。俺も落ち着いてストレージからカップを二つ取り出し、お茶をオブジェクト化して注ぐ。

ソラに手渡すと、何故か上目遣いで両手で受け取りやがる。なんなんだホントに。

「……」
「……」
「……」
「……えっと、えっとねっ！」

何分たったか。俺の見つめる先で、ソラが意を決して口を開いた。同時に右手を振って、二つのアイテムをオブジェクト化する。

一つは、細剣（レイピア）。『鑑定』スキルで見るとプレイヤーメイド、銘は、《フラッシュフレア》。赤く輝く刀身は、まるでそれ自体が炎を纏っているかのようで、相当のスペックの高さが覗える。そしてもう一つは、手甲、《フレアガントレット》。細剣とは比べ物にならないほどマイナーな装備品だが、こちらも同様の素材アイテムを使っているようで、揃いの赤い輝きを放っている。

…素材アイテム。これって確か。

「……《フレアライト・インゴット》。なるほどこれが目的だったのか」

現在見つかっている金属の中で、軽量なスピード系では最高峰の素材であるこのインゴットは、『炎霊獣の魔洞窟』のモンスターが低確率でドロップするアイテムだ。レベル上げは名目で、本当の目的はこっちだったのか。こくんとソラが頷く。手に取った手甲は十分に軽く、俺でもなんとか装備出来そうだった。

「…よく鍛冶屋が引き受けてくれたな」

「う、うんっ！『風林火山』の人たちが分けてくれたからっ、ノルマよりいっぱい取れたのっ！余ったのプレゼントしてきたんだ！で、でねっ、」

そしてまた、言い淀むソラ。

ああ、そういうことか。苦笑して、続きを、俺が口にする。

「おそろい、だな。二人。」

「う、うんっ！そうっ！二人で、おそろなの！おそろ、に、したいねっ、て、ねっ！」

嬉しそうに、でも恥ずかしそうにソラが笑う。

だんだん読めてきた。というか、分かってしまった。

（クラインの野郎……）

ソラが、なおももごもごと何かを言おうとするが、はっきりと言葉にならないで俯いてしまう。

その仕草も、俺の予想通りなら納得できるというものだ。

そして。

こういうときには、男が言わなければならないのだろう。

決心した瞬間、急に心臓が早まった。いや、この世界では脈拍が早まったりするのを感じることはできないから比喩表現なのだが、そのくらいに俺の緊張感が高まった。

だが、決心が鈍らないうちに、やってしまわなければならない。

俺は右手をふってウィンドウを呼び出し、とあるアイテムをオブジェクト化する。ああクライン、お前の言うとおりだ。この上なく、

「使い道のある」アイテムだったよ、こいつは。

「ソラ」

「ひゃいっ！？な、何かなっ！？」

「これ。俺から、プレゼント」

差し出したアイテムは、《ブラッド・ティア》。その形状は、指輪。

目を丸くするソラが何かを言う前に、俺は続けて一息に言葉を紡ぐ。

「いつも、感謝してた。初めて会った時、言ってたよな？楽しくする、って。言ってくれたように、俺は一緒にいられて、すごく楽しかったから。だから。だから、さ」

大切な人に、大切な言葉を。

「もし、よかったら」

俺の、偽らざる思いを。

「俺と、結婚しよう」

ソラの表情が、コマ送りのように変化していった。言われたことが理解できなかったのか、ポカンとした表情。そして、理解が追いついて、恥じらいに真っ赤になった表情。

そして最後に、心の底からの、笑顔。

「…はい」

その声と同時に、彼女からのメッセージが届く。結婚の申し込みを告げる、システムメッセージ。

俺は、その声と笑顔を、思い出す事は無い。なぜなら、一瞬たりとも忘れたことが無かったから。記憶や脳というレベルで無く、魂に刻みついたものとして、俺はそれを大切に持ち続けていた。

◆

後日談。

こうして結婚した俺達だったが、別に生活に何か変化はなかった。まあ要するにソラが突っ走り、俺が振り回される日々には全く変わりがなかったということだ。

その一例をあげておこう。

俺が手渡した結婚指輪は、かなりのレアドロップ品だった。にもかかわらずソラのバカが「指輪もおそろがいー！」とか言い出したおかげで、俺達は再び『炎霊獣の魔洞窟』に丸二日もこもることになったのだった。

episode6　ワカレミチ（前書き）

物語は終盤へ。今章は、全話超展開。

episode6　ワカレミチ

俺はこの時、本当に幸せだった。
元の世界がそれほど不幸だったとは思わないが、それでもこの世界と比べると霞んで見えてしまうほどに幸せだった。毎日が楽しく、明日が来るのが待ち遠しかった。

この世界が、デスゲームだということを、忘れてしまうほどに。

◆

「んじゃっ、行きますかっ！」
「おっけーッス！」
「……ごーごー」
「気をつけてな」
「そっちが一人じゃんっ！そっちこそ、気をつけてねっ！」

最前線にほど近い、六十五層の古城のダンジョン。迷路のようになった構成では、かの『忍者屋敷』ほどではないにせよ様々な仕掛けがあったが、それぞれに対して俺達はしっかりと対策を練ってあった。
この最初の仕掛け、一階にある階段を下ろすカラクリは、二か所のレバーを一定時間内に…まあ事実上二手に分かれて…操作する必要があるが、ここの分割メンバーも前もって決めてある。本来は二対二なのだろうが、今回は安全を取って三対一…つまりは俺が単独行動になった。

「…ほんとに、気をつけてね」

「…ん？どうした、ソラ？」

ふと違和感を感じて俺が尋ねる。いつもは俺が単独行動をしてもにこやかに見送るソラが、今日に限っては何故か心配そうな目でこちらを見ていたのだ。一瞬訝しんだが、すぐに俺はその理由に思い至った。

そうだ、考えてみれば結婚以来、初めて二手に別れての行動だ。思わず苦笑してしまいながら、ソラの頭をポンと叩く。それで伝わったのか、ソラがにぱっと笑う。

「ん、頑張ってね、旦那さん」
「おお、そっちも頼むぜ、奥さん」

俺が茶化すと、ソラは悪戯っぽく言い返して、左手を突きだす。指の部分が切り抜かれたグローブ、その薬指に光る指輪、《ブラッド・ティア》…システムで、結婚指輪に指定したアクセサリー。見えはしないが、リングの裏には二人の名前が刻まれている指輪。俺も笑って、その突きだされた拳に俺の拳を打ち合わせる。

二つ、揃いの指輪が、キン、といい音を奏でた。

◆

（よし、と）

俺の探索は、何の問題無く進んだ。最前線間近とはいえ俺のレベルはソロでも十分安全と言えるマージンを持っていたし、何よりＭｏｂとの相性が良かった。この古城ダンジョンに出てくるのは死人（アンデット）型や幽霊（ゴースト）型といった、防御や耐久にはひと癖ある連中だが、そのス

ピードは格段に遅い。いちいち相手をせずに振り切るのであれば、俺にはなんの問題も無い。ほんの五分足らずであっさりとレバーの前まで到着していた。

（おしっ、到着。まだあと五分もあるな）

打ち合わせで決まっていた作動開始時間までは、まだ大分余裕がある。まあ向こうは三人でいちいち相手をしながら進んでいるのだろうし、俺よりはよっぽど時間がかかるだろう。一応『隠蔽（ハイディング）』スキルで万一近くにＭｏｂが出ても大丈夫なようにしておく。いや、ここは確かＭｏｂのポップは無かったか。

少しだけぼーっとする時間が出来た俺は、さっきのソラの顔を思い出していた。そして、その後のやりとり。思い返せば所謂バカップルのお手本のような会話に、苦笑い。

（…俺も、随分緩んできてるかもな…）

まあ、それも悪く無い。そんなことを考えながら、時間を見守る。何も無い、何も起こるはずの無い時間。ホラー系フロアのダンジョンにふさわしい、薄暗くて無音の静寂。

全く音はしなかったから。

俺がそれに気付いたのは、完全なる偶然だった。

俺が通ってきた通路、その闇の中から、一つの影が歩み寄ってくるのが見えたのは。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　恐怖と絶望の体現者

闇の中、無言で滑るように近づいてくる漆黒の影。足こそあるが、その艶消しの黒いポンチョを纏った姿は、このホラー系古城ダンジョンのＭｏｂと言っても通じるほどの不気味さだ。だが、その影は、Ｍｏｂではない。なぜなら俺は、その影を…その男を知っていたから。

「っ……なぜ、貴様がここに…っ」

アインクラッドでは、知らない者はいない有名人。だがそれは、「最悪のプレイヤー」という恐怖によって、だ。この世界で最も恐れられた集団である、『殺人者（レッド）』ギルド、『笑う棺桶（ラフィン・コフィン）』の首領にして、天才的な短剣捌（ダガー）きで無数の敵を…いや、プレイヤー達を殺していった、最強の殺人鬼。

「ＰｏＨ（プー）…っ！」

アインクラッドおける、恐怖を体現するものとさえ謳われるプレイヤー、ＰｏＨ。

無言のままゆっくりと歩み続けたその男の足が、ダンジョン内の安全エリアにはいった地点で止まる。

「Ａｈ－Ｈａｎ？俺がここにいちゃ悪いのか？」

艶やかな…それでいてどこか異質な響きを持つ美声で、ＰｏＨは俺の言葉に答えた。流暢な英語の混じった、独特の声。まとわりつくその言葉に一瞬体が強張るが、すぐに気を取り直して言い返す。

「…それもそうか。『最前線』でも無けりゃ迷宮区でもない。テメーら犯罪者（オレンジ）プレーヤーがいても、おかしくはねえな」

「Ｈｍｍｍｍ？思ったより冷静だな。もっと恐怖で震えてくれると思ってたんだがな」

「…は。そんな必要はねえさ」

そうだ。震える必要はない。

奴が最悪の殺人鬼として恐れられているといっても、それはあくまで中層エリアでの話だ。事実奴らはいままで最前線には出没せず、ソラ達…すなわち、『攻略組』の面々に牙を剥いたことは無い。レベル的に優位なのは、こちらだ。例え首領であるＰｏＨといえど、そのレベルは俺の方が上…厳しく見ても同格のはず。

「勝てると思っているのか？これでもレベルは『攻略組』と変わらんぜ、俺は」

ならば、恐れることは無い。俺のピーキーな戦闘スタイルは相手を選ぶ必要があるが、対人戦は比較的得意分野だ。『敏捷』一極で鍛えた速さを生かしての剣戟回避、そしてカウンターで相手を叩く。或いは、そのスピードで相手のソードスキルの発動前に懐に潜りこみ、必殺の一撃を見舞う。

斜に構えた情報屋なんぞをやっている俺はそれなりにいちゃもんつけられる機会も多く、荒事の経験も多いが、それでも俺は他の情報屋は勿論、『攻略組』相手にだって対戦（デュエル）で負けたことは無い。

「…『攻略組』が怖くて、こそこそ低層フロアを這いまわるてめーらより、俺の方が強い」

にやりと笑って、拳を握る。体は、動く。例え最強の殺人鬼（レッド）を相

手にしても、俺は十分に戦えるはずだ。周囲を探る『索敵（サーチング）』スキル。既にマスターに達したそれでも、敵の伏兵はない、一対一だ。いける。いや寧ろ、最悪のお尋ね者を捕える、絶好の機会とすら言えるだろう。

そう考えて、戦闘の構えをとる俺の前で、ＰｏＨが突然笑いだした。

「ＨＡ－ＨＡ－ＨＡ！『攻略組』が怖い？俺の方が強い？傑作だ！！！」

ポンチョの裾から出た左手で頭を押さえ、可笑しくてたまらないと言うように笑う。そしてもう片方の裾から出た右手には、肉厚の赤黒い刃を持つ大型ダガー、《友斬包丁（メイト・チョッパー）》がギラリと覗く。

中華包丁のようなその特徴的な武器は、現在確認される最上級のプレイヤー製作（メイド）の短剣をはるかに上回る性能を持つ、いわゆる「魔剣」だ。だが、もとから避ける前提で戦う俺には関係ない。その形状の問題で突き技が弱体化する分、先読みがしやすいと言えるだろう。耳障りな哄笑を意識から追いやり、冷静に分析する。

「お前は勘違いしてる！滑稽な程にな！教えてやるよ、『旋風』！お前が単なる獲物に過ぎないってことをな！！！」

なおも狂ったように高笑いを上げるＰｏＨ。その体が、ゆらりと揺れた。傍目にはほとんど分からない、ほんのわずかな動作。だが俺はその瞬間、背筋が泡立つほどの緊張感が体を駆け抜けるのを感じた。

来る。

「ＹＡ―ＨＡ―！イッツショウタイム！！！」

俺の判断とほとんど同時に叫んだＰｏＨが、一直線に俺へと斬りかかった。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　恐怖と絶望の体現者２

ＰｏＨ（プー）の突進は、俺の予想の速度よりも速かった。
だが、それはどうにもでいないほどの速さというわけでは無かった。言ってしまえば『閃光』や『黒の剣士』のほうが速い。そして、カウンターを狙って待ち受けている俺が対応しきれない程の速度ではない。いける。

ＰｏＨの斬撃を読み切って、体を回転させて回避する。手にしている奴の武器は軽量系の武器である短剣（ダガー）とはいえ、恐ろしい威力を秘めた魔剣。それなりの重量があるだろう。空振らせれば、一瞬では立て直せまい。その隙に。

「はぁっ！！！」

回転の勢いを乗せた裏拳、《ゲイルナックル》。単発技の多い体術スキルの中でも、モーションの大きい分指折りの威力を誇る必殺のカウンター。赤紫のエフェクトフラッシュを纏ったその遠心力たっぷりの一撃がＰｏＨの体に、

「っ！！？」

当たらなかった。それどころか、俺が回転の際に目を離したほんの一瞬の合間に、奴の姿が俺の視界からすっぽりと消えていた。大ぶりの一撃の空振りが、かわされたソードスキルが、俺の体を固まらせる。技後硬直。他のスキルよりは遥かに短い、しかし決定的な隙。

その硬直の間に、俺の死角、あさっての方向から感じる、強烈な殺気。

「うおおおっ！！！」

怯みそうになるその体を、叫び声で叱咤して無理矢理に動かす。硬直が解けると同時に、敏捷値を全開にしたダッシュ。『軽業（アクロバット）』スキルによる初動速度の支援も受け、トップスピードで緊急回避した俺の、肩口。

「うっ……！」

そこが、ぱっくりと裂けた。振り下ろされたＰｏＨの《友斬包丁（メイト・チョッパー）》が、すれすれで掠めたらしい。そのほんの僅かの接触で、決して安物では無い俺のハーフコートがいとも容易く切り裂かれた。

…あれを、まともに食らったら。

再びの恐怖が、首筋を撫でる。地面に片膝片手をついて、ほんの一瞬前まで俺がいた場所に佇む、真っ黒い影。さっきの一撃。見切ることはおろか、初動を見ることすらできなかったその動きは、何らかのスキルですら無かったのだろう。硬直時間も何も無くゆらりと起き上った影が、こちらを向く。

「Ａｈ－Ｈａｎ？流石に一撃とはいかないかね」

その必殺の刃を、舐めるように口元に運びながら言う。その口ぶりからは、奴の心中を探ることはできない。分からない。さっきの一撃が、奴の全力だったのか。最高で最速の攻撃だったのか。それとも。

…それとも、さっきの一撃でさえ、ほんの挨拶がわりだったのか。

喉が、ゴクリと鳴る。本当はこの世界では感じないはずの鼓動が、狂ったように脈打っているような錯覚を感じる。頭を埋め尽くす恐怖と…絶望。もしあれよりも速い一撃が来たら、俺はもう避けられない。そしてこのハーフコートをいとも容易く切り裂いたあの魔剣をまともに食らえば、俺の紙に等しい防御ではＨＰは一気に持っていかれる。最悪、一撃で……

「っ、当たり前だ！次はこっちから行くぞ！！！」

止まりかけた体を、思考を無理矢理に断ち切って、疾走する。ＰｏＨの周囲を囲むような軌道で周囲を走る。今まで誰にも披露したことの無い複合スキル最上位技、《ファントム・シェイド》。必要とされる敏捷値はかなり高く俺も最近使用可能になったばかりだが、一定速度以上で走り続ける限り、俺の体はいくつもの影に分身して見えるというチート性能の技だ。その数は、疾走を続ける限り増え続ける。

「Ｗｏｗ…こいつは驚きだ」

ぐるりと見回すＰｏＨ。その目は、俺を捕えてはいない。行ける。なおも疾走し続け、右手の指を揃えて貫手の構えをとる。周囲の幻影達も、鏡映しのように走りながら同様に構える。その手が、一斉にソードスキルのエフェクトフラッシュを放つ。その数は既に十を軽く超えている。

そのまま、ＰｏＨの背後に一瞬で駆け寄る。『隠蔽（ハイディング）』の派生技で、その気配は完全に消してある。完全にＰｏＨの死角から、《エンブ

レイサー》の一撃で首筋を後ろから襲う。

「甘いな。『攻略組』最速、『旋風』ってのはそんなもんか？」

避けられるはずの無い一撃。それを、奴はあっさりと首を捻ってかわした。同時に振り返ったＰｏＨの目線が、俺の愕然とした目線と交錯する。本能的な恐怖に駆られて飛び退ろうとしたものの、体は微塵も動かない。技後硬直だ。

そんな俺を嘲笑うように、ＰｏＨの右手が構える。毒々しい色のエフェクトフラッシュを纏ったそれは、まぎれも無いソードスキルの前兆。ソラと背中を合わせて戦う中で、何回も見た短剣スキル四連撃技、《ファッド・エッジ》の構え。

「っ！！！」

その連撃の軌道を見切って、左手の手甲をそこに翳す。防げる。俺の左腕に装備されているのは、超軽量金属とは言え現在最高峰の素材から造られた《フレアガントレット》なら、防ぎ得るはず。間一髪間に合ったその動作を見たＰｏＨが、

にやりと嗤った。

「っ！！？」

予想した衝撃は、来なかった。

なぜ？俺の意識が、不測の事態に一瞬停止する。発動したソードスキルは、止められないはず。いや性格には出来なくはないが、そんなことをすれば硬直時間が…

いや。できる。

奴の使った《ファッド・エッジ》は、短剣カテゴリではせいぜい中級のスキル。恐らく『短剣』スキルをとっくにマスターしているだろう奴にとっては、そうそう硬直時間の長い大技では無い。いや、それ以前に、あのエフェクトフラッシュが、既にキャンセルされた後のものなら…

「っうあっ！！？」

直後、強烈な斬撃が、俺の左腕を襲った。堪えようとした場所とは異なるところを激しく打たれた手甲が軋み、殺しきれなかった衝撃が俺の全身を吹き飛ばす。威力に乏しい短剣にも関わらず、一気に俺の体が壁際まで弾かれる。慌てて起き上ってＨＰバーを見て、

「な……っ」

呆然とした。ＨＰバーが、二割以上減っている。不意を突かれたとはいえ、手甲の防御の上からこれほどのダメージを抜いてきた。間違いない、強攻撃を一発でもまともに食らえば、俺のＨＰは吹き飛ぶ。そして、防具の耐久値。まだ八割以上残っていたはずのその値は、既に一割を切っていた。たった一回弱い点を切られただけで。見やった左腕の手甲には、無残な罅割れ。

「……っ」

「いいぜ…。その顔だ。やっぱり獲物はその絶望した顔をしてくれなくちゃな…」

減った分を回復するために、高性能のハイポーションを煽る。その様子を、ＰｏＨがニヤニヤと笑いながら見つめる。奴は、まだまだ余裕を失っていない。対するこちらは、最高のスキルも、敏捷値

の限界も、左手の防具さえ、全てを曝け出している。

圧倒的不利の状況の俺に、再びＰｏＨの突進が襲いかかった。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　恐怖と絶望の体現者３

戦闘は、一方的だった。
一方的に、俺が押されていた。

十五分にも及ぶその戦闘の疲労で、俺は地面に膝をついた。

「はあっ、はあっ、はあっ！！！」

切れるはずの無い息が、異常に苦しく感じる。分かっている。どう考えても心理的な原因だ。俺のＨＰは確かにまだ七割以上残っている。しかし、それは、ポーチに入っているハイレベルのポーションを二つ、高級品である回復結晶一つを消費してのものだ。

歯を食いしばる。いや、食いしばろうとしたが、ガチガチと震えるだけで歯の根はかみ合わなかった。恐怖に、絶望に、震えを止めることが出来なかった。なぜなら。

「Ｇｏｏｄ…いいぜ、その表情だ」

ＰｏＨのＨＰは、減っていなかった。捨て身で放った攻撃のいくつかは当たっていたし、短剣を拳で迎撃した際に少しの削りダメージは入ったはず。だがそれは、戦闘時自動回復（バトルヒーリング）か、或いはなにか特殊な防具の効果かの自動回復ではいるその量にすら劣る程度のものだった。

俺のアバターは、悲しいほどに非力だった。それを、嫌というほ

ど思い知らされた。それを補えると信じていた敏捷力とさまざまなダッシュスキルも、ＰｏＨには全く歯が立たなかった。

「っ…。ぅっ…」

そして何より、俺の心はこれ以上ないほどに圧し折られていた。流れ落ちそうになる涙を、留めることが精一杯な様に。その顔は、さぞや情けなく歪んでいることだろう。

ＰｏＨは、明らかに遊んでいた。途中からは最大の威力を発揮する斬り技を封印し、中華包丁では十分に威力を発揮できない突きばかりで俺を責め立てる。挙句の果てには、ＨＰが危険域に落ちた俺が回復結晶を使うのを、笑って見過ごしたのだ。

だめだ。
勝てない。

構えていた拳が、力無く揺れる。霞む視界で捉えていたＰｏＨの姿を直視できず、がっくりと俯く。

俺はその時、死を覚悟した。いや、生きるのを諦めた。だが、頭上から降ってきたのは魔剣の斬撃ではなく、馬鹿にするような、呆れたような声だった。

「…Ｓｏ－Ｂａｄ。まだ気付かないのか？」

そう、この時俺はまだ気付いていなかった。呆れるくらいにばかばかしいことに。

「俺がなんで獲物を殺さないのか。こんなところに一人でいるのか」

絶望に、目の前の敵にばかりに気を取られていて、周りが見えていなかった。そして。

「なぜお前の仲間がここに来ないと思う？」

そう。なぜ他のメンバーが。『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』の三人が、ここに来ないのか。『隠蔽（ハイディング）』もしていないため、マップを確認すればフレンド光点が浮かび上がり、ここで俺が不自然に留まっているのを見えているはず。

なのになぜ、十五分もの間、何の助けもこないのか。瞬間、俺の体がビクンと強張った。

「言ったろ？ショウタイムはもう始まってんだぜ？」

――――イッツショウタイム。

そう。奴はそう言った。その意味は。

「きさまあああああああああああああっ！！！」

絶叫しながらＰｏＨへと飛びかかる。恐怖も絶望も忘れて、怒りと動揺のままに叫んで掴みかかろうとするが、当然そんな無茶苦茶な動きで奴を捕えられるはずもない。ひらりとかわされ、腹をけり飛ばされて無様に転がる。体に鈍い痛みが走るが、そんなことはもうどうでもいい。

「皆に、ソラになにをしたあああああああああっ！！！」

再び絶叫し、弾けるように起き上る。だがＰｏＨはにやりと笑っ

て、「さあな」とだけ言う。それだけで、もう確定だった。俺と同じように、三人にも危機が迫っている。いや、もしかしたら。

もしかしたら、もう。

「くそっ！！！」

辿りかけた、最悪の結末。それを無理矢理に頭で否定して、三人の元へと駆けつけるために足に力を込める。だが、その前には、入口を塞ぐように陣取ったＰｏＨ。迷っている暇はない。恐怖に竦んでる暇も、今は無い。あらゆるスキルを全開にして、その脇を走り抜ける。

その隙に一撃をくらえば、俺は死んでいただろう。だが、どれほど注意を払ったところで、奴がその気になれば俺はもう避けられない。それだけの力の差が、俺と奴にはあった。しかし、無駄と分かっているのに、視線はＰｏＨを追い続ける。その顔が、フードから覗いた目が、俺を見つめる。

その視線は、俺の醒めない悪夢に、いつまでも纏わりついた。

episode6　キエルヒカリ

明滅するように歪む視界の中で、俺は全力で疾走し続けた。ＰＯＨと戦っていた安全圏を出たため、いくらかのＭｏｂが湧いてはくるが、俺は『軽業（アクロバット）』のスキルの奥義をつかって惑わしながら、完全に無視して走り続ける。

「……っ、」

ぼろぼろの廊下を駆け抜けながら、震える右手を振ってマップを呼びだす。ダンジョン攻略のために、既にマップデータの登録されたその地図に光るのは、フレンド登録されているプレイヤーが存在していることを示す小さな光点。

その数が、一つしかない。

「っ！！！」

瞬間、目の前が真っ暗になったように錯覚する。床がまるで沼地にでも変わってしまったように、足元が急に覚束なくなって床に倒れそうになる。足がもつれる、なんてこの世界で初めてかもしれない経験に、眩暈を覚える。

だが、体が無意識にそれを立て直し、頭に中までは、届かない。頭の中にあるのは、既に、二つの光点がないということだけ。既に二人が、ここにいない。視界が狂ったように揺れ、涙で霞む。

「っ、まだ、まだだっ！」

その場に崩れ落ちそうになったものの、必死に足を、心を持ちなおす。そうだ、まだ終わりじゃない。

一人、残っているのだ。恐らくはＰｏＨが俺を足止めしている間に、フレンドでは無いせいで光点の表示されない何者か…恐らく『笑う棺桶（ラフィン・コフィン）』の幹部と戦っているのだ。

まだ、間に合うんだ。

「いそげ、いそげっ！！！」

溢れ出る涙をぬぐい、更に加速する。限界までも振り絞る敏捷値すらももどかしく感じて、僅かでも速力を稼ごうと神経回路を焼き切らんばかりに走らせて足へと指令を出す。前を遮るＭｏｂ達を一息でかわしながら、走る。走る。

ソラ達の向かった方の分かれ道に差しかかる。このペースで行けば、光点までは後二分とかからないだろう。だが今は、その二分が、何十分にも、何時間にも感じる。間に合え、間に合え、間に合ってくれ！！！必死に願い、マップを凝視しながら走る俺の、その目の前で。

「っ、ぅぁっ…！」

最後の光点が、音も無く消滅するのが見えた。

episode6　キエルヒカリ2

「……っ」

辿り着いた先で、俺はがっくりと膝をついた。そこにいた人間は、三人。だがそれは、俺が共に旅し、戦い、笑いあった『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』の三人では無かった。そこには、ファーもレミも、そしてソラも、いなかった。

世界が、色彩を失ったように錯覚した。もう一年以上昔にプレイした他のゲームで死んだ時のような、セピア色に色褪せた視界は、まるで俺自身ももうゲームオーバーとなったように思わせた。いや事実、その通りだった。

「…クク。一歩、遅かったな」

「頑張ったほうだったんじゃねえか？俺たち三人を相手にさ！」

「……ヴん」

――――イッポ、オソカッタ。

――――ガンバッタホウダッタ。

ニヤニヤと粘着質に纏わり付く声が聞こえるが、俺はその意味を理解できなかった。それは多分一種の防衛機能で、理解したら自分が壊れてしまうことが分かっていたからの思考の停止だったのだろう。崩れるように蹲った時には、もう俺は涙も枯れ果てていた。

「それに、しても。あの女が、結婚、していたとは、予想外、だったな」

声を放った人間を、俺は焦点の合わない目で見つめた。情報屋でもある俺はその男を知っていたが、それを機械的に確認しながらも何の感情も浮かばなかった。

ぶつ切りにしたようなしゅうしゅうという声を放つ男は、『赤目のザザ』。髑髏を模した不気味なマスクの下から紅く輝く目を覗かせ、小柄な体をぼろ布のようなギリーマントで包んでいる。その裾から覗く獲物は、突き技に特化した武器である、エストック。

「おかげでドロップアイテムが少ない少ない！まぁ、それでも流石は『攻略組』、装備品のドロップだけでも結構な金額になるぜ、こりゃあ！」

ガキのような声が聞こえた方へと視線を移した先にいるのは、全身を真っ黒に統一した男『ジョニー・ブラック』。犯罪者のお手本のような頭陀袋をかぶった頭を始め、全身がピッチリとした黒服に包まれている。右手に握られているナイフは、なんらかの効果を有しているのだろう毒々しい薄緑に光っている。

「…ゴろした。ヴぉ前も、ゴろす」

最後の一人が、、くぐもった声を上げる。身長は俺よりも頭二つ高く、体重は百キロはあろうかという巨漢の男は、『潰し屋ダンカン』。黒帽子と同色のマフラーで顔の大部分を隠しているが、帽子の下の目は生気のない濁った灰白色をしているのが見える。体はランニングシャツと皮の胸鎧、そして簡素な黒ズボンで、まるでその巨体を誇示するかのよう。丸太のように太い両手に持った巨大なハンマーは、《グラン・ギガンテス》。現在確認されている最重量、最大威力を持つ武器の一つと目されているもの。

いずれも、名の知れた凶悪な殺人者（レッド）だ。
だが、そんなことはもうどうでもよかった。こいつらがなんだろうと、俺にはもう戦う気は無かった。

なぜなら俺は、ここにきてようやく気付いていたから。

こいつらが『冒険合奏団』を襲った理由は、恐らく俺とソラだったのだ。奴らは来るべき『攻略組』との戦争に備え、その戦力を図るための試金石として俺達を選んだ。ソラはボス戦も何回も経験している上に攻略組でも有数の戦闘力をもち、しかもその戦闘スタイルは剣、槍、投擲まで様々なタイプを他の『攻略組』から習って作り上げたもの。戦闘に慣れるという点ではこの上なく適任だ。
そして、俺。最初に狙うべき獲物として定められたのが、俺だ。『攻略組』でも間違いなくトップクラスのスピードは、最近では『旋風』の二つ名を貰うほどだった。つまり、俺の速さに慣れてしまえば、『攻略組』の速さも怖くない。相手の剣が見えないという事態を未然に防げる。そしておあつらえ向きに俺の攻撃力は極端に低い。例え慣れるまでに数発貰っても、ＨＰは半分も減らない。まさに練習相手…いや、実験台として最適だ。

そう、狙われたのは、俺だった。俺が、皆を巻き込んだ、ということだった。

そして、奴らは俺の速さに慣れるため、時間をかけて俺を嬲り殺すだろう。そう、さっきのＰｏＨのように。そんなことをされて、『攻略組』の足を引っ張るくらいなら、俺は。

（……もう、このまま、無抵抗に…）

殺されてしまった方がいい。そう遠く無い未来に来るだろう、最悪の殺人者ギルド、『笑う棺桶（ラフィン・コフィン）』の討伐戦において、こいつらが『攻略組』に対して対策を取れないように、俺はここで、無抵抗のまま死んでしまえばいい。

「Ｈｕｍｍ…？思ったよりアイテムが少ないな？」

ぼんやりと霞んだ世界で、背後から艶やかな声が聞こえる。ＰｏＨのものだ。俺の後を追いかけてきたであろう奴がストレージを開き、戦利品を確認している。その声にこたえたのは、ジョニー・ブラック。

「結婚してたんスよ！だからコイツ殺せば全部手に入りますって！」

「それでも少ねェだろうが。オマケが二人いたろ？そいつらの分は？」

「っ、っと、そ、それは、」

「…ダンカンが、相手をしている時、隙を見せて」

「ヴぉれ…」

「……逃がしたってェのか？」

「…っ、そ、その…」

「……Ｓｕｃｋ」

三人がそろって目をそらす。短く舌打ちしたＰｏＨが、身を翻す。

「俺は入り口で増援がこねえか見張ってる。まずそうなら『笛』を鳴らすから、終わらせてから転移しろ。いいな。二人みてェに逃がすなよ」

三人が怯えたように頷く前で、ＰｏＨが左腰のポーチから一つの

小さなホイッスルを取りだす。俺も見るのは初めての激レアアイテム、《フレンド・ホイッスル》。登録した者に笛の音を届けるという有りがちなものだが、この世界ではダンジョン内で仲間とタイムラグ無しで連絡を取れる手段で、利便性は高い。ランダムドロップのそれをどうやって手に入れたかは、知りたくも無い。

「ちゃんと、殺す」
「了解っスよヘッド！」
「…ゴろす」

その声が、俯いた俺の脳に、きりりと響いた。だが、俺はもう、抵抗する気は無かった。そんなものは、もうとっくに圧し折られてしまっていた。俯いたまま、無意識に右手を振ってメニューを呼びだす。

このとき、俺はなぜメニューを開いたのだろう。
そんな必要など、全く無かったにも関わらず。完全な無意識のままで。

だからそれは、俺では無い、別の誰かの、意思だったのかもしれない。或いは、遺志か。

無音で開くストレージ。その中に、俺は見た。
まるで浮き上がる様に力を放つ一行。

片手用グローブ、《カタストロフ》。

episode6　猛る想いの炎

銀の布に不吉な文様の施された、片手用グローブ、《カタストロフ》。

何層かのボスドロップであるそのアイテムは、間違いなくワンドロップ品。

ソラが装備しているはずのそれが、俺のストレージに入っていた。

でも、なぜ。確かに俺はソラとシステム的に結婚していたから、ストレージは共通化されている。俺も実際に目で見たことは無いが、確かゲームオーバーとなったプレイヤーのアイテムにおいて、ギルドの共通ストレージに入ってたものはドロップしないことになっていたはず。その理屈で言えば全てのストレージが共通となる結婚では、アイテムはすべて俺のものになるだろう。ダンジョンに入ってすぐの段階だ、俺の広がったストレージなら二人分のアイテムを全部保持することができるだろう。

ただしそれは、ストレージ内のものだけだ。

本人が装備しているものについては、その限りでは無い。オブジェクト化されたままのアイテムは死亡した場合、無条件に足元に転がる様になっていたはず。事実、恐らく死の間際まで彼女が使っていたであろうアイテムは、見当たらない。

俺と二人で揃いのインゴットで作った細剣（レイピア）も。

彼女以外に使う者はいない、珍しい投擲槍も。

友人に作ってもらったという、高性能の軽装金属鎧も。

そして、二人の思い出の詰まった、結婚指輪さえも。

だが、彼女が肌身離さず装備していたはずのその手袋だけは、俺のストレージにあった。

（なぜ…どうして…）

絶望で固まった思考が、芽生えた疑問に再び動き始める。と同時に、俺の耳を素通りしていった言葉達が、頭の中で再構築されて響く。そうだ。奴らは何と言っていた？

――おまけが二人いたろ？そいつらの…

――隙を見せて…

――逃がした…

逃がした。二人、逃げた。そうだ、そもそもギルドの共通タブを見れば、二人が生きているのが分かるじゃないか。思い出したように回転を上げていく頭が、すぐさま状況を理解する。理解して…いや、理解すればするほど、流れ落ちる涙が止まらなくなる。

恐らく、ソラは、たった一人でこの三人を相手に戦ったのだ。あいつが頭で理解していたとは思えないが、直感的に奴らの狙いは自分だと言うことに気付いたのだろう。そして、最強の殺人者（レッド）ギルド、『笑う棺桶（ラフィンコフィン）』の幹部三人を前にして、レミ、ファーが委縮する中、たった一人で戦線を支えて、二人を転移脱出させた。

そして。

（最後に、俺に、自分の武器を、託した）

涙に洗われた視界が、クリアになっていく。

「…クク。どうした。もう、立ち上がる、気力も、ないか？」

ザザが呟くのが聞こえるが、そんなものは俺の意識にはさざ波すら生じない。

ソラは、あの常人離れしたウィンドウ操作速度で、自分の装備フィギュアからこの手袋をストレージへと移した。三人を相手にしては、たった一つ装備を外すのが限界だったのだろうが、そのたった一つに、この《カタストロフ》を選んだ。

「ならば、奮い立たせて、やろう。これは、あの女の、細剣だ。俺の、好みでは、ないが、威力、軽さは、申し分ない」

ザザがメニューから取り出したのは、炎のような薄赤い光を纏った細身の剣は、見間違うはずもないソラの愛剣、《フラッシュフレア》。『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』のメンバーで取りに行った素材で作った、俺達の思い出の剣。

ソラが俺に残してくれたのは、その思い出の剣でもなく。
友人の最高傑作なのだと笑っていた金属鎧でもなく。
俺と二人でそろえた、結婚指輪でもなく。

俺が戦うための、俺のための武器だった。

俺の魂に、ぼっ、と火がつくのを感じた。その火が、俺の涙で現れた視界をはっきりと乾かし、意識に氷の冷静さと炎の激しさを宿す。目の前の、ザザを…その右手でゆらゆらと揺らぐ、思い出の剣を見つめる。その剣の炎が、俺の火種をますます激しく猛らせる。

「…クク。この剣で、お前を、殺すのは、さぞ、」
「その剣を離せ」

声は、もう震えない。はっきりとした声で言い、ゆっくりと立ち上がる。

「ヒャハァッ！この状況で随分威勢がいいなァ、『旋風』！」
「……クク、離せ、だと？」
「……その、剣を、離せ」

俺は、もう一度繰り返す。それを受けて、ザザがしゅうしゅうと耳障りな音を立てて笑う。ダンカンが濁った眼のまま両手の巨大なハンマーを構える。そして、甲高い声で笑ったジョニーが、

「っ！！？」

構えて突っ込んできたナイフを、俺の右手が薙ぎ払った。単発体術スキル、《スライス》の、その一撃。たった一撃で、ジョニーの持つナイフが根元から圧し折れた。攻撃を放った右手に装着されているのは、禍々しい文様があしらわれた、銀色の輝き。

片手用グローブ、《カタストロフ》。
その武器破壊ボーナスは、武器が小さくなるにつれて反比例的に大きくなる。

ゼロ距離の体術使いである俺に、この上ない最強の装備。

「てめェ…死ぬ覚悟できてんだろォなァ……」
「……ザザ。もう一度だけ、言う。その剣を離せ。それは、お前なんかが持っていいもんじゃない」

飛び退ったジョニーの耳障りな声を無視して、俺はザザを…その右手の剣だけを見つめて言う。ジョニーがストレージから新しいナイフを取りだす。ハンマーを構えたダンカンがじりじりと距離を詰めてくる。ザザが、また笑う。

「……そう、思うなら、力ずくで、してみろ。もっとも、お前も、ここで、死ぬがな」

「…力ずく…そうだな。もう、言うことはない」

もう、言うことは無い。無いんだ。構えをとる。受身の構えでは無い。攻撃の構え。狙うは、ザザの持つ、ソラの…俺達の剣。ザザの奴が手放す気が無いのなら、俺が、この手で、打ち砕く。それが、俺の役目だ。

「…っは！！！」

一瞬の気合いの後。

俺は心に燃え盛る炎のままに、三人を相手に突進した。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　猛る想いの炎２

再びの、命をかけた全力の死闘。
だが、一種の恐慌状態にあったＰｏＨ（プー）の時とは違って、俺の頭の中は熱く炎を燃やしながらも冷静な判断を保っていた。

「っ！！！」

短剣の横腹を再び打たれたジョニーが飛び退る。恐らく相当に耐久度を削られたのだろう、苦々しく目を顰めている。先程のようにソードスキルで無いせいで一撃で砕くには至らないが、その顔を見れば何回も耐えられそうにないのは明らかだ。

「ちぃっ、クソッ！！！」

動きで言えば、三人の中でも群を抜いた精度。そして、一撃を貰えばその刃に塗られた麻痺毒が勝負を決するだろう。俺も左腰のポーチの中にある解毒結晶は、一秒の半分もあれば即座に使えるようにしてあるが、その半秒の隙があれば俺の体はズタズタだろう。

だが。

「甘い！」

すれすれで放たれるナイフの軌道は凄まじい速さだが、それはあまりにも『短剣』スキルの基本技の軌道を完璧にトレースし過ぎている。俺自身は短剣を使った経験は無いが、俺の相方はソラだ。そ

の戦闘を、俺は誰よりも近くで見てきたのだ。彼女以上の速さでもなければ、俺には通じない。

壁に向かってバックステップで飛び退り、三角跳びの要領で反転、そのまま頭陀袋の顔面を踏み抜く。そこを足場に、更にバク宙しながら離脱。体術、軽業（アクロバット）のスキル複合技、《ムーンサルト・フライ》。

「ヴぉ！！！」

と、着地の直後、後ろから剛毅な声が上がる。

振り返らずにそのまま横へと転がって緊急回避。その体を霞めるように振り下ろされたのは、優に俺の体重を超えるだろう巨大なシルエットの金属塊。振り下ろされたそれが轟音を立てて床板をクレーターのように抉る。

このダンジョンの通路は、その硬度こそ破壊不可能オブジェクトの一歩手前、鬼の硬さであるものの、ある程度の深さまでは破壊できるように設定してある。勿論本来は全力で壁に強攻撃…たとえば《ヴォーパルストライク》を叩きこんだところで握り拳程度の穴が空く程度だ。それを、これだけの範囲を砕くとは、尋常では無い破壊力。

だが、こういったパワーファイターは、俺の得意分野だ。一撃喰らえば毒など目では無く瞬殺だろうが、それをかわし続けて俺はここまで生きてきたのだ。なおも振り回されるハンマーを掻い潜っての回し蹴りを頭に放つ。クリティカルしたその蹴りに巨体が衝撃にぐらりと揺らぐが、それでもＨＰの総量が相当のものらしく、その二割も減っていない。

問題は。

「っつっ！！！」

燃えるように紅い刃が、俺の肩口を貫いていた。ザザだ。

油断していたわけではない。一撃が死に繋がる二人を捌きながらも、常に奴の右手の細剣には注意を払っていたのに。俺のＨＰは、さっきの一撃によってとうとう黄色の注意域に落ちているが、そのダメージは殆どがこのザザの突き技によるものだった。

「……クク。どうした？そんな、ものか！」

相性、の、最悪のパターンだった。

奴の突き技には、全くの前動作が無いのだ。ダラリと下げられた右手は何かの拍子をとる様に揺れるが、そこからは突きのリズムを読み取れない。相手の動きから攻撃を先読みする『見切り』が、こいつには通用しない。

「くっ！！！」

連続技を繰り出すことなく、ザザが飛び退る。背後にザラリとした違和感を感じて咄嗟に頭を下げる。直後、ダンカンのハンマーが髪をかすめるようにして薙ぎ払われた。壁が激しく打たれ、また巨大な穴をあけられる。

このままコイツを野放しにしていれば、周囲は穴だらけになって俺の生命線たるステップが封じられてしまう。だが先程のクリティカルでも、まだＨＰは安全域に保たれている。

（だが、負けない…！）

そうだ。まだ、負けていない。俺の中の炎は、まだ十分な熱を保

っている。
走り回って乱戦にしているため俺自身も余裕はないが、相手にもスイッチして回復をする暇を与えてはいない。俺のＨＰは黄色の注意域だが、奴らも無傷では無いのだ。とくにダンカンは、もう少しで半分を切るところまで責め立てている。

「っ！！！」

再び放たれるザザの突き。しっかりと剣先を見ていたにも関わらず軌道を読み損ない、脇腹を貫かれる。咄嗟に剣を掴もうとするが、割り込む様にナイフを振ったジョニーに邪魔されて追撃出来ない。必死にナイフを回避し、毒を弾くグローブでナイフを受け止める。削りダメージが、更に俺のＨＰを削る。再度突進してくるザザ。背後に、ダンカンがハンマーを振りかぶる。

「おおおっ！！！」

三人が俺を取り囲んだ、その瞬間。

今まで八割に制限していた敏捷値を、全開にして体を沈ませ、そのまま逆立ちした様な格好でコマのように体を回転させて繰り出す回転蹴り。体術スキル、《スパイク・ハリケーン》。俺の持つ体術スキル最大の攻撃範囲を誇る大技が、三人の体を同時に弾き飛ばした。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　消えゆく炎と折れた意志

戦闘が終わりを告げたのは、俺のＨＰゲージが既に赤の危険域に落ちてからだった。

もう残りは一割強、クリティカルポイントに入ればもう一発でＨＰがゼロになるだろう。ただ、本当の本当に追い詰められたことで俺の集中力は更に高まって、この状況に入って既に3分が経過していた。奴らのＨＰも、黄色の注意域まで削られている。

そんな中、加速し続ける世界で、ザザとジョニーが同時に構えをぶらしたのだ。

距離をとられて反撃の手を出せない俺の前で二人が顔を見合わせ、頷く。と。

「…クソっ、覚えてやがれよ！」

「……次は、ちゃんと、殺す」

恐らく、《フレンド・ホイッスル》の音が奴らに聞こえたのだろう。そして、その指示は「すぐさま撤退」だったようだ。ジョニーが脅えるように早口で転移結晶を使って撤退していく。だが、残りの二人は無言で佇むままだ。

いや。それはどこか、無言で睨みあっているような。

「……どうした。ダンカン。速く、飛べ」

「マだ、ゴいつ、ゴろして、ナい」

「……ヘッドの、命令に、逆らう、のか？」

「……」

それだけ告げると、ザザも転移結晶でどこかへ飛んだ。残念ながら、そのしゅうしゅうとした聞き取りにくい声での発声のせいでどこに飛んだがまでは分からなかった。そして、最後に残ったダンカンが、

「ヴぉ、ヴぉおお。ミんな、アまい。ザからう奴、ぜん員、ゴろせばいい」

震えるような声で何かをつぶやき…ハンマーを構えた。

こいつは、戦うつもりか。三対一だったこの戦いを、一対一で。

一瞬正気を疑って…気付いた。こいつはもう、とっくに正気を失っている。思えばさっきまでの戦いも、ただただ己の本能の赴くままに、相手を殺そうとしてきただけだった。

「ゴろす。ゴろす。ミんな、ゴろす」

いや、己の本能では無いのかもしれない。周囲の人間の異常な言動で、塗り替えられた価値観の中で…恐らくはＰｏＨの洗脳に、狂わされてしまった。ただただ、デスゲームの、刹那の快楽を愉しむという唯一の事象を生きる意味として。

コイツ一人なら、俺でもどうにでもなる。

炎はまだ猛っていたが、冷静さは十分に保たれている。コイツ一人でも拘束する。

だが、そんな理性は。

「アの女、ヅまらなかった。アしを潰しても、ウでを潰しても、

ビ鳴を上げなかった」

奴の、くぐもった声を聞いた瞬間。

「ヴぉ前は、ダのしませて、グれるか?アの女と、ヂがって!」

「……お前が、お前が」

燃え盛った炎で。

「お前が殺したのかあああああああああああっ!!!」

蒸発して消えた。

◆

「やめるんだシドっ!!!」

俺が駆けつけた時は、もう既に勝負は完全に決していた。

「お前が、お前があああああああああああっ!!!」

「シド、シドっ!!!」

シドは、何かにのしかかる様に馬乗りになって、その物体を力任せに殴りつけていた。

続いて、その何かが、人だと分かった。俺が最初に人と気付かなかったのは、それがあまりにも歪な形状に歪んでいたからだった。

「っ…!」

両足が、無かった。のしかかられた男はくぐもったうめき声を上

げて必死に手をばたつかせるが、首と肩口を押さえつけられて力だけでは抜け出せないように固められている。いや、そもそも抜け出せたところで膝の上下で足が切断された状態では逃げることもままならないだろう。

思わず息をのんだ俺の目の前で、

「お前が潰したのは、右手かあああああああああ！！！」

シドが再び絶叫する。その右手が、血のように真っ赤に光を放つ。あれは、体術スキル、《アースブレイク》…本来は地面を這う爬虫類や昆虫など、丈が低くて攻撃が当たり難い敵に使う技で…強烈な手刀で、敵を切り裂く技。

たっぷり一秒近い長大な溜め時間の後、振り下ろされたそれが。

「ヴぉおおおお！！？」

組み伏せられた男の、右腕を肘から切り落とした。同時に、男のＨＰが減少していき。

残り一割を切って、ほんの数ドットを残して止まった。

「っ、やめろシド！！！」

それを見てもなおも攻撃の手を緩めようとしないシドを、俺は後ろから羽交い絞めにして押しとどめる。シドはその長い手足をばたつかせ、意味の分からない言葉を叫びながらなおも手足を振り回す。いつもの憎らしいほどの冷静さは欠片も無く、眠たげだった目は限界まで開かれて瞳孔が小刻みに揺れる。そして、その目からは、幾筋もの涙が流れていた。

俺の腕の中で、徐々にシドが力を失っていく。見れば、既にシドのＨＰゲージも赤く、何かの拍子でゼロになりそうなほどに減少していた。だが、力を失い、声の張りが無くなっていくにつれて、その頬からの涙が勢いを増していく。

と。

「……グく。ヴぉ前らには、ヅかまらない」

ぐったりとしていた男が、嫌な響きを持つ声を上げた。

慌てて振り向いた俺が目にしたのは、男の四肢の中で唯一残っていた左手に握られた、一本のダガーナイフ。その刀身は、なんらかの毒を有しているらしく薄い緑色に光っている。

慌ててシドを後ろに庇って背中の剣の柄を手に取る俺の前で、

「バハハハハハ！！！」

男が、ナイフを突き立てた。己の、脇腹に。

呆然とする俺の前で、そのＨＰが更に減少する。その残量は、もう数ドットもない。

「…『黒の、剣士』。ギ様ら、ゴう略組も、モう、ヴォわりだ。バハ、バハハハハハ！！！」

そのＨＰを一瞥すらせず巨漢の男が大声で嗤う。その哄笑からは、今の現状への恐怖も、四肢を切り裂かれた苦痛も、死に対しての恐怖すらも、全く感じられない。

そして、その最後の一ドットが、ナイフに塗られた毒によって消滅して。

「…ゴろす！ヴぉ前ら、ぜん員、ゴろす！！！」

男は、最後に高々と捨てゼリフを吐いて、莫大なポリゴン片となって爆散した。

と、同時に。

「…っ！？シド！！？」

「……っぅ…き、キリト…？」

俺に抱えられたままのシドが、糸が切れた人形のように崩れ落ちた。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　消えゆく炎と折れた意志２（前書き）

区切りましたが、まだエピソード６は続きます。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　消えゆく炎と折れた意志２

俺がそのフレンドメッセージを受け取ったのは、少しばかり長引いたレベリングを終えて、ちょっと昼食でもと街へと帰ってきたちょうどその時だった。タイトルは無く、「助けてください　六五層」とだけ書かれてたそのメッセージにただならぬ事態を感じてすぐさま転移門へと飛び込んだ俺を、広場で泣き叫ぶファーとレミが迎えたのだ。

話もままならない二人から何とか事情を聞きだし、俺が急行したときには既に奴らの殆どの姿は無く、シドと残る一人がいるだけだったのだ。二人を逃がすために残ったと聞いていたソラの姿は、無かった。

残る一人の最期を見た後、託された回廊結晶で『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』のギルドホームへとシドを背負って飛んだ俺を、レミとファーが迎えてくれた。

「オイラがっ！オイラが、のこ、残らなきゃ、いけなかったんス！オ、オイラ、壁戦士（タンク）なのにっ！み、みんな、みんなを守るのが、オイラの、っ、役目、なのにっ！！！」

「……ファー」

「な、なのにっ！オ、オイラ、あの三人を見た途端、う、動けなくなって！そんな、そんな俺、俺を逃がすために、ギルマスが、ギルマスがっ！！！う、うううううっ！！！」

「……ふぁー、っ、っ…」

シドをソファに寝かして一時間。ファーは、地面に跪いて狂ったように絶叫しながら泣き続けていた。その目から溢れ続ける涙は、拭っても拭っても止まらない。レミがそんなファーの横に座って、ただただ名前を呼び続けてその背中をさすり続ける。だが、その目も涙に濡れ、時折嗚咽を噛み殺すように声が詰まっている。

俺は、そんな彼らに、何も声をかけてやれなかった。

「……レミ。ファー」

そんな中、シドが不意に呟いた。皆が一斉にソファを見ると、意識を取り戻したらしいシドが、虚ろな瞳で天井を見つめていた。そう、その目は、どこまでも空虚な色を宿していた。慌てて詰め寄るギルドメンバーの二人を、ゆっくりと見やって。

「……すまない。キリトと、話させてくれ…」

そう言った。

◆

「キリト…」

「……すまない。間に合わなかった…」

キリトの目に、暗い影が落ちる。それは、以前のクリスマスの前に見たような、昏い後悔の色。俺は謝りたかった。キリトに、そんな顔をさせてしまったことを。俺が、俺達が、大丈夫だとタカをくくっていたせいで引き起こした惨事のせいで。

だが、俺は謝れなかった。

もっと、先に、言うべきことがあったから。

「…キリト。俺は、駄目だった。ラフコフの連中に…ＰｏＨに、全く歯が立たなかった。あいつは、完全に遊んでいた…。殺されるだけならまだしも、俺は連中に、俺の敏捷を晒した。恐らく奴らは、そのスピードを基準に『攻略組』の対策を練るだろう…」

泣きそうな声を、必死に抑えて。

「……俺は、バカだった…俺は、俺は、ＰｏＨに、勝てるなんて、思ってた…。バカバカしいくらい、思いあがってたんだ……。はは…見ろよ、コレ。たった一発だぜ？たった一発くらっただけで、このザマだ……そして、俺も、このザマだ…」

震える指先で、右手を振う。実体化した、酷く罅割れた《フレアガントレット》をキリトに放ってよこすと、悲しそうな視線とぶつかった。構わず、俺は続ける。言いきらなくては。最後まで、言い切らなくては、いけないんだ。

「……キリト…俺は、俺は。守って、やれなかった…っ！ソラは、ソラはっ。お前や、『閃光』と同じ、『勇者』だったのに…っ！この世界を終わらせるために、失ってはいけない人だったのに…っ！俺は、ソラを、ソラを、守って、やらなきゃ、ならなかったのに…俺が、俺なんかが、生き残って……っ！」

言いきれたのは、そこまでだった。そこからは、もう、声にならなかった。再び流れ始めた涙が、漏れ出す嗚咽が堪えられず、俺は右腕で顔を覆った。食いしばった歯が、痛いくらいに軋む。腕の下から、止め処なく涙が零れる。そして急速に、意識が遠ざかっていく

またやってきた、昏いまどろみに落ちる直前。

「……俺は。俺は。…お前だって、『勇者』の一人だって。そう、信じてる。」

キリトの声を、聞いた気がした。

◆

この噂…『攻略組』、少なくともそのレベル帯のギルドである『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』が、『笑う棺桶（ラフィンコフィン）』に敗れたという噂は、すぐさまアインクラッド中に駆け巡った。最も反響が大きかったのは、『攻略組』だった。『旋風』と呼ばれる程の速度を誇ったシドが首領であるＰｏＨに圧倒され、ボス攻略に参加するほどの強さを有していたソラが殺されたのだから、当然と言えば当然だ。

こうして、アインクラッドでの『笑う棺桶』の脅威はますます高まっていき、早期の対策が叫ばれるようになった。そして、数日後のとある夏の日。とうとう、『攻略組』は、奴らの居場所を突き止めたのだった。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　虚ろな風と再びの火種

俺の拳が、金属質のヘルメットの顔面に鋭く突き刺さった。

身長は二メートルに迫ろうという、漆黒の金属兵士。重厚な鎧は勿論、そのヘルムの下の顔も、金属光沢を放つのっぺらぼうだ。色は、どちらも、黒。名称、『ブラック・ルーク』。このダンジョン、『盤上の古代遺跡』に出現する金属兵達の中でもＨＰ、防御力共に最高ランクのモンスター。

「うおおおおおおおおおおっ！！！」

ＨＰ、防御ともに高いという、俺の戦闘スタイルでは相性最悪の敵だが、そこをレベル差で無理矢理に押し切る。もう何発目か分からない顔面への殴打が、硬い敵を爆散するポリゴン片へと変えた。

だが、その時には俺の拳は既に別の敵へと向いている。

次の敵は、背後から掛けてくる、白い金属兵が、四体。

片手剣と円形盾をもった二体の『ホワイト・ポーン』。長大な両手槍を携えた馬の頭部を持つモンスターは、『ホワイト・ナイト』。そして、ただ一体だけ、布製のローブを纏った金属の僧兵、『ホワイト・ビショップ』。携える武器は、…エストック。

無感動にそれを確認し、真正面から飛び掛かる。

ＨＰを一瞥もしないで、飛び込んでの《スパイク・ハリケーン》。

ソラが死んで。俺はこの、『チェス盤』と呼ばれる地に籠りきり

になって、その硬いＭｏｂの群れを相手に狂ったように戦い続けていた。

◆

何度目かの意識の消失から目が覚めた時、俺はまた安全エリアに死んだようにうつ伏せに倒れていた。この『盤上の古代遺跡』は屋内のダンジョンだ。周囲の明かりは横の燭台からだけで常に一定量のため、今が昼なのか夜なのかも分からない。そして、何日が経過したのかも。

だが、そんなことはどうでもよかった。もう俺には、できることなんてない。

なにかができるかもと思うことさえ、できない。

うつ伏せで転がっていたせいか、息が苦しい。ごろりと横に寝がえりを打つように転がると、古びた遺跡の、円形をしたドームの天井が見える。大きく一つ息を吸い、そのまま顔を覆う。眠ろう。なんの寝袋も用いないこの体勢でも、Ｍｏｂのポップの無いこの場所なら問題ない。

勿論ここに犯罪者（オレンジ）プレイヤーでも来れば、すぐさま俺は殺されるだろう。

だが、それももう、どうでもいい。

右腕で視界を覆い隠して、その暗闇の中でぼんやりと考える。なぜ自分はここに来たのだろう。はっきり言って、意識しての理由などは無い。ただ、ギルドホームのソファからぼんやりと起き上り、体の動くままに来たら、ここにいたのだ。この、敵が硬い、武器も様々で対策も立てにくい、高価なドロップアイテムも無い、レベル（ファーミング）

上げスポットの対極に位置するようなダンジョンに。

様々な武器。ああ、そうか。

ここには。ここに出てくる「ビショップ」の連中が使うのは、エストック。珍しい武器だ。

いや、それとも。

ここは、短剣を使うＭｏｂがいない。短剣の、赤黒い輝きを、見ないで済む。

（……考えるのは、よそう）

ぐるぐると回転し始める…或いは、キリキリと痛みを放ち始める思考を、無理矢理に断ち切る。眠ってしまおう。そして、起きたらまた、あいつらを倒し続ければいい。何も考えずに。何も得ず、何も生み出さずに。

暗がりに戻りかけた、その瞬間。

「シドさん」

凛とした美しい声と、二人分の足音が、俺の耳に届いた。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　虚ろな風と再びの火種２（前書き）

満を持しての登場。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　虚ろな風と再びの火種２

アスナがその場を訪れた時、始めシドは死んでいるのではないかと思ってしまった。

彼は、安全エリアぎりぎりの位置で、力尽きたように仰向けに倒れていた。右腕がその顔を覆っており、眠っているのか…或いは泣いているのか、判別がつかない。更に言えば、アスナ達二人が近づいても、まるで起き上る気配が無い。

普通、屋外で休憩…というか、仮眠をとる際には『索敵（サーチング）』スキルでのアラームをセットするなどの対策を取らないと、ＰＫ…睡眠ＰＫと呼ばれる殺人集団の常套手段などの格好の獲物になりかねない。アスナもそれで一度大変な…いや、大変恥ずかしい目にあったことがある。

そして、この男がそういった対策を一切取っている様子を見せないことが、アスナを悲しくさせた。おそらく、「いつ死んでも構わない」とでも思っているのだろう。以前からそういった空気をもった男ではあったが、今回の事件でそれはもう無視しえないところまで来ている。

「シドさん」

声をかける。この距離まで接近を許したことに驚く様子も無く、シドはゆっくりとその腕をずらして、声をかけた自分を見つめてきた。その目に、一瞬アスナが息をのむ。人間に、生きた人間に、こんな目が出来るのか、と驚きを隠せなかったのだ。様々な負の感情をぐちゃぐちゃに混ぜあわせて凝縮し、それを固めて目に嵌め込ん

だような、昏く淀み、濁った瞳。

だが、固まってばかりは居られない。今日は、用事があってきたのだ。

「シドさん。キリト君が、多分ここにいるだろうって、教えてくれたの。今日はあなたに、お願いがあって来たの。聞いて貰えるかしら？」

「……そうか」

何の感情も持たない、合成音のような声。

「っ、『笑う棺桶（ラフィンコフィン）』の、討伐隊の編成が終わったわ。すぐに奴らのアジトに向かうの。メンバーの人数も、レベルも、こちらの方が十分に上。上手くいけば、私は無血投降すら可能だと思ってる」

「……そうか」

ラフコフの名を出しても、その声に揺らぎは…人間らしい感情の動きは、ない。

キリトは言っていた。ここが今現在知られている（といってもアスナは全く知らなかったのだが）ダンジョンの中で数少ない、エストックを使うモンスターのポップする場所だと。もしシドが、ラフコフへの再戦を…復讐を考えているのなら、ここにいるのではないか、と。

キリトの読み通り、ここにシドはいた。だが、その理由は違った。少なくとも、復讐のために腕を磨いていたのでは無かった。シドの、かつて『旋風』と呼ばれた男の心の炎は、完全に消えてしまっていた。

「…でも、必ずそう上手くいくとは限らないわ。だから、相手の情報は出来るだけ集めておきたい。あなたが戦った三人の、戦闘スタイルを教えてほしいの。対策は、最大限立てておきたいし」

「……そうか」

「…っ、そして、もうひとつ。もしも戦闘になっても、私達は出来るだけ、死者を出したくないわ。勿論相手が抵抗を続ければ、全損もやむなし、とは考えているけど、それ以外にも方法を持っておきたいの。具体的には、『武器破壊（アームブラスト）』の使い手を探してるの」

「……そうか」

予想外の自体に、アスナは胸中で狼狽する。彼女の予想では彼は怒りに狂っており、寧ろ「殺さずに捕える」という条件に納得してもらうために説得に来たのだ。こんな…まるで生きた屍のようになっているとは、思いもしなかった。

と同時に、アスナは、シドを励ますことが出来なかった。もし自分が最も愛する人を…あの黒装備の青年を失ってしまったらと考えると、軽々しく彼に言葉をかけられなかった。彼は今、まさにその状況にいるのだから。

「……っ」

口を開き、しかし何も言えずに、言葉を飲み込んだアスナを見て、シドは再び腕で目元を隠した。拒絶を表す意味ももちろんあったが、これ以上アスナにこんな自分の姿を見せたくなかった。そして、アスナに、これ以上そんな顔をさせたくなかったのだ。

互いの、無言。

それを破ったのは、それまで沈黙を守っていたもう一人の来訪者だった。

その一人は。
顔を隠したシドの横へとしゃがみこんで。
「っ…！？」
胸倉を掴んで上体を無理矢理に引っ張り上げ。
「なんなのよアンタは！！！」
そしてその頬を全力で…音高く張り飛ばした。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　虚ろな風と再びの火種３

途端、俺は世界が急に色付いたように感じた。最初は何が起こったのかまるで分らず、一瞬遅れて自分が無理矢理に引き起こされて、その頬を打たれたことを悟った。と同時に、頬に鈍く痺れるような痛みを感じた。それまでは、何も…それこそ金属兵のエストックが突き刺さっても何も感じなかったのに。

「アンタは、なんで、なんでこんなとこにイジけて転がってんのよ！？」

元の世界であれば唾がかかるほどの至近距離で怒鳴るのは、今まで会ったことの無い少女だった。ふわふわとした肩までのベビーピンクの髪に、フリルのついたエプロンの可愛らしい姿。見たところ、『裁縫』かなにかの職人プレイヤーか。

「呆れた！いざ会ってみれば、こんな奴だったなんて！！！」

呆けたように見つめる俺の前で、少女はなおも怒鳴り続ける。その声は、徐々に湿り気を帯びていき、そのダークブルーの大きな瞳にみるみる涙が溜まっていく。俺の胸倉を掴んだ華奢な手が、ぶるぶると震える。

「ソラが、アンタの奥さんが！こんなイジけた奴を好きになったって言うつもり！？違うでしょ！？少なくとも、アタシがソラから聞いてたアンタは、もっとカッコよかった！ソラは、…っソラっは、アンタの事を、店に来るたびに、いっつも誇らしげに話してた！！

！」

少女の瞳から、堪え切れなくなった涙が次々と零れ落ちていく。この少女は、知っているのか。ソラに、なにが起こったのか。ならこの少女も、『攻略組』の一員…或いはそれに近い位置にいるのか。ぼやけていた視界がガクガクと揺さぶられ、色を取り戻していく。

「……でも、俺なんかが…」

「言い訳するな！アンタは、『勇者』なの！少なくとも、ソラにとっては、アンタが、アンタこそが『勇者』なのよ！こんなところで、イジけてるなんて許されないのよ！！！」

開きかけた口を、少女が力ずくで閉じさせる。言葉に詰まったところで、少女が右手を離してメニュー画面を操作し、アイテムをオブジェクト化する。慌てて体を支える俺の前に現れたのは……一つの、手甲。

見覚えのある…というか、忘れられるはずの無いそれは。

「《フレアガントレット》…？」

「…キリトが、持って来てくれたの。私の銘があったから、って。っ、その時、全部、全部聞いたの…アンタのことも、…ソラのこともっ…！」

その顔が、俯く。私の銘…ということが、この少女が、ソラの言っていた「知り合いの鍛冶屋」…リズベット、なのか。初めての出会いが、こんなものになるとは、俺も…ソラも、この少女も思ってなかったろう。全部聞いた、と言ったということは、キリトが言ったのか。

ソラが死んだ…自分の作った防具が、ソラを守り切れなかったことを。

自分の作った細剣が、敵の手に落ちてしまったことを。

そしてこの手甲が、ＰｏＨの一撃であっさりと砕かれたということを。

食いしばった唇の端から、絞り出すようにして言葉を続ける。

「……ありったけの素材使って、限界まで鍛えなおしといた、からっ！…こんっ、今度は！今度は、絶対に負けない！相手が魔剣でも、《友斬包丁（メイトチョッパー）》でも、ＰｏＨでも！！！アタシの武器は、もう絶対に負け、な、いっ、がらっ…っ！！！」

最後は、もう、言葉にならなかった。

彼女は最後にもう一度だけ、力無く俺の体に拳を叩き付けた後、立ち上がってアスナの胸へと飛び込んだ。そのまま大声を上げて泣きじゃくる。アスナが、その体をそっと支え、背中を撫でてやる。

彼女も、悔しかったのだろう。

お得意様で、俺よりも長い付き合いだった友人を失ったのだ。

そして何より、自分の作った防具が、彼女を守れなかった。

嗚咽を聞きながら、俺は残された《フレアガントレット》を手に取る。最後にキリトに放って渡した時は罅が全体に広がって今にも壊れて消えそうだったそれが、改めて見たそれは完全な輝きを取り戻し、ほのかに薄赤い火焔を纏ったような鮮やかな光を取り戻している。そして今、その手甲は、まるでそれ自体が燃え盛る様に、己の熱を俺に伝えてきた。

それは、もう二度と負けないという、意志無き手甲の叫びか。
それとも、涙と後悔、怒りと決意、己の全てを込めた、リズベットの思いの結晶か。

その炎は、俺自身の、枯れきった心に、再び…もう一度だけ、炎を灯す。
もう一度だけ。もう一度だけ。

その意志が消えないうちに、俺は声を出す。

「……アスナ。条件がある。俺と、対戦（デュエル）してくれ」

思いの、全てを振り絞って。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　風踊り、光舞う

アスナが、驚いたように俺を見てきた。俺は、ゆっくりと立ち上がり、倒れ込む段階で既に相当に減っていたＨＰを回復結晶で全回復させる。一連の動作を無意識にこなしながら、アスナの無言の問いかけに答える。

「『笑う棺桶（ラフィンコフィン）』の連中…少なくとも首領のＰｏＨは、俺より強かった。パワー、スピード、反応速度、戦闘センス。全てにおいて、俺を圧倒していた。俺は、正直、奴が怖い。……今でも、だ。だから…」

立ち上がった後、左手に携えた燃え盛る手甲を右手に持ちかえ、そっと左腕に付けていく。感じる熱は、ますます激しさを増していく。俺自身に、あの時感じた、炎の意志と氷の冷静さが帰ってくる。

「…見せてくれ。『攻略組』が…『閃光』が、俺より強いってことを」

最後のベルトをしっかりと締める。そして、右手のグローブを外していく。力を示すための戦いに、この《カタストロフ》は不要だ。使う武器は、俺の、この拳、この体のみ。

そんな俺を…俺の目を見て、アスナの美しい顔が、すっと引き締まる。同時に届く、デュエル申請。

「……ありがとう」

一声応えて、俺はその画面をそっとなぞる。選ぶモードは、最初

から決めていた。
選んだ瞬間、アスナの顔に驚きが走る。恐らく、彼女は初めて経験する対戦なのだろう。

「『半減モード』…！？どうして…っ」
「すぐにわかるさ。なあに、心配はないよ。俺の最高の威力のスキルがクリティカルで入っても、『閃光』のＨＰは三割も減らないだろう。そして俺の方なら、心配いらない」
「でもっ！」
「手加減して俺に勝つのは不可能か？少なくともＰｏＨは、俺相手に完全に遊んで見せたぜ？」
「っ…」

なおも渋るアスナの前で、カウントが開始される。同時に俺は、ウィンドウを操作して二つの結晶を実体化させて、離れたリズベットに放る。二つの回復結晶を受け取ったリズベットは、それだけで「危なくなったら頼む」の俺の意思を読み取ってくれたようで、涙をぐいっと拭って力強く頷く。

なおも、細剣、《ランベントライト》を構えながらも迷いを見せるアスナの前で。
カウントが、徐々に減って。

――三
――二
――一

「っ！？」

ゼロになったと同時に飛びかかった俺のその速さに、アスナが驚

愕の表情を浮かべ。
放った一撃、《ロール・スラッシュ》が、防御も間に合わないアスナの頭部を完璧に捕えた。

◆

カウントがゼロになった瞬間、アスナの反応が普段のデュエルの際よりも、ほんの一瞬だけ遅れた。
だがそれは、『閃光』と謳われたアスナにとっての一瞬だ。普通の…いや例え『攻略組』のプレイヤーであっても、その一瞬の隙を見いだせる者はそうそういない。
しかしシドは、その一瞬を決して逃しはしなかった。

「っ!?」

突っ込んできたシドを見たアスナの顔が、驚愕に歪む。シドの体が、まるで冗談のように幾重にも分身したのだ。突進する影が、二重に…いや、三重にブレ、輪郭がぼやけていく。初めて見るスキルに、アスナの動きが、一瞬止まる。
その、二度目の一瞬。それはシドにとって、大技を放つに十分な隙になった。
薄赤いエフェクトフラッシュを纏った回転蹴りが、強烈にアスナの側頭部を捕え、吹き飛ばす。ダメージ軽減のために咄嗟に横に飛んだが、間違いなく強攻撃。アスナの頬に、有るはずの無い冷たい汗が伝ったように錯覚する。これが『初撃決着モード』だったなら、この一撃で勝負はついていた。

（手加減できる相手じゃ、ない）

アスナの迷いが、一気に消えていく。この相手には、一瞬でも気を抜けば、負ける。

完全に戦闘モードへと切り替えたアスナが、細剣を構えてシドの方を向く。

その時に、シドは、そこにはいなかった。

「っ！！！」

咄嗟に、脳に走った勘に従って剣を振う。

その鋭い斬撃が、死角を突いて振り抜かれたシドの拳と交錯した。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　風踊り、光舞う２

戦闘は、デュエルでは異例とも言える長さの、五分にも及んだ。
既にアスナもシドもＨＰは七割を切っている。アスナの《ランベントライト》が宙に美しい軌跡を描く。その体は、鮮やかに舞い、拳を、蹴りを、手刀を避け続ける。その姿は、『旋風』の助けを受けて、蝋燭で照らされたステージで踊る女神のようだった。

その、途方も無く美しい女神の頬に、音も無く涙が伝った。

シドの、その力に。彼の拳は、アスナにとってはあまりにも、あまりにも非力だった。

初撃以降も、アスナの体には着実なペースで攻撃が着弾している。だがそれは、アスナのＨＰを数パーセント削るのが精一杯で、アスナの然程高くない戦闘時自動回復（バトルヒーリング）にかろうじて拮抗するほどのものでしかなかった。

「っ…！」

鋭く振られた手刀、《スライス》を危ないタイミングでアスナの細剣で防ぐ。本来強攻撃を受ければアスナにも削りダメージが入るのに、彼の攻撃はソードスキルを使ってすらも、アスナに届かない…システムに、強攻撃とみなされていない。

そして。

「くっ！」

攻撃を弾かれて飛び退るシドのＨＰが、数パーセント減少した。

本来はダメージ判定を受ける、己の身体を武器とする『体術』スキルのせいで、アスナの武器でのパリィによって自身が削りダメージを受けているのだ。

そう。

アスナの攻撃は、殆ど当たっていなかった。ソードスキルはおろか、強攻撃すらまともに入っていない。『閃光』と謳われ、その剣戟の正確さ（アキュラシー）ではアインクラッドでも有数の腕を持つと言われるアスナが、的を絞れない。

なのに。

互いのＨＰは、拮抗していた。悲しいほどに、彼の力は足りなかった。これほどの敏捷値、反応速度、身のこなし、スキルを繋ぐセンス、そしてこの集中力を有しながらも、アスナと対等に戦うのが、精一杯な、シド。

いや、もうその「対等」は、崩れつつあった。アスナが、シドの速さに徐々に慣れ始めたから。アスナは既に、シドの敏捷値の使い方…普段は八割に抑え、回避、攻撃の一瞬に一気に引き上げるという独特のスタイル…を見抜いていた。最初当たっていたシド攻撃が、徐々に弾かれ始める。後は、彼の操る『軽業（アクロバット）』のスキルに気をつければ、アスナの勝ちだ。

これほどの、戦闘センスがあるのに。ＨＰゲージだけを言えば、アスナの圧勝になってしまう。そのことが、言いようも無く悲しかった。構成失敗（ビルドエラー）、という言葉が、アスナの頭をよぎった。

自分の攻撃が避けられ、弾かれ、そのＨＰがついに六割を割った時、シドが、ついに加速した。

アスナの周囲を全開の敏捷値で駆け回り、その体がぼやけ、いくつもに分身する。

シドの、最後の手段。それを感じたアスナが、剣をしっかりと握りなおす。流れる涙をそのままに、凛とした意志を宿した表情で前を向く。純白のエフェクトフラッシュを纏って激しく輝きだす細剣。放つ技は、アスナの極めた『細剣』スキルの、さらにその中でも最速を誇る技の一つ、単発刺突技、《スターシュート》。

同時に、周囲の幻影のシド達の右手が、一斉に赤く輝きだす。指先を揃えたその貫手の構えは、『体術』スキル、《エンブレイサー》。『旋風』の名に恥じない速度で走りながらも体を限界まで捻じり、矢を打ち出すかのように力を溜めて。

二人の視線が、交錯。

直後、二人の必殺の一撃が互いを襲う。

「やあああああっ！！！」

「おおおおおっ！！！」

影が、止まる。踊る様に舞い続けた二人の体が、その動きを止める。

そして、シドの体が、ぐったりと脱力した。

入ったのは、アスナの、《スターシュート》だった。その一撃は彼の胸の中央を、深々と貫いていた。対する彼の貫手は、アスナの首筋を掠めるに留まっていた。と、シドのＨＰが、一気に減少していく。表示される、ウィナーの表示。

「っ！リズ、回復を！」

「あっ、ひ、ヒール、シド！」

それを見たアスナが叫び、リズベットが慌てて回復結晶を使う。シドのＨＰが急回復していくが、その精神的疲労は相当のものだったようで、そのままがっくりと膝をついて崩れ落ちるシドを、アスナとリズベットが二人で支える。

「…ありがとう、『閃光』…ありがとう、リズベット…」

疲労で落ちそうになる意識で、けれどもしっかりとシドが告げる。

「…頑張るよ…俺、もう一度…。リズベット、ごめんな…俺のために、オレンジにしちまって…」

「…ん、そんなこといーって。これでもマスターメイサーよ、信頼回復クエくらいなんでもないわ」

「だいじょうぶ！リズのお店には私がちゃんと張り紙しとくよ」

震えながらの言葉が、そんな些細なことだったことに二人の少女が顔を見合わせ、クスリと笑う。

保護コードの無い場所でシドを引っぱたいたせいで、リズベットの表示が犯罪者（オレンジ）に変わっていたのだ。普通（グリーン）に戻すには異常に面倒くさい信頼回復クエストを受ける必要があるが、二人にとってそんなことは本当に「些細なこと」だった。

二人の笑顔に、シドが弱弱しく、けれども確かな意志をこめて笑い。

「ありがとう…。少し眠ったら、行くよ。よろしく、な。リズベット…手甲、ありがとう」

ゆっくりと、その目を閉じた。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　夏の日、午前三時（前書き）

またしても、短い…。１０／２８、サブタイトルを変更しました。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　夏の日、午前三時

八月の、なんの変哲もない暑い一日。だがその一日が、俺にとって、とても大切な一日になることを、俺は分かっていた。そして恐らく、アインクラッドにおいても大切な一日になるのだろう。記念すべき、とは到底言えるものではないが。

（なにせ、俺の命日になるかも、だからな……）

冗談でも誇張でもなくそう思う。『攻略組』は、確かに強い。今日この日…『ラフコフ討伐戦』のために依頼、或いは志願で集まったこのメンバーのレベルは、俺のそれと比べても十分高いだろうし、人数は五十人規模。量も質も、間違いなくこちらが圧倒しているだろう。

だが、俺はそれを分かっていながらも、懸念が拭えなかった。ＰｏＨが、最後に見せた視線が俺の頭から離れない。あの恐怖と絶望が、俺を未だに縛っている。

（ＰｏＨが目の前に現れたら、俺は戦えないだろうな……）

ＰｏＨと正対し、あの時を思い出してしまえば、もう俺は震えが止まらないだろう。座り込んでしまえば、この集団戦、今度こそ奴が俺を生かしておく意味はない。それに、懸念は首領であるＰｏＨだけでは無い。

他の二人…ザザとジョニーも、そしてあの戦いで死んだダンカンも、その瞳に異常な狂気を宿していた。それはいつ、どこで、いか

なる手段でも殺し合うことを厭わない、狂った…しかし研ぎ澄まされた、断固たる、意志。

対する『攻略組』は、あくまでも敵を降伏させるという…極端な言い方をすれば、理想に甘えた…考えで動いている。メンバーの中には、これだけのレベルが有れば無血投降すら可能だと本気で信じている奴もいるのだから。

（まあ、なるようになる、か……）

俺は奴らのアジトが発見された、低層フロアのダンジョンを進みながら、虚空を見つめながら考える。真夏とはいえ時間は深夜零時、その風は涼しく、どこか心を休ませてくれるように感じた。この際、『攻略組』の考えは、正直俺にはどうでもよかった。俺の狙いは、一つだけだったから。

そして進むこと数分。

辿り着いた安全エリア…奴らの根城には。

誰一人としてラフコフのメンバーは居なかった。

◆

先頭を行っていた偵察の一人によって奴らの不在を告げられ、『攻略組』の面々が急行した先は、見事なまでにもぬけの殻だった。同時に、ざわめき出すメンバー達。数人の顔に、明らかな恐怖と動揺が生じる。慎重に慎重を期して行われた奇襲が、どこからか情報が漏れていたのだ。

「奴らはどこだ!?」

「くそっ、アイテム類すらねえ!」

「ったく、肩透かしかよ…」

口々に不平を言うメンバー達。ある者は怒り、ある者は武器を下ろし、ある者は呆れたように額を抑える。だが、俺はそんなものは見ちゃいなかった。

俺は、その空間に、何かを感じたから。誰よりも多くのダンジョンに潜り、クエストをこなした俺の勘が、その場所の危険を告げていた。その予感に従って、俺がスキルを発動する。

ダンジョン探索の必須スキルである『索敵』スキルの一つ、『罠看破』スキル。

それで、広い床面積の安全エリアを見回し。

「っ！！？」

ありえない光景に俺の声が詰まり。

「っ、うしろだっ！皆構えろっ！！！」

と同時に、背後からキリトの声が響き。

真っ白な煙幕が、四方八方から俺達を包み込んだ。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　夏の日、午前三時２

広間は、一気に混乱に包まれた。奴らの罠は、この視界を遮る白煙だけでは無かった。

「うわあ！？」

「足が、足がっ！！！」

白煙と同時に発動したのは、俺が直前に見た安全エリアに設置されていた無数の罠…トラバサミのような、足を挟んで固定し、継続ダメージを与えるものだった。

本来安全エリアには、Ｍｏｂのポップが無いだけでなく罠なども存在しない。恐らく俺の知らない…というか、誰にも知られていないエクストラスキル…『罠設置』スキルとでも言うべき技で、奴らが設置したのだろう。俺達を、迎え撃つために。

完全に罠の索敵を怠っていた俺達の落ち度だが、こんな低層フロアのダンジョン、『攻略組』の面々が油断していたのも仕方がない。本来存在しない罠によって数人のメンバーが動きを止められ、しかし罠はそれだけでは無かった。

「っ、な、なんだ！？ＨＰがっ！？」

「っ、落ち着いて！恐らく貫通継続ダメージと、毒の複合罠よ！打撃系武器の方、すぐに捕まった仲間の元へ！罠を破壊して！」

「だ、だめだ！この煙でカーソルが出ない！誰がどこだか、」

「おい『閃光』！」

「シド！？」

かろうじて確認していた場所に一つに走り込むと、そこにいたのはアスナだった。純白のブーツが無骨なトラバサミに挟まれている。同時に、そのＨＰゲージが徐々に減少していく。『ＨＰ減少毒』に『貫通継続ダメージ』だ。

この手のトラップを破壊する方法は二つ。

一つは今アスナが指示しているように、罠自体を攻撃して破壊する方法。この手の隙間の多いオブジェクトとは相性最悪の細剣ながら、正確に刺突を当てて耐久値を削っていく技量は流石だ。だがこの方法では、例え最も相性のいい打撃武器でも十秒以上はかかるだろう。

そしてもう一つ。

「っ、あ、ありがとう、シド…っ」

「礼は後だ！俺はどうすればいい！？」

既にマスターに到達した『罠解除』スキルで一瞬でアスナの足を解放する。驚いた様子のアスナに怒鳴る様な口調で問いかける。

俺はチームプレイが苦手だ。煙の中何がどうなっているか分からず、部屋中央付近では罠に囚われたのだろうメンバーの悲鳴が聞こえ、更にはキリトの叫んだように後ろからの奇襲をかけてきたラフコフメンバーとの戦闘音まで聞こえる。こういった状況でどうすればいいか分からないために、的確な指示を出せる人間が必要。すぐにアスナを見つけられたのは幸運だ。

凄腕の細剣使いであると同時に、優れた指揮官でもあるアスナが周囲を見回し、すぐさま指示を出す。

「シド、煙を何とかできる！？」
「っ…できる。ただ、数秒の吹き飛ばし効果がある！伏せないと、」
「構わないわ！すぐにお願い！皆伏せて！！！」

アスナのこえを聞くなり、俺は左のポーチからアイテムを取り出す。アイテム名、《グレネードハリケーン》。それを単発体体術スキル、《スライス》で叩き割る。響く轟音と、捲き起る巨大な暴風。すぐそばで伏せた俺やアスナに僅かな削りダメージが入るが、凄まじい勢いの風は一気に煙を掻き消してくれた。慌てて身を伏せる者、罠に苦しむ者、そして幾つかの脇道からの襲撃に反撃する者達が見えるようになる。

「部屋中央付近の人は罠の破壊と回復を！戦線近くの人たちはいったん下がりつつ前線を何とか維持して！最低四人は固まって、スイッチしながら戦うのよ！」

素早く状況を判断したアスナが、的確な指示を飛ばす。確かリーダーは聖竜連合の幹部だったはずだが、混乱の中で罠にかかったか或いは前線で敵と切り結んでいるのかその声は聞こえない。だがアスナは流石のカリスマですぐさま皆を統率し、体勢を立て直していく。

そして。

「アスナ。俺は、打ち合わせたように、『戦闘時の対応』を取ればいいんだな？」
「っ、お願い！私もすぐに援護に向かうからそれまでは前線で、」
「すまん。俺はやっぱ、一人がいいや」
「っ！？シド！？」

走りだす俺を止めようとアスナが手を伸ばすが、他のメンバーの悲鳴にアスナの注意が分散される。と同時に、俺は一気に走りだす。発動する『軽業（アクロバット）』スキルの技によって地面を激しく踏みしめ、宙に体を踊らせる。

「っシド！？」

「…キリト。…ありがとな。あっちは、任せろ」

俺の筋力値ではありえない高度を三角跳びで稼ぎ、前線で鬼神のように剣を振うキリトの頭上を越えてラフコフの連中の真只中に飛び込む。キリトの視線と俺の視線が、一瞬交錯する。思わず笑ってしまった。キリトの目線は、多少の驚きは有れどもアスナのそれと違い、俺を引き留めようとする意志が見られなかった。

寧ろ。

――――いってこい、シド。

――――おお、任せな。

励ますようなその視線を受けて、俺は敵の中央に飛び込み、すぐさま体を転がして床に手をつく。

そして、その体をばねのように弾ませ、両足にエフェクトフラッシュを纏って。

《スパイク・ハリケーン》の回転蹴りの旋風で、殺到するラフコフメンバーを吹き飛ばした。

episode6　ケジメ（前書き）

次回は、明日零時に。

episode6　ケジメ

敵陣真只中を疾走する中で、俺はすぐにお目当ての相手を見つけた。先陣を切って斬り結んでいたのか、既にＨＰを半減させており、仲間の後ろで回復ポーションを煽っている。そのＨＰが既に徐々に回復していくのを見ると、既に二本目らしい。だが。

「……ック」

庇っていた仲間には気取られすらせず、俺は回し蹴りをその影…ぼろマントを纏った、髑髏マスクの男へと放つ。初動が大きかった分辛うじてかわされてしまったが、その手にあった瓶を蹴り落とすには成功した。乾いた音を立てて転がった瓶から液体が零れ、続いてその容器が爆散する。

だが、二人ともそんなものを見てはいなかった。

髑髏マスクの男、ザザのその視線……マスクの下の、血のように紅い目と、俺の視線が交錯する。

瞬間。奴のエストックが閃き、俺の右手の貫手が鋭く打ち出される。

「っ！」
「ッ！」

俺の右手が奴の左肩に突き刺さり、奴のエストックは俺の脇腹を貫いた。

と同時に、二人が全く同じタイミングで飛び退り、距離を取る。

俺達の只ならぬ様子に気押されたのか、それとも「『旋風』にはうかつに近づくな」とでも達しがあったのか、他のラフコフメンバーは俺を遠巻きに囲みつつも斬りかかってはこない。

それを一瞬で確認して、

「つっ！！？」

脇腹に、鈍い痛みが走った。驚いてみると、そこにあるのは、先程ザザが持っていた赤い地金のエストックとは違う、禍々しい黒いそれだ。

周囲を見回す間も隙を作ったつもりは無かったが、ザザにはその隙が見えていたらしい。

「クク。それは、俺の、コレクションの、一つ、逆棘の、エストックだ。貴様の、筋力値では、到底抜けん。加えて、『貫通継続ダメージ』に、特化した、武器だ。もう、貴様は、俺が、手を下さずとも、死ぬぞ」

それを見て、ザザがしゅうしゅうと笑う。なるほど確かによく見ればその細い刀身はびっしりと鱗のような棘が入っており、引き抜くには相当の筋力値が要求されるようだ。当然俺の非力な体では引き抜くのは不可能。

だが。

俺は笑った。

「ハハ。そいつはまた、好都合だ。生憎と俺は、引き抜く気はない」

笑いながら、突き刺さったエストックを右手で握りしめる。
棘が刺さり、俺のＨＰが数パーセントの減少。続いて、突き刺さった脇腹から鮮血のような赤いエフェクトが光り、更に数パーセントＨＰが削られる。そして、その握った右手が、

「…っ。なんだ、それは」

鮮やかな、そして強烈な碧いエフェクトフラッシュを纏った。その空色の光は、銀色の右手、《カタストロフ》に反射されて更にその光度を増していく。と同時に、握られたエストックの耐久値が恐るべき勢いで減少していく。
そして二秒とかからずにそのゲージが半減したところで。

「おおおおっ！！！」

全力の気合いをこめて吠える。と同時に、半分残っていたエストックの耐久値が、一気にゼロになって爆散する。俺も実戦では初めて使う『体術』スキルの、近距離中の近距離技、《デストロイ・ハンド》。体全体で大きな動きでの初動が必要なものの多い『体術』スキルの中では珍しい、手首から先の動きだけで発動できる技。
そして、その効果は、「握った時間に応じてダメージが増加、最後にもう一度力を加えることでそのダメージを倍加させる」というものだ。手に握れるサイズ、その上しっかりと握り続けることが必要と難易度は高いが、成功させればそれを補えるだけのダメージを与えられる。

そしてそのダメージは、《カタストロフ》の『武器破壊ボーナス』によって極限まで高められている。ほぼ全回復状態の武器を、二秒と経たずに爆散させることが可能なほどに。俺は、この力で。この、ソラから託された力で、コイツを倒す。

「……ザザ、もう一度言う。あの剣を、離せ」

もう一度、あの言葉を繰り返す。俺の狙いは、あの剣だけ。あの剣を、こんな腐った連中に渡すことだけは、あの剣がなんの罪も無いプレイヤーの血を吸うことだけは、決して許されない。

そんな俺を見て、ザザが一瞬目を見開き。

続けて、嘲るようにしゅうしゅうと笑って、右手を振る。実体化するのは…新たなエストック。それを見せつけるように口元に持っていき、ゆらゆらと舐めるように動かす。

「…確かに、貴様の、その『武器破壊（アームブラスト）』は、大したものだ。だが、俺の趣味は、エストックの、収集だ。俺の、ストレージに、何本の、剣があると思う？」

そうだ。奴は獲物の武器を見繕い、気に行った武器をコレクションするという性癖を持っていた。確かにエストックは珍しい武器だが、膨大な時間をかけて…そして相当の犠牲の上にあるそのコレクションは、一本や二本ではないだろう。

だが、そんなことは分かっていた。そんなことは。

「関係無い。何本でもへし折ってやる」

そう言って、拳を構える。ザザが、その笑みを消してエストックを構える。右手が、だらりと垂れ下がる。知らない人が見ればそれはとても構えには見えないが、俺にはそれこそがコイツの構えだと知っている。そして奴が、とうとう口調から笑いを消して言う。

「……できるものなら、やってみろ！！！」

「……言われるまでも無い！！！」

吠えるように応えて、俺が疾走する。迎え撃つように、ザザもそのマントを翻す。

俺の、つけなければならないけじめとなる拳が、ザザのエストックの先端と交錯した。

episode6　ケジメ2（前書き）

エピソード6、ラスト。

episode6　ケジメ2

俺のＨＰが一割前弱減るごとに、ザザのエストックが一本砕ける。

その一種の均衡状態が崩れたのは、『攻略組』から突然聞こえた悲鳴、そしてそれに続く、モンスターのそれとは違って甲高い響きを放つ、ポリゴンの爆散音だった。何度聞いても決して慣れることの無い、あの音。

直後、盛大な哄笑が洞窟に響く。『攻略組』の怒声、止めるような悲鳴が聞こえ、エフェクトフラッシュが光る。そしてまた、ポリゴンが砕ける不吉な音。

「……っ」

言うまでもなく、どちらか…あるいは双方に、死者の出た証拠だった。確かにそれは俺の心に鈍い痛みをもたらしたが、体が動かなくなるほどではなく、相対するザザに隙を見せることもしなかった。戦局を揺るがすことになったのは。

「きさまあああああっ！！！」
「ハアハハハッハハ！！！」
「ぶっ殺してやる！！！」
「ハハッ、死ねっ、死ねえっ！！！」

完全な、戦線の崩壊。
ほぼ全員が程度の差はあれ混乱…恐慌状態へと陥っていたのだ。
ラフコフの面々に関して言うなら、それはあるいは狂乱と呼ぶべき

だったか。今まで維持されていた戦線…つまりは『攻略組』とラフコフの境界が崩れ、完全な乱戦となったのだ。

「っ、らあっ！」

「……クク、ククッ！！！」

俺とザザも、この乱戦の中では互いだけを狙い続けることはできない。勿論、乱戦は俺の最も得意な戦闘だ。横から切りかかってきた男の剣を軽くいなし、その横腹を《スライス》の手刀で打つ。剣は一撃であっさりと砕け、男はそのまま走り抜けて混戦の中へと消える。すぐにザザへ目線を戻すと、奴のエストックが『攻略組』の男の鎧の隙間を貫いているところだった。凄まじい勢いで減少していくＨＰに男が悲鳴を上げる。

「ザザぁっ！！！」

咄嗟に走り込み、ザザのエストックの根元に、《エンブレイサー》の貫手を放つ。既にあらかた削っていた耐久値がゼロになり武器が爆散、と同時に解放された『攻略組』の男が震えながら逃げていく。ザザが、恨めしそうに俺を見る。右手が素早くストレージから次のエストックを抜き放つ。

だがその剣は、俺より先に脇から斬りかかった、別の男へと突き刺さった。この隙に再び飛びかかろうとするが、背後に気配を感じて咄嗟に横に転がり、放たれた長大なランスを回避する。その回転の遠心力を乗せた《ゲイルナックル》で打ち、耐久値を削ったところで再びザザに向き直る。

いける。

確かに奴もかなり乱戦に慣れているようで、闇雲に斬りかかられていてなおＨＰは殆ど減っていない。だが、その戦闘センスは、このＳＡＯ開始以来ずっと乱戦を続けてきた、俺を上回るものではない。着実に俺の拳が、手刀が、エストックを砕いていく。

そして。

何本目だったか。

俺のＨＰが、赤の危険域に落ちるかというところで、赤黒く輝く地金を持つエストックを砕く。その瞬間、俺は見た。素早くストレージを見た奴の真っ赤に染まった双眸に、僅かな、ほんの僅かな、動揺が走ったのを。

そして取りだされるのは、エストックでは無かった。見間違えようも無い。見間違えるはずもない。

赤く燃えるような薄い光を放つ、細身の細剣（レイピア）。
その柄には、虹に音符を模った、『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』のエンブレム。
そして、俺の、ソラの、思い出が言い表せないほど詰まった宝物。

《フラッシュフレア》。

それが俺の頬を霞めるように突きだされ、俺のＨＰゲージがついに赤く染まる。
だがもう、そんなことは、何の意味も無かった。

追い続けたその剣を前に。
俺はその体を踊らせ、真正面からザザへと突進する。

俺の、もう限界だと思っていた脳が更に加速する。対してザザは焦りが隠せない。その動きの正確さには、さっきまでのキレが無い。繰り出される剣戟は、俺の加速した体には届かない。引き寄せられる剣の腹を、右手で打つごとに、激しい光が…火焔のように赤い火花が散り、その耐久度が目に見えて削られていく。

「……クッ、クソッ」

ザザの顔が、苦々しく歪む。焦りはこの混戦の中で、その判断を誤らせる。結果生じるのは、致命的なミス。手にした剣に、赤紫のライトエフェクトが宿る。『細剣』スキルの上位技である刺突の連続攻撃、《スタースプラッシュ》。

凄まじいスピードの連続技。繰り出されるその剣戟が、俺の頬を掠め、左手の手甲に刺さり、俺のＨＰをじりじりと削っていく。だが、それはわずかな削りダメージに過ぎないず、俺のＨＰを削りきることは無い。そして最後の一撃を回避。ザザに訪れる、上位スキル特有の長い硬直時間。

その時間があれば、俺は、この剣を砕ける。

振う手刀は、遠心力をたっぷり乗せた、《スライス・ブラスト》。

これが当たれば、あの剣は。

あの剣は。

「……っ」

瞬間、俺の意識が、激しくスパークする。脳裏に、ソラの笑顔が宿る。

だが、この手を止める訳にはいかない。

ならば。

「っおおおおっ！！！」

振った手刀は、標的を過たずに斬り飛ばした。

宙に舞うのは、ザザの、右手首。

ぎりぎりで成功した《部位欠損ダメージ》に、ザザががっくりと崩れ落ちた。

◆

結果。

討伐戦は、惨憺たる結果となった。

死者は、三十人を超えた。

その一因は、間違いなく俺だったろう。本来は『武器破壊（アームブラスト）』を俺とキリトで連発し、敵を無力化するという作戦だった。勿論、『閃光』は前もって俺に、乱戦となれば自由に動いていいとは言っていたが、俺がザザを追い続けたのがこの惨劇の理由の一つなのは、言うまでも無かった。

奴らの持っていたアイテムは、全て回収された。

その中には、リズベットの最高傑作だったと思われる、ソラが装備していた金属鎧もあった。そして、ぼろぼろになってしまった、しかしそれでも途方も無く美しいと思える、一本も細剣も。だが俺は、それらをすべて『攻略組』に任せた。俺はもう戦後処理の間のその話に語るのも億劫だったし、なにより俺には、これを手にする

資格があるとは思えなかったから。ちなみに結婚指輪たる《ブラッド・ティア》は、誰のアイテムにも見当たらなかった。

ゲージを真っ赤に染め、脳の酷使で明滅する意識を保ちながら、力尽きて転がった床の上で俺は思った。俺はソラに、何ほどのことができただろうかと。ソラの願いを、俺は果たすことができただろうかと。ソラの、ソラにとっての『勇者』として、俺はふさわしい役目を出来ただろうかと。

俺は、出来なかった。

この戦闘で、ラフコフから二十一人もの死者が出た中で、俺はただの一人も殺せなかった。

俺の非力なアバターでは…いやそれ以前に、「奴らを殺す」という意志が足りなかったのだろう。

俺は、奴らを一人だって殺せなかった。

ソラの仇を、一人だって取ることができなかった。

ぐるぐると回る思考が闇に落ちる直前、頬にもう枯れたと思っていた涙が伝うのを感じた。

episode7　スランプと限界点（前書き）

ラストエピソード。

episode7　スランプと限界点

「おー、きたぞー」
「……らっしゃい」

第五十層主街区、『アルゲード』にある数多の店の一つ…その中で、俺の行きつけとも言える雑貨屋の店主は、心底から「いらっしゃい言いたくねえ」と思っていると容易に分かる声で俺を迎えた。その褐色の肌とがっしりとした巨体、にらみを利かせれば素晴らしい迫力を見せられるそのエギルの顔が、今は眉をハの字にしている。だがまあ、そこは店主と客だ。我慢して頂こう。

「……で、今日はどうした？」
「買い取り頼む。これ、三色リザードの革。数は…っと、赤が二十三、青二十、んで黄色二十五だな」

三色リザード、正確にはそれぞれ、『ガーネット』、『サファイア』、『トパーズ』と冠した、七十層のトカゲ型のモンスター。そのドロップアイテムである革は性能もさることながら、『裁縫師』であれば容易に加工できるうえに色合いも鮮やかで、ギルドのエンブレムや洒落たカラーリングの装備を作ることが出来る人気素材だ。当然、市場価格は高い。

聞いた店主の顔が、ますます歪む。
だがそれは、俺が何も無茶な買い取りを頼んでいるからというわけではない。

「……ってことは、受けたのか。『七色の革素材』クエスト」

「ああ。ちゃんとクリアして、報酬のレアポーション貰ってきたぜ」

七十層の主街区にいるＮＰＣからのクエスト、『七色の革素材』。三色リザードの上位亜種、『レインボーリザード』を倒して入手できる特殊な革を調達する、という典型的なクエストだ。ちなみにこの《七色の亜竜革》の利用はマスターの『裁縫師』でも不可能で、何らかの他のスキルが必要なのだろうということで検証が行われている、が……今はそんなことを聞かれているのではないのだろう。

「俺は止めたぞ。ソロでは危険だ、と」

「おいおい、いいじゃねえか、ちゃんとこうして生きて帰って来てんだぞ？」

「ＨＰを危険域まで落としておいて偉そうに言ってんじゃねえ」

このクエスト、既に数人の『攻略組』が成功しているものの、敵のレベル平均は七十五と高く、Ｍｏｂのポップもかなり激しい場所でのクエストだ。単身そこへと乗り込んだ俺は、危険といえば危険だったのだろう。事実、貴重な回復結晶を使って、離脱には転移結晶も消費している。俺の判断ミスだったのは明白だ。

まあ、それでも生きてるんだ。いいんじゃねえか？と心の中で言う俺の考えを読んだかのように、店主が少々腹を立てたような顔で続ける。

「いいか、シド。お前の一番の強さはな、その敏捷値でも、反応速度でもない。勿論『体術』や『軽業』スキルでもない。危機察知能力と、それを回避する才能だ。お前も分かってるだろう？今回だって、ヤバいって分かってたはずだ。それを自分で無視してどうする？」

「……」

確かに、そうと言えばそうだろう。だが、ヤバいがまあいけるだろう、と思ったのも確かだ。そこから言えるのは、二年に渡るＳＡＯ歴で研ぎ澄ましていた俺のクエスト難易度に対する勘が、鈍っているということ。エギルの言う通り、俺は自分の最大の長所を殺しているのかもしれない。

その理由に関して、エギルは何も聞かない。俺も言わない。

二人とも、言うまでも無く知っているからだ。

この世界で、俺の最も大切な人だった、ソラの死。

その出来事が、もともと薄かった俺の死に対する恐怖感をますます、そして決定的に狂わせてしまったのだろう。俺も、自分が死にたがっているとこそ思っていないものの、本当に追い詰められた場面での集中力が、以前より乱れているのを自覚している。

だが、それでも俺はクエストを受け続けていた。理由は俺にも判然としないが、おそらく習慣ってやつだろう。昔から続けているせいで、それをしない生活が暇すぎて考えられなかったという感じなのかもしれない。結果、こんな状況なのだが。

そしてもうひとつ、俺のスランプの理由。こちらは誰にも…勿論エギルにも言っていないが、精神論では無い厳然たる数値的問題も、俺の成長を妨げている。

「……まあいい。で、代金は、」

「いつも通りでいい」

「……そうか」

それだけ言って、エギルがトレードウインドウを操作する。表示される金額は、俺の一日の生活費。これは以前…といっても完全なソロに戻ってからだから三か月程度だが…「どうせあっても使わないから金は適当でいい」と言った際に「…思い遣って恵んでやると思うな」とだけ言って、本当に一日の生活費分しか出さなかったのだ。まさか本気でぎりぎりまで削りやがるとは思わなかった。

だが、この店主も、ただの悪徳故買屋ではない。

「……ああ、コレ。頼まれてたモンだ」

「……適当に処分してくれ、って言ったんだがな」

「こんなもん、お前の他に使う奴がいるか」

実体化したオブジェクト、《フレアガントレット》。耐久度がかなり減っていたため、先日売り払うつもりで渡していたものだ。受け取ってからまだ一日、リズベットもよく修繕してくれたもんだ。この店主、やっぱり肝心なところでいい奴だ。まあこんな超特殊な防具、使い道が無いというのも、嘘では無かろうが。

「あと、コイツだ。奢ってやるから使っとけ」

手渡される、回復結晶。確かにＨＰレッドゾーンで転移門にとんでそのままだった。

いや、流石におかしい。確かにいい奴だが、ここは《圏内》。そう言えばよく見れば、その目が俺の方を見ない…というか、どことなく泳いでいる。俺が座り込んだテーブルには、いつもは出てこない茶なんぞ出ている。流石にいい年こいた（実際いくつかは知らんが）大人なので有る程度は表情を作れる男だが、俺の目はごまかせない。

こいつ。

「なあ、エギル」
「なんだ？」
「何隠してんだ？」
「なにがだ？」

エギルは笑顔を崩さない。が、

「そもそも笑顔ってのがおかしいだろ。お前自分のキャラ考えろよ」

その笑顔が、ピシリと凍りついた。

episode7　スランプと限界点2

翌日の昼。あまりうろつくことの無い場所だったので午前中いっぱいぶらぶらと散歩…というかクエストやショップの品ぞろえ、周囲の地形やモンスターの有無を無意識に確認して…と無造作にうろついた。

なるほどな。

俺は心の中で納得した。

「夫は、店をしているときは寡黙な職人だったのですが、私にはとても優しくて…」

現在の最前線は、先日解放されたばかりの七十五層。俺がエギルに紹介してもらったのは、そこからたった二層しか下でない上に、主街区では無い圏外の村。その力のほとんどを迷宮区に注ぎ込む『攻略組』が向かう場所でもなく、中層ボリュームゾーンのプレイヤーが観光に行くには少々リスクが高すぎるような、どっちつかずの場所にある村だった。

「夫は流行り病で無くなってしまいましたが、幸いその銀細工の作品は多く残っています。私がこれを売っていけば、私もこれからも生活していけるように、と…」

思えば俺はこういった場所でのクエストをこそ専門に取り組んでいたのだったが、ここしばらくはその勘も鈍ってきているのか。結果誰かが先にこのクエストを発見し、クリアできそう…というか、

その条件に合うだろう俺が呼ばれた、というわけだ。最前線間近のクエストだ、エギルも心配もまあ分からなくはない。

「ただ一つ、私が残念なのは…夫の姿を徐々に忘れていってしまうことですね…。私は夫の写真も何も、持っていないのです…」

クエストの起点は、この村にあった一つの細工屋。美しい銀細工の家に居たのは、揺り椅子に腰掛けた若い女性のＮＰＣだった。細工と同じ白銀の美しい髪をしているが、その目は随分と深い憂いを湛えている。一時期のキリトのような…いや、それを言えば俺も同じか。心の中で苦笑する。

「旅のお方…もしよろしければ、私の願いをお聞きいただけないでしょうか？第六十六層、その北の外周部間際に存在する、『黄昏の境界林』。その先に、黄泉の国へと通じる河があり、そこに大切な人の思い出の品を投げ込むともう一度会える、という噂があるのです。夫が私のために作ってくれた、この《思い出のブローチ》を投げ込んでほしいのです…」

「任せてください」

六十六層、『黄昏の境界林』。夕暮れ時になると、強力なモンスターが出没することで有名なマップだ。そのレベルは、七十層クラス。今の俺でレベル的には安全範囲だが、ソロではやはり危険が伴うことは間違いない。

だが俺は、迷わずその依頼を受けた。こういった、危険度が読めない依頼こそ俺が最も得意とするクエストである。そして『攻略組』、或いは中層ゾーンのプレイヤーに求められるクエスト情報は、まさにこういったものだからだ。報酬も、いいものが貰えるだろう。

未亡人からクエストアイテムを貰い、そのまま外へと出て、主街区へと歩き出す。ここは圏外村、転移門も存在しない。転移結晶を使うのでなければ、一旦主街区へと戻る必要がある。そしてエギルの雑貨屋での取引からも分かる様に、俺に無駄に転移結晶を使うほどの懐の余裕はない。

村の外に出る時、俺はふいになぜエギルが紹介したがらなかったかの本当の理由に思い至った。ちらりと見た、クエスト進行中ログ。そのクエスト名は…『死者への贈り物』。なるほど、笑ってしまう。これはまた、俺におあつらえ向きというか、あてつけというか。

（……まあ、いい）

俺は苦笑を消し、敏捷値を引き上げる。最近の不調の原因でもあるこの動作に少々不安は残るが、それでも俺はこのクエストに対して乗り気だった。それは、最近鈍りつつある、しかし今は確信を持って言える、俺の勘だ。

一気に引き上げた敏捷値で、主街区までの数キロを走り始める。Ｍｏｂのポッを無視するなら、十分弱もあれば到着できるだろう。走る俺の脚は、いつも通りの快速を生み出して地面から土ぼこりを巻き上げた。

ｅｐｉｓｏｄｅ７　スランプと限界点３

「おおおっ！！！」

体術スキル、《ロールブレイク》。向かい来る髑髏剣士、『スケルトンロード』がしがみつこうと伸ばす両手を鋭く回転して避け、その回転の勢いのままに骨むき出しの後頭部に遠心力たっぷりの後ろ回し蹴りを叩きこむ。骨系のモンスターに有効な打撃攻撃、さらにはクリティカルポイントへの一撃だったためにかなりの怯み効果（ディレイ）が生じ、そこを連続技で仕留める。

「ったく、きりがねえな……」

仕留めた後、速攻で走り出す。そう、このダンジョン、発見された当初は変動するレベルや抜け出せなくなるマップなど、そのカラクリが分からず死者すらも出てかかったことがある難解なダンジョンだったが、解明されてからは随分と危険度は下がっている。

開放型ダンジョン、『黄昏（たそがれ）の境界林（きょうかいりん）』。

昼と夜は、モンスターたちのレベルはそれほどでもないものの、行けども行けども境界部に存在するはずの川へと届かない。三十五層の『迷いの森』と同じで、一定距離進めば元の端へと転送されてしまうからだ。その転送の仕組みを突破するには、「黄昏」の名の通り夕暮れの時間帯を選んで突入、そのままマップ端まで走り抜ける必要があるのだ。だが、夕暮れ時に突入した場合、ここのＭｏｂのレベルは格段に…平均で七十層クラスまで跳ね上がる。

まあ。

「だからこその、俺だけどよ、っと！」

俺の敏捷値を限界まで上げて走り抜ける。動きの遅い髑髏共やゾンビはいいものの、森ということで出没する狼や某ゾンビゲーのようなゾンビ犬達はそれなりに素早く、反応もいい。となると、俺も敏捷を一気に高めて対応するしかない。見ている者は居ないし、出し惜しみなく全開。切り札たる『軽業（アクロバット）』のスキルも遠慮なしに連発する。全力、全開。

全開、だが。

「っ、くそっ！」

その全開の敏捷値を使った回避。だが、群がる牙を回避しきれずに幾つかが俺の手足に食い込む。

ＨＰゲージが、ガクリガクリと減少していく。

そう。俺に訪れた、いつか来る結末。

俺の敏捷値の、成長停止（カンスト）だった。

◆

思えば、既に俺のレベルが七十の後半に入ったころから、ほんのわずかな違和感…の、兆候があったように感じる。それが無視し得なくなったのは、レベル八十に達した時だったか。

上昇した敏捷値が、なんというか…微妙に扱い難くったのだ。

そして今現在の俺のレベル、八十三。既に違和感は、戦闘に支障を来すほどになっていた。

確かに、俺の敏捷値は、数値的には上昇を続けている。その数値は、アインクラッドでも間違いなく最高峰のそれだろう。だがそれは…当然と言えば当然だが…扱う術者の能力があってこその数値的ステータスなのだ。本人の力が伴っていなければ、それらは単なるハリボテの強さに過ぎない。

本人の力が追いつかなければ、それを使いこなすことはできない。

恐らく、ここが俺の…俺の反応速度の、限界だったのだ。敏捷値は、いわばレーシングカーの最高速度なのだと、俺は思う。一直線に走り続けるならまだしも、カーブを曲がるためには、その力を操作するための反射神経と判断力が不可欠。つまり戦闘時、俺の脳神経の反応速度が、敏捷値で加速した体を操作できるだけの、俺本人の力が必要となるのだ。

その力が、俺にはなかった。ここが、限界だった。

先日行われた、キリトとヒースクリフの公開決闘（デュエル）を思い出す。確かに勝ったのはヒースクリフだったが、俺が心を惹かれたのはキリトの力…キリトの、反応速度だった。神速で繰り出される『二刀流』のソードスキル。十を軽く上回るその連撃を、奴は全て完璧にブーストして見せていた。

恐らくあれが、この世界で求められる反応速度なのだ。あの力を持つ者だけが、このアインクラッドの最前線を走り続ける権利がある。いわば、『勇者の資格』とでも言えばいいのか。それが、キリトを始め、アスナやヒースクリフ、クラインやエギルには有り…俺には無かった。

恐らくもう十層も登れば、俺はソロプレイはおろかパーティー狩りさえ覚束なくなるだろう。俺がその先、どうやって生きていくか…それはまだ、俺には思いつかない。そもそも、俺がそこまで生きていられる保証もない。

（とりあえず、）

もう何度したか分からない思考を打ち切って、俺は夕暮れで黄金に輝く森を駆け抜けた。

ｅｐｉｓｏｄｅ７　忘れ得ぬ想い

アインクラッドの外周から覗く、美しい空。今は、沈みゆく太陽が徐々に大きくなる、俺の最も好きな時間…いわゆる「逢魔が時」。俺が森を抜け、黄泉への入り口と噂される大河へと辿り着いたのは、ちょうどそんな時間だった。

「にしても、ね…」

周囲にＭｏｂのポップが無いのを確認して、ハイポーションを煽る。幸い喰らった攻撃はアバター末端に数発で、怯むほどのダメージも受けなかったので切り抜けられたが、合計すれば馬鹿にならないダメージ量だ。回復しておくにこしたことはない。

「すげえ景色だな、こりゃ…」

その三途の川は、途方もなく美しかった。

外周を沿うように流れ、しかしその端には水平線が見える。夕暮れの太陽はその水面に反射して、金色の光を散乱させる。その幻想的な美しさは、ここの名称、『境界』…生と死の境界を思わせるに十分なものだった。

「……ここなら、なにかが起こるかもな」

そんなことが起こるはずはないと知りながらつぶやき、それに気付いて苦笑する。死んだ人は、生き返らない。それは、絶対のルー

ルだ。もとの現実でも…この世界でも。手甲の嵌った左腕を翳して夕陽を遮り、右手に握ったクエストフラグとなるアクセサリー…《思い出のブローチ》を水面へと投げ込む。

夕陽を跳ね返した銀細工が、水面に入って一瞬だけ煌く。まるでこの行為に感謝を示すかのように。

それを合図にクエストログが進行、無事にシステムにこの行動が認識されたことが告げられる。

右手を振ってメニューを呼び出す。取りだすのは、結構昔に手に入れて、今も使い続けている意外と便利なアイテム、《試行結晶》。効果は単純、結晶が使えるかどうかを確認するだけだ。だがソロプレイで『盗賊』としても活動する俺にとっては、実は使う機会は多い。

「……使える、な」

使用した結晶は、全結晶使用可能を示す緑の輝き。ということは、転移で帰ることも可能だ。つまりは、クエストのバトルはここまでの道のりの段階で終了だったというわけだ。何も全てのクエストにボスがいるわけでもないが、少々物足りない感は否めない。

まあ、いい。もう帰るか。

腰のポーチに入った転移結晶に手をかけ…その時、思いつくものがあった。

ポーチの中に入ったあるアイテムが、俺の手に当たったからだ。

取りだしたそのアイテムは。

「《ブラッド・ティア》…」

今は亡きソラとの、結婚指輪だった。

途端、俺の頭にひらめく行動。一般常識…もとの世界の常識で考えればありえないものだが、ここの名称である『黄昏の境界林』、そして黄泉の国への入り口と言われるこの大河の噂と、ここがゲームであることを考えれば、意味が無いと断言はできない。

いやむしろ、その可能性は高くすらあるだろう。このゲームのクエストは数限りなく多く、それをこなしてきた俺の勘は「ここでの分岐点」…裏ボスの存在を告げている。

だがもしそれが間違いだった場合は、失うものは…。取り返しのつかないものを失くすことになる。

鼓動が、速くなる。

どうするべきか。

呼吸が、苦しくなる。

クエストの始まりの言葉を思い出す。

――大切な人の思い出の品を投げ込むと、もう一度会える…

俺は。俺は。

俺の左手が、ゆっくりと動き、ポーチから取り出すのは。

――もう一度、会える…

二人の思い出のアイテム…結婚指輪、《ブラッド・ティア》。ラフコフ討伐戦の後、ソラの指輪は見つからなかった（おそらくあの

場に居なかったＰｏＨが持ち去ったのだろう）ため、これは俺の分の結婚指輪だ。

これを。

これを、投げ込めば…

死者は、蘇らない。そんなことは分かってる。それが出来るなら、そもそもこの世界は存在しえないのだから。一年ほど前のクリスマス、一部のプレイヤーの間で囁かれた《蘇生アイテム》が存在しなかったことで、それは確定とされた。今更それを否定する気はない。

これを投げ込んだとして、どうなるというのか。俺の頭の一方で、理性をつかさどる部分が冷静に語りかける。このアイテムを思い出に、これから先に進んでいくべきだ、と。その瞬間、俺の頭のもう片方で、感情を司る部分が叫ぶ。ソラに会いたくないのか、と。

左手が、動く。

ああ、そうだ。俺は、ソラの死から立ち直ってなんかいなかった。ソラが死んで、ラフコフを討って。皆は俺が元の俺に戻ったと思っていた。俺自身も、戻れた…戻ってしまったのだと思っていた。ソラの死を悼みつつも、今までの俺に戻ったのだと。

だが、そんなこと、出来無かった。

忘れるなんて、俺には出来るはずが無かったんだ。

今更思い知った。

そうだ。俺は今、神様とやらが現れて、百人の命と引き換えにソラを生き返らせてやろうといったら、迷うことなくそれに従うだろう。百人が千人でも、一万人でも、…俺の命でも、同じことだ。何

だって差し出すだろう。

この指輪だって。

迷いは、ない。

意志を固めた瞬間、左手は鋭く振り抜かれ。

血の涙の名を持つ指輪が、妖艶な黄金色に輝く水面へと吸い込まれていった。

episode7　忘れ得ぬ想い2

結論から言おう。俺の行動は、正解だった。
正解だったが、それが良かったかどうかと聞かれると、それはまた別の話だが。

流れていた川面に、不思議な波紋が生じる。と同時に、水面から反射していた光が細かいポリゴン片となって、その波紋の同心円の中央へと収束していく。

普通、ボスモンスターのポップは巨大なポリゴン片がまず生じ、それが徐々に削り取る様に外見を形作っていく。だが今回は、そうではない。細かいポリゴン…極小のドットが、無数に収束していく様子はどこかで…、と考えたところで、思い至った。記憶の中の夏の日の、プレイヤーの消滅するポリゴンの爆散エフェクトの、逆回しだ。なるほどあの世の人が帰ってくる描写、ってわけだ。洒落てるじゃないか、製作者。

そうして形作られていくのは、人間大の、女性。
だが、ソラではない。当然だ。恐らく、

「このクエストの、隠しボス、だろ」

呟いて、構えを取る。

現れたのは、濃いピンクの髪に、黒い和服を纏った女。その手に抱えるのは、巨大な鎌。

頭上に現れる、カーソル。驚いたことに、ＮＰＣの表示だ。
だがその名称は、『Ｔｈｅ　Ｈｅａｖｅｎ’ｓ　Ｇｕｉｄｅ』。
黄泉への案内人。

実に四十七層以来となる、ボスクラスであることを示す定冠詞に、俺の緊張感が一気に高まる。
そんな俺の前で、女性がその碧眼で真っ直ぐに俺を見た。モンスターとは思えない、感情の見える瞳。

――――汝、死者に再び相見えんと欲するか

透き通るような艶やかな声。
そこに宿る感情は、嘲りか、憐れみか。それとも、俺への優しさか。
答えは当然決まっている。俺は、会いたい。何を犠牲にしようとも。

「望む。俺は、もう一度、ソラに会いたい」

――――ならば汝、案内人たる妾（わらわ）に、その力が黄泉の境界を超えるに足ることを示してみせよ

告げられた言葉と同時に、俺の目の前に開かれた画面は、この世界に来て初めてみるものだった。
デュエル申請……そのうちの一つ、『全損モード』。命をかけた、本当の決闘。

俺は笑ってしまう。
答えは決まってると言っているのに、随分とくどい。

迷わず選ぶ、申請受諾。

「……望むところだ」

死者にもう一度会おうと言うのだ。容易いはずはない。命をかけるくらいは、当然だ。

構える先で、美しい死神のカーソルが変化し、アクティブなモンスターを示すそれへと変わっていく。

冷静に考えれば、どう考えても俺にかなう相手では無かった。ここは六十六層で、このクエストの回始点は七十三層。出てくるＭｏｂ達も七十レベルの強敵だった。ボスのレベルが同クラスとすれば、今の俺のレベルの八十三では全く足りていないだろう。

だが、俺は冷静ではなかった。

頭のネジは、とっくにとんでいた。

ここまで話を引っ張ったのだ。何らかの報酬は有るだろう。

それに、ソラに会うためのこの戦いで死ぬのならば本望だ。

デュエル表示と、減っていくカウント。

それに合わせて、浮かぶように水面上に佇んでいた死神の女が、その俺の身長の数倍はあろうかという巨大な鎌を振りかぶる。その目が、整った顔が、戦闘に向けて鋭いものになる。思えばこの世界で、ここまで完全な人型のＭｏｂとの対戦は、これが初めてだ。それが吉と出るか凶と出るかは、分からないが。

構えた拳を握りしめ、敏捷値を戦闘用に引き上げる。

ゼロになるカウント。

瞬間、俺の胴体の高さを、彼女の視線が水平に薙いだ。

反射的に俺が自身の体を一気に沈ませる。と同時に、死神がまるで瞬間移動のように目の前に現れる。振りかぶられた大鎌が、かがめた俺の体を掠めるように通過する。風切り音で分かる、凄まじい勢い。喰らえば恐らく、俺の左腕の《フレアガントレット》でも一刀両断だろう。避け続けるしかない。

だが、この手の大ぶりな武器に、先読みのしやすい人型モンスター。相性は、悪くない。

引き絞っていた拳を、その胴体に叩きこむ。絶望的な僅かな量減少するそのゲージは、もう見ない。倒すまで戦い続けるなら、与えたダメージを見る意味はないからだ。と同時に、全力のバックステップで距離を取る。直後振り下ろされる大鎌が、その位置に叩きつけられて地面が大きく抉られる。

ゆらりと鎌を持ちあげる、碧眼の死神。

その顔には、もはや最初にあった感情は無い。ただただ、目の前の俺を倒す、モンスターのそれ。

だがその研ぎ澄まされた存在は、美しかった。美しいと、思った。

徐々に外周から水平線へと沈みゆく太陽を背に、佇む巨大な鎌を携えた死神。

その姿は、恐らく俺の命を奪うだろう相手にしては、贅沢過ぎるほどに、美しかった。

再び、彼女の目線が、俺の体を捕える。

なぞる軌道は、袈裟斬り。
鋭くサイドステップする俺の体を、大鎌が掠めていった。

ｅｐｉｓｏｄｅ７　笑顔と希望

もう、何分戦ったのか。その感覚すら無くなった頃だった。
腕はいつもは頼もしいその長さ重く感じ、足はまるで鉛にでもなったかのように重たい。だが、Ｍｏｂである敵の動きは疲れ知らずにますます鋭さを増し、その鎌は陽光を反射してぎらぎらと戦意を主張し続ける。

敵の目は、機械的な輝きのみを宿して、俺を追いかけ続ける。
だがその視線が、俺に敵の攻撃を教えてくれる。

結果、俺はその必殺の一撃を、避け続けることが出来ている。しかしそれは、俺がまだ生きていることと同じ意味しか持っていなかった。この威力なら、かすりダメージでも俺の貧弱アパターは吹っ飛び、仰け反り（ノックバック）が生じるだろう。そして次の一撃で、ゲームオーバー。

（だが……）

だがそれは、少なくとも今じゃない。
振り抜かれる、何度目かの死神の大鎌が、俺の肩スレスレを掠めていく。

それを見送り、次なる攻撃の予測のためにその目を凝視する。交錯する、視線と視線。途方も無く美しいその顔の向こうに、二年間のアインクラッドでの暮らしの中で最も美しい夕焼けの、最後の残光が、水平線へと消えていく。

と同時に、俺の目の前に不意にウィンドウが表示された。

「な……っ」

書かれている文字は…「Ｙｏｕ　Ｗｉｎ」。

呆然とする俺の前で、ここまで戦い続けた女が、先程までの鋭さが嘘のように、ゆっくりとした動作で大鎌を肩に担ぐ。これまでと違う…出現した当初のような、人間のような仕草で。

――――汝、よくぞこの境界の刻まで戦い抜いた

その目は、デュエル前のそれで、表示はＮＰＣを示すカーソルへと変わっている。ふと気になって確認したら、俺は奴のＨＰを三割も削っていなかった。つまり、このクエストのボスは、「倒さずともこの夕陽の沈むまでの間耐え続ければ勝利となる」という条件付きのデュエルだったのだろう。

途端、俺の体から一気に力が抜ける。

狂気じみた加速感が消えて、冷静さが戻ると同時に疲労も帰ってきたらしい。

俺はみっともなく河原に尻もちをついた。

生き残った。俺は、生き残った。

――――汝に、これを返そうぞ。妾（わらわ）の加護を加えて

死神が、その懐から何かを取り出す。小さなそれは、指輪だった。俺の投げ入れた、《ブラッド・ティア》。女が持ちあげたそれが、手の平の上で、文字通りの鮮血の紅色から美しい七色に変色していく。そしてゆっくりとそれを翳す。と同時に指輪は魔法のようにふわりと浮かんで俺の手元へと飛来し、両手で捕えると同時に消滅し

た。恐らくストレージへと入ったのだろう。

そして。

――――そして、汝の望みを叶えようぞ

再び取り出すそれは、……俺ですら見たことのない、虹色に輝く、途方も無く美しい、結晶。

それを取り出すと同時に、死神はゆっくり、ゆっくりとポリゴン片へとその体を変じていく。登場と逆回しのような…或いは、破砕音を抜いたプレイヤーの死亡エフェクトのような、ポリゴンのゆっくりとした拡散。最後に残ったその顔には、ＮＰＣとは思えない優しい笑みを浮かべながら。

残されたのは、水際の位置、俺の胸ほどの高さに浮かぶ、一つの結晶のみ。

精根尽き果てた俺が、もう一度全力を振り絞って、立ち上がる。全力を出せば一秒の半分も掛からない距離が、途方も無く長く感じる。去年のクリスマスの、《回魂の聖晶石》のことが、脳裏をよぎる。キリトが手に入れ、クラインがその存在を皆に知らしめて小さくない反響を呼んだアイテム。そして、死者が生き返らないことの証明ともいえたアイテム。

（やっぱ、ダメか……）

ずっしりとのしかかる落胆、そして徒労感。だが、これも貴重品だ。一応、貰っておこう。エギルの店で売ってやれば、あいつが上手く使ってくれるだろう。

そんなことを思いながら、俺が手に取ったそれは。

《回魂の聖晶石》ではなかった。

ポップして表示された名前は、似て非なるもの…《追憶の聖晶石》。

浮かび上がる説明文。

その最後に存在する、「ロード」の文字。

まるで急に世界が俺だけになったような錯覚。

いままで感じたどんな感覚とも感情とも言えない心で、無意識にその「ロード」をクリックする。

七色の光を発して、輝き出す《追憶の聖晶石》。

その光が、徐々に、徐々に意志を持つように集まっていき、虚空に絵を描いていく。

そこに浮かび上がったのは、十枚のスクリーンショット。

その写真の中央にあったのは。

俺が求め続けた、最愛の人の笑顔だった。

episode7　笑顔と希望2（前書き）

超オリジナル考察。

ｅｐｉｓｏｄｅ７　笑顔と希望２

「どう思う？」
「……むぅ」

店主…歴戦の強者然としたツラの茶褐色の肌の巨漢は、困ったように眉をハの字に寄せた。
答えたくない、という意味の「むぅ」だったのだろうが、それを無視して返答を待つ。
案の定、数秒で巨漢…エギルが折れた。

「……推測としては、可能性は否定できない、ってところか。確かにこのアインクラッドで、結婚まで至る者は少ないからな。その程度の人数であるのなら、不可能ではない、かもしれない」
「そうか」

言質をとった俺は、一言頷いた。

一夜明けて、クエストを終えた俺はエギルの店に赴いてこの不思議なアイテムとそれに関しての俺の持論を話していた。それほどに、《追憶の聖晶石》は、含みのあるアイテムだった、と言えるだろう。

《追憶の聖晶石》。

それは、効能的には単なる《映像結晶》となんら変わるところの無い、スクリーンショットを映し出すアイテムだ。問題は、その内容。既に死亡しているはずのソラの姿がしっかりと映っている…と

いうか、明らかにソラを主役として写真が取られており、他の人影は見えない。

俺達…といっても、二人だけだが…はこの現象について幾つかの仮説をたてた。

一つは、俺の案…『蓄積データからの抜粋』だ。

アインクラッドは、データで作られた世界だ。ということは、全てのプレイヤーの言動はデータに変換されている。そしてそれは、ある程度の「バックアップ」が取られているのではないか、という考え。何かの現象…恐らく不測のゲームの不具合などの際に取りだすためのそれがこのゲームにも存在しており、その中からこのクエストにふさわしいと思われるソラの映像を抜き出した…という意見だ。

二つ目は、エギルの案…『映像結晶からの抜粋』。

俺のものと似ているが、これはバックアップではなく、実際に取られた《映像結晶》のデータをアインクラッド中から検索、ピックアップしているのだという意見だ。確かにアインクラッドの初期人口が一万人ということを考えると、俺の案であるその全員分のバックアップは馬鹿にならない容量になる。こちらの方が現実味があるだろう。

そしてこの議論の中で出てきた、俺の中の一つの仮説。エギルが言うのをためらった理由。

「ありえなくは、ないってことか……」

『結婚』というシステムについてだ。

俺のエギルに対する反論の中で、「特定のプレイヤーのみのデータが保存されているのではないか」という案が浮かんだのだ。そう、たとえば…「『結婚』していた」とか。思えば、あのクエストはあまりにも「未亡人」というワードが押されていたように思う。クエスト自体は既婚者でなくても受注可能だったが、裏ボスはどうだろう。

エギルの反論は、「『思い出のアイテム』ということは、別に結婚指輪でなくてもギルドの印章でもよかったのではないか」というもの。確かに、実験してみないことには分からないが、『結婚指輪を投げ込め』ではなかったために、それも考えられる。

その議論の最後に、極論として俺がもたらした意見。

「『結婚していた者』に関しては、現実世界で死んでおらず、復活の機会を待って待機空間とでも言うべき空間におかれているのではないか、だな……」

一度だけ、キリトに聞いたことがあったのだ。既に死んだはずの人の映像を、見たことがある、と。確か五十何層かが最前線だったころだったが、その人が、自分に向かってほほ笑んで手を握ってきたのだ、と。もしそれが、待機空間から呼び出された人だったなら。

条件は、分からない。だがソラは、その人物とはかなり多い共通点……「既婚者」、「女性」、「一定以上のレベル」、そして「殺人者に殺された」などがある。それらを満たすプレイヤーは、まだ待機空間にいる…つまりは、生きているのではないか。

それの意味するところは。

「…この先本当に、『死者を生き返らせるクエスト』が見つかる可能性が、ある…」

「…シド。俺は、それは無いと思う。そして、それを求めることは、間違っていると思うぞ」

この先と言わず、今回のクエストでもあの「黄泉への案内人」を倒していたなら、違った結末があったかもしれないのだ。本当に、彼女の意識と出会える…或いは、生き返ることも。

そして、俺がこの可能性に狂うのを恐れて、エギルは俺を止めたのだろう。確かに、その危険性は自覚している。クリスマスのキリトを見ているからだ。恐らく今の俺は、あいつと同じ…もしかしたらそれ以上に狂った目をしているのかもしれない。

しかし俺は、その意見を一人で追おうとはしなかった。

俺は、キリトと違う。一人で全てを出来るほど、強くないのだ。特に、今の俺は。

だから、友人を頼った。

「……わかってるよ。これだけを探して生きることはしない。俺は今まで通り、クエスト攻略を続けるだけだ。攻略組への協力も行う。俺自身、ボス戦に出たっていい。少しでも攻略のペースを上げたいからな。だからエギル、それらしいクエストがあったらすぐに知らせてくれ」

エギルも、それ以上は止めなかった。

俺の目は、恐らく相当の決意、覚悟、そしてその奥に狂気を宿していたのだろうが、それでもまだちゃんと冷静さを、理性を保っている。そして、「ソラを生き返らせる」という目的を持った俺は、

死ぬわけにはいかない。ここしばらくのような「死に際の集中力の低下」などは、決してない。

それを見てエギルは、まあここ数日の俺よりも今の俺の方がマシ、という判断を下したようだった。その首が竦められ、見事なバリトンで「まったく、やれやれだ」とつぶやく。まったく、こいつは本当にいいやつだ。物分かりのいい友人に、プレゼントをやるつもりでトレードウインドウを開く。

「サンキュ。ほんじゃ、今回の戦利品だ。めずらしいクエストアイテムもあるから、今回はしっかり見といてくれよ」

「……ったく、どれどれ……ってオイ、なんだこりゃ！！！」

途端、店主の絶叫が響いた。まあ、その気持ちは分からなくもない。そして、この顔を見たかったと言っても過言ではない。うん、なかなかに爽快、満足だ。

「《リヴァイブ・リング》。指輪アイテム。効果は、『死亡時に五十％の確率でＨＰ五十％で自動蘇生する』。全く、レアだが、使い勝手は悪いことこの上ねえよな」

「……まあ、確かにな。試しに死んでみる訳にもいかんしな」

俺に帰ってきた、《ブラッド・ティア》は、そのデザインだけでなく名前と効果も変わっていたのだ。確かに貴重品だが、正直どう値段をつけるもんか俺も悩んだのだ。まあ、確実なのは俺なんかが持っているよりもっとふさわしい奴がいる、ってことか。

先程までの超シリアスから一転、二人で値段と使い道についてあーでもないこーでもないと言いあう。気のせいか、その時のエギルはいつもより饒舌だった。そして店のドアが空いた際、そのテンシ

ョンのまま、「お前誰だよ!?」と言いたくなるハイテンションで「らっしゃい!!!」と言い。

その顔が、ピシッと固まった。

不審に思って振り向いた俺も、同時に固まった。

「随分今日は機嫌がいいようだね、エギル君。お邪魔するよ。シド君も、ちょうど良かった」

「……おいおい、エギル。お前の店はこんな大物まで来んのかよ。」

現れた、紅いローブ姿の男…ヒースクリフを見て。

ｅｐｉｓｏｄｅ７　七十五層、合同討伐部隊にて

アインクラッド外周から覗く秋の空を、俺はぼんやりと眺めていた。そこに浮かんでいるのは、まるで秋を絵に書いたような鰯雲。その景色はどこまでもいつも通りで、まるでこれから始まることがウソみたいに思えてくる。

――君たちに、第七十五層の、ボス攻略の合同パーティーに参加してほしい。

昨日、突然エギルの店に現れたＫｏＢ団長ヒースクリフは、俺達にそう言った。当然、面喰ったのは言うまでも無い。だが、その後に続いた「先行偵察部隊の全滅」の言葉を聞けば、俺達もいやだとは言えなかった。いや寧ろ、「全滅」という言葉を聞いたからこそリスクを考え、商人クラス（といっても一流の斧戦士でもあるのだが…）のエギルや盗賊クラス（といって以下略…）の俺は断るべきだったのかもしれない。だがまあ、エギルはそういう時こそ断れない男だ。

そして。

（打算だけで動いてるのかもなあ、俺……）

俺も、その依頼を受諾した。理由は簡単。攻略のペースが遅れるのは、俺の目的……上層に存在するかもしれない、『蘇生クエスト』を探すという目的にとって、望ましくないからだ。我ながら呆れるくらいに自己中心的だ。

勿論他に理由が無いわけではない。予想される「結晶無効化空間」での回復、転移脱出不可に対しては、俺のもついくらかの貴重な…というか、「何に使うかよくわからないクエストアイテム」が役立つ場面があるかもしれない。そして、敵ボスの形状やしてくる攻撃がわからない以上、四十七層のように俺の敏捷、体術が生きてくる可能性も十分考えられる。

だがやはりそれは、俺の中では後付けの理由に過ぎなかった。他の誰もを騙せたとしても、俺自身は騙せはしない。俺は、俺のためにこの戦いに臨む。いままで俺は、自分の願望というものに頓着しない性質だと思っていたが、どうもそうではなかったらしい。

「……ハハ」

自嘲気味に笑う。まあいいさ。このデスゲーム、自分のためだけに戦い続ける奴も大勢いる。俺もそういった連中の仲間入りと行こうじゃないか。それが回りまわって皆の為になるというなら、それはそれで、悪くない。

そんなことを考えているうちに、メンバーたちは続々と集まってくる。

クライン、エギルといった顔見知りの面々。キリトとアスナの二人とは一瞬目があったが、二人とも声をかけてこようとはしなかった。その気遣いが、今の俺には正直有難かった。そして、ヒースクリフをはじめとするＫｏＢの精鋭が到着し、三十二名全てが集合する。

ヒースクリフが何かを言っている。その様は実に堂々としていて、

皆を高みへと導く者にふさわしい風格を醸し出していた。キリトが『勇者』であるなら、この男はさしずめ『王者』か。キリトが敵を切り裂く剣で、ヒースクリフが皆を守る盾。

おそらく俺が…レベル八十四にして限界に達した俺の…見ることのない、この先のボス戦をこなし、この世界の最後を見届けるだろうプレイヤー達。

「……なにを弱気になってんだよ、俺は」

呟く。確かに俺が『攻略組』の一角で居られるのは、もうあと数層分だろう。だが、それでも今は、この敏捷特化を生かした、戦力の一人なのだ。戦える。俺はまだ、戦える。全てのプレイヤーのため…なんてお題目ではなく、俺のために、そしてソラのために。

俺の頭が、すうっと落ち着いていく。

いままで経験した数々の戦闘の中でも最も集中した時だけ感じる、独特の熱と、冷静さ。

ヒースクリフが、掲げ持った《回廊結晶》を開き、その中に入っていく。続く赤と白の騎士装。

「さ、いきますか」

一瞬だけ、左手で顔を覆う。その薬指に光る、七色の指輪。結局ヒースクリフが訪ねてきたおかげで買い取りまでこぎつけられず、先送りとなった、《リヴァイブ・リング》。その輝きに、一瞬だけ目を細めて笑う。なんだか妙に励まされたような気になったのだ。

その笑顔のまま、俺は回廊結晶のゲートへと飛び込んだ。

◆

美しく削られた迷宮区の扉。それが果たしてどんなことを意味するのか、まだこれで二回目のボス戦の俺には分からない。だが、攻略組の面々を見る限り、どうやら愉快なものではないのだということだけはよくわかった。

（……出し惜しみは、無しだな）

いや、そもそもボス戦で出し惜しみも何も無いのだが。

メニュー画面を開き、装備を一式出す。つい昨日、『黄泉への案内人』相手に戦ったのと同じ、俺の最強装備。足のブーツは、移動補正と『体術』スキルの一部…足技にボーナスの入るモンスタードロップ品。纏う紺色のハーフコートと黒のズボンは、『隠蔽（ハイディング）』だけでなくかなりの敏捷補正と貫通、刺突攻撃に高い防御力、そして『軽業（アクロバット）』の上位スキル同様に相手Ｍｏｂの視覚情報を困惑させる効果がある。

そして、右手には、銀色の布地に俺には読めない文字の入った、《カタストロフ》。左腕には、燃え盛る火焔のような輝きを放つ、《フレアガントレット》。薬指に、《リヴァイブ・リング》。

全ての装備を装着し、前を向く。そしてもう一度メニュー欄を見る。

そこにある、今までの極貧暮らし（完全に自業自得だが）が嘘のような、巨額のコル。そして、俺には使えない武器…《フラッシュフレア》。行く直前にエギルが「今までの代金そして細剣はお守り代わりだ」と言ってくれたのだ。生き抜く意味を持った俺への、祝

いだそうだ。

扉に手をかけたヒースクリフと目が合う。俺と奴が、まったく同じタイミングで頷く。

そして。

「戦闘、開始！」

高らかに宣言したヒースクリフの後に続き、俺はボス部屋へと飛びこんだ。

ｅｐｉｓｏｄｅ７　七十五層、合同討伐部隊にて２（前書き）

作者の致命的弱点
原作シーン＋一名の描写はムリ。難しすぎます。

ｅｐｉｓｏｄｅ７　七十五層、合同討伐部隊にて２

飛び込んだ先には、何も居なかった。

四十七層のボス戦の時のように中央に鎮座しているのでもなく、かといって大型Ｍｏｂの出現時に見られる巨大なポリゴン片すらない。回りを見やると、他のメンバーも戸惑っているようで、それぞれ武器を油断なく構えながらもその目は泳いでいる。

一秒一秒が、まるで何分間にも感じる。集中力では無い、焦りによる体感時間の減速。

なにか、なにかあるはず。

後ろの扉は、音を立ててしまっていく。これが、俺達より先にこのボス部屋を訪れた偵察隊が全滅した原因だ。退路を塞がれる、そしてその上にここは『結晶無効化空間』。死闘の覚悟なくこのボス戦に臨んだ者たちには、どれほどの恐怖だったのだろう。

どこだ。どこにいる。

「上よ！！！」

思考を断ち切ったのは、『閃光』の悲鳴にも似た鋭い声だった。

弾かれた様に数人が上を見上げる。当然俺もすぐさま天井へと視線を向ける。

「っ…！」

そこに、目的のボスは居た。居た、のだが。

それは、あまりにも大きく、あまりにも長大だった。全体像を表すなら、巨大な骸骨ムカデ、といったところだが、その全長は軽く十メートル以上はある。灰白色の体から、まるで一本一本が槍のように鋭くとがった無数の足が生えている。

浮かび上がるカーソルに出るのは、『Ｔｈｅ　Ｓｋａｌｌｒｅａｐｅｒ』…骸骨の狩り手。

その禍々しい名を持つボスが、その人間の頭蓋骨のような…いや、それをさらに禍々しくカスタマイズしたような顔をこちらに向ける。正面の眼窩から覗く、二対四個の青く揺らめく目が俺達を見つめて、猛る様に燃え盛ったのを、俺は見た。その瞬間。

「っ！！？」

その鋭い足を一斉に広げて、俺達の真上から落下してきた。

「固まるな！距離を取れ！」

ヒースクリフの鋭い指示が飛ぶ。固まっていたプレイヤー達が一斉に動き出す。俺も一旦距離を取るべく一息で壁際まで飛び退り、落下の衝撃に備える。だが、全員がその反応を出来たわけでは無かった。ちょうど落下の真下にいた三人が、どちらに逃げるか迷っていたのだ。

「こっちだ！」

叫ぶキリトの声。慌てて動き出す三人。だめだ、あの巨体。恐らく。

「うわっ！！？」

俺が「飛べ」の声を上げる直前に、ムカデの巨体が轟音を立てて床へと降り立つ。そして落下した瞬間生じる、巨体モンスター特有の床振動効果。三人が足を取られ、一瞬その動作が止まる。逃げようとした姿勢……敵に、背を向けたままで。

瞬間、骸骨ムカデの右腕…まるでカマキリのような形状で、鎌の部分だけでも人の身長ほどもあろうという大鎌が、一閃される。その横薙ぎの一撃に、三人が纏めて吹き飛び。

ＨＰが、一気に減少して。減少して。
あっけなくゼロになって、ポリゴン片を残して爆散した。

「なっ…」

あの、八十代のレベルを持つだろうプレイヤーが、一撃。
背後からの、しかもクリーンヒットの一撃だったとはいえ、その相当量のＨＰを、削りきった。

「こんなの、無茶苦茶だわ……」

『閃光』の呟き。呟けた分、まだ『閃光』はマシだった。中にはまるで放心したように固まってしまった奴すらいる。かくいう俺だって、あまりの衝撃に眩暈に似た揺らぎを感じてしまっていた。そして、その隙を、ボスが見逃すはずもない。

「うわあああああっ！！！」

固まっていたプレイヤー達をめがけて猛烈な勢いで突進した骸骨ムカデに、標的となった一団が悲鳴を上げる。声は上げられても、体は…足は、うごいていない。だめだ、早く逃げるか、冷静に盾を構えなければ。振りかぶられた左の鎌は、迎撃の気配の無い一団に向けて振り下ろされ、

「ヒースクリフ！」

鋭く滑り込んだヒースクリフの持つ十字盾に迎撃され、耳をつんざくような衝撃音を発した。赤い騎士装の『王者』が、冷静な真鍮色の瞳で真正面から骸骨ムカデを見据える。凄まじい力で打ち込まれただろう左の骨鎌と十字盾が、拮抗した力に小刻みに揺れる。

左の、鎌。

気づいた瞬間、俺は敏捷値全開で飛び掛かった。

ボスでは無く、ヒースクリフに庇われた一団に向けて。

「ボケっとすんなっ、にげろっ！」

重装備の男の、その金属鎧の肩の部分めがけて《ムーンサルト・フライ》を繰り出す。ダメージは無に等しいが、その仰け反り（ノックバック）効果によって男が壁際まで弾かれ、攻撃範囲…もうひとつの、右の鎌の射程から脱出する。だが、周りにはまだ動けないプレイヤーが何人もいる。呆然とボスの巨体を見上げたまま、その右の鎌を眺める。

どうする。《スパイクハリケーン》で皆を弾くか？いや、そうすれば、今度は俺が取り残される。しかしまだ俺の方が避けられる。

俺はいつも通りだ、一撃喰らえば死ぬ戦闘なんていつものこと、緊張はしても動けないなんてことは、いや……

「くそっ！！！」

一瞬硬直した俺の、その前。先程男を弾き飛ばした場所に走り込む、黒い影。その両手に構えているのは、透き通るような流麗な水晶色の剣と、ぎらつく肉厚の黒い剣……キリトだ。素早くその双剣を交差させ、振り下ろされる鎌を受け止める。凄まじい衝撃音。

だめだ。

キリトのスキル構成は、壁戦士（タンク）ではない。

ヒースクリフのように受け止めきるには、足りない。このままでは…

だが、その俺の思考を読んだような完璧なタイミングで、後ろから真っ白な光が剣と鎌の交差点に突き刺さった。『閃光』だ。愛剣、《ランベントライト》を右手に構え、その突進系ソードスキルで鎌を僅かに弾き、キリトが押し返す。キリトの真横に立った『閃光』が、力強く言う。

「二人同時に受ければ、いける！わたしたちならできるよ！」

「よし、頼む！」

続けて襲いかかる骨鎌を、二人が完全に一致した動作で受け止める。繰り出される、完全にシンクロした右斜め斬り降ろし。さっきは弾かれた二人の剣が、今度はあっちの骨鎌を弾き飛ばした。

「大鎌は俺たちが食い止める！！みんなは側面から攻撃してくれ

！」

叫ぶキリトの指示。

同時に数人が応えて突進し、ボスのその人間の背骨のような体に各々の武器を振り下ろす。ほんのわずかに、だが確かに減少するボスのＨＰ。俺も二人の後ろの位置から飛び退り、その体を打つべく拳を構える。しかしその拳が振り下ろされる前に、悲鳴が上がった。

ボスの体節の、その終端。

槍のように尖った尾が、数人のプレイヤーを薙ぎ払った。

ｅｐｉｓｏｄｅ７　こんな自分にできること（前書き）

明日零時、ＳＡＯ最終話まで。

ｅｐｉｓｏｄｅ７　こんな自分にできること

「くそっ……！」

長引く死闘の中、また一人、ポリゴン片となって爆散した。

ボスの攻撃は、単調でありながら対策のとれない、それでいてクリーンヒットを貰えば一撃でＨＰを持っていかれる厄介なものだった。鎌を捌き続けるキリト、アスナ、ヒースクリフ。だが、三人が抑えてくれている間はまだましだ。

「ちっ！また動き出すぞっ！離れろ！！」

振りまわしていた鎌を万歳をするように大きく上げる。再移動の合図だ。

一旦大きく仰け反った骸骨ムカデが、その無数の足を蠢かせて突進を開始する。だがそれは直線軌道では無く、フロアを隙間なく埋め尽くすような、ジグザグの不規則な動き。

「くっ！」

「クライン！！！」

そして、十メートルを優に超えるだろうその長い巨体。逃げ方によっては「詰み」に追い込まれてしまうものも出てくる。今まさにその状態に追い込まれた、無精ひげのカタナ使いが顔を歪めながらポーチを漁る。追い込まれてしまえば。

「う、ぐあああああっ！！！」

そのまま、あっさりと、轢かれた。

突進攻撃時には、あの恐ろしい威力の鎌は使ってこない。だがその代わり、無数の足が次々にプレイヤーを踏みつけ、そのゲージを凄まじい勢いで削っていく。クラインは素晴らしい判断力で咄嗟にハイレベルの回復ポーションを煽っていたようで、数秒ごとに回復しているためゼロにはならないが、この咄嗟の行動が出来なかった仲間がすでに何人もやられている。

そしてクラインを踏みつけながら、ムカデが壁へと登っていく。

「上に行くぞ！真上に行く前に撃ち落とせ！」

叫んだ男が、投擲用のダガーナイフを次々と投げつける。キリトら数人の『投剣』スキル持ちがピックを放ちまくる。真上に行くまでに一定のダメージを与えられれば、跳躍からの全床衝撃攻撃がやってこないからだ。

今回は何とか成功し、骸骨ムカデが途中であきらめて降り立ってくる。

固まってポーションで回復していた一団に向かって、今度は一直線の突進。鎌攻撃のサイン。

「ふっ！」

「おおおおおっ！」

「やあああああっ！」

振り上げられる鎌を、キリト、アスナ、ヒースクリフの三人が迎

撃する。と同時に、まだＨＰに余裕のある面々が武器を構え、側面へと突進。薙ぎ払われ、突きたてられる尾骨の槍をなんとかかわしながら攻撃を放つ。

俺は。

「クライン！」

「くっ、大丈夫だ、ちょっとふらついただけだ、すぐに俺もいけるっ、く…」

「回復ポーション持ってけ！まだＨＰ注意域（イエロー）だ！」

「うっ、面目ねえ…」

踏み潰され続けたクラインのもとに駆けよってその体を支え、ストレージから取り出した回復用のポーションを手渡した。あれだけ連続して踏み抜かれたのだ。数値的ダメージ以前に連続した衝撃で脳震盪を起こしていてもおかしくない。

俺は、攻撃には参加できなかった。

恐らくウィークポイント…というか、「ダメージの通る個所」である、体節の隙間に《エンブレサー》を叩きこんでさえ、「ダメージが通った」感覚が無かったのだ。恐らく奴にダメージを与えられる下限的な攻撃力に、俺の攻撃力が達していなかったのだろう。

俺に出来るのは、こんな支援ともいえないような支援しか無かったのだ。

クラインから離れ、また骸骨ムカデへと向き直る。相変わらず超人的な力で鎌を捌く三人。そして、重武器の面々が、動かない横腹を次々と打つ。そして何人か、キリト達に次ぐ反応を誇る面々は後

ろの暴れまわる尾に立ち向かい、うねりながら襲い来るその槍を捌きつつ、時折見える体節の隙間を完璧なタイミングでソードスキルで攻撃する。

俺は。俺は。

「っ！避けろっ！」

ソードスキルを放った数人が、その技後硬直で固まっている。ムカデの体がおおきくしなり、そこへと向かって、鋭い長槍の尾骨が真っ直ぐに振り上げられる。あれが突き刺されば、またプレイヤーが。飛び込み、一番装備の薄い軽装戦士を弾き飛ばす。だが、まだ数人は硬直のまま。そこに向かって、伸びた槍が、

「ぬうううん！！！」

右下段から鋭く振り上げられた斧に、その側面を激しく打たれた。赤紫の強烈なエフェクトフラッシュが迸り、一瞬怯んだ尾骨に再びの、左の斬り上げ。『斧』スキルの中でも有数の威力を誇る二連重攻撃、《ヘヴィ・スワロウ》。

「エギル！」

「逃げろ！これはまぐれだ、次は捌けんぞ！！！」

ぎりぎりのタイミングで後ろの数人の命を救った褐色の巨漢は、厳しい表情のまま尾骨を睨みつける。巨大な尾骨の槍は一度は大きく弾かれたものの、再びしなるようにして次の獲物を探すように揺らめく。弾かれたエフェクトフラッシュが、側面に残光を煌かせる。

その、残光の中。

俺は、確かに見た。

僅か、ほんの僅か、描画にして数ドットに過ぎなかったが。

尾骨の側面、エギルの斬撃をまともに受けた、その一点に。

細い細い、一筋の罅が入ったのを。

ｅｐｉｓｏｄｅ７　こんな自分にできること２

俺の『暗視』スキル、その上位効果で、俺の視力は現実世界のそれよりもかなり強化されている。その強化された視力が、確かに捕えた、骸骨ムカデの尾に走った一筋の罅。ＨＰの減少とは違う、ダメージエフェクト。ということは、あれは。

（恐らく、破壊可能オブジェクト！）

分かった瞬間、俺は全開の敏捷値、そしてなけなしの筋力値を振り絞り、『軽業（アクロバット）』まで使って、荒れ狂う尾骨に向かって一直線に飛び掛かった。

「っシド！？」
「おいっ！？」

エギルとクラインの悲鳴。それを無視して、尾骨へと繰り出す渾身の一撃。回転の勢いを生かした裏拳気味の鋭い手刀、単発体術スキル、《スライス・ブラスト》。極低の筋力値ではダメージ自体は通らないが、俺の右手のグローブは、ただのグローブでは無い。驚異的な武器破壊ボーナスをもたらす、《カタストロフ》だ。

「おおおおおっ！！！」

俺の持つスキルの中でも、有数の威力を持つそのソードスキルが、尾骨の側面…エギルの斧がつけた極小の罅のその点を、過たず狙い打つ。ブーストされたその一撃が、振り回される骨槍の側面に炸裂して。

「っし！」

また一筋、罅を深めた。

もう確定だ。この尾骨は、破壊できる。前の大鎌を三人が抑えてくれているなら、この骨槍さえ砕いてしまえば敵の戦闘力は激減する。そしてこの役目は、敵にダメージが通らない俺でも出来る…いや、《カタストロフ》を持つ俺にしか出来ない。

もっと言えば。

この戦闘で、俺に出来る唯一の役割だ。打撃の衝撃を利用して再び飛び退り、地面に着地する。このままあの尾を打ち続ければ。出来る。俺にも、この戦闘で、役に立てる。『攻略組』の…『勇者』の一人として。

決意をこめて、前を向き。

「っ！！！？」

眼前に、鋭く繰り出された槍の、その先端が閃いた。

◆

「シドっ！！！」

悲鳴が誰のものだったかを考える余裕は、俺には無かった。その槍は、俺の顔面……ではなく、咄嗟に翳した左腕を貫き、顔の横を掠めて背中へと抜けていた。ＨＰゲージは、まだなんとか半分近く

を保っている。その槍に中央を貫かれているのは、左腕に嵌った《フレアガントレット》。

紙装甲の俺に一撃を耐えさせ、尚且つそれ自体の耐久度もまだ半分以上保っている。見た目には部位欠損になっていないのが不思議な程の大穴があいているというのに。

（リズベット…お前はホント、すげえ鍛冶屋だよ……）

そして、槍の刺さった部分から噴き出す、鮮血のような赤いフラッシュエフェクト。『貫通継続ダメージ』だ。この手の攻撃で、しかもアバター末端だというのに、俺のＨＰは二パーセントも減少した。このままではあっという間に俺のＨＰはゼロになるだろう。

「シドっ！！！」
「任せろ！！！」

だが、甘い。俺はすぐさま腰のポーチから回復ポーションを抜き取り、煽る。つい先日にクエストで獲得したばかりの、非売品の現在最高レベルのポーションだ。その回復量は、俺のＨＰなら五秒で五パーセントというポーション類では驚異的なポイント。

煽ると同時に、俺が右手で、巨大な骨の槍を掴む。
新たな獲物を求め、抜き取られようとするそれを逃がすまいと、銀色の手袋の手で、握り締める。

「いくぞおおおっ！！！」

放たれる、極大の蒼いライトエフェクト。俺の持つ無数の『体術』スキルの中で、最大の威力を誇る大技、《デストロイ・ハンド》。

握ったその槍から、聞こえるはずの無い、ギシギシと言う響きが走る様な錯覚をもたらす。

と同時に、その灰白色の側面に罅が走っていく。

（……いける）

確信する俺。このペースなら、例え敵尾骨の耐久値ゲージが見えずとも、このまま砕ききれる。

だが、それは甘い考えだった。

「っ、うわっ！！？」

「シドっ！」

「馬鹿、離れろ！！！」

敵の膂力を、見誤っていた。握りしめた《デストロイ・ハンド》、そして《カタストロフ》は、その槍を決して離さない。だが、その貫通された左腕、握り締めた右手をそのままに、まるでクレーンのような巨大な力で俺を持ちあげてきたのだ。

あっけにとられる俺、そして側面攻撃の連中の前で、俺は高々と掲げられ。

「ぐおおおっ！！？」

そのまま槍と一緒に激しく薙ぎ払われた。体が数人のプレイヤーと衝突し、そのＨＰが直接槍を受けたのほどではないが、それでも二、三割がごっそりと減少する。勿論、俺のＨＰも。三割削られたため、既に赤の危険域だ。

「シド離れろ！！！」
「馬鹿、死ぬぞ！！！」

悲鳴が聞こえる。だが、それは出来ない。

先程の攻撃、確かに凄まじいダメージ量だったが、俺という障害物のおかげで戦闘開始当初の一撃死の恐れがあるほどのものではなかった。そして俺が邪魔をしているせいで、尾骨は槍の最大の攻撃である突き技を封印されている。

大きく持ち上げられ、今度は床に叩きつけられる。激しい衝撃。優秀なポーションがすでに黄色の注意域まで持ち直していたＨＰが、また赤の危険域…今度は一割を割り込む。だが。それでも。

「うおおおっ！！！」

離さない。絶対に離さない。

俺が今使っている《デストロイ・ハンド》は、握り締めた時間に応じてその威力が上昇する技だ。

さっき、俺がぎりぎりのところでこの刺突攻撃を避け、左手を犠牲に槍を固定できたのは、はっきり言って単なる偶然だ。次に同じ攻撃が来た時に、同じことが出来るとは思えない。そして何より、このレアポーションはもう無いし、ＨＰ、耐久度共にとても耐えられない。

これが、最初で最後のチャンスだ。

絶対に。絶対に。

「俺がっ、この槍を砕いて見せる……っ！！！」

どこかから悲鳴が聞こえる。赤いダメージフラッシュ。ＨＰがまた二パーセントの減少。左手の手甲の耐久値も、みるみる削られていく。レアポーションの数パーセントの回復が無ければ、もうとっくに死んでいるだろう。そして。

「もう一回来たら死ぬぞ！！！」

「一旦離れるんだ！！！」

そう、もう一回叩きつけられれば、俺のＨＰはゼロになるだろう。悲鳴は絶え間なくとどろく。だがその中に、俺の決死の覚悟を理解した数人が、敵の体節の隙間に大技のソードスキルを次々と叩きこむ。骸骨ムカデのＨＰが、目に見えて減少していく。既に、奴も赤の危険域。

骨の罅は、もうはっきりと分かる。だがそれでも、今にも壊れそうという程ではない。せいぜい耐久値の半分と言ったところか。けれど、あきらめない。絶対に、あきらめない。

（見てろよ、ソラ……！）

お前の託してくれた《カタストロフ》の力を。握りしめる拳が、一層激しい蒼に明滅する。もうすでに、今までに使った際の継続時間の、何倍もの時間に及ぶ《デストロイ・ハンド》。骨槍にかかるダメージ量は、俺の虚弱なアバターでも凄まじい量のはず。

あと少し、あと少し。

だが、その思いを聞き届けてくれるほど、敵は甘くなかった。

尾が、再び意志を持って動き出した。

瞬間、世界が減速する。

減速してなお凄まじい速さと分かる、振り下ろし。

床へと叩きつけられる体。

奇跡的に、ほんの数ドットだけ残る、俺のＨＰ。

そして、左腕から光る、紅い…血のようなダメージエフェクト。

ゼロになる、俺のＨＰ。

瞬間。

「うおおおおおおっ！！！」

全力を込めた、絶叫。数ドットがゼロになるまでの、ほんの一瞬の隙間に放つ、《デストロイ・ハンド》のもう一つの効果……「最後に区切りを入れることで、これまでのダメージを倍加する」。凄まじい…俺がこの世界で経験した中で、最も激しく、美しい蒼い光が迸る。

はじけ飛ぶ、巨大な、ポリゴン片。

響く重厚な爆砕音と、そしてその中に紛れた、軽い破砕音。

ボスの尾骨、そして俺自身が、砕けた音。

はは。死んじまったか。ソラに為に、俺は生きなきゃいけなかっ

たのにな。これで「蘇生クエスト」の謎も謎のままだ。いや、ソラだったら寧ろ「ここで男を見せてこその『勇者』だっ！」って褒めたかもな。よくは分からんが。

砕けて…死にゆく俺が、最後に思う。

俺は、出来たかな、と。ソラの果たすべきだった、『勇者』の役割を、代わりに果たせただろうか。いや、ここで死ぬ様じゃ、とても代わりとは言えないか。かろうじて保たれた視界が、砕けゆく左腕をとらえる。ぼろぼろになった、しかしまだその存在をしっかりと保った手甲…《フレアガントレット》。俺には、出来過ぎの防具だったよ、リズベット。もしかしたらこの先誰かが使ってくれるかもな。俺の遺品ってわけだ。もう消えていきかけた右手から抜ける銀色の輝きは、《カタストロフ》。こいつにはずっと世話になりっぱなしだったな。俺がソラに振りまわされた分を払っても、十分おつりがくるくらいだ。全く、しっかりと借りは返しやがって。

俺の意識が、どんどん遠のいていく。死ぬっていうのはどういう感覚なのかと思っていたが、どうやらこの極度の疲労と緊張で先に意識の方が落ちてしまいそうだ。文字通り一生に一度しかできない体験だが、まあ仕方ないか。

そして、消え逝く意識の中。

最後に残った、左手の薬指、その先。

七色の宝玉の嵌った指輪が、キラリと光るのを見た気がした。

ｅｐｉｌｏｇｕｅ　夢か現か、幻か

目が覚めたとき、俺の視界はあまりの眩しさにはっきりしなかったが、とにかく全体が白いことだけはなんとなくわかった。

そう。俺は、目が覚めた。

（……何が、起きたんだ…？）

生きている。俺は、あそこで死んだんじゃないのか。

思い出すのは、あの死闘の、最後の風景。キラリと光る、七色の宝玉を持つ指輪…《リヴァイブ・リング》。効果は、「五十パーセントの確率でＨＰ五十パーセントの状態で蘇生する」というもの。それが発動したのだろうか。そして俺は、意識を失ったままここに連れてこられた…？

（いや、それにしては……）

この世界は、異質に過ぎる。だんだんと慣れてきた視界はやけに白い上に、その天井や床はタイルのように整っている。こんな部屋のある場所は、俺の知る限りどの層にも存在していない。その上俺は今全裸で、やたらと柔らかい…ジェルのようなベッドに寝ていた。あまりにも、「ソードアート・オンライン」らしくない。

（ならば……ここは……）

死んだ後の世界か？

なるほどそれも考えられる。死んだ後の世界だと言うのならこのよくわからん…しいて言うなら、病院のような世界観もうなずける。死んだこと無いしな。確認する手段がない以上、死後の世界だと断言も出来ないわけだが。

「う……」

声を上げようとしたところで、喉に鋭い痛み。しゃべることもできないのか。とりあえず起き上ろうとしたところで、腕と体がやたらと重たいことに気づく。おいおい、動きも出来ないじゃないか。とりあえず、感覚は有るから、ゆっくりと、

（ん……？）

握った右手が、何かに触れた。それは細く、けれども温かく、そしてＳＡＯの世界ではありえない、掌紋や指紋の感触を持っていた。どこか懐かしい、体温以上の暖かみを感じるその感触は。遥かな昔、記憶の中にだけあるその感触は。

「う……っ」

「あ、あ……」

痛む体を無視して、上体を持ち上げる。

はたして、そこにいたのは。

「ああ、ああっ…っ！！！」

「かあ、さん…」

俺の、母親だった。

実に、二年ぶりとなる再会。少し、いやかなり痩せている。もともとは俺と姉弟に間違われていたくらい若づくりだったのに、一気に年を取ったように感じた。それは間違いなく、二年の歳月のせいだけでは無いだろう。

その母親は、言葉もなく、ただただ涙を流して俺を見つめていた。左手で感極まったように口元を抑え、右手は俺の手を力強く握りしめる。俺は何か言うべきだったかもしれないが、呆然と見つめることしかできなかった。

そして、急に動いて疲れたのか、一気に眠気が襲ってくる。

眠りに落ちる、その直前。

――――ＳＡＯが、クリアされました！患者たちが次々と目を覚ましています！…ＳＡＯが……

よくわからない、誰かの声が聞こえた気がした。

ｅｐｉｌｏｇｕｅ　夢か現か、幻か（後書き）

初、あとがき。

この不完全燃焼の結末を以て、～無刀の冒険者～ＳＡＯ編、終了となります。しばらくの間、各エピソードのまとめ、ＡＬＯ編の書き溜め等の時間を頂くため、更新を停止させて頂きます。ご意見、ご評価、ご感想、いつでもお待ちしております。

たくさんのご声援、ありがとうございました。

ｅｐｉｓｏｄｅ１　灰色で楽しい日常（前書き）

ＡＬＯ編、開始しました。しばらくは、日常パート。シドさんの現実世界、皆さんの予想とどれくらい一致しているでしょうか？

episode1　灰色で楽しい日常

ヴヴヴヴ、ヴヴヴヴ、ヴヴヴヴ。

三連の短いヴァイブレーションに、ゆっくりと、目を覚ます。もともと眠りの浅いタチの俺は、これでも十分に覚醒できるし、そもそも今現在は学校にも仕事にもいく必要が無いため、正直朝起きる必要があるかどうかすら疑わしい。そう言えば、同じように起きられなければそれでよかったあの世界では、目覚ましを使うこと自体が稀だったな。

時刻は、五時二十五分。

キリの悪いこと極まりないこの時間には、理由があるが、まあ、それはあとでいいだろう。

「ふあ……」

畳に直接惹かれた布団からむくりと起き上り、一度大きく欠伸、ついで両手を上にして伸びをしておく。これが俺の一日の始まりの合図だ。

（夢じゃ、ねえんだよな……）

今日は既に冬の真只中になる、十二月の半ばだ。あのデスゲーム、「ソードアート・オンライン」の世界から離れて、もう一カ月が経過したことになる。あの世界でなにが起こったのか、そして今俺はいったいなぜここにいるのか、そもそも俺は本当に生きているのか。そんな訳のわからない混乱は、未だ俺の中で消えはしない。親も、総務省のお役人もそんなことを教えてはくれないのだから。

そんな状況のせいか、ふと目が覚めたら、あの住み慣れた『冒険（クエスト）・合奏団（シンフォニア）』のギルドホームにいるのではないか、と思ってしまうことすらあるあたり、「重症だなあ」と自分でも思う。

（まあ、総務省のお役人連中の気持ちも、分からんじゃあないが、な…）

もしここが元の世界、「現実世界」だとして、ＳＡＯ内で何が起こったのかの情報は、正直一部の人間に対してで留めておきたかろう。あんな誰が誰を殺したのかも分からんような中だ、下手に解明したらパンドラの箱を開けることになる。だから俺が「いったい何が起きたのか」と聞いても、「もう大丈夫」「解放されたのだ」「安心してくれ」としか聞かされなかったのだろう。

ちなみに一番傑作だったのは、「ここは現実世界なのか」と真顔で尋ねた時か。当初の気が動転していた俺にしては切実な疑問だったのだが、周囲からすれば単なるキチガイか、或いはショックでおかしくなった人にしか見えなかったろう。もうちょっとでアタマの方の病院に連れて行かれるところだった。

「うしっ、と…」

まあ、何はともあれ。

今、俺はこうして母親の実家に邪魔している。母さんも一旦仕事を休み、静養（というか、俺を養っていくために相当の無茶と心労を抱えていたのが今回の件でとうとう限界に達したのだろう）しているというわけだ。

箪笥から、きちんと折り畳まれた服を取り出して手早く着替え、上からウインドブレーカーを羽織る。外はまだ暗いし、相当に寒い。

それでなくてもまだ免疫系は弱っているだろうし、体は気遣うに越したことは無い。センスの良い障子張りの襖をあけ、鴬張りの廊下をそっと歩いていく。

ここにきた最初の頃はその防犯設備に屈していたが、既にここで暮らしはじめて一週間だ。どこを歩くのが一番音がしないか、既に完全に頭の中でルートは出来上がっている。むこうでいうところの『罠』を避けて進むのは、俺の十八番だ。

「んじゃ、今日も行きますか」

こっそりと、歩き出し、外へと向かう。その瞬間、一瞬動きが止まって、『隠蔽（ハイディング）』、『忍び足（スニーキング）』のスキルを発動しようとしてしまったことに、少し、ほんの少しだけ、苦笑する。

まったく、この癖は、しばらく抜けそうにないな。

ｅｐｉｓｏｄｅ１　灰色で楽しい日常２

生きているか死んでいるかも分からない俺だったが、だからといって普段の生活を営まなくていいというわけではない。そして残念なことに…もしくは幸運なことに、俺は普通の生活を営むにあたって、そうそうシリアスでい続けられる性格では無かった。

（ま、そうでもなきゃこんなお屋敷から抜け出そうとは思わんよな……）

ピッキング（『鍵開け』スキルでは無い）で古い裏口の鍵を開けて、周囲の安全を確認する。時間はまだ五時三十五分だ。予想より幾分か速いが、まあ朝の散歩、そして家の堅苦しい朝食の時間が六時半というのを考えれば丁度いいか。

ゆっくりと抜けだし、俺は軽いジョギング程度の速度で走り出した。

◆

あの世界を通じて、俺の心は若干どっかがイカレてしまったらしい。分かりやすく言えば、ブレーキが壊れてしまった、という感じか。まあそのおかげ様で俺は普通の人間であればまず不可能な速さでリハビリを終わらせ、こうして軽い運動まで出来るくらいに回復しているのだから（まあこの異常な復帰の速さは、俺の精神的問題の他にも一つ要因があるのだが）。

俺個人の問題に関しては、医者が言うにはそれは、「痛みをリアルに感じ取れていない」というものらしい。確かに神経は痛みを脳へと伝達しているし、脳もそれを痛みとして受容しているはずなのに、それが本人の意識上に登っていないのだ…などという話を、ドーパミンだのノルアドレナリンだのの難しい専門用語で説明されたものの、はっきりいってよく分からんかった。

まあ俺としては、それでさっさとリハビリが終わるならそれで十分だった。

結果。俺は医者からは痛みを伴う様なことを厳格に禁止（ちなみにできれば運動も控えてほしいと言われていた）されたもののそんなものを守るはずも無く、こうしてバカな遊びに興じているのだった。

◆

冷たい風の吹きすさぶ、実家から少し離れた、雑木林の傍。

ここが、戦闘の場だ。そして時は、六時ジャスト。勝負の時は来た。

「ふっ…また、性懲りも無くやってきたか…」

俺が、獰猛に舌で唇をなぞる。挑発的な言葉を吐くが、この相手には言葉は通じないだろう。

「負けると分かっていても挑むか。まあ、それもいいだろう」

その言葉を最後に、構えを取る。両手をいつでも使えるようにだらりと下げ、瞬間的な判断で跳躍ができるように膝を曲げ、腰を落とす。あの世界で培った戦闘……特に、一対一のデュエルで用いる体勢。その姿勢は、こちらの世界でも違和感無く俺の感覚にマッチする。

言葉は通じずともこちらの戦意を感じ取ったのか、敵もまた同様に構えて。

一気に飛びかかってきた。

「きゃんきゃんきゃん！！！」

「甘いっ！！！」

可愛らしい、吠え声を上げて。だがその小さな体の動きは、俺の視線にしっかりととらえられている。その突進を、俺はサイドステップで紙一重でかわし、反撃に移る。友人からは「怪奇・蜘蛛男」と称される（悪口だが）長い腕を伸ばす。狙いは、後ろ脚。

正面から腹の下を通って握ったのは、右の後ろ脚だった。間髪入れずにそれを手前に引く。

「きゃうんっ！」

ふんばりの要である後ろ脚を引き出されてバランスを崩した相手が、「ぺたん！」と効果音がしそうな勢いで尻もちをついた。一旦弱弱しい声を上げて倒れたが、すぐに体勢を立て直して飛び退り、その目を爛々と輝して戦意を主張する。

いや、戦意っていうか。

（仔犬が目ぇ輝かせてじゃれついてきてるだけなんだがな…）

再び飛びかかるようにひっついてくる仔犬を巧みにかわしながら、今度は左の後ろ脚を捕まえてやる。また、「ぺたん！」だ。この野良犬（なのかどうかも分からんが）に初めて会ったのは四日前。最初の一日はその動きに翻弄されていたが、今ではこの通りだ。思うに、向こうの世界での経験が、ある程度はこちらに生きているということだろう。

五回目の「ぺたん！」の時点で、奴はとうとう諦めた（というか、満足した）らしく、座り込んだままこちらを見つめて尻尾を振る。うん、今日はもう完勝だ。反射神経は、大分戻ってきてるな。

だが、本番はこれからだ。

「ワオン！」

やってきたのは、この仔犬の親だろう、なかなかの立派な三毛色の犬。体重は、三十キロはあるだろう。この隠しボスが現れるようになったのは、昨日…つまりは、この仔犬をあっさりと屈服させられるようになってからだ。どうも、この仔にお手本を見せてやるつもりらしい。流石に年の功か、仔犬よりも素早く、見切りも上手い。前回は、二戦二敗だ。しかし。

「今度は、簡単には負けねえぞ！」

「オゥン！」

一声吠えて飛びかかってくる、三毛犬。だが、その軌道は、目線から軌道を読む『見切り』によって俺には分かっている。素早くかわし、敵の隙を覗う…が、その巨体では簡単に後ろ脚は取れない。前足を払って、そこからか。

高まる鼓動のまま、体を躍動させること、数分。

結果は、またしても二戦二敗だった。

episode1　灰色で楽しい日常3

「ふぅ……っと、やべっ」

数分のじゃれあい（俺にとっては真剣勝負）を終え、家に帰ってきたときには既に六時十五分を回っていた。うん、やばいな。三毛犬にのしかかられ、その際仔犬に舐めまわされたため、俺の体は今、相当に獣臭い。軽くシャワーでも浴びたいが、その時間はなさそうだ。

（しゃーない、タオルでも…）

再び鴬張りの床を歩いて、部屋まで戻る。この、いわゆる「裕福なお屋敷」であるこの家には、なんと「お手伝いさん」なる人物がいるのだ。さすがにその格好は某東京の一部の町にて熱狂的な人気を誇る例のあの服装でこそ無いが、あの割烹着姿もなかなか…いや、そんなことはどうでもいい。問題は、そのお手伝いさんが毎朝俺の（借りているだけだが）部屋に起こしに来るということだ。時間も測ったように正確で、六時二十五分。その時間まで寝ていたら朝食までに五分で身支度をすることになるのだが、幸い俺は起こされるまで寝ていた事はない。

今日も戻って体を拭いておけば、それでよかろう。朝食の席で獣臭いのは何か言われるかもしれんが。だが、今回は残念なことに、そうはいかなかった。

「お待ちしておりました、御主人様」

「……オハヨウゴザイマス」

「お早う御座います。挨拶が先でした、失礼いたしました」

「いや、それはいいですが…」

廊下の前で、その「お手伝いさん」が、お待ちなさっていたからだ。うん、何とも言えない気まずい空気だが、やはりここは俺が口を開くべきなのだろうか。まあ、彼女が開くべきならもう既に開いているだろうからには、俺の役目なのだろう。

「ど、どうされたんです？牡丹さん」

目の前の、臙脂色の割烹着を着たお手伝いさんが、その切れ長の目を半眼に開く。この家にもう長いこと勤めているのだろうこの女性、名前は神月牡丹さん。年は、俺よりやや上といったところだろうが、やや茶色く染められた長い髪が後ろで緩く一つに結ばれており、体は凹凸のでにくい和服でありながらも十分に女性的のシルエットを描いているおかげで随分年上に見える。いかにもやり手の女将…さもなければ、メイド長だ。

普段と違うのは、いつもは隙なく前に組まれている手に、お盆が抱えられていることくらいか。

「当主様の御指示で、御主人様に体を拭うものをお持ち致しました。朝食までお時間がありません。使われるのなら急がれた方がよろしいかと」

やっべー、爺さんにばれてんのか。

「…分かりました、有難く使わせて頂きます。支度が出来たら向かいますので、牡丹さんは先に食堂に戻られてください。それと、「御主人様」は勘弁してください。俺にだって名前ってもんがあるんです。あと、できれば敬語も」

「できません。当主様より、御主人様がこの屋敷にいらっしゃる

間は名前で呼ぶことを一切禁じるとの指示でございます。また、私のことは名字で呼び捨てにしてくださいませ。敬語も結構です」

「……スミマセンデシタ」

この譲り合いのやりとりは、既にこの滞在で幾度となく繰り返されているものだ。いつかは牡丹さんが折れてくれると信じて、抵抗を続けている。残念ながら自分は、そのように呼ばれる事に快感を覚える人種では無いのだ。

とりあえずお盆の上の濡れタオル、さっき用意したばかりなのか、まだ十分に心地よい暖かみを保ったそれを手に、部屋の中に入る。既に布団は片づけられており、更には着替えまで置かれている。これも、全く慣れない。昔のお貴族様はこんな生活ができていたのかと驚くばかりだ。

（っと、そんなこと考えている場合じゃあないな、急がんと！）

ゆっくりしている暇は無い。さっさと着替えないと、朝食に間に合わん。

俺が怒られる分ならまだいいが、残念ながらここではそうでは無い。

俺の為に二年…いや、十九年頑張ってくれた、母さんに迷惑がかかってしまうのだから。

ｅｐｉｓｏｄｅ１　灰色で楽しい日常４

都内から若干離れた土地にあるこの巨大な日本屋敷の名は、「四神守」家。
読み方は、「しじんがみ」だ。

御大層な名前だが、聞いた話ではどうもそれに見合うだけの名家でもあるらしい。嘘かホントか家系はなんと飛鳥時代まで遡り、「王家（勇者だったかもしれん）の四方を守る尊い役目を仰せつかった」という伝説まである…らしい。らしい、とつくのは、この話は俺がＳＡＯから脱出し、まだ入院しながらリハビリしていた時期に母さんから聞いた話だからだ。

ここらへんは、話せば長い。面倒くさいほどに。だからまあ、簡単に言おう。

一、母さんは、いわゆる「お嬢様」として名家に育った。
二、親父と運命の出会い、しかし爺さんはそれを許さず。
三、母さん妊娠、結果二人で駆け落ち。
四、まだ俺が物心つかぬうちに親父他界。
五、母さん、気力と根性で女手一つで俺を育てる。

となるらしい。ちなみにここから、「六、俺ＳＡＯへ。入院費等に困窮した母さん、意を決して実家に助けを求める」となって今に至る。母さんもかなり無理をして、助けを求めたのはＳＡＯ開始一年後の十一月になってからだったらしく、「もう一年耐えられたら、頼らなくて良かったんだけど」と力無く笑っていた。

俺に言わせれば、「バカか」といったところだ。
俺は生きてることが第一だと思う。そのためだったら、プライドなんて喜んで捨てるだろう。俺が同じ立場だったら、別に頭を踏みつけられてニジニジされようが助けてくれと泣き付くことに、なんの抵抗も無いだろう。他人がやってたらちょっと引くかも知れんが。
まあそこは母さんにも譲れない一線というものがあったのだろうが、その母さんを見て育った俺がこうなったところを見るに、親父の遺伝子か。もしそうだとしたら俺は親父の印象が記憶にないことを心の底から感謝する。「父の威厳」というものを、一応男として信じておきたい年頃なのだ。

とにかく。

こうして俺は、ひっじょーに気まずい関係にある、名家の領主である実の爺さんと、今現在一緒に暮らしているのである。

◆

焦らず、急いだ結果は、ぎりぎりセーフと言ったところか。名家の辛いところで、時間がヤバいからと走って馳せ参じられないのは大変だ。ああ、高校時代、パン一枚咥えて通学路を全力疾走していた時代が懐かしい。

到着した際、時間は既に三十分を回っていたが、まだ爺さんは現れていなかった。
先に食事の場についていた母さんが、不安そうな顔を嬉しげにほころばせる。
絹のように美しい黒髪をかんざしで美しく纏め上げた姿は、まさ

に「良家のお嬢様」だ。
だが。

（やっぱ、痩せた、よな……）

母さんは、もともと太かったわけではないが、それでも頬には健康的な膨らみがあったものだ。それが今は、完全にそげ落ちてしまっていた。今は、というか、正確には、俺が囚われていた二年間の間に、ということになるのだろう。全く、親不孝な息子なことだ。心の中でだけ、ごめんと謝りながら、自分の席に着く。ちなみに日本家屋、食事は広間で畳に正座だが、母さんの教えのおかげで俺にとって正座はさして苦ではない。

するりと座って背筋を伸ばしたその瞬間、奥の襖がするすると空いた。

現れたのは、既に一人の老人。既に総白髪、口元の髭まで真っ白だが、身長は俺と殆ど変らず、体重は細身の俺より明らかに多いだろう。その伸びた背筋とがっちりとした立ち姿からは、既に七十近いというのに年齢による衰えは微塵も感じられない。

その「厳格な老人」を絵に描いたようなのが、俺の祖父…四神守（しじんがみ）宗源（そうげん）ということになる。その鋭い黒目がじろりと広間を見回して、広間の畳に十人分以上の朝食の盆の前にそこに空席が無いことを確認し、重々しく口が開かれる。

「朝餉（あさげ）が終わったら、道場に来い」

それは、いつもの朝食の始まりの挨拶では無く、俺に向けられた言葉だった。

マジかよ。

episode1　必然という運命

正座だ。

さっき俺は、正座をすることに関しては苦は無い、ということを言ったが、それを取り消したくなる。確かにただ正座で耐えろというだけなら三十分だろうが一時間だろうが問題ないが、それは時と場合と状況によって変わる基準である。既に、相当痛い。足では無く、主に胃のあたりが。

この「四神守」家、巷では有名な道場でもあるらしい。教えているのは合気道らしく、近所のちびっこ共は勿論、バスや電車で通う輩もいるらしいし、近所の高校生が様々な武道系の部活の練習に使ったりもする、いわゆる「まちの道場」だそうだ。

まあ、場所はいい。よくある場所だ。問題は、場合と状況だ。

場合として、今俺は爺さんに悪事…朝の抜け出しがバレている。加えて、状況として、爺さんと向かい合って正座している。その鋭い目つきはそれだけで結構な寿命を縮めてくれそうだ。更に横には、俺を心配した母さんがこれまた正座している。そして、すでにこの状況が既に三分続いている。体感時間は考えたくも無い。

爺さんは、何も言わない。ただ、心の読めない漆黒の瞳で俺を見据える。俺も、その目を見返す。目を逸らすとマズい、というのは単なる俺の強迫観念だが、あながち間違いでもないだろう。そして爺さんと睨みあうこと、更に二分。先に口を開いたのは、爺さんだった。

「…今日も、出かけるのか？」
「……はい」
「…よかろう、夕餉までには、帰ってくるように」

重々しい声でゆっくりとそれだけ言って、すっくと立ち上がる。その動きは、流石は現役の道場師範だけあって流れるように滑らかだ。そのまま、こちらを一瞥すらせずに道場を去っていく。

うん、これだけで周囲の空気が一気に軽くなったように感じる。あっちの世界で、キリトやアスナ、あるいはヒースクリフといった強者といった人間と相対したときに感じるプレッシャーだった。いや、もっと分かりやすく言えば、ボス戦級の重苦しさだ。

「はあ～…」

思わず、深々と溜め息をつく。隣に母さんがいるが、ここの人たちと違って十九年…いや、二年引いて十七年一緒にいた人だ。俺の性格がどういうものかくらい、分かってくれていると信じて脱力して、ぐったりとだらける。ちらりと見やると、母さんはくすくすと笑って、そんな俺を見ていた。

「勘弁してほしいよ、ったく…」
「また何かしたんでしょう？父さんを誤魔化せるなんて、思ったらダメよ」
「行けると思ったんだがなあ…」

ニコニコと笑うその顔と声は、他の人間には分からないかもしれないが俺には分かる。あれは、自分もホッとしている時の顔だ。恐らく俺が呼び出されたとあって、自分も気が気ではなかったのだろう。

それにしても、母さんはここに来て随分と変わったものだ。
絹のように美しい黒髪は、もともとのぼろアパート暮らしで安物シャンプーで洗っていてすらも目を惹くものがあったが、こうしてしっかりと磨き上げて結い上げてあるとどこからどう見ても良家のお嬢様だ。俺の身長から考えるとそこそこに小柄な体は、着ている薄墨色の着物がこの上なく似合っている。その童顔と相まって、まあ、四十の女性には見えない。
そして、その表情にも、そこはかとない変化が見て取れた。以前は優しさの中にも親としての厳しさ、強さを持っていたのだが、今はそれらがどんどん薄まって、このまま消えていってしまいそうな儚さを醸し出している。

いつ切れるかの張り詰めた緊張感のあった以前と、それが無くなって、意識を張ることの無い今。
どちらがいいのか、俺には分からない。

と、笑って俺を見つめていた視線が、ふっと陰った。

「今日も、行くの…？」
「ん、ああ。リハビリだし。そんなにきつくもないし、晩飯までには帰るよ」
「……そう。気を、つけてね」

……。全く、うちの家系は、どうしてこうも鋭いかね。

心の中で、今日何度目かの溜め息をつく。
いや、俺が言うのもお角違いか。母さんが言うには、「あなたの勘の鋭さは、一族でも飛びぬけてると思うわよ」らしいしな。とにかく、流石の慧眼は遺伝のものか、或いは十九年俺を見守り続けた

経験の積み重ねによるものか。

「んじゃあ、早めに行ってくるワ。散歩もリハビリになるし」

「……うん。いってらっしゃい」

立ち上がる俺に、ゆらゆらと手を振る。なんというか、俺を養うためにブラック会社に勤めていたころに比べれば、時間の流れが二、三分の一にでもなってるんじゃないかと疑いたくなる振る舞いだ。

まあ、いい。気付いていない…止められないなら、好都合だ。

俺は、二人の勘の通り、ただリハビリに行っているだけではないのだから。

episode1　必然という運命2

「ふぅ……」

一息ついて、左手首の時計を見る。午前、十一時半。

時間はまあ予想通りだが、予想外なのは俺の手首だ。細い。もともと細かったが、今はもう向こうで言う所の骸骨モンスターやらゾンビモンスターのレベルだ。

（ま、リハビリのプログラムに不服は無いさ。時間に間に合えば、な）

出てきた病院を、ちらりと見やる。清潔的で真新しい白い病院は、リハビリ施設としてはやや早い時間に始まるおかげで、予約さえ前もって入れておけば、二時間の一日分のリハビリを昼前に終わらせることが出来る。バスでここまで通っているのは、もともと入院していたバカでかい病院の紹介に加えて、この終わりの早さに惹かれたからだ。

なぜなら俺は病院を出るときには既に、とある筋に連絡を取ってあり。

そこからの、仕事をもう依頼されているからだった。

◆

昼前。俺はぶらぶらと当ても無く歩き、近くにあった喫茶店…特

に、失礼ながら客の入りの少なそうな店を選んで入る。今日入った店は、カウンター席が三つにテーブルが二つしかないような激狭な喫茶店だったが、最初に頼んだコーヒーは埋もれさせるには惜しいくらい美味しかった。

もう一杯お代わりを注文し、そこで携帯端末を開く。

朝方、電車の中で送ったメールに、返信があるのを確認する。

心臓が結構な勢いで脈打っているのは、これが所謂「採用通知」…或いは「不採用通知」だからだ。

（頼むぜ、マジで…）

細目で見ながら恐る恐る見る結果は…ＯＫ。

「っしっ……！」

とりあえずはこれでしばらく食い扶持は稼げそうだ。

あの家の暮らしに金がいる訳ではないが、もう俺も十九歳、来年には成人ということを考えるとなんとなく自分で稼がなければならない気もしている。今から大学に行く気が無い俺にとっては、早いとこの職場復帰は欠かせない。いや、高校時代はバイトみたいなもんだったが。

「んで、次は…」

そして、次の依頼を確認する。書かれている、次に俺が行くべき場所。

その場所の名前は。

『アルヴヘイム・オンライン』。通称、ＡＬＯと呼ばれる、妖精の国だった。

◆

俺は、以前に少し言ったかもしれないが、高校時代に既にバイトをしていた。そのバイトとは、『雑誌の投稿記者』…俗称で言うなら、ジャーナリスト、というものだった。といっても、報道会社に雇われている訳ではない。フリー、というわけだ。

そこに至る過程は、ちょっと複雑だ。

お節介な母さんは、俺のことを心配して、ちょっと常軌を逸した（と、今では分かる）レベルで俺に語学教育を施した。日常会話は勿論、敬語やら文法表現やらレポートの書き方、果ては日本人でもどこまで理解しているか分からんような複雑な古典まで学ばされた俺は、学校でも国語は優良児だった。というか、中高の入試も、そして二年までの高校の授業でも国語で困ったことはない。

それが高じて、中学時代から雑誌の読者からの記事募集（ちなみにこの時は取材費という名目での賞金目当てだった）に頻繁に応募し、それが編集者の目に留まってバイトに誘われたのだ。良ければ読者応募ではなく、正規の記者として定期的に記事を書かないか、と。

ＳＡＯに囚われたことで、二年もの時間の経過でそのパイプは既に無い…というかその雑誌自体がまだ生き残っているか不安だったものの、恐る恐るその頃の連絡用アドレスに送ったメールはきちん

と帰ってきた。その内容は、当時の俺の担当もまだ働いていることを伝えてくれて、また雇うかどうかに関しては一つ記事を読ませてもらって判断したい、とのもので…俺は再び、記事を書くために、ＶＲワールドへと旅立ったのだった。

俺の書いていた記事は、主にネットゲームのレビュー、スクリーンショットだった。担当もどうやら俺からは若者の意見というものを聞きたいらしく、それを生かす上でネットゲームは都合がよく、ＳＡＯに行く以前にも幾つかのＶＲゲームを手掛けていた。今回の記事に使ったのは、往年の名作ゲームをモデルにした、赤い帽子をかぶって空飛ぶカメを踏みつけていく主人公になって跳躍するという、当時も販売されていたゲームの最新作だった。

あっちの世界での『軽業（アクロバット）』スキルが生きたのか、超難易度と言われるそのステージを久しぶりのプレイであっさりとクリアしてしまって少々目立ったが、その世界観と懐かしさ、他には出来ないアングルから撮影したスクリーンショットを生かした記事はそこそこに受けたらしい。

こうして俺は再びネットゲームのレビュアー…要するに、数多くのＶＲワールドを旅することを仕事とする様になった。そんな俺に、「アルヴヘイム・オンライン」という、あのＳＡＯに劣らぬと謳われるゲームであるタイトルが勧められたのは、ある意味必然だったと言える。

運命という名の、必然と。

こうして俺は、その妖精の世界へと旅立つことになる。

様々な思惑の渦巻く、仮想でありながらも真実を含む世界へと。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　懐かしき新世界への旅立ち

「なるほどね…。ま、詳しくはやってみて、だな……」

情報端末に開かれた無料の情報サイトを一通り眺めて、俺は一息ついた。

俺が入ったのは、都内の漫画喫茶。店員さんの、この手の店にしては随分としっかりした対応を受けて指定された部屋に座っていた。俺は生前…じゃあなかった、ＳＡＯ突入以前も原稿を書くときにはこの手の店によくお世話になったものだ。まあ以前は取材…要するにＶＲワールドへのダイブ自体は実家のボロアパートでやっていたのだが。

（まあ今は、あの家からダイブする訳にもいかないしな……）

どこで監視されているかわからんあの家でダイブなんぞしようもんなら、爺さんは猛り狂って母さんはノイローゼになりかねん。その点ここなら、さすがに四神守（あのいえ）の監視網も伸びてはいないだろう。

（…それにしても、うーん、やっぱ落ち着くなぁ）

意味も無くのびをしてウンウンと頷く。『アルヴヘイム・オンライン』…通称ＡＬＯについて、一通りは分かった。後は実際にダイブしてみるのが早いだろう。このまま入ってしまおうと決め、座っている椅子の背もたれを限界まで倒す。

普通はフルダイブする際は寝転がるのが一般的だし、最近は確か快適なダイブ専用のアイソレーションタンクなる設備のある場所もあるらしいが、そこまで金に余裕はない。もともと貧乏症の俺にと

ってはこれで十分だ。

（さて、準備しますかね……）

ゆっくりと眼を閉じて数秒。そして、再び開ける。別にしなければならない動作では無いが、現実に戻って以来、コレを取りだす時は、それが習慣のようになっていまっていた。別に、瞑想だとか、ましてや黙祷だとか、そういう訳じゃあないのだが。

近場の預り所から取り出してきたリュックのジッパーを開け、中に手を入れる。入っているのは、そこそこの重量感のある、大きくて円形の物体。似た物を上げるなら、バイクのヘルメットか。引っ張り出して、一旦テーブルの上に置くのは。

悪魔の機械と謳われた、ナーヴギアだった。

◆

病院で目覚めた当初、俺の元にはすぐに総務省の役人だと名乗る男たちが訪れた。聞くと彼らはＳＡＯ内の俺のレベルや存在座標の追跡から、俺が所謂『攻略組』（実際には違うのだが…）だと考え、一体何が起こったのかを聞きに突撃してきたらしい。はっきり言ってお門違い、寧ろ俺の方が何が起こったのかを是非説明して欲しかったくらいだ。

まあ、それはいい。

その中で彼らに話した情報で、最も重要視されたのは「ＳＡＯ世

界での積極的殺人歴のあるプレイヤーの名前」だった。向こうでは情報屋でもあった俺は、他の一般プレイヤーよりもそのあたりの情報に詳しかったので、これはお役人方にとってはかなり有用だったそうだ。確かに、向こうで殺しの味を占めた連中だ、お役人達も開け放つには不安だろう。

まあ俺もバカではない。言われるままに情報を渡したのは当然無償では無い。取引だ。

俺が求めた条件は、たった一つ。

このナーヴギアを、持ちかえらせて貰うことだった。

◆

電源に接続して、準備を整えてナーヴギア…俺を二年間拘束し続け、ともすれば俺の命を奪ったかもしれないこの名高い悪魔の機械…を、ゆっくりと頭に装着した。そこに、恐怖は無い。なぜ、と問われると理由は分からないが、帰ってきて初めて被った時も、全く恐れは無かった。

被った瞬間、鼓動が安らぐ。

まるで、誰かに守って貰っているような、安心感。

勿論、そんなものは俺の錯覚だと重々分かっているのだが。

「リンク・スタート」

呟いて入っていくのは、仮想の世界。いや、仮想の世界、という

のも違和感があるか。俺にとっては、もう一つの現実とでもいうべき場所だった…いや、今でもそうだと思っているのだから。

（全く、なーんでこうなったかね……）

真っ暗な世界に入り、あちらの世界での感覚を設定するための諸動作を行いながらぼんやりと考える。なんでこうなったのか、を考えているのではない。その理由は、分かりきっているからだ。考えているのは、その原因となった、彼女のこと。

彼女のことは、一向に分からない。

いや、常識で考えれば死んでしまっているだろう。ＳＡＯ事件がその終焉にどういった経過を辿ったのか詳しくは知らないとは言っても、向こうでの死者が本当に死んでいた事……四千人近い数の犠牲者がでたことくらいは、俺だって知っている。

だが俺は、どうしても彼女の死に実感が持てなかった。あの世界で最後に得た仮説…まだ彼女が生きているのではないか、というのを積極的に信じている訳ではない。もし俺の推測通りに彼女が待機空間というべきところにいたとしても、あの世界が終わってしまったのなら当然生きてはいないだろう。

それとも。

（まだ俺は、あの世界がどこかに残ってるとでも思ってんのかね……）

思考では無く、感情で。

俺がナーヴギアを頑なに求めたのも、心のどこかでもう一度…と願っているからかもしれない。

或いは、この世界が夢で、目が醒めれば向こうに帰れると。

（…くだらないな……）

取り留めのない思考の中、設定が終わる。

続けて、キャラの設定。性別、名前…入力はまた、「シド」だ。

どうやらこのＡＬＯ、大空を自由に飛びまわれるらしい。この名前は昔の超大作ＲＰＧでは有名な飛空挺乗りのものだ。いかにも空中戦を支配してくれそうではないか。

最後に選択するのは、自分の種族。

決めていた。この種族の肩書きを見たときから、決めていた。見た瞬間、懐かしく、本当に楽しかったあのギルドの事を思い出したから。

選択する。

『音楽妖精、プーカ』。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　懐かしき新世界への旅立ち２

突入した俺が降り立ったのは、システムが正常に作用しているのなら、選択した種族である音楽妖精プーカの首都、ということになるのだろう。周囲を見回してまず上げた声は。

「…すげえな、こりゃ……」

そのＳＡＯに勝るとも劣らない、素晴らしいグラフィックのスペックだった。

プーカは、妖精の肩書きとしては「音楽妖精」となっているが、その生活や外見を簡単に表すなら所謂「サーカス団」というのが近いのだろう。他の妖精たちがそれぞれある程度統一された色調の姿を持っているのに対して、プーカはかなり自由度…というか、キャラのランダム度が高いようだ。見回した周囲は平日の昼ということもあってか驚くほどの人通りというわけではないが、その様々な、それでいて鮮やかな色合いのひしめく人波は、見ていて圧巻だった。燃えるような赤髪の青年がいるかと思えば、絹のように滑らかな黒髪を靡かせる少女もいる。美男美女ばかり、というわけではないが、それさえもサーカスのような楽しい雰囲気にマッチして感じる。

「…って、賑やかだな」

次に気付いたのは、周囲から流れてくる多種多様な音楽。ゲームセンターの様に耳が痛くなるような五月蠅さでは無い、心の踊る様なＢＧＭ。町全体で一様に感じられる音楽に混じってかすかに聞こえるのは、道端でギターのような楽器をかき鳴らす少年のものか。見れば至る所でそういったストリートミュージシャンのような人達

がおり、中には人気なのか人だかりがあるところも見られる。そういった全てが、なんだか心を楽しくさせてくれる。

ボーっと突っ立っているのもなんのなので、とりあえず歩いてみる。近くを通ると、或いは視線を向けるとシステムの補正がかかるのか、そこの音楽が聞こえてくる。心が跳ねるような楽しいポップ、しっとりとしたバラード、中には全力のシャウトも聞こえたりした。

周囲の建物も、個性的だ。

街の中央に立つ、目に優しい茶色の高い建造物は、恐らくここが首都たる所以となる「領主館」とやらだろう。あの世界でも美しい建物、荘厳な城などはいくつも見てきたが、それに劣らないセンスの良さを感じさせる建造物。

だがそれよりも俺に印象深かったのは、周囲に立ち並ぶ街中の家々だった。いやそれは、家と呼ぶのはおかしいかもしれない。なぜならそれは、布で作られた幅広の円錐形…いわゆる、テント、というものだったのだ。大きいところ…看板から見ればおそらく宿屋か…では、コテージのようなものもある。街のサーカス団、或いはジプシーとでも言うべき雰囲気に、とてもマッチしている。

「いいじゃん」

心からそう思う。うん、いいじゃないか。これなら取材というだけでなく、プライベートにも十分に楽しめそうだ。浮かれた気分のまま、邪魔にならないような場所まで歩いてきたのを確認して、ウィンドウを開き、

「…っ！？」

眉を顰めた。

「バグッてやがる…のか？」

開かれたメニュー画面。名前のシド、ＨＰ（ヒットポイント）、ＭＰ（マナポイント）、種族名の「プーカ」、これはいい。間違いないし、数値も初心者然とした（まあこのゲームは完全スキル性なので、成長してもさほど増えないらしいが）ものだ。

問題はその下にある、スキルスロット。

数値…熟練度が、おかしいのだ。普通は初期値の０か１のはずが、埋まっているスロットの殆どが三ケタなのだ。いや、中には四ケタ…すなわち上限の１０００に達して、マスター表示が付いているものすらある。そもそもなんだ、普通は初期ならこんなにスロットが埋まっているはずが無いだろうが。

その表示を、じっと見つめる。ゲームマスターに連絡すべきか、どうか。

ちなみにバグに恐れをなしている訳ではない。寧ろ逆だ。

こういったＶＲＭＭＯで、スキル熟練度というのは途方も無く長い時間をかけて成長させていくものだ。今のこの熟練度まで達しようと思ったら、一体何カ月…いや、下手すると年単位でかかってもおかしく無いかもしれない。正直、勿体ない。

（バグ、ねぇ……というか、この数字、どっかで…）

そこまで考えた瞬間、まるで電撃に打たれた様に頭が働き始めた。

そうだ。どうして忘れていたのだ。

埋まっているスキルを見てみろ。体術、軽業、索敵、暗視、罠解除……これは。この数値は。

「…ＳＡＯの、俺のキャラデータ…？」

間違いない。そこに並ぶ数値は、俺の記憶のそれと完全に一致している。視界が、急に歪む。映像の解像度が落ちた訳ではない。逆だ。ナーヴギアから視覚野に与えられる情報量に、俺の脳の方がついてこれなくなったのだ。脳裏にフラッシュバックした、ＳＡＯの世界の記憶のせいで。

どういうことだ？
なぜここにＳＡＯのデータがある？
混乱がさらに混乱を呼ぶ。体が、得体のしれない浮遊感に包まれる。

ＳＡＯは、まだ続いているのか？
それとも、これが夢なのか？俺の深層心理が創った幻想か？

それとも…再びあの世界に、帰ってきたのか？
彼女の…ソラのいた、そして散った、あの世界に？
いや、散ったのか？もし、もしここがあの世界なら。そして俺の仮説が正しかったなら。

俺はまだ、ソラを追いかけられるのか？

「う、うあ……っ、っ！！！」

あまりの感情の本流に絶叫しなかったのは、自分でも褒めてやりたい。
だが、それでも俺は、心の揺さぶりのままに走りだした。どこに行くでも、何を為すでもなく、ただただ想いのままに、全力で。向

こうの世界では『旋風』と呼ばれたその速度で走りはじめ、

「へぶっ！！？」

ド派手にコケた。初速はあの世界での一極ビルドで鍛えたそれに勝るとも劣らなかったようで、顔面からつんのめったまま派手に体が地面を滑った。体をおろし金にかけたような不快な刺激は、ここが自種族の領内でなければ相当量のＨＰが減ったろうと思われる。

「っ、な、なにが…」

仮想世界初心者のようなミスに、ふらつく頭を抑えて立ち上がり、その原因を探そうとして。

「って、なんじゃこりゃあああっ！！？」

…今度こそ、絶叫してしまった。

人が集まってこなかったのは、不幸中の幸いだったが。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　懐かしき新世界への旅立ち３

「……まじかよ……」

冷静さを取り戻した俺は、肩で息をしながら周囲に茂る針葉樹の一本にもたれかかっていた。

いや、訂正だ。とても冷静さなんぞ取り戻していない。だってさ、これ。

「…なんだよ、この体…まじかよ……」

俺は、失念していた。ＳＡＯではゲーム開始直後、《手鏡》なるアイテムで自分の容姿を強制的に現実のそれと一致させられてしまったせいで、本来はＶＲワールドは「別の自分を作り上げる」ということも求められていたことを。先程の派手な転倒。その理由は、すぐに分かった。現実の自分と、この世界の自分の体の感覚の不一致だ。

「……まじかよ…」

今日三度目の「まじかよ」を口にして、空を仰いでいた頭をがっくりと俯けた。

このプーカ領、確かこのＡＬＯ世界では北の方に位置するおかげで少し北…ノーム領側まで行けば雪が積もっている。所々にある水溜まりは、凍りついている。まるで、鏡のように。うん、正直どこまでも嬉しくないが。

がっくりと俯いた拍子に、足元の水溜まりをしっかりとその目に捕えてしまう。その表面に映る顔を、見て、四度目の「まじかよ」。……やめよう、これ以上数えても不毛になるだけだ。その、顔はいい。現実の俺の、寝ぼけ眼がしっかりと再現されているのは頂けないが、十分に及第点だ。現実の俺と違って、随分と幼さの残る顔であるのだが。耳の尖りも妖精らしく、燈赤色の髪もこの世界ではポピュラーな色合いで特には目立つまい。そこもいい。

問題は…いや、つらつらと語ってもしょうがない。

俺の、この世界での体を、一言で表現してやろう。

チビ、だった。

「…まじ、かよお……はは…」

笑ってしまう。ちなみに俺は親父の血のおかげか、幼い頃から背は高かった。一般には幼少期に背が高い人間は二次成長期に背が伸びないみたいな話を聞くが、俺はその例にはあてはまらずに順調に成長を続け、ＳＡＯ開始時は百八十五センチ程はあったのだ。その俺が。

「下手すると、百五十くらいか…？ははは…」

どこからどうみても、チビすけだった。ここまで我を忘れてきてしまったのも頷けるだろう。いや、きと頷いてくれる。いや、誰が頷くのか。全世界の高身長の皆さんだろう。いや、逆に小さい人も頷いてくれるんじゃないか？というか俺は何を考えてんだ？

よくよく考えてみれば、この針葉樹森、既にノーム領寄り…つま

りは、プーカの領外まで来てしまったようだった。領外では異種族間ならキル推奨、というハードなタイトルのこのＡＬＯで、まともに装備品や所持アイテムすら確認していない状況はよろしくない。いや、ゲーム開始直後だし死んだって特に問題はないのだが。

「いや、でも、それにしても……まじかぁ……」

それにしても引き摺りすぎだろ俺。

しかし、今思えばこれは結構、精神安定上良かったかもしれない。いや、別に森林浴の効果を実証したいわけでは無く、こんな馬鹿な理由で頭を抱えていられたからだ。もしあのまま、あの世界を…ソラのことを考えたままだったら……最悪、発狂してしまっていたかもしれない。とりあえず今ほど落ち着いては居られなかったろう。

だが、まあ、この時は本当に縮んだが深刻だったわけで。

「どうすんよ…もっかいアカウントとるか…？でも追加料金……」

俺はなおも、そんなことに悩み続けた。一体何分悩んでいたのかは、自分のバカさ加減を晒すだけなので控えておこう。というか、正直正確には覚えてすらいないのだが。

その思考を断ち切ったのは。

……ッ！…っ…ぉっ！！…

…っ！……？

……！！！

鍛え上げられた危機察知能力の捕えた、森の奥からの話し声…い

や、怒鳴り合いの声だった。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　妖精たちとの空中戦

とりあえず突進した俺が見たのは、五人の妖精たちだった。いや、これは……うん、五人と一括りにするのは忍びないし、情報を伝えることを生業とする者として頂けないだろう。訂正しておこう。

一人の妖精の女の子と、四人の男性プレイヤーがいた。

「なるほどなあ…外見ランダムってなかなかの弊害があるな……」

思わず思ったことがそのまま口に出てしまっていた。

見たところ、一人の妖精の女の子を四人のプレイヤーが取り囲んでいるようだった。ＡＬＯ、「異種族間ではＰＫあり」というハードさを売りにしたタイトルで、他種族をキルすれば名誉値などのボーナスも与えられるらしい。ということは、これはゲームとしてのＰＫであって、獲物である女の子を四人で狩っているということか。ちょっとカッコ悪いが、まあ狩れる獲物を狩るというのはゲームの黎明期から続く常識だ。

（っと、で、この外見は…）

素早く見やったそれぞれのステータスから、その種族を見る。四人組はどうやら二人がケットシー、二人がノームの混成部隊のようだ。ということは、別に異種族同士仲良くしちゃいけないってわけでもないのか。種族で言うならノームは、その黄土色の髪とやや色素の濃い肌でいかにも「土妖精」といった姿。ケットシーは毛色は

二人で異なるところをノームのように統一はされていないのだろうが、頭の上の猫の耳が特徴的だ。

そして俺が「妖精」から「プレイヤー」と言い直した理由でもある四人の容姿に関しては、何も言うまい。向こうもそれは望まないだろう。俺は一応ジャーナリストだが、誰も幸せにならないような情報を伝えるのは好みでは無い。

対する一人の女の子は、小柄な体をセンスのいい法衣（ローブ）に包み、顔で特徴的なのは、時代を何十年か間違えたような巨大なまんまる眼鏡…あれか、牛乳瓶の底のような、という奴か。頭はショッキングピンクの胸まで届く長い髪を、顔の左右で束ねている。

その鮮やかな髪の毛の色から予想してはいたが、ステータスの下に表示されるこの少女の種族は、音楽妖精（プーカ）だった。つまりは、種族的には俺の味方で、俺の助けるべき相手なのだろう。だが、正直俺はこの時点で、彼女を助ける気は一切無かった。

（だって俺、種族強化とかより観光目的だし……）

助ける気は無い。気は、無かった、のだが。

「なんだコイツ！おめぇの仲間か！？」

「まさか！バリバリの初期装備じゃないかよ！単なるバカだろ！！！」

「それより今なんつった！？バカにしやがったか？」

四人が、油断なく武器を女の子に突き付けながら、俺の方を睨みつけて威嚇する。

向こうから突っかかってこられては、俺も自己防衛せざるを得ない。だがまあ、それは誤解だ。確かに思ったことは口に出す前に一

度考えるべきだし、口は災いの元ということわざだってある。しかしその誤解を解くのもまた、口だ。弁明をすべく口を開く。なんかピンク女が「はやく逃げてっ！」だの言ってるが気にしない。誤解を解いて快く狩りを再開して貰おうと

「調子のんなよこのチビが！！！」

予定変更。事情が変わった。

「てめえら全員、皆殺しだ」

口を出る直前だった謝りの言葉を挑発に変えて、俺は地面をけって弾丸の如く男に飛び掛かった。

貴様ら、絶対に許さん。俺の心を傷付けた罪は重い。死罰で償って頂こう。

俺は猛烈に反省していた。

幼い頃から背の高かった俺はそう呼ばれたことが無かったせいで、この言葉が人をどれほど傷つけるかを分かっていなかった。いや、「これは人を傷つける言葉だ」という認識はあったが、本当の意味でその傷の大きさを理解していなかった。

こんなにも、痛いなんて。

だが若干、俺の「傷ついた」の感情表現は、人と異なっていたかもしれない。

それは、世間で言う「怒りの暴走」に近かったかも。

「はっ……！！！」

「なっ……」

一瞬で俺のことを「チビ」呼ばわりした男の眼前に構え、間髪入れずに引き絞った貫手を放つ。ＳＡＯ世界であれば《エンブレイサー》と呼ばれた、素早い一撃。あの世界、それこそ数限りなく繰り出し続けたその動きは、ソードスキルのアシストなしでも繰り出せる程に体に染みついている。

すさまじい勢いで繰り出されたその右手が、男の喉元の直前で止まった。

頭一つは高い相手の顔を、睨むように凝視しながら。

「な、な、なっ…」

「……ちっ」

男が、突然の俺の戦意に対応しきれず、手にした武器を構えることすら出来ずに口をパクパクさせる。ケットシーの特徴なのだろう猫耳が、なにを思ってかぴくぴくと震える。俺はそれを機械的に確認しながら……深い位置からの、素早い足払いを放つ。

男が慌てて飛び退こうと頭で思ったのだろう、顔に恐怖を露わにした時には、既に俺の足払いは完了していた。全力の下段の回し蹴りは、それ自体もダメージ判定を持つ。派手にすっ転んだところに放つ追撃は、《ルーフ・ブレイク》…現実で言う、空手の瓦割り。ヘルメット類を装備していなかった頭部に、凄まじいスピードで炸裂したそれに、男の顔が驚愕に歪み。

茶色い炎を上げて、燃えるようにその体ごと消滅した。

「なっ……」

「まじかよ…」

二連の攻撃で、男のＨＰ…まだ六割は残っていただろうそれが、一気にゼロになったのだ。他の三人の男たちが、呆気にとられた様に固まる。ピンク女も、口をあんぐりと開けて停止する。先程の絶句は、その四人からでたものだ。ちなみに「まじかよ」の呟きは、俺だ。

正直、結構驚いた。

この世界での、ダメージ計算式は、ＳＡＯのそれとは異なる。攻略サイトで見たところその変数は「武器の攻撃力」、「防具の性能」、「攻撃のヒット部」、そして「攻撃速度」の四つ…つまり、ＳＡ

Oで言う所の『筋力値』が関係しないのだ。つまり敏捷（この世界では反応速度だけで決まるらしい）さえ高ければ、十分な量のダメージが発生するのだ。結論、超非力アバターだった俺でも、それ相応のダメージ量を与えられることになる…とは思ってはいたが。

（こいつは、予想以上だ…）

確かに当てた二発のどちらも、ちゃんと革製鎧の隙間を突くように入れた。加えて、一撃一撃も、結構な威力を持つ単発の重攻撃だった。だがそれでも、たった三発…実質二発で、あのＨＰを削り取った。うん、向こうの世界では味わったことの無い快感だ。なかなか気分いいな、これ。

そして、もう一つ。

（こっちも、予想以上だ…なぁ……）

構えたまま、ちらりと右手を見やる。さっきの《エンブレイサー》は、別に寸止めを狙った訳ではない。腕の長さが、全く足りなかったのだ。一応は結構深めに…手首まで貫通するくらいのつもりで繰り出していた。

それが、寸止めにしかならないほどに、俺の今の腕は、短い。今まで通りの感覚で技を繰り出しては、今の体との差によって攻撃が当たらないということだ。二回目の足払いの蹴り技も、思い描いていたのとはやや異なる軌道だった。

いや、それもまだいい。感覚自体はまた慣れればいいのだが、問題は根本的なリーチの短さか。こればっかりは、頭が慣れてもどうしようもない。ぎりぎりの命の削り合いであれば、それは命取りになるかもしれない。まあ、そこまで切羽詰まった戦闘は、しないつ

もりではあるのだが。

「っ、な、なんだコイツ、やべえぞっ！？」

「あ、慌てんな、一旦飛んで距離を取るぞ！」

俺が「待ち」の構えとみた（実際は物思いにふけっているだけだ）のか、三人が一斉に空中へと飛び上がる。おや？この世界では空を飛ぶのに初心者はコントローラを用いると聞いたのだが、目の前の三人は何も使わずに飛びあがった。つまりはあれは『随意飛行』という、熟練者、一流戦士の証といわれる代物か。…ってあいつらで一流なのか？

「っ、あいつら、この辺では敵無しのＰＫギルド、『空飛ぶ狩人（フライング　ハンター）』の連中なんだよ！？こと飛行に関しては『随意飛行』がギルド加入の最低条件、その戦闘の腕も相当のものだ、って！き、キミは『随意飛行』出来るの！？」

「出来ん。『随意飛行』どころか飛んだ事ねえ」

「えええーーっ！！？」

なんか言ってきたピンク女の言葉に脊椎反射で返答すると、絶叫がかえってきた。うるせえな。

確かに闘技場でデュエルでもしようもんなら、相手が飛んでいてはこちらは攻撃出来ない。投げ槍などの投擲武器はおろか、まともなリーチすら無い《体術》使いの俺ならなおさらだ。そのうえこの世界は、『ソードスキル』の代わりに魔法がある世界。奴らも遠距離攻撃手段には事欠かないだろう。

だがそんな状況で、こんなに俺が落ち着いていられるのにはそれなりに訳がある。

……ここは、闘技場ではない。真っ直ぐで頑丈な木々の茂った、針葉樹林の森だ。

「……ここなら、飛ぶ必要はない。跳べば、いい」

呟いて、全力で地面を蹴る。この世界でも可能なのか少々不安があったが、『軽業（アクロバット）』のスキルはこの世界においても力強く俺の体を支持してくれたようだ。跳躍した先の木を足がしっかりと踏みつけることが出来、一瞬で体勢をしっかりと立て直せた。再び跳躍。

「おおおっ！！！」

三角跳びの要領で次々に幹を蹴って、みるみる高度を上げていく。こんな曲芸移動は初めて見るのか、連中は俺のこの跳躍に対策を取るどころか動きを目で追うことすら出来ていない。これでホントに一流なのか？いや多分、「とりあえず随意飛行はできる」ってだけだろう。

「なっ、ぎゃふっ！？」
「こ、このチビ、ぐえっ！？」
「た、助け、ひいいぃ！」

飛行する三人の、更に上からの一撃を背中…飛行の要になるらしい…に入れて、その力のまま地面へと叩き落とす。今回は跳躍しながらの攻撃だったため、ソードスキルのアシストなしでは満足な攻撃力は無かったようで、それぞれ一割もＨＰは減っていない。落ちた連中はすぐに起き上がり、降りてくる俺を今度は必死に目で追う。

と。

「うおっ！！？」

俺の体が、大きく傾いた。

episode2　妖精たちとの空中戦3

「うおっ！！？」

吹っ飛んだ俺のバランス。視界が大きく回転する。
あちらさんの攻撃では無い。太めの木の幹を蹴った足が、大きく滑ったのだ。

やられた。確かに『軽業（アクロバット）』のスキルは、万能ではない。確かにしっかりと足をつければある程度は自動的に体勢を整えてくれるなどといった補助効果があるが、あくまで「しっかりと足をつけた」とシステムが判断してくれればこそ、だ。

（やっちまったっ……！）

今の俺の体は、本来の俺の体と比べれば遥かに小柄だ。装備重量こそ超軽量だったあの頃と比べてもいい勝負だろうが、身長は三十センチは低く、手足もそれに伴って相当に短い。あの頃と同じ感覚で飛び回っていては、足がついていかなくなるのは当然のことだった。

正直、致命的な隙だ。
いくら『随意飛行』しかできない雑魚とは言っても、これを見逃してはくれまい。

落下の途中にある別の木の幹に蹴りを入れて、なんとか軌道を変える。と同時に、紅い光が俺の体を掠めていった。走るのは、微妙な熱さを感じる衝撃。弾き飛ばされながら見やると、三人のうち一人がなんだか良く分からない言葉…恐らくあれが「魔法」、という

か「呪文」という奴だろう…を唱えている。

急がないと、さっきの攻撃が来るだろう。いや、さっきの攻撃ならまだ回避の余地はある。だが、もう一度アレが来るとは限らない。全くの未経験の技が来れば、さすがにそれを初見で絶対回避できる自信は無い。かといって、不用意に降りたら待ち構えた二人に同時に襲われてしまう。

（どうする……っ!?）

迷いは、一瞬だった。

「ぐあっ!?」
「くっ!?」
「ぎゃあっ!!!」
（な、なんだ……っ!?）

理由は、下の三人がこぞって体勢を崩したからだ。と同時に、俺の頭にも微かな揺らぎが生じる。…これは、なんだ?分からなかったが、まるで…そうまるで、高校生時代に経験した酩酊感が、唐突にやってきたような。いや、親とケーサツさんには内緒だが。だがそれでも俺は軽症のようだった。

下の三人は頭を押さえてふらつき、一人…さっきまで素早くなにかを呟いていた男はがっくりと膝をついている。揺らぎは、あの連中のように、体勢を整えられない程ではない。とりあえず、チャンスは今しかない。

「はあああっ!!!」

いい感じに視界に迫ってきた幹を蹴って落下の向きを変え、急角

度で飛び掛かる。狙いは、呪文を唱えていた軽装のケットシーの魔法使い（メイジ）。驚いて慌ててロッドを構えようとするが、遅すぎる。連続技を見舞って、すぐさま沈める。今度は黄土色のエンドフレイム。これも種族で異なるのか。

反撃に備えて振りかえった先にいた二人の男。だが。

「ひ、やべっ！！！」
「に、逃げるぞ！！！」

その体は既に後ろ姿で、得意の随意飛行で飛び去っていくところだった。おお、はやいはやい。俺の全力疾走くらいあるんじゃないか？まあ、別に是が非でも殺さなきゃならん理由があるわけでもないし、追うのは諦める。

チビと言われたことを許した訳ではないが。

「ふぅ……」
「き、キミ、何者なの…？プーカがたった一人で、四人を相手に…それにあの動き……」

と、背後から突然声がかかった。正直、結構ビックリした。いや、いるのは分かってたけど、意識的な視界に入っていなかったというかなんというか。

振りかえったすぐに見える、驚きと恐怖、そして好奇心の混じった顔。

若干好奇心の度合いが強いのが、丸眼鏡の下の、ブルーの瞳の輝きで分かる。

ああ、面倒なことになったな。

やれやれ。予想される質問はいくつも思いつくが正直に答えるのが面倒なものばかりだし、なにより俺自身がよく把握していない部分も多い。そして俺は別に、一人旅で十分だ。ビジネスライクに生きていくつもりなので、あんまり親しい奴なんていらんのだがな。

「はぁ……」

だが、一応、それをズバリ指摘しない位には、人間が出来ているらしい。自分で言うのもなんだが。　とりあえず、早くも巻き込まれたらしい厄介に、溜め息をひとつついておいた。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　思い出達の行方

一旦プーカの首都に戻ろう、となってはや三十分。もう街…といってもでかい領主館が、だが…見え始めたころまでに分かったことは、とりあえずは一つ。俺が、飛行が壊滅的に苦手だということだった。

◆

ピンク女…モモカも、俺が飛行初心者だと知って、飛行のイロハを随分丁寧に教えてくれて…ものの五分で諦めた。主に、俺が音をあげたせいで。

なんというか、無理だった。

生理的に無理だった。

だってあれ、地に足付いていないんだぞ！？無理無理、だって弓とか飛んできたらどうすんだよ！？緊急回避の仕方が全くの絶無じゃないか！？そもそも片手が塞がるなんて戦闘において致命的だし、自分の体の動きを指先だけで操るのも相当に違和感がある。自転車だって両手両足使うだろう。スティックだけなんて仮想世界でも俺には無理だ。

この独特の飛行手段がＡＬＯの大人気の理由の一つであり、一部の上級者…いわゆる「随意飛行」なるスティックなしの飛行をこの上ない快感とする「スピードホリック」なる人種もいるようだが、

俺はどうやら彼らとは一生分かり合えないだろう。

速攻で飛行の習得を諦めた俺に、モモカが「でも飛行出来ないと時間かかっちゃうよ？」と言った。成程この世界において、飛行の速度は使用者の心持ち一つで操作できる。全身の動きを考える…つまりは走る動作を全てイメージするのに比べれば、格段に速度を出せるだろう。

そんな彼女に、俺はにやりと笑った。

別にそんなもの、走る速さが十分に出れば問題ないのだから。

◆

「ねえーっ！キミなんでそんな走れるのーっ！」

数メートル上を飛行しているモモカが、飛行しながら地を走る俺に声をかける。プーカ領近くは草原地帯となっているため低空飛行が可能で、両手でラッパを作ってまで叫ばずともこちらに良く声は聞こえているのだが、なんというかそれは気分なのだろう。

彼女の顔には、驚きが張り付いている。それはそうだろう。草原地帯とはいえ、空を飛ぶのと同じスピードで地を駆け抜けているのだから。だがまあ、この反応は俺にとっては割と慣れた反応だ。

あの世界、俺の疾走は全プレイヤー中最速動作の一つと謳われたのだから。ふと思い出すのは、いつか駆け抜けた四十三層のフィールドだ。俺とキリトの二人のデッドヒートを、皆が見つめ、助け、

応援してくれていた。

そうそう、そう言えばモモカは、なんと随意飛行ができるようだった。見た目によらず熟練者というわけだ。まあ俺の情報サイトで得た知識だとシルフやケットシーのスピード、サラマンダーのパワーのような補正の無いプーカは基礎戦闘力では劣るらしく、自分のように随意飛行まで出来るプーカは少ないのだと言っていた。

「走れるから、走れるんだよ！」

草原地帯を失踪しながらその体をちらりと見やる。昆虫系のシンプルなデザインの羽だが、音楽妖精にふさわしい美しい高音を響かせているその姿は、いかにも妖精といった風貌だ。ピンク色の髪も相まって、幻想的な美しさがある……が、なぜかその表情は冴えない。領地が近づくにつれて、無視できないレベルで顔に陰が差していく。

（…間違いなく、なんかあるな……）

俺の勘は告げている。

戦闘には向かない音楽妖精が、何故あんなところにいたのか？そもそも随意飛行が出来るほどのキャリアを持ちながら、彼女は四人に囲まれている時一切の武器を持っていなかった。ちょっと俺も冷静では無かったために記憶が曖昧だが、確か持っていたのは腰に差した横笛だけだったはずだ。

そしてどうして首都が近付くにつれて、ここまで彼女の表情が曇っていくのか。確か俺の見た情報サイトでは、首都を追放された「レネゲイド」なる妖精もいたはずだが、もし彼女がそれなら首都に行く前に止めたはずだ。

（まあ、いいか。これ以上問題を背負いこむのは無理だしな…）

走りながら考える。今は、自分のことで一杯一杯だ。他人の事情にまで首を突っ込む余裕はない。

話すなら街に行こう、と俺が言ったのは、いくつか確認しておきたいことがあったからだ。

彼女のことではない。俺がこの世界ですごしていく為に、必要なことだ。

一つは、俺がこの世界に来た理由…仕事の為に。

そしてもう一つは。

俺が、この世界で見つけた、心の奥底の、望みの為に。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　思い出達の行方２

首都に到着したときには、モモカの振る舞いはもう俺でなくても十分以上に変だと分かるものになっていた。街の郊外に降り立ち、歩き出す時にはまるで何かから隠れるように俺の体の影に隠れようとしているし、落ち着きなくきょろきょろと周囲を見回し続けている。

「……そのっ…角のさき……左…や、宿屋……」

声は、まるで蚊の鳴くように小さくてかぼそい。この賑やかなプーカの首都では、聞きとるのに一苦労だ。このまま話してサヨナラでも良かったのだが、この音楽ではまともに話も出来そうにない。仕方がない、大人しく宿屋まで向かうか。

「そ、そこ……、二人用の、談話室……」

別に車のナビでもないのだが、案内されつつ宿の中に入る。というか、彼女の小さな右手がしっかと俺の服の袖を掴んでいる。なんだなんだ。まあ流石に昨日の今日どころか会ったばかりだ。これで好意を抱かれていると錯覚出来るほど、俺もおめでたくは無い。ＮＰＣ店員にも声をかけようとしないモモカに代わって、部屋を取る。

（何を怖がってるのかね……）

自分の種族の領土内では、ＨＰゲージを減らすことが出来ない。であるから、キルの心配はないし、何よりも安らげる場所だ……が、それはあの世界での話か。キルが死と同義であり、何よりも避けるべき事態であったＳＡＯとは違い、この世界でならキルされるより

恐ろしい問題が山ほどある。たとえば、

（ギルドの不和、とかな……）

まあ、いい。それこそ俺が聞いてなんとかなる問題でもないしな。

◆

「ぷはっ！……あ、ありがとね！ち、ちょっと人ごみって苦手なの！」

「そうかい」

部屋に入ってドアを閉めた瞬間、まるで本当に息でも止めていたみたいに大きく息をついて捲し立てる。俺には分かるがあれはドアを閉めて、「内部音声が遮断された」瞬間だった。誤魔化そうとしているのがバレバレだが、いちいちそれに突っ込みもしない。話が長引くのは、正直面倒だ。

「ごめんね、私がちゃんとお金払うから、」

「いいさ、このくらい。というか…」

ちょっと気になっていた事象を確認しておく。

「一応断っておくが、俺は年は十九だ。ガキ扱いは、正直心外だ」

「え、ええっ！？あ、そ、そうだよね、いや、そうですよね！」

「……いや、別にＶＲＭＭＯで敬語を求める訳ではないが、そこんとこ了解してくれ」

「あ、は、はい、じゃなくて、うん！わ、分かったよ！」

…全く、どいつもこいつも。まあこの先会う奴ひとりひとりに誤解を解いていくわけにもいくまい。俺が慣れていくしかないのだろう。勿論、チビ呼ばわりする奴を鉄拳制裁することに関しては全く躊躇いはしないが。

「んじゃあ、折角の縁だし、お話しようよ！シドはなんであんな強いの！？飛べない癖にさ！」

「…以前は格闘系のＶＲゲームやってたんでな。ああ言ったラッシュやジャンプは得意なんだ」

「へーっ。じゃあキミも戦闘メインで来たの？」

「戦闘メイン？」

聞いたことの無い単語に、思わず聞き返す。

「ああ、そっか、分かんないよね。戦闘メイン、っていうのは、プーカの種類だね。プーカは大きく分けて三種類なんだ。一つは、完全にお仕事としてこの世界に来る人。ここならウィンドウいくつも開けるし、目とか指とか疲れないし、事務作業をしに来てるんだ。このテの人には、近場で新しいＢＧＭとかが買えるからプーカは人気なんだ。二つ目は、音楽をしに来る人。プーカは楽譜からの自動楽器演奏とか、キーを弄っての声の質を変えたりとかができるから、自分の好きな声、好きな楽器が自由に使えるんだ。それでストリートで歌ったり、作曲とかしたりする人達。で、三つ目が、」

「その戦闘メイン、って奴らってわけだ」

「うん！執行部の人たちとか領主さんとかは、すっごい強いんだよ！プーカは大した特殊技能も無いからその分プレイヤースキル重視で、コアな人には人気みたいね。中には戦闘狂って言われるくらいにアツい人もいるしね！シドも、」

「俺は違うかなぁ。少なくとも戦闘狂では無い」

「えーっ！あんなすごいのに！？」

失敬な。俺はこう見えても平和主義者だぞ。あの世界でも積極的に戦闘して…いたなぁ、確か。単身でアヤシイ情報屋なんぞを営んでいた俺は、顧客やら大手情報ギルドなんかからいちゃもんつけられ、デュエルにまで行きついた事態も少なくない。でもこっちから喧嘩売ったりは…していたかもしれん。ずんずん墓穴を掘っているような…。

いやでも、まあ、少なくともこの世界では、俺は三のプレイヤーではない。しいて言えば…

「一、かな…？」

「ええーっ！？なに、キーボードとか打つの！？それとも格闘技関係の仕事してるの！？」

ああ、なんか知らんが話の流れ的に仕事に持って行けそうだ。それならそれでいい。聞きだしたい情報だってあるのだし。俺は自分の仕事を簡単に告げた。即ち、この世界には取材で来ており、これからいろいろな場所を旅してスクリーンショットを取って回るつもりだということを。そして、聞きたかった情報の一つを問いかける。

「プーカは、他の領の街って入れるのか？なんでも対立種族だと出入りが制限される、なんてのを聞いたんだが」

「ああ、それなら大丈夫だと思うよ！プーカは種族的に…っていうか、主に「二」の人達が自分の作った歌とかをいろいろ売りに他の街にいくこともあるから、基本的に立ち入り禁止、ってのはないよ！あ、でも、入ったらキルされるかも、ってのは」

「それなら逃げればいいんだろ？問題ねえよ」

あの世界、俺は非力アバターだったこともあって、毛ほどの傷もつけられない相手から逃げまわるのは結構得意だった。例え向こうがコードに保護されていても、逃げるだけなら問題はないだろう。

それにこの世界は、あの世界とは違うのだ。殺されても、死にはしない。俺のストレージ内のアレのせいでまだ死ぬかもしれないという思いはあるが、まあ、死んだら死んだ時考えればいい。今更迷ったって仕方無いし、俺が森で殺した連中はちゃんとリメインライトで帰っていっていた。

「じゃあ、すぐに行くの？」

「んにゃ、まずはこのプーカ領で遊んでるつもりだ。まあ、二、三日で出ていくと思うがな」

「んっと、じゃあ、さ、あの、」

「ああ、そうだ、もう一つ」

言いだそうとした言葉を遮る。それを言わせると、俺のもう一つの目的…いや、「真の目的」に多大な影響を及ぼしてしまうから。正直、部外者を巻き込みたくない。だから早いところ切り上げるべく、言葉を紡ぐ。

「この世界、倉庫とかあるか？お金はかかっても構わないんだが」

もう一つ、「真の目的」の為の質問を口にした。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　思い出達の行方３

「助かったぜ、ホントにな……」

モモカから聞いた預り倉庫…結構にバカ高い値段だそうだが…のあるテントへと向かいつつ、安堵のため息をついた。モモカはまだ何か言いたげではあったが、「今日はもう落ちる」という嘘で誤魔化して別れ、こっそりと一人街を歩いていた。

俺のストレージに眠るものの数々に、無言で想いを馳せながら。

街に来る途中、俺は一度ストレージを開いていた。

ステータス画面を見た時から考えていた、ＳＡＯ時代のアイテムの持ち越しの可能性を信じて。

まあその可能性は裏切られた。ただし、半分だけ。

中にあったのは、俺には読めない…というか、文字化けしたアイテム群だった。間違いなく、あの世界から引き継がれてきたアイテムデータが、破損した結果だった。正直落ち込んだが、それでもこの世界にあの世界が関わっていることの証拠でもあると言える。これはこれで朗報だ。

破損したデータは、常識で考えれば、すぐに捨てるべきだろう。ＧＭに見つかったら厄介だし、それでなくてもこの手のゲーム、そのうち自動で修復されるだろう。最悪、破損データが新たな破損をもたらす可能性だってあるのだ。

しかし俺は、それをどうしても捨てることが出来なかった。勿論、例え大事に取っていたとしてもエラー検出プログラムに引っかかっ

てしまえばそこですぐに消去されてしまうことに変わりは無いのだが、それでも俺自身の手で、「消去」の文字を押すことは、出来なかった。

どうして捨てられるだろう。

『攻略組』への俺の、行商人としての協力を可能にしてくれた、《ブレイバー・バック》。『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』の面々と成し遂げた、数々の戦利品達。最後のその瞬間まで俺を守り続けてくれた、《フレア・ガントレット》。俺に、仇打ちと最後の戦いへと赴けるだけの力を与えてくれた、《カタストロフ》。エギルが願掛けにくれた遺品、《フラッシュフレア》。

俺を支え続けてくれた、数々のアイテム達を。

そして何より。

……あの結晶があるかも知れないのだから。

◆

預り倉庫は確かにバカ高く、並大抵の金額では足りなかったろうが、有難いことに俺のストレージに表示されたユルド…あの世界では、「コル」と呼ばれていた通貨は、掃いて捨てても一向に構わんようなレベルの桁を表示していた。

最初俺はこの桁が不思議だった…というのも、俺が最後に持っていたＳＡＯでの金額は確か、エギルが今までの滞納分として渡してくれたものだった。確かに巨額ではあったが、それでも今の俺の所持ユルドの半分ほどだったはず。

なぜこんなに増えているのか…というか、この数字は一体どこから来たのか、と考えていたのだが、しばらく考え抜いて、ある一つの可能性に思い至った。

（俺が、ギルドリーダーだったんだよな……）

ギルド、『冒険合奏団（クエスト・シンフォニア）』。かつて俺の最愛の人が創り、率いてきたそのギルドは、あの事件以降もシステム的には消滅したわけではなかった。名目上サブリーダーとして登録されていた俺が持ちあがりでリーダーになったはずで、その俺がギルド解散の操作をしていないからだ。

全く気付かなかったが、日頃の俺の雀の涙程の稼ぎからも、ギルドへの上納金が引かれていて金庫へと溜まっていき…それが、この金額に加算されていたのだ。この桁違いの額、勿論俺だけが稼いだものとは到底思えない。と、いうことは。

（どんだけ稼いだんだよ、あの二人……）

思わず苦笑いをする。脳裏に浮かぶ、二人の顔。いつも体育会系の元気のいい笑顔の男と、何を考えているのか分からない無表情の美少女。二人は一体、何を考えてここまでの金を稼いだのか。俺が使いもせずにただただ溜めこむだけだった資金を、どんな気持ちで納めていたのだろうか。ギルド、『冒険合奏団』の一員であり続けてたのだろうか。

苦笑するしかない。

（また会ったら、二人にはなんか礼をしねーとな…）

ともかく。

そのおかげで俺は、バカ高い倉庫も自由に使うことが出来て。

大切な思い出を、しっかりと…一時的とはいえ…とっておくことができたのだった。

episode3　立合ひ

何とも言えない感覚が、体をよぎる。
また、こちらの世界に来た、という感覚。

ゆっくりと、目を開ける。フルダイブの後遺症は、無い。こちらで座ってダイブするようになってからは、向こうでも座った状態でログアウトすることで少しでも酩酊感を軽減するようにしている…が、正直その必要があるかどうかも疑わしい。内緒でこんなことをしている以上、体調の不良を残すわけにはいかないと思ってし始めた気遣いだが、何日続くことやら。

「戻っちまったな……」

帰ってきて、ゆっくりと伸びをする。と同時に、頭に嵌ったナーヴギアを、慎重に外して目の前の机にそっと置く。戻ってきた、脳神経ではなく自分の眼球で直接見る世界で、まずは目の前に表示される液晶画面の右下端…時間を見つめる。
既に時間は五時を回っている。昼からダイブしていたから結構な長時間潜っていた事になるが、そこはまあ一ヶ月前は二年もぶっ続けでＶＲワールドにいたのだ、疲れなど一切ない。問題は、家まで帰る電車の時間…ひいては、家の夕食の時間だ。急がないと結構まずいな。

テキパキと荷物を仕舞いながら、向こうの世界に思いを馳せる。

「仕事は、上々だな……」

見たところ、仕事の方は問題ないだろう。ゲームの性質上、ソロ

でやっても難しすぎて攻略に困る、ということはなさそうだ。ことに飛行が出来ないダンジョン内の探索なら俺でも十分に通用するだろう。

とりあえずは、しばらく…二、三日はプーカの領内でクエストやダンジョン探索をしていいスクリーンショットを探すか。それが終わったら、領外を軽く見て回ろう。いい写真と、動きのコツでも書ければいいか。

問題なのは。

「……もう一方は、どうするかね…」

向こうの世界に残る、あの世界の残り香の、手掛かりを探るには。そもそも、データがあるからと言ってその手掛かりがゲームの中にあるなんて、そんな都合のいいことはあるまい。少なくとも俺ならそんなアホなことはしない。

「探すつもりなら、もっと時間をかけるか…或いは、レクトに直に聞くか…」

いや、それは逆効果か。あんなチートなステータスを持っているのだ、人間のゲームマスターが確認すればすぐに修正されてしまうだろう。そうすれば、俺は一人での観光旅行すら覚束なくなってしまう。

それ以前に俺は、向こうの世界…いや、ソラのことに関しては、誰にも聞かないことに決めていた。理由は簡単、真実を聞いてしまうのが、怖かったからだ。だから俺は、ＳＡＯのことは自分の目で見て、自分で判断しようと思っていたのだ。全く、心の弱いことだと自分でも笑ってしまう。

まあ、とにかく。

あの世界で、その手掛かりをほんの少しでも得ようと思うなら、方法は一つ。中を、システムを、なるべく詳しく探索していくしかない。つまりは、ダイブ時間を増やすしかない。ということは。

「あの爺さんを、何とかしねえとな……」

episode3　立合ひ2

「……」
「……」
「……」

人間というのは、生まれた時から空気の重量を背負って生きているらしい…のだが、なんというか、これは、未だかつて体験したことの無い領域の空気の重さだ。こんなくだらないことを、思わず考えてしまうほどに。

場所は、再びの道場…だが、今回は前回よりも更に人が多い。全員、無言だが。

奥に胡坐をかいて座る、爺さん。その横に立つ、既に混じり始めた白髪が誤魔化せない程の年齢の女性は、俺の記憶が確かなら爺さん添きの使用人…つまりは、侍従長だったはず。伏せた目は開いているのかも分からないほど細いが、彼女も相当やり手の風格がある。

対するは、俺…そしてその中間、俺達と直角になる様に正座で座るのは、母さん。最初に俺の要件を口にした際から、その顔は真っ青なままだ。まあ横に牡丹さんが控えているから何かあったら対応してくれるだろう。

「……もう一度、言うてみよ」

重厚な空気を破っての一言に、もーろくしやがったか爺さん、と言いたい……いや、冗談だ。さすがの俺も、このプレッシャーのなかそんな事を口に出来るほどの図々しくは無い。神妙に、しかしはっきりと口にする。

「…しばらく、帰りが遅くなるのをお許し頂きたいのです」

…いや、なんで男が十九にもなって門限緩めてーの許可をこんな神妙に取らななならんのだクソ…とも、口には出さない。顔にも出さない。だがこの爺さん、どうやら見た目通りの筋金入りの頑固ジジイらしく、「そんなん許さんわたわけが！」と顔に書いてある。その表情のまま、一言。

「…それは、『四神守（しじんがみ）』の名に、恥じない行いか？」

重低音の声が、道場を這うように響く。さして大きくも無いのに、よく通る声で…それ以上に、正座で対峙する俺の腹の底を揺るがすように反響する。感じるプレッシャーを抑え込み、なんとか口を開く。

「俺は、自分が四神守だと思ったことはありません。…ただ、名だろうがなんだろうが、この行いを恥じるつもりはありません」

「……左様か」

それを言ったきり、向こうは口を閉じた。俺も、待つ。

いや、ただ待つ訳ではない…睨みつける。向こうも睨みつけやがるなら、こっちも返すまでだ。

どれくらいの時間がたったか。

その睨みあいの末に、爺さんが言ったのは。

「……ならば、その力のあることを、儂（ワシ）に示してみよ。…立ち合え」

「！？」

「お父様！？」

俺と、横でじっと様子を覗い続けていた母さんが、同時に息を呑んだ。特に母さんの反応は、今の時間の流れが何分の一かになってしまったようなこの家での生活の中では破格の反応速度で立ち上がって、爺さんを縋る様な眼で見る。

零れ落ちんばかりに大きく見開かれた母さんの目を、ゆっくりと立ち上がった爺さんが睥睨する。文字通り、睥睨。睥目(へいもく)し、睨みつける。その視線の鋭さに、威圧感に、母さんの体がみるみる縮んでいく。そのまま俺の方を見たその目は、涙が落ちそうなほどに滲んでいた。ちょっと俺が無茶をするのを止めているだけには見えない、あまりの必死さ。だが、その心情は俺は知らないし、知っていてもそんなものに気を取られる余裕はないだろう。

母さんの視線が外れた後、爺さんは身を翻してゆっくりと道場の奥に向かった。影のように付き従って歩いていく侍従長に、何かを耳打ちする。恭しく頷いた彼女が、壁際の無数にある扉のうちの一つ…大仰な鍵のかかった扉を開き…ちらりと見えたその先は、現実にあったとは少々信じがたい、ファンタジーの世界のような武器の山。おいおいおい。この屋敷なんでもありかよ。

と。

「御主人様」

「うおっ!?ぼ、牡丹さん!?」

「御主人様は、何をお使いになりますか？」

後ろから突然聞こえた声に、思わずちょっと仰け反った。慌てて振りかえると、そこには茶髪の長い髪を後ろに伸ばした俺の添き人…牡丹さんが立っていた。俺の索敵スキルを無効化するとは、なかなかに…って違うか。

「…使うって、何をですか？」
「立ち合いの武具をです。この四神守家、一通り以上の武具は揃っております」
それは銃刀法的にどうなんだ。
「……俺は、いいや。徒手空拳だし」
「……かしこまりました。御武運を」
こちらも恭しく一礼して、するすると壁際に下がっていく。うん、足音は一切ない。なんだあの『忍び足（スニーキング）』スキル。メイ…失礼、使用人の嗜みとでも言うつもりか。それで身に付くなら俺の二年間の努力の積み重ねは何だったんだ。
……心を乱されてしまった。落ち着け。そんな余裕はないと言ったばかりだろう。
何せ相手は。
「……貴様は、徒手空拳、か。…よかろう」
「…薙刀、か。……つっ！？」
ダンっ、という鋭く響いた音が、俺の体を竦ませた。
とっくに還暦を迎えた老体とは思えない、堂々とした立ち姿が滑らかに動き、構えを取ったのだ。先程の音は、足が床を踏みならした音。構えの先端たる薙刀の切っ先が、真っ直ぐに俺を向く。…刃引きがされているとはいえ、その遠心力の乗った一撃を貰えば俺もただでは済むまい。油断は無いし…手加減するつもりも無い。真剣勝負だ。

俺も、構える。
爺さんの、相手を威圧する構えとは違う、ゆらりとした力みのない動作。
何を感じたのか、爺さんの目がすっと細まる。
と同時に、俺達二人を見える位置に、侍従長が音も無く進み出す。

「では、僭越ながら…」

するり、とその白い手が掲げられ。
爺さんの、鋭い黒目が更に険しくなり。俺の体感時間が、減速を始め。

「はじめ！！！」

鋭い声が道場に轟いた。

episode3　立合ひ3

響いた声が、空気を振わせ…た時には、俺は全力で床を蹴っていた。蹴る足は、当然裸足だ。あの世界では『軽業（アクロバット）』スキルや高級品のブーツでの高い初動支援と足場補正機能があり、一気にトップスピードまで加速出来たものだが、この世界ではそうはいかない。一瞬感じる違和感…イメージと、実際の体の異質感。その意識と体の乖離は、戦闘において致命的な隙をもたらしかねない。本来ならこの開幕突進は下策だ…が、俺には悠長に待てない理由がある。

「ふんっ！！！」
「くっ…！」

俺の初動の、ほんのわずかな違和感を爺さんは見逃さない。対する俺から見ても完璧な…完璧に嫌なタイミングでの突き技が入る。あの世界でも何度となく対峙してきたが、突き技は槍や薙刀において主力であり、特徴のある技だ。殺傷力が高く攻撃が見切り難いが、見えてしまえば斬り技よりは避けやすい。そして。

「ぬぅん！！！」

…次の攻撃に、つなげやすい。

続けて繰り出された斬撃は、紙一重で避けた突き技からの連続攻撃。繰り出されることを予測していたが、予測してなお接近したままでは回避出来ない軌道。あわてて飛び退って…その軌道に戦慄する。

（首筋直撃（クリティカル）コースじゃねえか……っ！）

首に喰らおうが心臓に喰らおうが、「ＨＰ」という絶対の保護があれば死ななかったあの世界と違って、こちらは場所と場合では「一撃死」という事態が起こりえる。というか、刃引きされているとはいえ当たり所が悪ければ重傷…いや、死ぬと思うのだが。

間近に迫る死の足音…だが、そこに恐怖は無い。

「喰らえば死ぬ」なんて、俺にとってはあの世界では当たり前だった。そしてそれは、本質的にはこちらの世界でも変わることは無い。人間、いつ死ぬかなんてのは分からないのだから。が、恐怖は無くとも緊張感は高まる。そしてそれは、今回に限っては戦況を悪化させる。

（まずいな…）

あの世界ではなかった、激しい鼓動を左胸に感じる。息も、精神的なものだけでなく苦しい。さっきの、ほんの一幕の打ち合いに関わらず。集中に伴って、体が悲鳴を上げ始めたのだ。

一応俺も、この世界独特の要素…「肉体の疲労」という現象を考慮して、リハビリ（という名の朝の鍛練）に精を出していたのだが、やはり犬ころとこの爺さんでは与えてくるプレッシャーが違う。頭はその緊張による疲労に慣れているが、あの世界では関係無かった肉体的な疲労は、確実に俺の体を蝕んでいく。戦っていられる時間は、短い。

「はっ！！！」

間髪いれずに床を蹴り、飛びかかる。噴き出しはじめる汗を拭う、

なんて隙は見せない。
爺さん相手に、短期決戦。悔しいが、まだこっちの世界に来て二カ月と経っていないこの俺と、七十近いとはいえ日々鍛錬に余念のない暇人ジジイ。持久戦では向こうに分があるのは明白だ。
行くしか、ない。
狙いは、手刀。脇腹か、首筋か、それとも突き指覚悟で貫手を叩きこむか。一応、試合という名目のこの勝負、一撃有効打を入れれば俺の勝ちとなる。年寄りを思い遣れ？知ったことか、先に急所狙ってきたのはあっちだ。
「おおおっ！！！」
振り降ろされた薙刀の剣戟を辛うじてかわし、そのあってないような僅かな隙に体を捻って更に接近、俺の手の届くそのラインを目指す。だが爺さんが、鋭い足運びで大股に体を一歩引かせる。畜生、完璧に間合いを外された。俺の長い腕、そのリーチがしっかり見えてやがる。頭で思う一瞬の間に、構えた右手が行き場をなくす。と同時に、先程の動作で下段に構えられていた薙刀が鋭く跳ね上がる。
「くおっ！！！」
交差した両腕で抑えるが、その長いリーチの遠心力のたっぷり乗った一撃が俺の両腕をひどく痺れさせる。と同時に、俺も爺さんの広い間合いから抜け出すべく後ろに跳ぶ。あの世界でも確かいたな、ソードスキルを使わない長物使い。その持ち味は、硬直の無いことを生かした連続攻撃。それがこちらの世界で培われたものなら。
「ぬううぅんっ！！！」

「っ！！？」

予想通りに連続して繰り出される鋭い剣戟が、予想以上の速度で俺の体の全方位から襲いかかった。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　四神守家の人々

「おおおっ！！！」
「ふんっ！！！」

ズドン、という音が、道場中に響いた…ように、錯覚した。

勿論、錯覚だ。俺の体は打楽器では無い、そこまで大きな音は出ない。例え全身全霊を込めた爺さんの薙刀の突き技が腹部に入っていても、それが響くのは俺の体と意識だけだ。交錯するように伸ばした俺の貫手は、爺さんの腹部…から、拳二、三個分の距離を残して止まっていた。いくら俺の腕が長くても、薙刀のリーチを覆すことは、出来なかった。

「グゲッ」だか「ゲロッ」だか、蛙を踏み潰した様な声が俺の口から洩れて、そのままがっくりと崩れ落ちる。情けなく蹲った体が、上からバカにしたように見下ろす視線を感じる。何かが突き付けられる感覚も。間違いなく爺さんのそれだろうな。

「そこまで！」

横で気配を消して審判を務めていた侍従長の声が響き、近くにあった気配が遠のく。爺さんが、蹲った俺にまで油断なく突き付けていた薙刀をやっと引いてくれたらしい。全く、隙も容赦も微塵もねえな。ってかこのハラ、洒落にならんぞ。すっげえ痛え。内臓どっかイカれてんじゃねえか。

「……貴様の負けじゃ」

うるせ。言われなくても分かってら。

「…今後、この家の敷居を儂の許可なく跨ぐな。当然、『四神守』の名を名乗ることも禁じる」

…は？

「勘当だ」

それだけ聞こえた後、俺の背後、道場の入口が開かれ…爺さんは去って行った…っておいおい、ちょっと待て、今何てった!?ってかこれからどうすんだ、俺ちょっと動けんぞ!?そもそも勘当っておい、勘当だよな!?出ていけって意味だよな!?「感動した」の言い間違いとかじゃないんだろ!?

「ああ、大丈夫、シー!?」

慌てた声は、母さんだ。とりあえず大丈夫…と言おうと思ったのだが、ハラの痛みがそれを許してくれない。仕方なく右手をヒラヒラさせ、意識はあることを示す。背中に、触れる手…が、二人分。母さん…と、牡丹さんか。意外だな。あっちについていったと思っていた。

「朱春（すばる）様。蒼夜（そうや）様をお呼びして参ります。五分ほどで戻りますので、しばらくの間、御主人様をお願いします」

「分かったわ、急いでお願い！」

冷静な牡丹さんと違い、母さんの声はもう涙声だ。

思えば、母さんは俺がこっちに戻ってきてからは泣きっぱなし…いや、泣かせっぱなしだ。以前は俺の前では絶対に泣かない人だったのに。俺がこっちに戻ってきたせいか。それとも、母さんがこの家に戻ってきたせいか。或いは、両方か。

「ごめ…、勝てんかった……」

「いいの、いいのよ、そんな事！すぐに蒼夜お姉さまが来るから、しっかりして、喋らないで待ってなさい！」

「……いや、もう、大丈夫。大丈夫…っつ！」

抑えていたハラから手を離して、ごろりと横倒れに寝転がって大の字になる。纏わりつく汗が、張り付く服が向こうの世界と違う感覚を伝えてくる（正直ありがたくはないが）。だが、そう言えばあの世界でもこんな風に疲れ果てて転がったこともあったな。

転がった拍子にズキンとハラに痛みが走り、顔を歪める。同時に歪んだ視界に、どアップに映ったのは、母さんの顔。溜まった涙を零させまいと、根性で痛みを抑えて笑顔を作る。ド根性。やせ我慢がバレバレだったが、誤魔化せたのか或いはやせ我慢が出来るくらいの怪我だと分かったのか、母さんもほっとしたように泣き笑いの表情を作る。

それを見届けて…俺の頭の疲労も限界に達したらしく、意識が遠のいていく。これぱっかりは、向こうでもこっちでも同じだな。なんか変な病気とかじゃないだろうな、コレ。

気を失う直前、最後に聞こえたのは。

「…シーも、もう十九だものね…父さんに、そっくりだったのよ。お父様に面と向かって私をくださいって言って、立ち合って。……

構えも、瓜二つで母さん驚いたわ。しっかりと、あの人の血を受け継いでるのね…違うのは、…」

ギリギリで、ここまでだった。

episode3　四神守家の人々2

「お？目が醒めたようだねえ？」

目が醒めた俺を迎えたのは、横に無表情のまま控えた牡丹さんと、玄路（げんじ）伯父さん…全部で四人居る爺さんの子の、最年長の長男…だった。あわてて布団から起き上がって姿勢を正そうとしたが、「いいよいいよ、病人だし」と笑って止められてしまった。

飄々、という言葉を体現した様な態度を貫くちゃんちゃんこ姿のおっさんが、俺の顔を見て「こりゃまた派手にやられたねぇ」と笑う。とてもあの爺さんの血を引いているとは思えない人の良さだ。無精ひげの生えた細身の顎とボサボサでツンツンの黒髪に、猫背に曲がった細身の体。しっかり立てば俺と同じくらいの背丈があるかもだが、普通にしていては俺の方が十センチは高く見える。

ひとしきり笑った後、あの後道場に来て診察した蒼夜（そうや）伯母さん（女医さんだ）によると、腱も内臓も異常は無し、牡丹さんが湿布等を貼ってくれたことを伝えて…最後に一枚メモをくれた。

「シー君、親父にカンドーされたんだって？なら、ここに行くといいよ。ボクの物件だから」

「…そう言えば玄路さん、不動産やってましたね…」

貰った紙を一瞥して、ジト目で伯父さんの顔を見つめる。ジト目なのは、その声が俺の不幸（いや、自業自得なのだろうが……）を楽しんでいるのを隠そうともしなかったせいだ。その上、「楽しんでますよー！」の満面の笑み。全く、この人は。

長男として道場の跡取りとして修業を欠かさない傍ら、片手間…というか、結構ガッツリと不動産業で稼いでいるやり手の経営者でもある…ってか、彼の下（ということに名目上なっている社員）の皆さまが優秀なだけなのだろうが、とにかくこの人、いろんなことに手を出している人だ。俺もその全貌を知っている訳ではないが、それでもその仕事の顔の数は十はくだらない。

それはまあ、今回は置いておくとして。

今の申し出、有難いかどうかは微妙だが、俺はきちんと家出先の家まで用意していただいたわけで。

流石に俺一人の人脈と経済力では、職はあっても住む所までは準備出来ない。最悪俺一人だったらネカフェ難民でもいいのだが、母さんまで一緒に養っていくのであればそうも言っていられない。

だがここに行ってしまえば、四神守の監視の目が届くことには想像に難くない。というか、心情的にそれはどうなんだ、と思ってしまう。いや、まあ、みみっちいプライドだな。

「……爺さん…宗源さんは、このことを？」

「いいや？これはボクの独断だよ。いやあ、あれほど追い詰められたオヤジを見るのはボクも久しぶり…二十年ぶりかなあ？だったから、その見物料ってコトで。もちょっと言うなら、君の戦い方に、武の道を志す者としてふっか～い感銘を受けてね。あの世界での君の強さを、ボクも見てみたい」

……ったく、どこまで本気なのかさっぱり分からない。

まあ、確かにこのままでは困るのも事実だ。俺のプライドなんてどうでもいい。頭を下げて頼むと伯父は「んじゃあ、手続きはしておくよ～」といってヒラヒラと手を振って去っていく…前に、ひょいっと振りかえって。

「それにしても君の戦いは、君の親父さんにソックリだねえ？君は、武器は使わないのかい？」
「……向こうで、身一つで戦ってきたんで」
「おやあ、そうかい？ま、いいや。んじゃね～」

今度こそ身を翻して、廊下をギシギシと言わせながら去っていった。その歩き方がまた絵に描いたようなガニ股で、威厳というものを全く感じさせない。あれであの爺さんの跡取りが務まるのか？とも思うが、俺の知ったことではないか。勘当されたばっかりだしな。

遠い目でそんなことを考えていると、横に控えていた牡丹さんが一歩歩み出た。俺はそんなこと気にしないのだが、発言の前に進み出て礼をするのは嗜み…というか、こだわりというか、そういうものらしい。俺が視線を向けたのを確認して一礼、口を開く。

「……御主人様。今日一日は、安静にしておけ、との蒼夜様の言伝でした」
「ああ、蒼夜伯母さん、機嫌悪かったですかね？」
「はい、大層。私も相当に嫌味を頂きました」
「……ゴメンナサイ」

それが仕事ですから、とでも言うかの様に恭しく礼をして、顔を上げ…こちらを見る。
その視線に、どことない違和感…というか、責める様な色を感じる。あ、あれ？

「……牡丹さん、な、何かされましたか？」
「…出過ぎた真似かもしれませんので」
「いえ、言ってください」

「では」

切れ長の目が、とじられて。

「御主人様は、仮想世界と現実世界の差を軽視し過ぎです。反応速度と体の記憶であちらで出来たことをトレースするにしても、初速や威力は大きく異なります。あんな初動作では、当主様はおろか玄路様、私にすら通用しないかと」

「……牡丹さんも、何か武術を？」

「棒術を少々。嗜むほどですが」

嗜むほどで、俺のアレは通用しない、と。なんかショックだな、おい。

ていうか、気軽に話してくれ、と以前言ったのは俺だが、ここまでズバズバ言われると結構堪えるぞ。

ああ、そうか。

これが流行りの、メイド萌えって奴か。いや、違うか。

そんなどうでもいいことを考えながら、俺はこの家を、出ていくこととなったのだった。

ｅｐｉｓｏｄｅ４　魔法の世界の洗礼

「甘いな……」

暗がりの洞窟の中、『隠蔽（ハイディング）』…じゃあなかった、こちらでは『隠密行動』だったか、のスキルを発動して出口を覗う。既にマスターに達した『索敵（サーチング）』のスキルが、向こう側に待ち伏せ（アンブッシュ）する数人の敵の姿を捕えたからだ。

「……四人、か…」

このプーカ領の上級ダンジョンから出てくるパーティを襲う待ち伏せの人数としては、随分と少ない…が、俺一人を襲うための戦力としては、十分だろう。つまり連中は、元から俺を襲うつもりでここに来た、と。やれやれ、暇な奴らだ。

勿論、俺は巷でブームのチート無双野郎ではない。一体四、そして向こうは俺の予想が正しければ（九十九パーセントの確信を持って言っているが）全員が『随意飛行』の使い手だ。まともに戦えば、明らかに俺の方が不利だろう。ん？あの世界では乱戦が得意だっただろ、って？それは『軽業（アクロバット）』と『体術』の多種多様なソードスキルがあったからで、今は無理だ。

「どうやって逃げたもんかね……」

呟いて、見やる。

見れば、茶色く輝く拳大の蜘蛛が、数匹岩場の地面の這っていく。

土属性の魔法の探索生物（サーチャー）だ。いくら隠れていようが、こいつが一定距離まで近づけば一発で見破られてしまう。残された時間は少ないな。

「んじゃ、いきますかね」

ゆっくりと、膝を曲げる。未だに背中の羽での飛行はてんで駄目だが、現実よりはるかに短い手足には随分と慣れてきた。組み手はまだ難しくても、初動のダッシュなら問題ない。

「ふっ！」

短い気合いをこめて、地面を全力で蹴り飛ばす。現実でこんな事をすれば結構な音が響くだろうが、『隠密行動』、そして『軽業』、或いは『体術』も関係あるのか殆ど何の音もさせずに俺の体が一気に加速する。土蜘蛛達は他属性のサーチャーに比べれば耐久値に勝るが、スピードはそれほどではない。それに、こいつらはまだ低級の索敵魔法。一気に駆けだせば簡単に置き去りにできる。

疾走して出た先は、ちょうど夕暮れ時だった。

眩い光は洞窟出てすぐの目に染みるが、燈赤色に岩場地帯を光らせるその斜光は、俺の同色の髪をいくらかは目立たなくしてくれる。最善は完全に紛れられる夜の闇が理想だったが、まあ贅沢は言っていられない。

「おいっ、来たぞっ！」
「追え追えっ！」
「いや、束縛が先よ！」
「任せろっ！」

俺が飛び出したのに一拍遅れて、それぞれの岩場に待ち伏せていたらしい四人が声をあげた。うん、考えが足りんな。俺が気付いて走り出てくるとは思っていなかったのか、囲み方が甘すぎる。

これならこのまま逃げ切れるか、と思ったが、流石にそこまで上手くはいかないらしい。

足元から感じたゾクリとした違和感。咄嗟に岩場を蹴って、高々と跳ぶ。

「っ、なんだこりゃ！？」

足元から這い寄ってきたのは、まるで水で出来た蛇だった。足を縛りつくように捲き付いてくるその水流は、俺の跳躍が後コンマ数秒遅かったらしっかりと俺を拘束していただろう。全く、毎回毎回あたらしい魔法を披露してくれるぜこいつらは。嬉しくは無いがな。

「くらえっ！！！」

「ぐあっ！？」

続けて繰り出されたのは、強烈な轢弾。こっちは土属性の魔法か。見れば土妖精（ノーム）の女が跳躍した俺に向けて真っ直ぐに杖を向けている。おお、女のギルドメンバーもいたのか、あそこ。直線軌道の石つぶての攻撃は普段の俺の機動力なら簡単に避けられるだろうが、なにぶん今は跳躍中だ、羽の使えない俺では避けようがない。咄嗟に両手で急所を庇うが、それでも二割近くＨＰを持っていかれる。

（なるほど敵さんも対策を取ってきてるね…）

羽を使わない、機動力戦闘派の俺。まず機動力を殺ぐのを目的としての魔法、そしてそれがかわされるなら跳躍だと読まれていた。

そして。

「うおおっ！！！」

「死ねやオラァ！！！」

クロー系の装備を構えた二人の猫妖精（ケットシー）が、『随意飛行』で一気に距離を詰めてくる。どちらも顔に覚えがある。以前会った時は確か二人とも剣や槍といった武器を装備していたはずだが、俺と戦う際にはそんな長物を振り回す余裕はないと知ったらしい。

（…が、急造の接近装備じゃあな）

動きが、まだまだ甘すぎる。二年間体術戦闘の研鑽を続けてきた俺からすれば、隙だらけだ。振り抜かれた二人分の爪の一撃をかわし、一人の被ったつるりとしたヘルメットを踏みつける。羽の使えない俺は空中戦は絶望的だが、足場があれば別だ。

「ぐあっ！！？」

『体術』、『軽業』複合スキル、《ムーンサルト・フライ》…と、かつて呼ばれていた、片足で対象を踏みつけからのバク宙。一気に距離を稼ぎ、繰り出された敵後衛の魔法使い（メイジ）の魔法を回避する。敵さん、俺が空中では動けないと踏んで追尾（ホーミング）系の魔法を使っていなかった。まだまだ甘いな。

「逃がすなっ、追え！」

「まずは束縛魔法を、」

「だめだ、距離外だっ！」

「ああ、もう！また逃げられてんじゃん！」

残念。

既に地面に辿り着いた俺は、猛烈なダッシュを再開する。ものの数十秒で岩場地帯を抜け、辿り着くのは枯れ木地帯。ノーム領寄りの針葉樹林に比べれば幹は細くてひ弱だが、『軽業』の足場には十分だし、飛行の妨げとしても十分だ。

相手もそれをこの数日で学んだ…というか、体に教えてやったので、追っては来ない。

今日も、俺の勝ちだ。

「ふぅ……」

一息ついて、中立の村…俺が今日滞在し、ＮＰＣから聞きこみをしてクエストを受けた場所へと向かって駆け出す。洞窟でこなしてきた今日のクエスト、その報酬だと説明された、「面白いマント」とやらに思いを馳せながら。

だが。

そんな思いは、虚しく遮られた。

「シードくーんっ！」

美しい、鈴の音色の様な声で。

ｅｐｉｓｏｄｅ４　魔法の世界の洗礼２

「シードくーんっ！」
「またかよ……」

呼んでくるのは、鈴が鳴る様な美しい声だが、こう毎日続くといい加減うんざりしてくる。

プーカ領に入る前に寄った中立村、『ブレーメン』。プーカの首都にほど近いだけあってＮＰＣもプーカが多く、ゲーム内時刻は夕刻にも関わらず賑やかな場所…なのだが、残念ながら今日はその場所にたどり着けなかった。…というか、ここ数日、午前中（向こうの世界で、だ）はいつも滞在中の村の入り口で待ち伏せされっぱなしだ。

ショッキングピンクの二つ結びと、特徴的な瓶底眼鏡…モモカだ。俺がその内プーカ領を出ると知って以来、「私もついていく！」と言って聞かないのだ。全く、毎日午前中からログインしやがって、リアルではちゃんと仕事なり学生なりしてんのかこいつは。俺も人のことは言えないかもだが。

俺は、彼女を敬遠し続けていた。
頭ではこの世界に詳しい人間に尽きてきてもらった方がいい、と分かってはいるのもの、頑なに彼女を…いや、「同行者」という存在自体を、俺は遠ざけ続けていた。なぜか、は、俺には分からない……というか、分かりたくないのだろう。

だが。

「今日は、特別ゲストだよ！」

いつもの、しつこいセールストークを聞くだけでは済まなかった。

突如、表示されるシステムメッセージ。

――――Ｂｌｏｓｓｏｍ　ｉｓ　Ｃｈａｌｌｅｎｇｉｎｇ　ｙｏｕ.

隣に控えた女性が、無言で突然俺に決闘（デュエル）を挑んできやがったからだ。

◆

大人の女、と呼ぶに相応しい外見だ。悔しいことに俺よりも十五センチは背は高かろう。

ショートカットの上にいかにも魔法使い然とした三角帽子を被り、メリハリの効いた体ををセンスの良い模様の入ったローブで包んでいる。手には両端に黄色と青の水晶の嵌ったステッキ。一見して分かる、バリバリの魔法戦闘型だ。

種族は。

「鍛冶妖精（レプラコーン）、か……」

特徴的な金属光沢のをもつその髪は、音楽妖精（プーカ）と同じく非戦闘系の種族であるそれのものだろう。目は随分と細く、俺からは瞳の色を判別することさえ出来ない。てか、これじゃあ寝てるのか起きて

いるのか分からないんだが。

と、彼女の左手が素早く動いた。同時に表示される、初めてみるウィンドウはどうやら特殊なアイテムらしく、右手首の腕輪から広がった画面が俺の目に入る。書かれているのは、…『貴方はこのまま他種族領へ行けば、死にます。魔法やこの世界の仕組みについて、貴方は知らな過ぎます』…随分と言ってくれやがるなオイ。というか、このフルダイブ環境でタイピング会話って。鼻で笑おうとして…続けて表示された文字に、その笑みが固まった。

『あの世界との違いを、貴方は理解すべきです』

あの世界。こいつは、知っている。俺の、正体を。

反射的に、俺は決闘の申請を受けていた。

俺のリアル…いや、ＳＡＯでの情報が割れている以上、ここでむやみに逆らうのは得策ではない。聞き出すにしても、向こうをまずは屈させる必要がある。それにコイツが俺のことを知っている…つまりは俺と同じなら、その戦闘スタイルから何か分かるかもしれない。

そして、ここまで言われて、引き下がる気も無い。

（そう言えば、『全損モード』での決闘（デュエル）は、二回目、か……）

減っていくカウントに、微かな感慨を感じる……が、それも途中まで。

カウントが残り三になったあたりで、俺の思考が切り替わる。同時に、もうお馴染みとなった、両手をだらりと下げた構えを取る。

夕日は既に、幾筋かの残光を残して地平線へと落ちているが、まだ視界が悪くなるほどではないし…そこまで長引かせるつもりもない。

表示される、ＤＵＥＬの文字。と同時に、一気に地面を蹴っての加速。

だがその突進は、目前で阻まれた。

「っ！？」

流石の俺の速度でも、相手が一音節早口で呟くのには敵わなかった。生じたのは、縦横共に人間大の、地面から伸び出た泥の壁。防御を得意とする土属性の魔法の、初級の防御呪文だ…が、初見の俺には咄嗟にそれを理解できない。

構わず放った回し蹴り、泥壁くらいはあっさり砕けると思ったが、それは予想外の硬さで俺の脚の一撃を、罅割れつつも防いだ。舌打ちして一旦突進の勢いを殺し、回転の勢いを生かした手刀…《スライス》で壁を破る。

…ああ、何故俺はこの時、この壁を避けようと思わなかったのか。

「うおっ！！？」

壁を砕いた瞬間、現れた女の周囲に浮かんだいくつもの雪玉。

ゆらゆらと揺らぐそれらが一瞬だけ制止し。

直後、俺めがけて一気に殺到してきやがったのだった。

ｅｐｉｓｏｄｅ４　魔法の世界の洗礼３

「おおおっ！！？」

殺到してくる雪玉は、氷雪系…確か水妖精（ウンディーネ）が得意とする攻撃魔法だが、だからといって他の種族にそれが使えないというわけではない。だが、水の系統の魔法の得意分野は、支援と回復だ。攻撃系…特に今の雪玉攻撃のように直線軌道スピード重視の呪文なら、威力、追尾性能いずれもそこまでの脅威ではない。

「はあぁっ！！！」

ダッシュで走りながら、殺到してくる雪玉を回避する。こんなもの、あの世界で殺到するモンスター群を避け続けた俺からすれば、さして難しい芸当では無い。勿論掠った雪玉が幾許かの削りダメージを生じさせてくるが、気にするほどの分量では無い。

だが。

（っ…！？連続で使えるのか……っ！）

あちらが続けざまに連続して魔法を唱えているのか、絶え間なく攻撃は続いてきやがった。ちらりと睨みつけると、女はいかにも魔法使い然と杖をこちらにつき付け、絶え間なく唇を動かし続けている。その視線は、俺を捕えて逃がさない。ちっ、仕方ない。無傷で距離を詰められはしないだろうが、ある程度の直撃のリスクを負えば、行ける。

絶え間ない呪文の、あって無いかのようなほんのわずかな隙…女の「息継ぎ」。その一瞬の隙に地面をを蹴って加速して、一気に目の前に迫る。繰り出すは貫手、《エンブレイサー》。

「はっ！」
「――――！」

だが、それはものの見事にかわされた。ローブを纏ったピュアメイジといった風貌から回避能力はさほどでもないと踏んでいたが、どうやら見くびっていたらしい。軽快な動作で跳び退るとともに、システム認識ぎりぎりの音量での呪文詠唱。再び一音節で召喚された泥の壁が、俺の跳躍からの追撃を阻む。

（今度は、騙されない！）

先の失敗を生かして、回り込んでの攻撃をすべく泥壁を避け、

「っ！？」

足に衝撃を感じてつんのめった。今日見たばかりの水属性の移動阻害魔法、水の蛇（このころはこのスペル名が《アクアバインド》ということも知らなかった）だ。だが、その詠唱は見たところ、そこそこに長かったはず。この女、あの一瞬でそれをこなしたというのか。

驚愕したものの、左手を咄嗟に地面に付いて転倒によるダメージを回避、と同時に右の指を揃えての手刀で水の蛇を断ち切る。あの世界で鍛え上げられた判断力の賜物、その間一秒もかかっていなかっただろう。だが、それでも、大きな隙であることには違いない。

来るであろう強力な攻撃呪文を迎え撃つべく敵を見て、

「っ、なんだっ！？」

何度目かの驚愕に声をあげた。

目の前にあるのは、いくつもの泥の壁。不自然に佇立した人間大のその障害物は、俺の攻撃をたびたび挟んだあの魔法だろう。つまりさっきの一瞬で、あの女が連続してこれだけの泥壁を出現させたことになる。どんだけ早口言葉が得意なんだ。

驚く……が、これは。

（……好機！）

敵さんがなんの為にこの泥壁の林を出現させたかは、分からない。だが、これだけ遮蔽物、足場があれば、俺にとって状況は格段にやりやすくなるだろう。例え身を隠す目的でこの泥壁を作りだしたのだとしても、俺の『索敵（サーチング）』スキルは謎のＳＡＯデータ引き継ぎによって既にマスターに達している。例え探索生物（サーチャー）を呼べずとも、この至近距離ではなんの問題も無く敵を見つけ出せるはずだ。スキルを発揮しようと、耳を澄ますように独特の感覚を呼び起こそうとして、

「っ！？」

体を吹き抜けた風が、全身を震わせた。

突如現れたそれは、氷の竜巻…とでも表現するべき、極寒の風。回避しようにも、周囲一帯を包み込むように吹き荒ぶこの攻撃は、なんの魔法も使えない俺では避けも防ぎも出来なければ、索敵もこ

の雪風ではまともに行えない。

更に、ＡＬＯに入ってまだ日が浅い俺は、そこまで高位の装備は持っていなかった。首都で買った革製コートは、防御力こそそれなりだが、対寒、対魔法効果は薄かったようで、あっという間にＨＰが削られてしまう。残量は既に五割を割って、黄色の注意域に突入している。

（……時間は、無い！）

足に力を溜め、低空の跳躍。遮蔽物を足場にして次々に跳躍、必死に泥壁の影を視界に入れて敵の姿を探す。いない、いない、いない……いた！隠蔽（ハイディング）の基本に忠実に、壁を背にした姿勢でしっかりと杖…先端の水晶が、青色の輝きを放っているそれを翳している。まだ、こちらに気付いてはいない。

「おおおっ！！！」

叫んで、壁を蹴る足に渾身の力を込める。
弾丸のように加速する体が、女へと襲いかかる。

気がついた女のその細い目の視線が、俺の視線と交錯して。

「――――」

唇が、一音節を紡ぎ。

「ぐあっ！！？」

鋭く突き出された杖の先端が、俺の腹部を捕えてそのまま回転、

俺を地面へと叩き付け。
同時に生じた水の蛇が、俺の四肢を拘束した。

HPがレッドゾーンに突入した俺に、女が左手で杖を突き付ける。

『貴方は、この世界では無知に過ぎる。私の杖は古代武具級（エンシェント）、《預言者の双玉短杖（プロフェット ツインロッド）》。宝玉の色に対応する魔法の初級呪文の、「シヨートカット」を一種類登録できる武器です。知っている人はスピード勝負を挑もうとはしません』

女…ブロッサムは、杖を突き付けたまま、左の手首についた腕輪を右手で叩く。それが合図らしく、俺に向けてのメッセージウィンドウが表示される。まだ決闘（デュエル）中だ。四肢を縛る水蛇を振り切ろうとするが、駄目だ、力だけじゃどうにもならない。

もがく俺の前で、なおも彼女は言葉を打ち込む。

『登録していたのは、《アクア・バインド》と《アース・ウォール》。土属性の防御魔法が、初級のものでも打撃に強いことを知っていれば、初手で打撃を加えようとは思わなかったのでは？』

ただただ、淡々と。

『そんなザマで、一人旅など可能なのですか？』

言葉を。

『貴方を支えてくれる方がいたからこそ、貴方がいるのではないのですか？後ろからの援護を、或いは肩を並べて戦ってくれる方が、或いは世界を超えて祈ってくれた方が、いたのではないのですか？

今の貴方は、弱い。だが、それでも貴方がこの世界を廻るのなら』

目線を、こちらに向けたままで。

『助けを。支えを。貴方は求めるべきです』

そして俺は、もがくのをやめ。

「……降参（リザイン）…」

歯を食いしばって、呟いた。

episode4　悟る真理の一角

訪れたバー（の、ような雰囲気のテントのブースの一角）で、俺はどっかりとテーブルに両肘をついた。組んだ手は、額に当てられる。勿論、疲労からだ。

「これで、私達も一緒にいけるよねー！」
「……オメーは何もしてねーだろうが！」

デュエルが終わった後、俺はもともとの目的だった中立村、《ブレーメン》にて夕食（こっちの時間で、の話だ。現実ではそろそろ昼、というところか）…という名前の圧迫面接を受けていた。横にいるモモカ一人ならいつも通り容易くあしらえるのだが、今日は勝手が違う。

『先の決闘で言った通りです。貴方では、長い時間この世界で活動している人の助けなくしては観光も覚束ないでしょう』

目の前に、もう一人いるのだ。

俺を完封してくれた（あの束縛、囚われてしまえば内側からの物理的な力だけで解こうと思えば鬼の硬さを味わうことになるそうだ）この女…ブロッサムも、一緒についてきたのだ。テーブルでこうして向かい合っているものの、相変わらずチャットでの会話だ。

「……っつってもそれだって、慣れれば、」
『そのつもりがあるのですか？モモカさんは、貴方がすぐにでも

プーカ領を出ていくように感じておられるそうです。自分も同様に思います。そもそもお仕事でしたら、慣れるなどと悠長なことは言っていられないでしょう。協力者に同行してもらうのが定石です』

おいおい。俺が仕事で来てることまで喋ったのか、このピンク野郎。睨みつけてやると、頭の上に「？」を三つくらい浮かべて首を傾げやがった。ったく、とぼけたって許さねーぞ。

「……〆切は年明けだ、そこまで急ぐ必要は」

『毎回領土を出るたびに死に戻りしては無理だと思います』

「……」

『往生際が悪いですね。「私が同行します」と言っているのです。あまり断り続けるのは、殿方の器が知れます。寧ろ殿方は、ついてこい、というべきものです』

俺の方を向けて表示されるメッセージ、ご丁寧に太字で強調されていやがる。ブロッサムの腕に装着された腕輪アイテム、《ノティス・ウィンドウ》で表示できるこの対面向きのウインドウ、そんな事まで出来るのか。このフルダイブ環境、使う奴なんて絶滅危惧種だろうが。

がまあ、この場合はそんなことに感心している場合では無い。

強調してきやがったということは、俺に逃げ場はないということだ。少なくともブロッサムは、俺が『ＳＡＯ生還者（サバイバー）』だと言うことを知っている。恐らくは、あの世界での俺の戦闘スタイルも。これを無差別にばらされては堪らないし、もしかしたら『俺の倉庫の中』まで知られているかもしれないのだ。

あのバグデータの群れが明るみに出されれば、一発でエラー検出

プログラムにひっかかるだろう。そもそも今も弄らずに安置しているからまだ無事なのであって、この先も無事な保証はない……が、今ここで消去されるのは、出来れば避けたい。

「……わーかったよ…連れてきゃいいんだろうが…ってか勝手についてきやがれ…」

「やったー！！！」

「なんでテメーまでついてくる前提なんだよ！？」

『モモカさんは、この世界の随意飛行のシステムやアイテム、各地の勢力情報に詳しい方です。自分は『随意飛行』は苦手ですし、自分はこの通り周囲とのコミュニケーションが出来ませんから、彼女の同行を求めます』

「……あーもう好きにしろや…」

結局もう、既に俺は敗北者なのだった。情報においても、戦闘においても。

というかそもそも、三人部屋の個室（珍しいことにここの店はレストランに個室用のブースがあった）に、女二人に連れ込まれた段階で俺に勝ち目は無かったよなあ…と、あの世界に思いを馳せる…が、もう入ってしまった後。あとのまつり、という奴か。

口は、女の方が上手い。そして、言い出したら女は引かない。これは昔、母さんが教えてくれたことだが、今身に染みて分かった。真実だ。俺は今、この世の真理の一つを悟ったかもしれん。

とにかく。

三人部屋の個室に、俺のふかーいため息を響かせて。

「あーあー。分かった、分かったから。今日は、もう落ちるから、

明日な」

「ええっ！もう落ちちゃうのー？まだ一緒に街とか回りたいのにー」

『では自分も、もう落ちます』

言うが早いか、ブロッサムがログアウトする。ここはログアウト者を自動で横の休憩テントに転送してくれるらしく、その体は自動モードで動いて取った部屋へと歩いていった。間髪いれない撤収に二人で顔を見合わせて、

「ってか、テメー俺のことべらべら喋るなよ？記者ってばれるといろいろ面倒なんだよ、この仕事は。テメーだってリアルとかばらされたら困るだろうが…」

「へ？シドくんの知り合いじゃないの？私はここ数日、「体術を操る新参のプーカを知らないか」って聞き込みしてるレプラコーンがいるって聞いてね、話してみたら「同行して貰えるように交渉する」って言ってくれたからついてきたの。だからてっきりキミの知り合いだって思ってたけど…」

「はあ？俺の知り合いじゃ……」

無い…はず。ネットゲームをやる様な知り合い、なんてのは、ＳＡＯ世界にしかいなかったはずだ。…まあ、逆に言えば、ＳＡＯ世界になら、いる訳だが。

「んん？もしもーし？どしたの、考え込んじゃって。落ちるんじゃないの？」

「…あ、ああ……んじゃ、」

「明日は九時にここに集合ね！」

……しまった。思考に気を取られて、現実世界への逃亡のタイミ

ングを逃した。
俺はそうして、しっかりと次の約束を取り付けられてしまった。

episode4　悟る真理の一角2

ゆっくりと目を覚まし、頭のそれを外す。
嵌っているのは、無骨な、それでいて何とも言えない感慨を呼び起こすヘルメット型のハードウェア、ナーヴギア…ではない。あれに比べたら随分と華奢で、まるで装飾具のようにさえ見えるそれは、アミュスフィア。ナーヴギアの、後継機だ。

（やっぱりまだ、違和感あるよな……）

力を込めると壊れてしまいそうに思えるそれは、かつてのナーヴギアの『拘束具』の印象こそ弱まったものの、俺にとってはあまりにも貧弱で、命を預けるにはどうにも頼りなさが否めない。まあそこには、俺のナーヴギアに対しての忌避感の少なさも関係しているのだろうが。

（まあ、好みもあるけど、実際問題なぁ……）

ゲームのハードウェア、という点で考えれば、ナーヴギアの方が機能的にアミュスフィアに勝るのだ。それは延髄部で遮断する神経の強さが強く、その分感じられる感覚が僅かに、しかし確かにクリアになっているのだ。勿論そのせいでブロッサムに負けた、とは言わないが、俺にはどうしてもその僅かの違和感が気になるのだ。感覚の鋭さでいうなら『黒の剣士』や『神聖剣』、『閃光』達も感じるだろう。

「っと、こんな暇は無いな、ぼちぼちメシを……、っ？」

ボーっとしていないで昼食を準備しなくては、と思って買い置きのインスタントを見た時、玄関口のチャイムが鳴った。時刻は、昼の一時をもう回っている。昼食には、やや遅い時間…なのだが。まさかと思いながらドアを開けた先にいたのは、やはりあの人だった。

「ぼ、牡丹さん、…こんにちは…」

「お待たせいたしました、御主人様。昼食を作りに参りました」

「…い、いつもいつもスミマセン…」

後ろに緩く結ばれた、やや茶色味がかった長髪。軽く一礼して、ぴしゃりと揃った前髪の下から切れ長の目を半眼に開いてこちらを見つめる女性…言うまでも無く、あの屋敷での俺のお手伝いを務めていた、牡丹さんだった。彼女は（或いは四神守の家は）どういう心境か、俺があの家を追放になった後も俺の元を毎日訪れてくる。

というか、なぜ俺がフルダイブから帰ってくる時間が分かる？どうやら俺は一度真剣にこの部屋に監視カメラが隠されていないかを確認する必要がありそうだ。ここを紹介したのがあの伯父さん打ということを考えると、もっと早めにそうしておくべきだったかもしれん。

「失礼します」と行儀よく一礼して玄関をくぐった牡丹さんが、靴を脱いで家へと上がる。と同時に、両手に大事そうに抱えている可愛らしい丸型のヘルメットを靴箱の上に置く。ということは。

「……その格好のまま、電スクで来たんですか？」

「何か問題がございますでしょうか？」

大有りです、と言いたい。

というのも、彼女は四神守の屋敷にいたときと一切変わらない割烹着姿。割烹着でも大分アウトだろうが、これが例のあの服装だったなら、ここらがちょっとした騒ぎになりかねんぞ。牡丹さん凛々しい系の美人だし。

「……では、昼食を御作り致します。十分ほどで出来ますのでコーヒーでもお飲みになりながら少々お待ちください。朱春様が淹れて、私に持たせてくださいました。あと、「体調に気をつけて」と、言伝を頼まれました」

「……ありがとうございます」

すらすらと口にした後、ちらりと部屋を見やって、勝手知ったる様子で台所へと向かう。俺が家を追い出されて以来、殆ど毎日牡丹さんが昼に来るせいでもうそこは完全に彼女使用にカスタマイズされており、とても一人暮らしの男の家とは思えないものになってしまっていた。

そう、一人暮らし。

俺としては母さんと二人で家を出たかったのだが、それは爺さんの命令で罷り通らず。

その代わりというかなんというか、俺の家には牡丹さんが来るようになったのだった。

◆

（なーに考えてんだろうなあ……）

コーヒーに口を付けながら、割烹着の後ろ姿を見やった。一言も発さずに黙々と作業をこなし、台所…そしてさして広くは無いこの部屋まで響く包丁の音は、軽やかで美しいリズムを刻んでいる。流石はお手伝いさん、家事スキルは一通り抑えてあるらしい。

毎日のようにやってきて作ってくれる料理はレパートリーも豊富で栄養面も見栄えも申し分なく、世の一人暮らしの男性諸君からしたらこの上ない贅沢だろう。通い妻、という単語が脳裏をよぎるが、無視を決め込んでおくとこに、俺は初日から決めていた。深く考えてはいけない。

だが、そこに何の意図も無いはずはないのだ。

――――それについては、お答えできません。

牡丹さんは、最初に来た日、誰の指示かと聞いた俺にそう言った。「体を気遣ってやってくれ」との指示…というか、お願いをしたのは母さんだということは話してくれたが、ここに来た理由を始め肝心なことは「お答えできません」。「禁則事項です」状態だ。

（牡丹さん本人の意思か、或いは「神月（がみづき）」、「四神守」の家の理由か。はたまた爺さんや伯父さん個人の指示か……ね）

想像は、いろいろと出来る…が、どれも確信は持てない。そして、そこに何らかの思い…もっと言えば何かの策謀が含まれているかどうかも、分からない。ただただ、「何かをされている」ということを分かっておくことしか出来ない。

だが。

「……っ！」

「…もう少々お待ちください。もう盛り付けるだけでございます」

大きく鳴った腹の音は、しっかり台所まで響いてしまったらしく。

何の料理も出来ない俺は、結局は牡丹さんに頼るしかないのだった。

episode4　悟る真理の一角3

「ふぅ……」

ぐったりと椅子にもたれて天井を仰ぐ。家の天井では無いが、俺にはもう随分となじみのある天井だ。しかしネカフェの天井に馴染みが深いというのも、それはどうなんだと思わなくはないな。

「いちいちここまで来るのも骨なんだがな……」

四神守の家を追放された俺は、移動費も最低限に抑えるために今まで使っていたバスでの移動を控えていた。といっても、流石にリハビリしまくっているだけあってちょっと歩いただけで息が上がる様な事は無い。ことは無い…のだが。

「向こうに比べると、疲れやすくはなってるよな……」

というか、向こうの世界では「疲れる」ということが（全身全霊を込めての全力疾走をしたりしない限りは）システム的になかったように思う。つまりは、もともと生身の肉体にはあって当然のはずの「疲労」というパラメータに、戸惑いを感じていたのだ。いくらリハビリをしたところで俺の体が人間のそれである以上、「ゲームの世界のように、疲れを知らない超人の体」なんてものが不可能なことくらいは分かっている。

まあ、それは、今考えることではない。

使いなれたリュックを下ろし、ゆっくりと取り出すのは、ナーヴギア。一人暮らしをすることになるのであれば家に持ち帰って使う

ことが出来たのだが、毎日牡丹さんが訪ねて（しかも俺がフルダイブから帰った時を狙いすましたように）来るのではそれも出来ない。そして。

「監視の可能性も、捨てきれないしな……」

用意された家が、玄路伯父さん……四神守の直系の用意した場所なのだ。あの時代錯誤の家のことだ、監視カメラ、最悪見張りの数人は居ても不思議はない。一応その可能性を考慮し、外出時は尾行に気をつけてはいる…が、『索敵』スキルがあるわけでもない今の俺では、逃げ切れている確信は無い。「悪魔の機械」を未だに使い続けていることも、隠し切れているかどうか…。

「はぁ……」

大きく息を突き、額に手を当てる。思ったより眉が顰められていた事に驚き、苦笑する。考えても、答えは出ないなら、それでいいじゃないか。見張られている？上等だ、だからなんだ？今の俺に、何か失うものがあるのか？例えナーヴギアを取り上げられても、取材費で貰ったアミュスフィアだってある。

無意識のうちにこなしていた接続の準備を終え、ギアをセット。準備は、整った。

「リンク・スタート」

行こう。見張られることの無い世界へ。

俺の、行くべき世界へと。

◆

俺はこうして、日に二回のダイブをするようにしていた。一度は、朝の数時間。これはモモカ・ブロッサムの二人との行商と銘打った観光活動。そして二度目は、午後リハビリを終えた後、喫茶店で一息ついたてからのダイブ。本当の目的…クエストをこなし、微かに感じるＳＡＯ世界の気配を探るための旅。

二人は俺が午前中しかダイブしていないと思って昼間はいないため、ついてこられる心配はない。俺は観光用の写真を取るという名目でクエストを受けつつのダンジョン攻略を繰り返して、体の感覚を養うとともに行商用の商品を仕入れていた。

その結果、分かったことが、二つほど。

一つは、この世界が…この世界の「クエストストーリーのクセ」とでも言うべきものが、ＳＡＯと酷似しているということ。そしてもう一つは、この世界…「クエストのスタート地点」を作った奴は、間違いなく相当にあくどい性格をしているということだった。

そのことを知ったのは、ちょうどモモカ達に押し切られて同行を認めさせられた日。

「面白いマント」の効果に、俺が首を傾げたことが切っ掛けだった。

ｅｐｉｓｏｄｅ４　悟る真理の一角３（後書き）

１２／１０あとがき、削除いたしました。ご協力ありがとうございました！

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ影妖精領

流れるは、美しい音色。流麗な銀色に輝く横笛から聞こえてくる音楽はどことなく年代を感じさせるもので、周囲の雰囲気…この謎めいた空気を醸し出している影妖精領（スプリガン）のそれと、上手い具合にマッチしている。その上、俺は知っているのだが、この音楽は昔の大作ＲＰＧゲームの、懐かしい古代遺跡の音楽だ。うん、いい趣味だ。

「おおっ、シブいね～」

「きれ～！」

周囲の人だかりから、溜め息のようなざわめきが零れる。分かる人には郷愁を誘うし、分からない人にとっても重厚で壮麗なその音楽は、横笛一本だとは到底思えない音色で聴衆の心を捉える。

（にしても、驚いたな……）

横笛をくわえる横顔を見つめる。眼鏡に隠れて良く見えないが、いつものキラキラした瞳とは異なる、神秘的…或いは、神聖的、とでも言えるかもしれない横顔。普段は冷静な俺やブロッサムの分を補って余りあるくらいにはしゃぎ、騒ぐモモカなのだが、こうして演奏の時はまるで別人のように纏う空気が変わるのだ。

曲の終わりの、最後の高音が美しく周囲に伸びる。

周辺が遺跡地帯ということもあってか、音楽妖精（プーカ）領の様な賑やかなＮＰＣ楽団の音楽が無い分、その素敵な一音の響きは領土全域にまで広がっていったような錯覚を覚えさせる。

「おおーっ！」
「すごいすごーい！」
「アンコール、アンコール！」

賑やかな拍手と喝采に、先程の神々しい雰囲気とは一転にこやかに笑って「ありがとー！」と元気よく声をあげて手を振る。先程のオーラを纏った空気もいいが、こちらのほうがなんとなく馴染みがあっていいな。まあ、まだ一緒に旅してたったう一週間、そこまで親しい訳じゃないんだが。

「ありがとー！ありがとー！」

なおもステージ（といっても、遺跡の崩れた石段の一つに過ぎないのだが）上で喝采を浴び続けるモモカ。彼女は、鍛冶妖精領（レプラコーン）（はじめて来たのだと言っていた）以降はこうしていく町々で音楽を演奏してる。その腕の程は、この通りだ。

そんな彼女を、少々離れた場所から横目で見ながら、

「兄ちゃん。この鎧、あんまり見ないけど、古代武具級（エンシェント）かい？」
「いいや。土妖精領（ノーム）の地下ダンジョンでのモンスタードロップだ。だがエクストラ効果があって、暗いところで使えば一時的に隠蔽魔法と同じ効果が出せる。《暗視》の強い影妖精戦士（スプリガン）にゃお勧めだぜ？」
「こっちのは？攻略サイトの名鑑では見たこと無いな」
「鍛冶妖精領（レプラコーン）のクエスト報酬だな。こっちは古代武具（エンシェント）、エクストラ効果は普通に魔法攻撃の両手用戦鎚だな。ただ、情報サイトには載ってないから、何か使い道があるかもなぁ」

俺は戦闘系のプレイヤー達を相手に行商をしていた。

本来は、適当にプーカ領や周辺の中立域で売られている特産品を仕入れ、別の領内で売りさばいて…の予定だった。…のだが、「あるアイテム」のおかげで俺はかなり多くの…そしてハイレベルのアイテムを獲得することになっていて、路銀には事欠かなくなった代わりにちょっといろいろと面倒になってもなっている…が、それは後でいいか。

とりあえずそんなこんなで、ごつい男どもとひそひそと商談を交わす俺の横から、

「わーっ、かわいーっ！これ買うわ！」

「私も私もー！」

黄色い悲鳴が上がった。

俺の更に横では、ブロッサムが黙々と針仕事を続けながら時折表示されるトレードウィンドウを確認、ハンドメイドの作品を売っているのだ。無愛想だが、それもゲームの世界ではあまり珍しくも無い態度なのか、女の子たちは気にすることなくアクセサリーを眺めてはしゃいでいる。

彼女は、驚いたことに、自種族の領土内に店を構えている一線級の『細工師』だった。ストレージ内には多数のアクセサリーがあり、見た目重視の女性プレイヤーにも、実用性一本の戦闘系プレイヤーにも幅広く楽しめるラインナップを提供している…とはモモカの談。

ああ、針仕事をしているのは俺やモモカの装備品の補修をしているためだ。有難いことに俺達は革装備二人、魔法使い系のローブ一

人の軽装パーティーだ、『鍛冶』スキル無しでも『裁縫』だけで武器防具の手入れには事欠かない。最もこちらは修行中…というか、俺達が旅を始める直前に上げ始めたようだが。

（にしても、助かってるぜ、ホントに……）

ここは、スプリガン領だ。

はっきり言えば、相手さんからすれば俺を襲って身ぐるみ剥いでも一向に問題ない…というかＡＬＯではそれが推奨すらされているハードなゲームのだ。だが、そういった観光目当てのプレイヤーを辻斬るのを良しとはしない、良心的なプレイヤーも多いのも確かだ。モモカの演奏でこれだけの人が集まっていれば、俺やブロッサムのアイテムを狙ったＰＫを心配する必要はなかろう。

とにかく。

俺達三人の旅は、予想以上にうまく行っていた。

予想外の難しさと、恐ろしさ、そして面白さがあったのは。

午前の三人旅行では無く。

午後にこっそりとダイブしての、俺の一人活動だった。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ影妖精領２

アルヴヘイムの時間は、現実世界のそれとは若干長さが異なっている。午後一番にダイブした俺を待っていたのは、遺跡に映える夕焼け模様だった。うーんなんか最近、俺の動く時といえば『逢魔が刻』がトレードマークみたいになっちまったな。狙ってるわけじゃないんだが。

ゆっくりと降り立ち、装備フィギュアを操作する。この時間から活動すれば、帰ってくるのはこちらの時間ではもう夜が深まるだろう。選択する装備は夜用、そして行商人には相応しくない『隠蔽（ハイディング）』ボーナスの高い、宵闇色のコートと、燈赤色の髪を隠すサンドイエローのバンダナ。

加えて。

（今日も、コイツの世話になるかね……）

ストレージの中に、確認するアイテム。

《トリック・クラウンズ・シェイド》……『奇術道化の影』の名を冠する、薄布の衣を確認した。

◆

そのアイテムは、はっきり言ってネタアイテムだった。

少なくとも、どの情報サイトでもそう紹介されていた。

有する効果は『自分の外見を、他の種族の特徴を加えたものに取り換える』というもの。それだけを聞けば凄まじいチート、いくらでも有用、悪用の手段がありそうで驚いたのだが、情報サイトで確認してみるとその効果はがっかりの一言だった。

まず、プレイヤーに対しては、カーソルで見ると変身前の種族が分かる。

次に、街を守るガーディアンも誤魔化せない為、出入り制限も覆せない。

極めつけに、装備によるスキル値や熟練度の補正も変化なし。

結論。

本当にただただ「外見を変える」というだけのアイテムだったのだ。サイトと違って情報の錯綜する掲示板を見ているとこのアイテム、近々の大規模アップデートで実装されると噂の種族変更…所謂『転生システム』を匂わせ、転生した際の自分の外見を確認するために用いるアイテムだ…などと書かれていた。なるほど、これはこれである程度納得できる。

だが俺は、何か違和感を感じた。

このアイテムは、本当にそれだけなのか？あのＡＬＯ世界、居るのはプレイヤーとガーディアンだけでは無い。ショップや村人として、少なくない数存在する人々…そう、ＮＰＣ達。彼らに対してはどうだろうか？

もし俺がこのゲームの設計者だったら。

いいや。ここが、ＳＡＯの世界だったら。

――――ＮＰＣのクエスト発生条件に「この種族で尋ねる」というフラグがありえるはず。

そして、その予想は、正しかった。これが俺が、数々の古代武具（エンシェント）級アイテム…そして幾つかの、伝説級（レジェンダリー）の武器さえもを手にすることが出来たカラクリだった。

◆

ゆっくりと、宿を出る。辺りは夜、古代遺跡は暗闇の中に佇んでいる。いくら夜目が利く影妖精（スプリガン）とはいえ、さすがに平日の午後だ。道行く人の数は少ない…が、その目は皆、ぎらぎらと光っている。

（ま、平日の昼間っからログインしている様な奴らだ。廃人レベルとして、恥ずかしくない強さとスキル熟練度の連中ばかりだろうな……）

だが、引く気はない。何せ俺だって、立派な廃人だ…いや、二年間ログインしっぱなしだった俺なら、もう廃人通り越して死人レベルだろう。

苦笑を噛み殺しながら古代遺跡地帯から離れ、石畳の道をゆっくりと歩く。革のブーツは、あの世界に比べればそのグリップが若干心もとないが、足音を消す分には十分だ。暗い夜道で、俺の進む気配を限界まで隠してくれる。

行き先は、一軒のＮＰＣ家屋。店でもない、何の変哲もない家だ。
俺が普段通りのプーカの姿で入っても、または他のスプリガンが入ってもなんのイベントも無かった家。入ってすぐに、薄布を体に巻き付ける。マントの前留めの部分をクリックするとウィンドウが開き、幾つかの選択肢が現れた。変身後の種族の選択画面だ。

そして幾つかを試してみると。

「……あんた、火妖精（サラマンダー）なのかい！？こんなところに来て、大丈夫なのか！？」

変身した瞬間にかけられる、ＮＰＣの驚いた、それでいて潜められた声。

（……ビンゴ。…にしても、このゲームの製作者はいい性格をしているこった。敵対種族として進入制限をしてしまえばこの領内には入れなくなるのに、結構な量の「他種族用」クエストが用意されてる、なんてな…）

まあ、とにかく。
俺はまた、こうしてクエストの依頼を取ることに成功したのだった。

episode5　行商in影妖精領3

この魔法の世界アルヴヘイムにおいて、ぶっちゃけ大半のスキルは魔法によって補完、代替が出来るようになっており…それは『隠蔽（ハイディング）』（こっちでは「隠密行動」、だったか？）』、『索敵（サーチング）』も例外ではない。それぞれ効率的な魔法が用意されており、こっちがどんなに頑張って隠れても（或いは探しても）あっさりとその上をいかれれてしまう。やれやれだ。

（といって、しないって訳にもいかないがな……）

息を潜めて覗く先は、重厚な岩で作り上げられた洞穴の様な遺跡がいくつもの口をぽっかりと開けている。その様は、いかにもダンジョン、それも昔懐かしい古代迷宮、さもなければ不思議のダンジョンといった趣だ。

スプリガン領内上級ダンジョン、『古代獣の封印迷宮』。情報サイトによればスプリガン領内ではかなりの難易度だが、邪神級といったソロではどうにもならない敵の湧出（ポップ）は、流石に無いらしい。その分なかなかのレベルのモンスターが高い率で湧き出してくるため、索敵や隠蔽、そしてダンジョン内の三次元的な構造を上手く利用して魔法や射撃、取り囲みを防ぐ必要がある…うんぬん。

まあ分かりやすく言えば、プレイヤースキルさえあれば、数値的熟練度関係なしのソロでもなんとか潜れるぎりぎりのレベルのダンジョン、というわけだ。つまりは、俺の戦いの練習には持ってこいだ。

（んじゃ、行くかね……）

周囲の壁を見やる。

（……ん？）

ふと、違和感を感じた。そこに、一人のスプリガンがいたからだ。硬質の毛を持つ者が多いスプリガンには珍しい、流れるような黒髪を肩の下まで伸ばした男だ。大きな瞳にシャープな顔の輪郭、そして全体的に均衡のとれた体。…外見データがランダムのこの世界では、ここまでの美男は珍しい。いや、それはいい。ランダムだから、珍しくはあるが居ても不思議はない。問題は。

（俺が、全く気付かなかった…？）

男は、何の変哲もない壁の…いや、どことなく重い雰囲気の壁の前でしばらく佇み、そのまま歩き去っていく。魔法で隠れていたのか？俺の『索敵』はマスターだが、それでも魔法を使えば誤魔化す手段は多いから、ヤツも相当手練のメイジなのだろう。全く、困った世界だ。

だが。

索敵の警告アラームが鳴ろうとする気配を感じて、咄嗟に横に跳ぶ。

「おっとっ！」

まあ流石に、襲いかかってきた奴くらいは、気付くことが出来た。

恐らく昼間に俺の行商を見て、そのアイテムの品揃えに目が眩んだ馬鹿共だろうな。数人が「バカ外すなよ！」だの「逃がすなよ！」だのわめいている。

うむ、ＰＫ野郎ではあるがそれほどの熟練者でもないようだ。こうしてみるとプーカ領で俺が毎日のように相手をしていたナントカというＰＫギルドの連中はそこそこに強かったんだな。俺ならこのレベルの雑魚、何人来ようが苦も無く撃退できる。

普通ならば。問題は。

「ここはスプリガン領内だ、向こうの攻撃は通らねえ、一気に行くぞ！」

相手の種族の領内では、俺のダメージは一切通らないということか。

（…ま、しゃーないか）

溜め息をつく。倒せないなら仕方がない。

俺は一つ、溜め息をついて。

「ってオイ、逃げんなコラ、待てやぁー！」

全力で遺跡ダンジョンの中へと逃走を開始した。

◆

ダンジョン、『古代獣の封印迷宮』に潜って、一時間ほど。
辿り着いたの地下三階層、その薄暗い通路の中。
遺跡中に轟くような、地を這いずる咆哮が通路と俺の体を震わせた。

「オイオイ誰だ情報サイトに「巨大モンスターのポップはなく、ソロプレイの特訓に最適なダンジョンです」なんて書きこんだ奴！！！コイツどう見ても巨大ボス、もしかすりゃあ邪神級Ｍｏｂじゃねえのかコレ！！！？」

悲鳴を上げて、遺跡の狭い通路を疾走する。

人一人が走るのが精一杯のスペース（それもそこかしこに転がる遺跡の残骸を巧みにかわす事が出来れば、の話だが）を駆け抜けながら、ちらりと背後を見やる。と、再びの咆哮。「グルルルル」と「ギャアアア」を足し合わせて更に二倍した感じの絶叫を上げて襲いかかってくるその影は。

「蛇か？ミミズか？それとあれか、巷で流行りの触手ってヤツかあ！？」

残念だが俺にそっちの趣味は無いし、例えあったとしても俺自身がその餌食になるのはごめんだ。すさじい勢いで這って俺を追いかけるその巨体が掩蔽物に直撃するたびに、情けないほど僅かな量敵のＨＰが減少していく。俺に出来る攻撃は、それだけだ。

「畜生、先はなげえなクソっ！！！」

ＳＡＯ世界とは違って、ＡＬＯでは膨大なＨＰ総量を持つ擲Ｍｏｂは、ＨＰゲージの表示が段組みになって表示される。このデカブ

ツならぬナガブツＭｏｂ、その段数はなんと三つだ。普段は一つの依頼に時間はかけずにサクッと終わらせ、複数の依頼を受けてまわるつもりなのだが、どうやら今日はそうもいかないようだ。

いいだろう、こうなれば持久戦だ。

覚悟を決めれば、あとは気合いの勝負だ。

追いかけっこが始まって十数分が経過した頃に、やっと一本目のＨＰゲージが消える。

この走りっぱなしの長期戦、俺が辛うじて戦い続けられている理由は、このダンジョンの特殊な構造故だった。シュートトラップから落ちて少し進んだ先に現れたこのボス戦のフィールドは、分かりやすく言えば、迷路構造。有難いことに行き止まりのないこの通路、掩蔽物さえ避けられれば、そして走り続けられれば死にはしない。

だがまあ。

「どう考えたって、一人が誘導、他数人が側面から攻撃するボスだろコイツ！！！」

繰り返しになるが、このダンジョンをソロ向けと書いた奴、絶対に許さんぞ。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ影妖精領４

更に逃げ続けること数分、とうとう二本目の敵ＨＰバーが消滅した。その意味するところは、あと一歩…ではない。昔の超有名大作マンガ風に言うなら「ここからが本当の地獄だ」ってやつだ。一声大きく奇声をあげたナガブツ、その鋭い牙のずらりと並んだ口元から。

「うおおおっ！！！？」

真っ赤に燃え盛る火焔が噴き出してきやがった。これがコイツのエクストラ攻撃か。開けた空間でならいくらでも避けようがあるが、この細い通路ではそうはいかない。足を止めないまま羽織った革製コートで抱きしめるように体を覆うが、一気に三割近くＨＰが削られていく。

まずい、まずいぞ。何発もは喰らってられん。

慌ててポーションを取り出し…足が遺跡の残骸を踏み外して派手に転倒した。

くそっ、大分このミニサイズ身体にも慣れてきたと思ってたのに！ちなみにこの世界では、どんな踏み外し方をしても捻挫や骨折をすることは無い…が、そんなことは今は何の慰めにもならない。

「うおおおっ！！？」

転倒の勢いで手からポーションがすっ飛ぶ。後ろには、迫りくる巨大ナガブツ…うわあ、やべえアレ、なんか口からよだれみたいなの撒き散らしまくってるし。あの外見はこんな神秘的な遺跡とかじゃなくって砂漠とか毒沼とかに居るべきタイプだろアイツ。

（…っと、そんなこと言ってる場合じゃねえ！）

咄嗟に緊急時と判断、鍛え上げたウィンドウ操作速度で取り出す、投擲用のマジックアイテム。《投剣》スキルなどビタ一上げていない俺だが、それでも鍛え上げた反応速度は右手を霞むほどの速度で動かして取り出した魔法球を投げつける。

一直線に飛来した水晶は、怪物の顔（その目も鼻も無い巨大なのっぺらぼうを顔と呼ぶのなら、だが）に過たず衝突し、派手な音を立てて弾ける。同時に白い霧のような魔力が噴き出した。マジックアイテム、《フロズン・スフィア》。ノーム領巨大地下ダンジョンの地底湖でのクエストで受けた、投げつけるだけでダメージと束縛の効果をもつ氷雪魔法を発動させる、俺の数少ない魔法攻撃手段。

――――――――オォォッッッン！！！

迷路に怪物の悲鳴が響き、ＨＰバーが一割近く減少する。本来束縛の魔法なのにこれほどのダメージがはいるとは、どうやら弱点らしい。まだ俺もツキに見放されてはいねえな。

敵が突進を止めて大きく仰け反り、体に張り付いた氷を壁に擦りつけて落とそうと身を捩らせる。すかさず続けざまに氷球の残りを投げつける。ああ、これだけで一財産……。

だがそれは、流石にゲージ一本を削りきるまでは出来ない。全弾

命中したのは奇跡とも言っていい偶然だったが、それでも残りはゲージの三割はある。

（……仕方ない、一か八か！）

起き上って、一気に跳躍。

さっきまでと同様に、逃げる方向では無い。

「おおおおっ！！！」

真正面から、立ち向かう方向に、だ。

跳躍のままに全力で振り抜く足は、あの世界での、『体術』スキル連続蹴り技、《ネプチューン・ストーム》。連続の回転蹴りは、右の回し蹴り、続けて左の後ろ回し蹴り、それを二セット連続で繰り出す四連撃。あちらの世界では相当の硬直時間を課せられる大技で、俺の得意とするスピードファイトには向かない為に敬遠していた技だったが、こちらではその心配はない。勿論システム的なアシストは得られないが、それでも二年間培った戦闘の勘は、当時の動きを完璧にトレースする。

一撃、一撃、もう一撃！

「うおおおおっ！！！」

絶叫しながら神経回路を振り絞って、最後の一撃が深々と怪物の頭頂部に突き刺さり。

大きく痙攣したその巨体が、ポリゴン片を残して派手に爆散した。

◆

「はぁ、はぁ……うっし、クエストアイテムゲット…かぁ…」

荒い息の中、力尽きて倒れそうになるのを必死に堪えてストレージを確認する。新規獲得欄に新しく入っているのは、クエストアイテム、《封印獣の毒牙》。受けているサラマンダー用クエストのフラグアイテムだ。

直後、脱力して、がっくりと膝をついた。

まったく、この「異種族用」クエスト、難易度高すぎだろ、全体的に。

恐らくは、「既に領内のクエストをやり尽くした様な、上級者用のクエスト」としてこれらのクエストは設定されているのだろう。今回のクエストだってそのＭｏｂの力は俺一人でもなんとか（多少イレギュラーなアイテムの力は借りたものの）なんとか出来なくは無かったが、ここまで来る途中のシュートトラップは明らかに数人しか入れない…つまりは、人数を制限する為のものだった。

土妖精領（ノーム）、鍛冶妖精領（レプラコーン）でも、他のクエストと比べて全体的にしんどい。そろそろ俺一人で出来るのも、限られるか。あの世界で二年間培った勘で無理なクエストを避けれてはいるが、所詮は勘だ。いつまでもつか。

（そろそろ現地で、手伝いでも雇うか…？）

まあとりあえず。

こうして俺はまた、新たな武器…今回は、古代武具級（エンシェント）の鎧を手に

入れたのだった。

重金属鎧なんぞ俺には装備出来んから、行商の品目入りだったが。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ火妖精領

「え、えっとね、……」
「だーからいいって言ってんだろ。心配ねえって」

心配そうに眉をひそめるモモカを、ヒラヒラと手を振って制した。

既に闇妖精（インプ）領の高山地帯を抜け、周辺は徐々に砂地へと変わりつつある。見渡す限りに広がる荒涼とした砂漠地帯は俺にとっては遮蔽物も無く足場も悪い、天敵としか言えない地形だ。サボテンの生えた場所やオアシスまで行けばなんとか戦えなくはないが、それでもＭｏｂ相手が精一杯、対人戦は到底不可能だ。

『行きたければ、ご自由に。ただし死なれた時はご連絡ください。貴方は各街でセーブをしていませんから、音楽妖精（プーカ）領まで戻ることになりますから』

「ああ、それなんだが、二人は大丈夫なのか？俺死んだらここで残されることになるんじゃ、」

『私は一旦鍛冶妖精（レプラコーン）領に戻って、再度プーカ領まで行きます』

「あ、私も大丈夫だよ！セーブも領内の家でしかしてないし、死に戻りするにしてもどうせ音楽魔法瓶とか演奏用の楽器とかしかもってないから！」

……いや、二人の持ってるアイテムも、決して安物では無いとは思うのだが。まあ、問題ないというのならいいだろう。それに突き詰めれば、俺が死ななければいい話だ。死んだら…死んだ時考えよう。

ここまで二人（ブロッサムはしてるのか微妙だが）が心配する理由は一つ。

この砂漠地帯を縄張りとする妖精、火妖精（サラマンダー）。

ここまでプレイした中で聞いたところのイメージは、泣く子も黙る、飛ぶ鳥を落とす現在の最強勢力。

そして、敵対種族を、躊躇なく切り捨てる、非情にして冷血の、コアゲーマー集団。

そのサラマンダーの領地の首都であるガタン…行商なんぞに行く者は皆斬られるといわれるその本拠地に、俺が赴くと言ったからだった。

◆

「うおっと！！！」

普通に入ろうとして、斬りかかられて慌てて跳び退った。プレイヤーでは無い、ＮＰＣガーディアンだ。種族の領主によって設定できる、「領内の種族の立ち入り制限」で配置されるこの剣士は、街中に入ろうとする不許可種族に容赦なく斬りかかる。

だが。

「やべえやべえ…。プーカってどこでも入れるんじゃなかったのかよ……」

この「立入不可」が、ガーディアンというシステムであるのは正直有難い。

確かにこいつらは無敵、一発でＨＰの大半を持っていかれるし、こちらのダメージは通らない……が、俺のスピードがあれば、数回分の攻撃は回避できるし数秒であれば逃げ切れる。システム的な立ち入り禁止よりは、こちらに自由度があるということだ。案外キリトとかなら、ガーディアンと切り結びながら街中探検とかできるんじゃないか？

閑話休題。

いきなり斬りかかってきたガーディアンからの連撃を回避して、街の外…システム的保護圏外へと転がる様に逃げる。途端に騒ぎを聞き付けた野次馬が続々と集まってきやがった。その数十人、二十人…ってやべえ、中には杖やら槍やらの武器を構えている奴らもいるじゃねえか。殺す気マンマンだぞこいつら。一人ではとても対応できん。

モモカとブロッサムは、近くの中立村においてきた。モモカは最後までついてきたがったが、そこはブロッサムに押さえつけて貰った（彼女は喋らないが、指示すれば受け入れてくれる）。俺のわがままに彼女らをつき合わせる（そのついでに狩られる）のも悪いしな。まあ自分勝手なコトを言えば、一人で街に入れば一日中クエストと街中探索ができるし。

と、そんなこと言ってる場合じゃないな！

「待った待った！俺は戦う気はない！」

「だったら何の用だ！」

「行商だ！単にアルヴヘイム中を回って、観光がてらにクエストアイテムを売ってる、ホラ！」

杖を構える赤髪（サラマンダーの特徴だ）のメイジの声に応えて幾つかのアイテムをオブジェクト化して広げる。広げるのは各種特産品、そして珍しいクエストアイテムを幾つかだ。あまりに珍しい…情報サイトに載っていないようなアイテムを晒すとＰＫされる危険があるので、細心の注意は払ってはいる。

（ちょっとの油断が、命取りだしな……）

なにせこの街は、積極的に風妖精（シルフ）や闇妖精（インプ）を狩り、その戦利品をかき集めて戦力を強化、近いうちにこのゲームのグランドクエストたる『世界樹攻略』へと乗り出すと噂のサラマンダーの首都なのだから。

だが、そこにこそ、入り込む隙はある。

「世界樹挑戦の噂がホントなら、ぼちぼちいいアイテムが欲しくなるんじゃないかな、と思ってな。例えばアンタの防具、見たところ《クリンゾンローブ》のようだが、上級ダンジョンや邪神級Ｍｏｂを倒すにはちょっと魔力補正に不安があるんじゃないか？こっちのマント、《オーロラ・フレイム》なら火属性魔法に倍近い効果があるぜ？」

「っ、こ、これは、」

「杖だって、構えてるそれよりはいいモノ扱ってるぜ？見ていかないか？」

「……っ、」

自分の装備をバカにされたメイジが、顔を髪と同様に赤く染める。

世界樹攻略に向けて動いているなら、各個人のノルマで徴収される金額もバカにならないはずだ。必然、金銭でないアイテム獲得のためにクエストを受ける暇は削られ、いい装備を探すのは難しくなる。動きから見てプレイヤースキルはそこそこの様だし、そろそろいい装備がほしいと思っていたのか、男が言葉に詰まる。

その横から、メイジよりもがっしりした、長槍を携えた男が一歩進み出た。

「へえ、ジータクスのよりいい装備があるのかい。一行商人にしては随分品揃えがいいな？俺は魔法戦士なんだが、いい装備はあるかい？」

「勿論。魔法は、火属性だろ？武器？防具？」

「んん、武器がいいか。重装槍で、魔法補正とかあるか？ＮＰＣショップじゃあんまいいの見当たらなくてな。いいのないか？」

「これがあるが、かなり重いな。重量級プレイヤーでも使えるかどうか…」

「ほお、どこで手に入れたんだ？見せてくれよ」

こいつは思ったよりフレンドリーなようだ。すらすらと話し掛け、俺にカマかけてくるのも忘れない。体は完全に近接タイプのパワータイプだが、魔法も使うだけあって頭の回転もはやいようだ。おそらく「今は話を聞き出し、アイテムのレベルを見るべき」と判断したのだろう。

と、アイテムを広げる俺の周囲が、突然静寂に包まれた。

訝しむ俺の前で、周りの人垣が真っ二つに割れる。おお、これが噂のモーゼｉｎｇというヤツか。

その先を、ゆっくりと見やる。

「なんの騒ぎだ？」

そこにあったのは、槍の男よりさらに屈強そうな戦士が、こちらを睥睨している姿だった。

episode5　行商in火妖精領2

「何事だ？」

聞こえた声は、太いが味のある、男らしい声。ゆっくりと歩んでくるその体は、重量級のサラマンダーの中でも更に一際大きい。巨人タイプの一歩手前、といったところか。今の俺とは、頭一つと言わないくらいの差があるだろう。全く羨ましいこった。

一目で高級品と分かる、巨大な黒い剣は、恐らく伝説級（レジェンダリー）。赤く輝く鎧と、たなびく流麗な刺繍の施されたマント。逆立った赤髪がさらけ出されているが、額を飾る額冠が恐らく兜の代わりの頭装備なのだろう、美しい輝きの中に魔力の雰囲気を感じる。装備だけ見ても、相当の手練だと分かるが、それだけではない。

（……強え、な…）

その堂々とした立ち姿。完璧にフルダイブ環境に習熟した者特有の、力みのない滑らかな歩行。何気ない一挙手一投足が、その男の力量を伝えてくる。直感で測るその力量は、俺より上…もしかしたらキリトやヒースクリフ、或いは彼女に届くかもしれない。

男が俺の方を油断なく見やったまま、ピク、と眉を動かす。

「何だ、貴様は。ここはサラマンダー領の主都、ガタン。他種族の立ち入りは制限されている」

その手は、いつでも剣を抜ける体勢だ。事を荒げるのは、まずいな。

直感し、四神守家関係以外では滅多に使わない敬語で応える。

「ええ、さっき知りましたよ。ガーディアンに斬りかかられましたから」

「…ふむ。そして領内サラマンダーは基本的に他種族が来れば狩るように指示している。ここに来るまでに、プレイヤーから何度も襲われただろう。わざわざ何故ここまで来た？」

行商に、と応えるのは簡単だ。

だが、俺はこの男に、それ以上の何かを感じた。

もしかしたらそれは、あの世界で俺を何度も助けた、エギルの言う俺の最大の武器である「危機察知能力とそれを回避する才能」ってやつだったのかもしれない。

「……探し物が、ありまして。各地を回っているんです。」

その勘が、俺に告げさせる。

正直、これは本気では無い…と、自分では思っている。ゲームの中で人探しというならまだしも、繋がってもいない…そしてこの世にもいないゲームの残り香を探すなんて、バカげた話だと頭では分かっているから。だが、心の底で、その思いがあることも、やはり否定は出来ないのだろう。

その声は、随分と良く響いた。

聞いた男は、また眉を一つ動かして俺を見、…笑った。

「面白い奴だな。単なる行商人なら斬って、首ごと荷物を置いていってもらうのだが。貴様は、違うのだな。で、ここに入る当ては

あるのか？」
「いいえ。ですが丁度今手段を知っているだろう人を見つけましたよ？」
男の口元だけの笑いが、深まる。
それをみて、俺の顔にも笑みが浮かぶ。
「ほう。確かに俺はサラマンダーの『将軍』だ。《パス・メダリオン》も発行できる。…が、タダで、とはいかんな。貴様は俺に、何をしてくれるんだ？」
「……俺の持つ、名鑑にない古代武具級（エンセンシェント）の重金属鎧でどうです？その鎧よりいいものだと自負していますが」
実体化させる、紅の輝きを放つ金属鎧。影妖精（スプリガン）領で手に入れた、俺の持つ最高額防具。
だが、それは逆効果だったようだ。
「俺はアイテムにはそこまで執着は無い。…が、貴様を斬り捨てれば、手には入るわけだ。…そうだな、俺に勝ったら、《パス・メダリオン》を発行してやろう」
「……勝ったら、ですか？……五分逃げ切ったら、ではどうです？」
「ふ…いいだろう。俺の名はユージーン…いくぞ」
男…ユージーンが、剣をすらりと抜きだす。
それを見て、俺も笑う。相手が挑んでくるなら、問題ない。敬語を使う必要は、ないな。
「……シド、だ。こいよ。スピードには、自信があるぜ？俺は」

男の笑みが深まる。そのまま。
凄まじいスピードで、巨体は俺へ向けて弾けるように突っ込んできた。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ火妖精領３

「…やるな！」
「そっちこそ！」

繰り出される剛毅な剣を、紙一重で回避する。

強い、と感じた直感は、やはり間違ってはいなかった。その巨大な剣の重みを生かした強烈な剣戟はかつてのキリトの戦闘スタイルに似ているが、それに加えて巨体を生かした突進攻撃まで織り交ぜてくる。間違いなく、キリトランクの実力者だ。

全く、俺の勘は自分でも時々怖くなるな。あの世界での二年間がこの力を俺に与えたのか、或いは代々伝わる四神守の血か。もしかしたら、親父の方の血かもな。

まあ、今はいい。
使えるものは、使うだけだ。

「ぬぅん！！！」

再び振り抜かれる大剣を、大きく跳躍…バク宙して避ける。高々と宙を舞った俺を、素早く飛翔、追撃してきたのは流石だ。が、それも予測の範囲内。

「あだっ！」

空から俺達二人を眺めていたサラマンダーの男の胸鎧を足場に地面に急降下、再び戦場を地上へと無理矢理変える。

空中戦は分が悪いが、完全な平面でも勝ち目はない。いやそもそも俺に勝ち目が無いのは分かりきっていた事だ。なんとか今辛うじて生きているのは、こちらから手を出さないでいい…その実攻撃に神経を割かなくていい分回避に専念できるという条件なためと、周囲がサラマンダーだらけでユージーンが魔法や剣が十分に振えないせいだ。

しかし敵もやはりなかなかのもので、観客を盾代わりに使う俺に対して、巧みに同種族を避けながら大剣を向けてくるが、その避けるための僅かな思考の隙間があれば、俺ならなんとかできる。避けるだけならこの体のリーチも関係ない。

「おら、今四分！あと一分だぜ？」
「…む、そうか。では」

ユージーンが、一旦、その突進を止める。

そして構える剣は、横薙ぎの軌道。正気か？これだけサラマンダーがいるのに？
再度の突進に咄嗟に横っ跳び、観客の一人の大柄な男を盾にするべくその脇に隠れ…驚愕した。

みやった男…さっきまで話していた、大柄な槍使いのその顔に、にやりとした笑みを見たから。

瞬間、スローになる世界。

振り抜かれるユージーンの巨剣。
その剣が、吸い込まれるように槍使いの胴に入り。

鎧の胴体を、剣が、すり抜けた。

◆

「ッ……！！？」

男の腰の高さ…丁度、俺の、首の高さ。
すり抜けた剣が、俺の首を。

「…ほう、やるな」

跳ね飛ばす直前、咄嗟に庇った腕を派手に斬りつけた。
盾代わりに使った男が、大柄な戦士で良かった。胴体をすり抜けるのに時間がかかった分、ぎりぎりタイミングで防御が間に合った。
だが。

「っく……」

それでも、間に合った、と言えるかどうかは微妙だ。

咄嗟の動きはやはり、ほんの数週間で治る様なものでは無かったらしい。庇ったのは、左腕。本来ならこれはかわすべきだった。例え跳んだ直後であったとしても、頭を下げるなり転がるなりして回避することは決して不可能では無かった。

それを、受け止めてしまった。

ありもしない、《フレアガントレット》を脳裏に描いて。

小さく舌打ちして、疾走を開始する。雑踏を縫うように走って身をくらますが、敵は飛んでやがる。上からなら俺の動きは丸見えだ。まだあと数十秒、逃げ切れない。一瞬だけ、ちらりと自分のステータスを見やる。

（まずいな……）

一気にＨＰが半分以上持っていかれた。イエローの注意域は、俺が次の一撃には耐えられないことを無情に告げている。あの巨剣が対象を透過する力をもつなら、このプレイヤーの雑踏は効果が無い。次の一撃は、完全に見切らなくてはならない。見切って、避けなければ。

（できるのか……？）

今の、俺に。

あの世界の俺が見たら、笑ってしまうほどに弱くなってしまった俺に。

瞬間、足が止まった。

走り続けた、足が、止まった。

命綱であった、俺の動きが、止まってしまった。

瞬間、響き渡る咆哮。

見るまでも無い。ユージーンの空からの重突進攻撃だ。止まった隙を見逃すようなレベルの敵ではない。そして、止まってしまった俺に、それをかわす手段は無い。勝負、ありだ。俺はゆっくりと目を閉じた。

感じる、轟音。

衝撃。

だがそれは、俺の体を吹き飛ばしただけだった。

（は、はずれた……？いや、外した……？何故……？）

答えは、直接もたらされた。

「五分、だ。斬りたい気はあるが、…よかろう。楽しめた」

吹き飛ばされて転がった俺を、剣を仕舞いながらユージーンが見下ろす。若干敬意らしい物が見えなくもないが、こんだけ見下ろしておいてはそれもないか。ちくしょー…と思わなくも無いが、顔には出さない。「へへっ、やってやったぜ」のVサインだけを出す。

その様子を見て、ユージーンが口元だけで笑う。左手を操作して、出現した初めてみる巨大なメニュー画面を操作し…一つのアイテムを取りだした。放り投げられる小さなそれは、まぎれもない《パス・メダリオン》。

…俺は、とりあえず、目的を果たした。

ただ、ここで負けたことは、俺の心に、長く、長く影を落としたのだが。

◆

入るのに非常に、ひっじょーに苦労したガタンだったが、正直中身はうまみが全くなかった。全く、努力が報われるなんて嘘っぱちだ。報われるときには報われるし、報われんときは報われんもんだ。まあ、アイツらはこういう俺の姿勢は嫌いだったがな。

とにかく。

苦労して入って、苦労して探したが、異種族用クエストは重装防具だったり剣や槍といった俺達の旅には使わない武器だったり、地理的な特殊Ｍｏｂ用のテイムアイテムなんてケットシーでもない俺には使えない道具だったり。

深いため息をつきつつ盛大に無駄骨を折った俺を中立村で迎えた二人（主にモモカ）の爆笑は、チョークスリーパーで応戦しておいた。保護コードぎりぎりの痛めつけなら、慣れたもんだからな。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ風妖精領

俺が旅を初めてはや数週間。
世間一般は年が明け、新年会のシーズンだ…が、生活態度的にはニートの俺には関係ない。四神守家の新年のうんぬんかんぬんもお呼びはかからず、正月はのんびりと自分のステータスアップと戦闘訓練に費やせた。ん？何か問題でも？ニート？望むところだ。

正月ぼっち？ああそう言えば、食うつもりは無かったんだが牡丹さんがおせち持って来てくれたな。あの量は流石にちょっとビビった。ってか、あまりもんじゃなかったぞ、アレ。わざわざ作ったのか？有難いが、そこまでされるとちょっとなんか怖いぞ。

さて、そんなこんなでＡＬＯ。
俺はアルヴヘイムの各領の主都は勿論、かなりの数存在する中立村も結構な数を訪れて旅をしていた。そんな中で、寂れた村ものどかな村も、勇壮な城もおどろおどろしい街も見てきたわけだが、その中で最も美しい街は、と聞かれれば、俺はこう答えるだろう。

風妖精（シルフ）領の首都、翡翠色の尖塔、スイルベーン、と。

◆

「すっげえな……」

思わず感嘆の声を漏らして、夢中でスクリーンショットをとる。

陽光を受けて輝く緑色の尖塔の積み重なったその街は、俺の今まで見てきたあらゆる景色の中でも間違いなくトップスリーには入る絶景だ。緑を基調としていて目にも優しいしな。間違いなく俺の書く「ＡＬＯ旅行記（仮）」の彩の一つとなってくれるだろう。

さらに有難いことに、シルフはそこまで行商に目くじらを立てることは無いようで行商だと告げうと積極的に狩られることも無く、火妖精（サラマンダー）領の時と比べればその苦労は天と地どころか地球とお空の星くらいの差があった。

さらにさらに加えて。

「うわーっ、この音楽いいなあーっ！しっとりした感じでさ」

「ああ、その曲？その曲だったらね、入れた魔法瓶があるよ！ただちょっと値段が…」

「ええっ、ホント！？買う買う、私こう見えても古参だし、懐は今割と余裕あるんだ！」

「そ、そう？だったら、こっちの音楽もお勧めだよ！いい感じのムードで、踊りとかにあう感じ！」

「踊りかあ…いいね！」

「り、リーファちゃん、あんまり買いすぎると……」

「いーの、私が稼いだ分なんだから！レコンに迷惑かける訳じゃないでしょ？」

一部のシルフは、積極的に馴染んでいるようだった。

モモカの今回の客寄せ用音楽は、以前の様なソロ演奏ではなく楽器達を使ったバンドでの演奏。音楽妖精（プーカ）の特殊技能の一つ、『楽器の自動演奏』。特殊な効果をもった演奏は出来ないが、楽譜さえあれば自動で楽器がそれを演奏してくれる…という「作曲家用システ

ム」だが、一人でたくさんの楽器を同時に演奏できるのは、こうした行商の場ではとても便利だ。

彼女のストレージは殆どが音楽関係で埋まっている。ギター、ベース、横笛、ヴァイオリンとかはまあ許すとして、ドラムはどうなんだ。重量が流石にバカに無らんだろう。しかしかくいう俺もストレージのほぼすべてが行商用の武器防具やアイテム、各地の特産品だ。回復担当のブロッサムがいるからアイテム類が少なくて済むのもあるが、それでも探索用アイテムを彼女以外まともに使っていないのもどうかと思うんだがな。

「ほう、この宝玉の効果は高いな。買おう」

『どうぞ』

「これは、火属性防御か。最近サラマンダーがよく突っかかってくるからな。俺も備えとくか」

『ありがとうございます』

ブロッサムは、相変わらず無言…いや、ウィンドウでの会話で販売をしている。彼女の販売するアイテムはそれほど多くないがかなり出来のいいものばかりらしく、どこでもそれなりに商品が捌けている。っていうか、いつ作ってるんだ?もしかして午後もダイブしてんのか?

無表情のその横顔からは、何も読み取れない。そう言えばモモカが言っていたが、別に喋れないのではないらしくモモカは何回か喋ったことがあるらしい。なんだ、俺の前では喋りたくないってかそうですかいいけどね。

順調な行商に、陰りが差したのは。

「貴様、この特産品は、サラマンダー領のものではないのか！？」
「な、なんだってっ！？こ、こいつら、スパイなのか！？」
俺が不用意に広げた、ガタン特産品に気付かれてからだった。

episode5　行商in風妖精領2

はああ～、とつく、ダイブ一発目の息は、溜め息だった。なんか最近、また溜め息の頻度がうなぎ上りに上昇しているような…。幸せ云々は、考えるだけ時間の無駄だ。

「ったく、まいったね……」

午後、俺はまた一人でダイブしていた。

有難いことにモモカと仲良くなっていた数人が庇ってくれたおかげでスパイ疑惑、果ては追放…の事態こそ免れたものの、疑惑を掛けてきた奴が結構執政部のお偉いさんだったらしく、「領内を好き勝手に動きまわらないようにな」と釘を刺されてしまった。

まあ、正直あんまり…いや全く、聞く気はないが。ハハハ。

「とりあえず、行きますかね」

ダイブ早々、ゆっくりと伸びをして、肩を回す。うん、やっぱ午後のダイブはいいな。ナーヴギアのおかげで体の感覚が僅かに、しかし確実にクリアだ。この感覚が、午後のソロプレイで俺を生かしている一因であることは間違いないな。午後なら転倒や見切りのミスが大分減ってきている。

「うし」

一言気合いを入れて、ゆっくりと宿のドアを開ける。男一、女二

のパーティー構成のおかげで、俺は一人部屋だ。脱走、もとい出かけるのは容易いし、万一相手もダイブしていても（ブロッサムあたりは昼間に多分部屋で『裁縫』や『細工師』の作業をしている危険が高いと俺は睨んでいる）バレることは無い。

街へとくり出すべく、そっと宿のドアを開け。

「およ？シドくんだ」

全く同じタイミングで隣室のドアを開けたモモカと、ばっちり目があった。

◆

「それにしても、シドくん、」

「だーから今日だけちょっと暇が取れたんだって。いつもしてるわけじゃねえよ」

まあ、嘘だけどな。そしてブロッサムの視線が痛い。ばれてるはず無いんだが。

「それにしてもシドくん、どうするつもりだったの？あんまり出歩くな、って言われてたんでしょ？」

「その言葉、そのまま返そう」

「私はリーファちゃんにスイルベーン領内をいろいろ案内してもらう約束してたからさ！実は結構凄腕らしいから、簡単なダンジョンくらいなら行けるって言ってたしね！」

「んじゃあ俺もついていっていいか？」

「ホント!?いいよ、一緒に行こうよ!」

瓶底眼鏡の奥の目が目まぐるしくその感情を表し、最後に満面の笑顔を形作る。うん、有難いことに上手く誤魔化されてくれたらしく、案内人無しだったら『透明化マント』のお世話になる予定だったのはバレずにすんだ。ブロッサム、その目はなんだ?言いたいことがあれば聞くぞ?

◆

「で、結局五人ともなんだ」

「うん!どうかな、ちょっとキツイかな?」

「ううん!この人数だったら、ちょっと難しい中立域ダンジョンとかも行けるかな?」

「えぇ〜、中立域まで行くの〜?PKとかされたら嫌だよ〜」

「ウジウジ言わない!別にあんたはついてこなくてもいいわよ」

「そんなぁ〜」

辿り着いた先に待っていたのは、二人の風妖精(シルフ)だった。一人は、女…モモカの音楽を熱心に聞いていた子の一人だった。くっきりした眉に、気の強そうな瞳。目鼻立ちのはっきりしたおやかな美人…と、美少女の中間くらいの少女。腰には長い日本刀の形の長刀を携え、背中にはシルフの証である薄緑色の燐光を纏った四枚の羽根。

名前は確か、

「リーファ、だったっけ?」

「うん、よろしく!そっちは、ブロッサムさんと、…」

「シド、だ。よろしく。んで、そっちは、」

「レコン、です～…」

もう一人、困ったような形の眉の少年が、ますますハの時に眉を寄せながら言う。どうやら役割的に突っ走る彼女のフォロー担当らしく、既に相当に気疲れしているのが分かる。まあその気持ち、俺にはよく、よ～く分かるぞ、少年。人生の先輩として意見するとしたらまあ、そこは仕方ないと割り切って頑張ることだな。

「うん、それじゃあ、『古森』を抜けた先の、『風の啼く岬』に行こっ！すっごいきれいなトコだし、きっとスクリーンショットとかにいいと思うよ！上まで飛べばアルヴヘイム全体も見れるしね！」

……モモカの奴、俺がスクリーンショット中心で仕事に来てるってばらしやがったな。ネットゲームという環境は、仕事で来ているような奴に対してあんまりいい顔をしないプレイヤーが圧倒的に多い。今回のように忌避感無く受け入れてもらえるのは、かなり幸運だ。その辺踏まえて、ちょっとモモカには気軽に言いふらすなと説教せんとな。

まあモモカは後でしめるとして、リーファの提案は悪くない。いい景色があるなら、いい資料になるし、そろそろ時期的にも原稿を書き始めないとな。

「んじゃあ、さっそく出発しよう！今から行けば、夕暮れ時に間に合うかも！レッツゴー！」

「ゴー！！！」

…まあ、モモカはノリノリだろうな、あの性格だし。俺を「一緒に『ゴー』しないのー？」の目で見るのは頂けないが。そしてブロッサム、『ゴー』ってウィンドウに打つのはどうなんだ。ノリがい

いのか悪いのかどっちなんだ。

とにかく。

こうして俺達は五人パーティーで、ちょっとしたダンジョンへと狩りだすことになった。

思えば俺は昔は、こういった雰囲気が、嫌いじゃなかった。

そんなことを、ふっと思い出した。

どう嫌いじゃなかったか…或いはどう好きだったかは、今はもう思い出せなかったが。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ風妖精領３

「はっ！！！」

鋭い掛け声とともに繰り出される長刀の一撃が、怪物の体を袈裟掛けに切り裂いた。相手のモンスター…鷲の羽と頭をもった鳥人間、『イーグリードファイター』もかなりの速度と飛行能力をもった相手だったが、振り回される両手剣はリーファには一太刀としてクリーンヒットしない。

自ら古参と称するだけあって、このシルフの少女はかなり出来るようだ。

（恐らく、剣道…か）

あの回避は、この無法な世界で培われることのない戦闘技術だ。俺やキリトの『見切り』とは違うその避け方……体の中心線をずらし、クリティカルダメージを避けることを重視したスタイルは、「一本」を避ける剣道の動き。

その予想の裏付けとして、先までのケモノ然としたモンスターより、『イーグリードファイター』の様な人（？）型のほうが各段に戦いやすそうに見える。その剣筋の見切りと反撃のキレは、キリトレベルに届くか。そしてその傍らで、

「やあっ！」

ハの字眉の少年、レコンもなかなかに善戦している。彼の持つダガーでは一撃必殺は狙えないが、それでも武器の軽さを生かした連

続攻撃でチクチクと敵の動きを封じ、魔法攻撃を使う『イーグリードメイジ』に呪文を使わせない。片手がスティックで塞がっているが、それでも遊撃としては及第点。

勿論俺も、ただ黙って見ている訳ではない。二人と違って飛行そのものを苦手とする俺は、戦場…森の上空数メートルでの戦闘には混じれない。だがそれでも並んだ木々の先端近くの枝を足場に、いつでも跳べる準備をしており、

「よっと！」

生じた木々のざわめきと共に、一気に跳躍した。

狙うは、同様に木々の隙間から空中の二人へと飛びかかる影だ。モンスター、『フォレストイーグル』…鷲兵士よりも小柄で、木々の間に隠れられる厄介な敵。が、システム外スキルである『聴音（ハイディング）』の使える俺にはその隠蔽は通じない。

「らあっ！」

巨大（といってもせいぜい羽を広げて一メートルといったところだが）な鳥型のそのＭｏｂの体を狙い打つ回し蹴りに、敵が嬌声をあげて吹き飛び……横から飛来した氷矢に貫かれ、ポリゴン片となって爆散した。

五人の中で唯一の魔法使い（メイジ）である、ブロッサムだ。高威力の範囲攻撃こそ使えないが、それでもこういった追尾性能（ホーミング）のいい魔法攻撃は討ち漏らしを減らしてくれる。空中戦から少し離れた位置からのトドメを狙う低威力の攻撃なら、憎悪値（ヘイト）を煽ることはほぼ無い。後衛のやりかたの分かっている、堅実な戦い方。ＳＡＯでのレミの支

援を思い出すぜ。

そして何より。

「すごいね、これ！」

「ボク一撃であんなに敵のＨＰ削ったの初めてだよ～！」

俺達の威力の底上げしている支援の効果が半端では無かった。笑顔を向ける二人の先で微笑むのは、横笛を咥えたショッキングピンクの髪の少女…モモカだ。演奏を切らさずに、眼鏡の奥の目だけでウィンクして二人に応え、更に笛の音を響かせる。

音楽妖精（プーカ）の固有の支援特技（バフスキル）、『魔譜演奏』。

簡単に言えば、本来このＡＬＯで魔法を使うためには呪文（スペル）を唱える必要があるが、それが特定の音楽になったものだと思えばいい。呪文と同様に途中で失敗すればその効果は消失してしまうが、彼女はこの『魔譜演奏』の達人だった。恐らく向こうの世界でも音楽に関わっているのだろう。

響く勇壮な音楽は、《猛る獅子の狂想曲（カプリッチオ）》。演奏の聞こえる範囲のパーティーメンバーの攻撃力を上昇させる支援技で、演奏という複雑な過程を経る分同レベル帯の演奏よりも高い効果を誇るそれが、俺達の戦闘をサポートする。

この演奏が、戦闘開始から一度も途切れることなく続けられている。

『索敵魔法（サーチング）で十体規模のイーグリード部隊の接近が確認されています。下にもまだ残ったイーグルがいるかもしれません。油断せず

に行きましょう』
「おっけー！！！」
「わかったよ～！」
「んじゃ、俺は下からあぶり出すぞ！」

連続しての戦闘だが全員意気軒昂、モモカの支援も絶えることは無い。

飛来する影を捕えたリーファが大上段に長刀を振りかぶって突進する。「まってぇ～」と情けない声をあげてレコンがその後を追いかけ、モモカも演奏を絶やすことなく随意飛行で追随。ブロッサムがこちらを見やりながら飛んでいく。

そして。

「らーすとっ、っと！」

恐らく最後の残党だったのだろう飛びだしてきた『フォレストイーグル』を全力で踏みつけて爆散させ、それを足場として俺も跳躍。先を行く四人の後を追いはじめる。飛行する彼らと違って木々を飛び移る必要がある俺は若干移動で劣る。四人に離されないようにその背中を見つめ、

「…っ」

突然、ふっと、目の前が霞んだ。
一瞬だけ頭を振って、意識を戻す。

そうだ。そういえば、ここまでしっかりした集団戦は、久しぶりだったな。ここまでの行商でも確かにパーティー戦闘は経験したが、

それでも俺の潜るダンジョンクラスのモンスターからは殆ど逃げて、安全第一な旅だった。

いつ以来になるか。考えてみれば、本当に久しぶりだ。

最後の集団戦……。

滲んだ先に、だんだんと大きくなる夕陽を見ながら、俺は目を擦った。

◆

「シドくん？大丈夫？」

「あ、ああ…」

生返事。全然大丈夫じゃないのがバレバレだ。全く、我ながら情けなくなる。

戦闘を重ねるごとに、俺の様子がどんどん変になっていったのが分かったのだろう、モモカが心配そうな声をかけて俺を見やる。後衛のモモカでこれなのだ、前衛二人はもっと如実に感じたことだろう。

「きつかったら、ここで落ちても大丈夫だよ？」

「大丈夫だって。ちょっと考え事してただけさ」

そう言って露骨に目線を逸らす。見やる先は、古森の向こう。既にもうゴールが見えていて、木立の終わりから黄金色の光が漏れだしていた。その眩しさに、また目を細める。

「考え事って？」
「昔のことさ。昔の、もうやり直せないこと。誰にだってある、後悔ってやつさ」
その言葉に、モモカが息を呑んだのが分かった。
そんなに怖い口調じゃ無かったつもりだがな。
「おーい！こっちこっち！すごい綺麗だよ！！！」
「Ｍｏｂはもう大丈夫っぽいよ～！」
シルフの二人の呼び声に、俺達も足を速めた。抜け出た木立の先。
「うわぁ……っ！！！」
モモカの感嘆の声が、横から聞こえた。
抜け出た先は、まるで絵画のように美しい夕陽があった。
崖へと伸びる、一本の細い岬がその陽光を受けて赤々と染まっている。岬を覆う丈の低い草が、後ろに茂る古森の木々が、聞こえるか聞こえないかの微かなざわめきを奏でながら、その幻想的な景色に深みを与えていた。岬の向こうに広がる海がいままさに日を呑みこもうと、黄金に煌く水面を広げている姿が、俺の記憶の何かを刺激した。
その刺激は。
「……し、ド？」
「あ、ああ？」

俺の目から、一筋の涙を無意識に零させた。

流れた一筋が、滴となって零れ落ちる。

モモカが、どうするべきか分からずにあわあわと手をふる。リーファとレコンの二人が、何事かと目を見開く。ブロッサムは変わらない無表情な瞳で俺の涙を見つめる。隠そうと思うのに、体は『麻痺』でも喰らったみたく全く動かない。

唯一動くのは。

「モモカ。なんか、さ。雰囲気ある曲、歌ってくれよ」

「え、ええっ!?」

「ちょっと、夕日がきれいだからさ」

「え、え。えっと……」

震える唇で、横のモモカに声をかけた。

何でもよかった。あの世界のもの以外の何かを、感じたかった。そうでないと、この景色に呑まれてしまいそうだったから。「思い出の品」として、この体を投げてしまいたいほどの衝動を、抑えられそうになかったから。

モモカは、そんな俺に何を思ったか、しばらく逡巡した後に歌ってくれた。

――風よ　汝は誰の子ぞ

――光か闇か　火か水か　それとも大地か　海の子か

――何処で生まれて　何処へ往く

鈴の音のようなその声。

――風よ　汝は誰が親ぞ
――月か陽日か　木か土か　それとも人か　妖精か
――何処で休みて　何を生む

不可思議で、神秘的な歌。
魔法の効果も何もないはずのその歌は、俺に確かな落ち着きを取り戻させてくれた。

「ありがとう」

そんな歌に俺は、こんなそっけない言葉しか言えなかったのだが。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ猫妖精領

ゆっくりと、目を開けた。人の気配を感じたからだ。

例え『索敵（サーチング）』による接近警報がなかったとしても、それなりの間合いになにかが来ればなんとなく分かってしまうのは、あの頃の癖だろうな、と思う。そういえば、以前は睡眠時間こそ短かったもののその分眠りは深かったのだが、今は眠りが随分浅くなってしまった。

（ま、燃費がいい、ってのは悪くないんだがな……）

閉じていた目を、ほっそりと開ける。

ＰＫ野郎なら即座に跳び起きて反撃…は、効かないんだったな、逃走するところだが、どうやら今回はその必要は無いらしい。覗きこむその顔に、見覚え…といっても今日会ったばかりなのだが…があったからだ。

「何のようかな？猫妖精（ケットシー）のお姫様（プリンセス）？」

「およ？起きてたんダネ。てっきり寝てるんだと思ったヨ！」

俺を上から見下ろす、褐色の肌の幼い顔つき。玉蜀黍のような色の髪から覗く三角耳は、少女がケットシーであることを示している。小柄（俺と比べるのは拒否する）な身体つきを水着の様なバトルアーマーで包んでいて、その背中のあたりでゆらゆらと尻尾が揺れる。

「寝てたらどうするつもりだよ？ＰＫでもしてみるかい？」

「護ってあげようと思っタ、って言ったら信じるカナ？」

挑戦的に頬を吊り上げてみたが、あちらさんもにやりと妖艶な流し目で笑いかけてきただけだった。幼い顔つきながらも様になったその色目遣いを見るに、もしかしたら年は少し上かもしれない。簡単な挑発に乗らず、これくらいの無礼を笑って流してくれるのは流石に領主としての器量か。

（ケットシー領主、アリシャ・ルー…か）

直に領主クラスに会うのは初めてだが、なるほど流石に一つの勢力を率いる者だけあってその感情表現や言葉遣い、立ち振る舞いにはどこか人を引き付ける物を感じるな。

そんなことを考えながら見つめていると、その目線がふっと緩んだ。

「本当だヨ。それニ、キミに挑んだって流石に勝てっこないヨ」

「はっ、買い被りだよ。それにあんたも領主なら、そこそこに戦えるんだろ？」

緩んだままの視線に、俺も表情を苦笑に変えざるを得なかった。

◆

話は、少し遡る。

風妖精（シルフ）領でのゆっくりした行商と観光（ちなみに俺はクエスト探索はお預けとなった）を終えた俺達一行は、とうとう最後の領地へと足を踏み入れることとなった。アルヴヘイムをぐるりと巡って、

音楽妖精(プーカ)領の隣。
猫妖精(ケットシー)族領首都、フリーリア。

俺にとってはプーカ領を探索していた時代のノームに並ぶ仇敵だったためにかなり警戒していたのだが、それは取り越し苦労だと思われた。モモカに聞いたところによると、『空飛ぶ狩人(フライングハンター)』の連中のように積極的かつ金銭面関係なくＰＫを行うような種族は殆ど無い、火妖精(サラマンダー)だって狩る相手は選んでいるらしい。

そんなこんなで安心していた俺達の予想は、あっさりと裏切られたのだが。

◆

「君タチのコンビネーションもスゴかったけど、やっぱりあの乱戦での動きはすごかったヨ！前衛四人相手に被弾ほぼゼロ、その上戦線を上手く動かして後衛に落ち着いて詠唱をさせなかった。とてもＡＬＯを初めてまだ数カ月なんて信じられないヨ！」

「ありゃアイツらが下手糞だっただけだ。敵さん連中『随意飛行』も満足にできない癖によく護衛付き牛車なんて襲おうなんて考えたもんだぜ」

「ヘタクソって言ったって、私達ケットシーの護衛達は完全に押されてたみたいだけどネ？それだけの腕を持っているのに、単なる行商人なのかナ、キミは？ケットシー領でならぜひ傭兵として雇いたいくらいだヨ」

「ハハ。冗談言うなよ」

ケットシーの領主、アリシャ・ルー。

本来は俺なんかが望んでも会えないような大物が、こうしてやけに気さくに話しかけてくれるのは別に俺が出逢った瞬間に生じるタイプの好意を持たれている…というわけではない。

ケットシーの操るテイム生物によるアイテム運搬騎乗生物、『牛車』。

そのアルンからの交易をおこなっていた牛車を襲う一団を相手に、ちょっとやんちゃをしてしまったからだった。全く、目立つのはあんまり好きじゃないし、得意じゃないんだがな。

ま、行商人なんかしておきながら何を言うか、とも思うのだが。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ猫妖精領２（前書き）

１８日、零時投稿分です。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ猫妖精領２

猫妖精（ケットシー）。敏捷性とテイミングに長けた、猫耳のケモノ妖精。

その最大の特徴は、やはり他種族にないＭｏｂのテイムの機能だろう。そこまで巨大なＭｏｂは基本的にテイムするのは不可能だが、それでもかなり多くの種類のモンスターや騎乗用生物を自分の使い魔や専用生物として扱うことが出来る。

今回俺が偶々目にした、『牛車』もその一つだ。

プレイヤーが羽を持ち、空を駆け回ることが売りのこの世界ではあまり流行らないだろうが、それでも一人では持ちきれないほどの重量級アイテムや大量のアイテムを使う行商人や交易人にはそこそこの使用があるらしい。

（そう言えば、あっちの世界ではそこそこに使われてたな、牛車……）

俺は所持容量を拡張するアイテムがあったしそこまでの大きな商いをすることはなかったから個人では使わなかったが、何度か大規模ダンジョンの攻略班の後方支援用の物資運搬に何度か用いられ、その護衛に同行したことがある。

今回の戦闘形態は、この世界では珍しい、地上での防衛戦だった。もっと言えば、あっち世界での俺の得意分野の一つともいえた。敵は集団で一か所を狙ってくる。こちらはそれを待ち受ける。乱戦で

地上戦で、俺なら護衛を味方に任せて敵陣に突入、混乱を引き起こせばいい。敵も味方も慣れていない状況では、俺の動きは流石に捉えられなかったのだろう。

（それに、二人の支援も、すごかったしな……）

後方支援のモモカ、ブロッサムとの連携は、風妖精（シルフ）領以降どんどんその練度を高めていた。二人が、あの『風の啼く岬』で何を思ったかは、知らない。聞いてもいない。だが彼女らだってそれぞれ何かを思ったのだろう。俺が、あそこでどうしようもない俺の中の弱さを知ったように。

それがどのような力とどのような相互関係で作用したのかは不明だが、とりあえずいい方向にベクトルが向いていたらしく、三人での旅も、戦闘も、こうした集団戦も、以前より更にその連携は各段に上手くなっていた。魂が近づいた…なんてのは、ちょっと調子に乗り過ぎか。

とまあ、二人の支援と勝負の相性が良かっただけで。

（まいったな……）

俺はそんな、鬼の様な強さなんて持ってるわけではないんだから、傭兵なんて出来ないんだが。

◆

さて、と。

「あれだけ強いなら、雇われてヨー！」
「いや、俺弱いって。『随意飛行』はおろかまともな飛行すら出来ねえよ」
「ウチの護衛達が揃って褒めてたのにかナ？可愛い子もいるから紹介するヨ？」
「俺にはその手は効かん。褒めてたのだって、地上戦だったからだ」

必死に辞退するものの、アリシャは執拗に付き纏ってきやがる。もう起き上って宿に向けて歩き出しているものの、その周りをクルクルと目まぐるしく動き回りながら喋りかけて来ており、悔しいがネコミミとネコシッポをユラユラと揺らすその姿はなかなか…いや、とても愛らしい。領主選挙の得票率の高さも頷けようというものだ。

「持ってるアイテムも、かなり高価だったらしいネ？幾つか見たこと無いのあったヨ！全部キミがゲットしてたんだって、売り子のオンナノコが言ってたヨ～。相当の腕じゃないとあれだけのレアアイテム集めるなんて無理なんじゃないかナ？」
「……いろいろ交換して貰って、わらしべ長者っただけだよ」

嘘だが。八割は自前だ。

「飛べないんだったら、いい騎乗用生物いるヨ？天馬（ペガサス）とか、鷲頭馬（グリフォン）とか使えるようになれば羽が使えなくても移動に困らないヨ！」
「ああ、そりゃ便利だな」
「だったらその代わりニ」
「断るっ！」
「はやっ！！？」

全く、こういう奴の相手は苦手だ。コロコロと変わる表情。ピョコピョコと飛び回る体。バカっぽくて賑やかで、それでいてどこか放っておけない、人を引き寄せる力のある独特の人間性。見上げてくる瞳が媚びるような色を帯び、俺を絡め取っていく。全く。まーったく。

「んー…ナカナカ上手くいかないネー…」

「そうだな…」

「問題の中心が何を言うかーイ！」

「同じく中心が何を言うかーい！」

ただし、まあ、こんなアホなネタに付き合ってくれるくらいには、ネットゲーマーだな。向こうの世界の彼女の外見はこの通りのそれでは無いのだろうが、おそらく同じように慕われているのだろうな。それは、なんとなく、感じる。彼女の笑顔を見ていると、なんとなく、な。

まあ、だからと言って手伝うわけではないのだが。

「んー、マ、良かったら領主館に遊びにきてヨ！ほら、通行証！」

…だが、バカには、突っ込まねば。これには、流石に。

バカやって取り返しのつかないことをした奴だって、世の中にはいるのだ。

「……それは流石にマズいだろうが。俺がスパイだったら、どうする気だ？」

「スパイなの？」

「そーだぞーすぱいだぞー」

「…ププッ。そんなんじゃ誰も信じないヨー！」

「…、とにかく、気を許しすぎるのはよくねーよ、ったく」

ちょっと、とげとげしかったか。気にして、ちらりと目をやってその横顔を見やる。その先にあったのは……おいテメー、言葉が通じてねーみたいな顔して首かしげてんじゃねーよ。テメーだってその外見通りの年ってわけじゃねえんだろうが。ちょっとボケてもかわいくねーぞ。ホントだぞ。

「んー、ワタシは、折角だから楽しむべきだと思うけどナー」

「……はぁ～…」

「だから、サ」

ととっ、と。数歩前を歩いて、くるりと振り返る。その拍子に、シッポがピコピコと揺れる。顔には、心からの、笑顔。本当に、人を信じきった笑顔。全く。勘弁してほしいものだ。俺はまた一つ、大きくため息を付くしかなかったが。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ猫妖精領３（前書き）

※１２／２０　深夜零時、更新いたしました。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　行商ｉｎ猫妖精領３

「ハァ……」

少女は、ゆっくりと溜め息をついた。なかなか上手くいかないものだな、と思う。まあネットゲームである以上は仕方がないのだろうと知ってはいるだが、それでも夢は見てしまうものだ。皆が仲良くなれるなんて、そんな叶うはずの無い夢を。

「どうしてかナー…」

壮大な、領主館の廊下を歩いていく。自分が龍主となってからかなりの時間が経っているが、それでも今でもまだどことない違和感を感じてしまう。大して取り柄のない自分が、領主。確かに、なれたらいいな、と思ったもののまさか本当になれるとは思わなかった。

選挙のときに話したのは、皆で仲良くしたい、ということだった。今のギスギスした雰囲気が、なんとなく良くないと思って、それを知り合い（今の側近…というのは大袈裟で、単なる腐れ縁の友達だ）に話したらそのまま立候補、領主になってしまったのだ。

「上手く、出来てるかナー…」

後悔は、していない。やってきたことも、間違ったとは思ってない。

でも、全てが上手く言っている訳でもない。反対意見だって出るし、出来ないことだってある。人のものではなく単純なシステムだ

って、なかなか確率がデレてくれない。お金だって、なかなか貯まらない。

また一つ、溜め息をついて、立ち止まる。

そして、…笑う。

「ショーガナイよネ！」

そう、しょうがないのだ。上手くいかないことは多いが、しょうがない。

思うようにプレイしていてそれなりに楽しいし、もし間違っていたら周囲が止めてくれるだろう。だあら今は、自分の思うようにふるまえばいい。幸い、それが出来る立場に、自分はいるのだ。

ウン、と一息気合いを入れ、ゆっくりと重厚な扉を開く。

領主館の、更に一番奥。執政部の、更に一部のメンバーしか知らない、極秘のその扉を。

◆

さて、と。ここまでで分かったことは一つ。

あの領主、俺が思っている以上にアホで不注意だということだった。

（全く、ホントに俺がスパイだったら、これでジ・エンドだぜ…）

隠密行動は、俺の特技だ。向こうの世界では実は尾行の依頼とかも受けたことがあるし、何より俺の数少ない自慢の一つに、「あの《索敵》マスターの『黒の剣士』の尾行を成功させたことがある」というものがある。《隠蔽》でスキルを誤魔化すのは可能だがあの男、異常に感が鋭いのだ。だから、

（この体勢は、結構キツイが、な……）

天井にぶら下がったまま、音を抑えて溜め息をつく。

領主館の廊下が無駄に豪華で助かったぜ。所々のシャンデリア、豪華な燭台、彫像。掴まるところには事欠かない。行商中に手に入れた《透明化マント》は、索敵生物（サーチャー）や高レベルの《索敵》であっさりと破られるが、どうやら向こうはそのどちらも実行する気は無い様だ。それどころか、周囲の人気を気にする様子も無い。後ろから足音消して歩くだけでもなんとかいけそうなくらいだ。

と、歩いていたアリシャが、でかいドアの前で停止。

何やら大袈裟な動作をした後、ゆっくりとそのドアを開いていく。入るらしい。

（よいしょ、っと！）

開ききり、アリシャが入っていく。その後ろから、素早く無音で扉の隙間に滑り込む。そして。

「っ、うぉっ！！？」

思わず、声が出てしまった。

◆

大広間…というか、でかいホール見たいな広さのそこは恐らくは、飼育場、とでも言う所か。

牛や馬といった現実でもお馴染みの生き物から、それらに妙な羽やら角やらが生えたファンタジー御用達の怪物たち。果てはなんだかよく分からない獰猛そうな化け物も、パタパタと飛ぶ小さなピクシーまでいた。

だが、そんなもんで、ここまでの広さは必要ない。

ここが、これほどまでに巨大なのは。

「で、でけえ……！」

そこの中央で勇壮に鎮座する、一頭の巨竜だった。

羽を渡せば恐らくプレイヤーの数倍はあるだろうというその巨体は、邪神級とまではいかずともかなりのハイレベルモンスターだろう。ドラゴンは確かに伝説では強者の代名詞で、テイムできるのは小竜やせいぜい竜兵といった程度だと思っていた。それがまさか、ここまでの巨竜をテイムするとは。

「だ、だれっ！？な、なんで、え…し、シド…？」

おっと、見とれちまっていた。驚いた声で我に返って見やると、そっちも負けず劣らず驚いた表情のアリシャ…だったが、俺だと分かった瞬間、その表情に安心が浮かんだ。それを見た瞬間。

ドクン、と心臓が脈打った。

その表情に、嫌悪感…とまでは言わないが、胸の奥底がザラつく、堪らない不快感。

俺なら大丈夫だ、そう信じ切っているその目に、言いようのない胸の軋みを感じる。

その痛みが、俺の振舞いを決める。

「おーおー、こいつはすごいな。これがケットシーの秘密兵器ってワケか」

「え……う、ウン、まあ、」

「この情報は、風妖精（シルフ）とかに高く売れるな。いや、火妖精（サラマンダー）の方が高く買ってくれるかな？」

「っ…！！？」

アリシャの顔が、さっと歪んだ。

と同時に左手が素早く動く。表示される無数のウインドウが光の六角柱を為す、領主専用の巨大なメニュー画面だ。呼び出されるのは、領主の示す敵を容赦なく切り裂くガーディアンだろう。だが、甘い。

「おおっと、いいのか？もうスクリーンショットは取ってあるぜ？俺を領地に死に戻りさせたらマズいんじゃないか？」

「っ、っ…ケットシー領の出口で検問をはって、」

「俺はここでセーブしてない。死んだら別の領地だぜ？」

「っ……！」

見ていて痛々しいくらいに、アリシャの顔が悔しげに顰められる。

それを見ているはずなのに、俺の目はそれを分かっているのに、

口は止まらない。
自分の顔に、張り付いたような厭らしい笑みが浮かぶのを、他人ごとのように感じた。

「アンタは、甘すぎるんだよ。それとも俺を麻痺させて足止めするかい？俺とその鉤爪（クロー）で戦ってみるかい？まあ、無理だろうがな。アンタが一番良く分かってるはずだぜ」
「っ、」
「悔むんだな。簡単に俺を信じた、自分の迂闊さを。」
「……っ、でも。っ……！」

俯いて、唇が噛み締められる。耳が後悔に…或いは、悲しみにぺたんと伏せられる。
それ以上何も言えずに、今にも泣き出しそうな彼女が、俺がかけた次の言葉に、

「……十分、反省したな？」

弾かれた様に顔をあげた。

episode5　アルン、旅の終わりに（前書き）

今話から、ついに伏線回収ラッシュ。

ｅｐｉｓｏｄｅ５　アルン、旅の終わりに

積層都市、アルン。
世界中の根元に広がるこのＡＬＯでも最大規模の大きな街は、様々な色合いの妖精たちの飛び交う幻想的な雰囲気で俺を魅了した。
この景色だけでも蝶の谷を抜けてくるくらいの苦労の甲斐はあるな。
他の街々は中立都市とは言ってもやはり近くに領地のある種族が多く、遠くに領地のある種族は少なかったのだが、流石にここはアルヴヘイムの中心地だけあってあらゆる種族が入り乱れていた。

そして。

「すっごーい！！！」

横から、モモカが弾むような声をあげた。うるさいが、まあ気持ちは分からなくもない。

見上げれば首が痛くなる程の角度まで広がる、巨大な世界樹。
神話の中からそのまま持ち出してきた様な、雄大で華美なその巨木は、まさに世界樹の名にふさわしい厳かな雰囲気を存分に醸し出している。近づくにつれてその威圧感はどんどん増していき、この行商（俺にとっては取材だ）の最後の街としてこれ以上ない、いいスクリーンショットが取れそうだった。

「すっごいね、シドくん！」
「ああ、分かったから落ち着けよ」
「だって、その、さっ」
「どうどう」

あまりの興奮にぐるぐると目を回すモモカを、ブロッサムと二人がかりで宥める。

どうも最近モモカがやけにハイテンションなのだ。いつからだろうか。風妖精（シルフ）領を出た頃は寧ろ俺を気遣うかのようだったから、それが一転したのは…

（猫妖精（ケットシー）領での『交渉』の後からか……？）

◆

「反省したなら、『交渉』と行こうか、ね」

散々に責め立てた後、俺はアリシャにそう言った。全く、ジゴロの手口だと自分でも思う。

「これは、火妖精（サラマンダー）領で手に入れた《竜（ドラゴン）の珠（・オーブ）》。竜族のテイム率を上げるケットシー専用のアイテムだ。これがあれば、その飛竜、もっと効率よく捕まえられるんじゃないか？」

ペラペラと口にする。

そういえば、サラマンダーの領は高レベルのドラゴンの出現地帯である『竜の谷』のすぐそばにあった。テイム用のアイテムがあったとしても不思議はないし、このアイテムであそこの竜が捕まえられるのはある意味納得だ。

「ついでにもう一つ。ここの飛竜は見たところ鞍だけの装備みたいだが、俺は装備アイテムだろう《竜鎧》の存在を知っているぜ？」

続ける。甘やかしすぎだろー、と、自分でも思う。

「鍛冶妖精（レプラコーン）領の西区の外れに、一件のＮＰＣ鍛冶屋がある。フードを被った小柄な店主が経営している大して見る物の無い店だが、夜の店仕舞いの直前にケットシーが尋ねるとイベントが発生、『テイムＭｏｂ用の装備アイテム』を売ってもらえるのさ。普通は馬鎧、牛鎧、あとは亜人型Ｍｏｂの武器なんかだが、そこにバカ高い装備の『竜鎧』ってのがあってな。多分、このＭｏｂ用なんだろうな」

自分の持っている、ケットシーの利益になる情報、アイテム、全部出した。

全く、タダでこんなことするなんて、行商人失格だな。

さっきまでイジメまくったお返しってわけでもないんだが。

なぜそんなことをしたのか。一応理由はある。

ある、が、本当にそれだけなのかは、俺にだって分からなかった。

◆

「……んー、どうしたもんかね…」

これだけ異種族が入り混じっていれば《トリック・クラウンズ・シェイド》でも新しいクエストを見つけるのは困難だと考えて、俺は先に取材…つまりは風景撮影に入った。街の上空をひとしきり飛び回りながら、いいアングルでのスクリーンショットを取りまくり……大きく溜め息をついた。

俺の飛行の才能は、はっきり言って皆無だ。コントローラーを用いた初心者飛行でも、加速減速が上手くいかずにふらふらと安定しない。何とか取った世界樹のスクリーンショットも、多分何枚かボケているだろう。

「だからさー、私が手繋いで飛んであげるよー」
「断固拒否する」
「なんでさー！」
「なんででもだ！」
『意外とヘt…純情なのですね』
「……おい今一瞬なんて打ち込もうとした…？」
『タイプミスです』

横からのあれやこれに突っ込みを入れつつ、再びの溜め息をつく。

（もう、ここしかねえからな……）

探し続けている、あの世界の残り香。もはや残り香とすら言えないような、ほんのわずかな気配の様な、システムのバグと俺の勘しか根拠のないもの。残っているとしてもそれが俺の望むものとは限らないし、残っている可能性は限りなく低いだろう。

（でも、な……）

――助かる可能性が一パーセントでも残っているなら、全力でそれを追え。それが出来ない者に、パーティーを組む資格はない。

いつか聞いた、ゆるぎない言葉は、言葉と同じくあの世界で一番ゆるぎない信念を持って動いていたプレイヤーの一人のセリフだ。その通りだ、と俺は今でも思っている。

だからこそ。

なんとかして、行きたかった。

この世界樹の向こう…空中都市。最後の、希望の地へと。

◆

差し出した、あらゆる情報。

その対価は、果たして適当だったかどうか。

呆然とするアリシャに俺が求めたのは、単純なことだった。単純ではあるが、この上無く難しいことでもある。何せこのＡＬＯ内プレイヤー全ての願いと言っても過言ではないのだから。

――一刻も早く、世界樹を攻略してほしい。

本気で何かを探すなら、探せない場所は、一か所でもあってはならない。

つまりはこの世界に、「侵入不可侵の場所」はつぶしておく必要があるのだ。

それが自種族である必要はない。今と同様に行商として上の街に行ければ問題ないし、そもそも自分は飛行自体が苦手（というか嫌い）だ。飛行制限が解除された所で雀の涙ほども嬉しくない。

だから、誰かがクリアすればいい。

誰か、『勇者』と言われる奴がすれば、俺はそれのおこぼれで十分。

そのために各地を回り、それぞれの種族が必要としているだろうアイテムを譲っていったのだ。
この世界の戦力を、引き上げるために。

まあ、そんな思いを語ったわけでもなく、適当に「さっさとクリアせぇやコラ」みたいな感じで言ったのだが、どうやらなかなかに納得されたらしく、アリシャの奴はえらい張り切って竜騎兵（ドラグーン）隊の整備のための飛竜テイム班の編成やら何やらを早口に捲し立て（俺は聞いても分からんのだが）、果てはシルフとの同盟がどうとかまで言ってやがった。

そしてそこで、俺の痛恨のミスが生じた。あまりに熱心だったためにあまり真剣に話を聞いていなかったことで適当に相槌を打ち続けていたら、「その時は傭兵として頼むヨ！」と言われたときに全く反応できずに頷いてしまったのだ。全く、意識して混ぜたなら大した策士だ。

とにかく。
すったもんだあったものの俺は一通りの行商の旅、その最後の首都での交渉を終えたのだった。

◆

「だからさー、手を繋いでさー。ブロッサムさんと両方から支えてさー」
『私が抱えていっても構いません。貴方の超小柄なその体なら、私なら問題なく抱えられます』

オイコラ、超って言うな、結構気にしてんだぞ…と二人が話していることに心の中で突っ込んで。

唐突に、閃いた。

俺の小柄なアバター。世界樹の高さ。

上の枝まで届かない原因である、飛行制限。そうだ。

「…なあ、二人とも。ちょっといいか？」

「ん？なになに？」

『なんでしょう？』

「…人を集めてくれないか？…そうだな、二人程。一人は巨人型の出来るだけ大柄な奴。もう一人は…ブロッサムよりも体格が良ければ大丈夫だ。…目算、五人で行けるだろう。とりあえずそれで試してみたい」

「？？？？」

『何をおっしゃられているかは分かりましたが、何故でしょう？理由を説明して頂けますか？』

ショッキングピンクの髪の上にクエスチョンマークを浮かべたモモカは放っておいて、なんとか付いてきているらしい（それでも切れ長の目がいつもよりさらに細められているが）ブロッサムに説明する。

「滞空制限的に、誰が飛んだって上の枝には届かない。ブロッサムが俺を抱えて飛んでも、たぶん無理だろう。だが、もっと人数を増やせば？例えば、」

『五人で…そうですね、全員が肩車でもして順に飛行していけば』

「上まで行けるかもしれない！！！」

最後はモモカにも分かったらしい。二人はすぐに頷き、嬉々として人を探しに行く。これで何とか世界樹の上には行けそうだ。もしかしたらそのまま中に入れるて、探索まで出来るかもしれない。そう考えながら、俺は再びスクリーンショットの準備を始めた。

◆

結論から言おう。

上には、入れなかった。ぎりぎりのところでシステム管理者に勘づかれたのだ。

だが、収穫はあった。

誰にも言えない、言えるはずのない、とんでもなく大きな、収穫が。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　運命という偶然（前書き）

ついに、ＡＬＯラストエピソード。時間軸も、原作の三、四巻に追いつくことになります！伏線、皆さんどれくらい気付かれましたかね？

episode6　運命という偶然

どんよりと濁った雲が、重苦しく空を覆い尽くしている。その陰のせいで、世界全てが灰色になったかのように錯覚させる。全く、こんな景色では歩いていても何の楽しみもない。

（ま、それでも歩くんだがな……）

リハビリの帰り、俺は必ず散歩…というか、放浪することにしている。こうして自分の普通のペースの徒歩を体に覚えさせていないと、ふとした拍子に足がすぐに速くなってしまうからだ。まあ、あれだけいろんな世界をウロウロしていれば、日常生活の活動強度がごちゃごちゃになっていても不思議はない。

だが、体は格段に軽くはなっている。

恐らく三年前よりも運動能力は増しているだろう。

まあ、どうでもいいか。

とりあえず、今日もいつものノルマである時間の放浪を終え、手近な喫茶店へと入った。

小さな喫茶店、『ダイシー・カフェ』へと。

◆

世の中には、運命ってものがあるらしい。あるらしい、が、俺には運命って奴にも二種類ある様に、今にして思う。一つは、「必然

から来る運命」。例えばＶＲワールドジャーナリストである俺が、その最も有名タイトルの一つであるＡＬＯ世界へと旅立ったのは、ある意味必然だ。そこでの出会いや発見を運命と呼ぶなら、それは来るべくして来た運命だろう。

そしてもう一つは、「偶然の運命」。何の因果関係も無く訪れる、唐突な出会い。今回は間違いなくこちらの運命に属するだろう。そしてこちらには、もう一つの名前が似合うかもしれない。

奇跡、という名が。

◆

「いらっしゃい」

深みのあるバリトンの声が、俺の脳を、記憶を揺さぶる。

一瞬で周囲の景色がフラッシュして消え、あの世界に帰ったように錯覚する。

第五十層主街区アルゲード、その無数の店の一つの、雑貨屋。

たっぷり五秒は硬直した俺に、声の主が訝しげに視線を向ける。

同時に、俺も店主を見やる。

見間違えるはずもない、特徴的な外見。褐色の肌に、迫力のある顔、見事な禿頭。

「……エ、エギ、ル…？」

呆然として呟き、はっと思いなおした。エギルはこれ以上ないくらいに分かりやすい外見であるし、ＳＡＯは外見がこちらの世界と一緒だ。どう考えても同一人物とすぐに分かる。それに対して、俺はあの世界とは異なっている。内面が違う…なんてアホな意味では無く、そのまま、見た目が違うのだ。向こうから見たら俺が誰だか分からないはず。

だったのだが。

「お前…シド、か…！？」

巨漢の店主は、はっきりとその名を口にした。

◆

カウンターに座ると、間髪いれずにコーヒーが出てきた。驚いて見やると、「俺が飲むつもりだった分だ。お前が向こうで良く飲んでたのと濃さはそう変わらん」と言って、エギルがにやりと笑う。そのやりとりは、まるでアルゲードでのそれのようだ。ちなみに客が全くいないのもあの頃と一緒だ。

「驚いたな。エギルが、こっちでも店を経営してた、なんてな。いや、帰ってきて開いたのか？」

「馬鹿抜かせ。まだ帰ってきて二カ月なのに新しく店なんて開けるか、もともとだ。まあ二年間残ってたのは感動の話があるからゆっくり聞かせてやる。それにしても…」

一言区切って、エギルがじろりと俺を見る。

俺の髪と、瞳を。

「…やっぱり、シドも、だったのか」

「ああ。そうだな、自己紹介でもするか。はじめまして、俺は、シエル・デ・ドュノア、だ。また会えて嬉しいぜ、…っと、」

「ギルバート。アンドリュー・ギルバート・ミルズ、だ。まあ、エギルで構わんさ」

「ま、それもそうだな。俺も今まで通りシドで頼むわ。お前に本名呼ばれるのも気持ち悪いしな」

「なんだそりゃ…それにしても、シエル、ってぇと…フランスか？」

エギルが問いかけてくる。俺の色素の濃い金色の髪と、真っ青な瞳を見つめながら、だ。

「ああ、親父がな。まあハーフだし、親父は物心つく前に逝っちまったから、面識はないがな。…向こうにいたころから、気付いていたのか？」

「…まあ、うすうす不自然さは、な。シドの日本語は、あまりに綺麗過ぎたからな。書く文章なんかは、特にな。お前さんくらいの年の奴が、あんなに整った新聞記事みたいな文章は普通は書けんよ。誰に教わったんだ？」

「母さんが、熱心に教えてくれたのさ。日本で住むなら日本語、母国語としてフランス語、ついでに「ガイジン」ならと聞かれるだろうからって英語までみっちりと、な。今にしてちょっと常軌を逸していた事は分かってるが、感謝はしてるぜ。エギルは？」

「俺は生まれつき、いや、親の代からの江戸っ子だ」

そう言って笑う。なるほどこいつの態度に江戸っ子は、なんとなくイメージが合うな。ちなみに俺の外見は、純外国人と言える。金

髪碧眼、ついでに手足の長さも肌の白さも、だ。向こうでは髪と瞳を黒にカスタマイズすれば誤魔化せるかと思ったが、同類には流石にばれていたらしい。

俺の日本語力は、幼い頃に母さんが教えられた…というか、叩きこまれたものだった。

曰く、排他的な日本の学校で俺の外見が目立つことを心配して、「せめて言葉だけでも」とのことだった…が、はっきり言ってやり過ぎだろ。ひらがなカタカナ漢字は愚か、なんで論文の書き方やレイアウトの練習、古典まで勉強してたんだ、俺。小学校で古典の文法やってたぞ。

まあ、俺のちょっと異常な文章力のおかげで、さして考えることなくスラスラと「クエスト依頼書」や「注意書き」が書けたのだから、母さんには感謝はしているが。

一通りの世間話の後。

「…んで、お前さん、やっぱり…」

「…ああ、聞きたいな。七十五層ボス戦、俺が気絶した後。あの場所で、一体何があったのか、な」

渋るエギルに、俺ははっきりと断言した。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　運命という偶然２

説明は、長いようで、短かった。

「……そうか…ヒースクリフの旦那が、ね……」

ソードアート・オンライン。かの天才茅場晶彦が作り上げ、『神聖剣』…いや、『魔王』ヒースクリフが育て、ソラが愛し、そしてソラを奪ったあの世界は、あの場にいた数人の手によって俺の意識の無かったほんの数分の間で、全てを終えたのだそうだ。まあ、俺がそこに関わりたかった…とは思わない。それは『勇者』であるキリト達の役目で、俺は『勇者』では無かったのだから。

ただ一つ、思う所があるとすれば。

「……恨んでいる、か？…キリトの、ことを…」

「…なぜ、そう思う？」

エギルが、重々しく、口を開いた。聞きたくない…けれども、どうしても聞いておかなければならないことだと判断したのだろう。その困ったようなハの字に眉を寄せた顔は、見た記憶がある。忘れもしない、七十五層でソラが生きている可能性を検討していた時と同じ顔だ。

「キリトが、終わらせた…終わらせてしまったからな。あの世界を、途中で…もしかしたら……」

その先を、エギルは飲み込む。まあ、言われるまでも無い。

――もしかしたら、ソラの生き返るクエストがあったかもしれないあの世界を――

「……そこまでは、ねーよ。だいたい、あったかもしれない、ってだけのクエストのことで恨まれたら、キリトだって堪んねえだろうよ。そこまで理不尽なことを言いはしないさ。……ただ」

「……ただ？」

「…あいつには、もう会えないなあ。会ったら多分、ぶん殴っちまう。理不尽だ不条理だと頭で分かってても、抑えられるとは思えねえよ」

笑っては、いない。エギルも、笑っていない。悲しげな眼をしているだけだ。全く、笑ってくれよ。

仕方なく、俺が笑顔をつくる。ああ、自分でもわかる。無理矢理笑っているのが、バレバレだ。

エギルが、再び俺の前にコーヒーを置く。

「…せっかくだから、まとめて言っておくか…シド。俺は、キリトと連絡が付く。そして、キリトは何故かまでは詳しくは知らんが、ＳＡＯのプレイヤー達の個人情報を知れる位置にいるらしい。…もし、お前さんが望むのなら、」

「それはいいや。知りたくねえ」

エギルの言葉を、俺は遮った。その言葉に、エギルの顔が再び悲しげに顰められる。そんな顔すんなって、お前が悪いわけでもないのに。

ソラの、こちらの世界での情報。エギルの言うことが本当ならば、

キリトに聞いて問い合わせて貰えばすぐにでも彼女の本名、住所が分かるはず。言うまでも無く、その生死のほども。だが俺に、それを聞く勇気は無かった。こちらの世界に帰ってきてすぐの時も、今この時も。ははは。何を言っているのか、俺は。知らなければ、それは現実にならないとでも思っているのか。そんなことはないと、嫌ってほど分かっているのに。

深い溜め息。降りた沈黙を続けない為、とりあえず口を開き、

「……悪かったな。聞きにくいこと、いろいろ教えて貰って、な」

「いや、それは構わんが……」

「でもまあ、俺が……っとちょっと待て、お前今なんつった？」

「構わん、が、だが？」

「そんな直前じゃねえ。…キリトと連絡が付くのか！？」

あることに思い至って、思わず身を乗り出した。『黒の剣士』、キリト。あいつなら、俺の映像データにあるあれが本物か、分かるかもしれない。慌てて鞄の中から端末を取り出し、電源を入れる。いつもは喫茶店でのんびり一服しながら記事を書くために使っているが、別に映像が見れないわけではない。進歩した端末は流石の速度で起動し、俺がＡＬＯ世界で写し取ったスクリーンショットをそのウィンドウに並べていく。

そのうちの一枚をクリック、問題のスクリーンショットが広がり。

「なんだオイ…って、こ、コイツはっ！？」

カウンターのエギルに見せた瞬間、いかつい顔がアホみたいな驚き顔に変わった。

◆

写真を前に、二人で検証をする。そう言えば、《リヴァイブ・リング》の値段を検討する時もこんな感じだったな。あーでもないこーでもないといいながら、画面をいじり回す。俺も画像加工は苦手じゃないが、エギルの知識もなかなかのものだ。

「やっぱ、似てる、か……」

「確信は無い、がな。お前さんの言う通り、キリトならすぐに判別するだろう。ちょっとまだ画像の引き延ばしが雑だから、俺が自前のソフトで手を加えて終わり次第送る。明日の朝には出来る、はずだ」

開かれた画像は、世界樹根元の街アルンから俺が撮影した写真の一枚。五人がかりでシステムの抜け穴を突いて撮った写真は手伝ってくれた四人に報酬がわりに配った（いくらかはネットに既に上がっていた）のだが、その一枚だけは配らなかった。俺のきたえあげられた《索敵（サーチング）》スキル、そしてあの世界で培われたゲーム勘が、「これは何かヤバいものだ」と叫んでいたからだ。

撮影して、原画は小さな欠片の様な人工物があるようにしか見えなかったが、それを家の端末で引き延ばしてた結果、映っていたのは俺の予想通り…いや、予想以上にヤバいものだった。映っている…ように見えるのは、金色の鳥籠の中に囚われた、美しい妖精の姫君。その物憂げな、悲しげな横顔は。

「『閃光』っぽいよな…。羽とかは、妖精っぽいが」

「確かに、な…」

ＳＡＯ世界で俺が見た最も美しい女性の一人にして、紛れもない『勇者一行』の一人。いや、『勇者』キリトのお相手たる『ヒロイン』の少女…『閃光』アスナに、そっくりだったのだ。

「もう一度飛んで行って確認は出来んのか？」

「無理だ。俺が上にいって枝につかまろうとしたら、もうシステム妨害が入った。二回目は一人分も飛べなかったから、もう外から確かめる方法は無い。となると後は、」

「中から、か…。お前さんの口ぶりからして、そいつは簡単じゃないんだな？」

「ああ。何せそれこそ、一年以上未クリアのグランドクエストだからな。俺も何度かやってみたが、全然全く突破力が足りなかったよ」

残る手段は、中…世界樹を守るガーディアンを突破して、噂の空中都市へと行くしかない。

撮影後、何度かモモカ、ブロッサムと三人でちょっかいを出してみたものの、突破できる気配すらなかった。モモカなんかは「相手の演奏妨害音波（ジャミングウェーブ）、黒板引っ掻く音みたいでヤダー！」と悲鳴を上げていたものだ。

先へ進むのに必要なのは、力。

俺なんか及びもつかないような、『勇者』の力。

あの世界の、数々の戦場を思い出す。そこを駆ける、漆黒の影。二本の大剣を圧倒的な速度で振い、あらゆる敵を薙ぎ払い、切り裂き、最後には六千の命を助け出した、『勇者』の姿。アイツなら。

「…分かった。キリトに、連絡を取ろう。シドは…」
「中で、もう少し情報を集めてみる。そう言えば、パッケージはあるか？結構、」
「若造に奢ってもらうほど、この店は苦しくは無いぞ。俺がすぐ買っておく。キリトなら、写真見せた瞬間に突っ込んでいきそうだからな。ハードは…」
「ナーヴギアで動くぜ？」

俺は何気なく言ったが、エギルは露骨に顔をしかめた。どうも俺がナーヴギアを被っているのが気に入らないのか…ああ、そうか。あれは、普通のＳＡＯ生還者には、『死の機械』だったな。……俺にとっては、思い出の機械だが。思わず苦笑が口元に浮かぶ。

店主は俺の浮かべた笑みに何か言おうとしたが、それは飲み込んだようだった。

よし。

一区切りを感じて、立ち上がる。そして。

「…そうだ、俺の名前は、出さないでくれよ。アイツは、「彼女」について俺達が話しあったクエストのこと、知らないだろ？知ったらまたウジウジ悩みそうだしな。『勇者』は、前を見るのが仕事だから、俺のことを知らせる必要はないさ」
「……そうか。……分かった。お前さんが、それでいいならな」
「おう。じゃ、コーヒー、御馳走様」

それだけ告げて、俺は店を後にした。
あの世界の残り火が、再び動き出すのを、胸のどこかで微かに…しかし確実に、感じながら。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　会議の席　『勇者』の底力

「はあー」

深く、深くため息をつく。と同時に、

「なんだか元気無いねー！？どしたのー！？」

上からモモカが声を挙げる。まあ、説明するのも面倒だし説明できることでもないので、今回は「別に」とだけそっけなく返す。モモカも、それ以上は追及してこない。うん、他人に過剰な関心を示すことのない、じつに現代人らしい対応だ。

エギルに…ひいてはキリトに調査を依頼したその日、俺は一人で（モモカは演奏に、ブロッサムは細工の依頼をこなすと言って宿にいた）世界樹クエストに何度か挑戦し…深い絶望を味わっていた。なんとかキリトが来る前に少しは対策を考案しておき、アイツの到着次第一気に攻略といきたいと思ったのだが、正直どうにもならなかった。まあ戦闘は俺は専門じゃないし。専門じゃないんだぞ、専門はクエスト攻略と行商だ。

一夜明けた今日はもう攻略は諦めて、三人でアルンからの移動の最中だ。

『なんにせよ、飛行くらいはそろそろ身につけてはいかがです？下に向けてウインドウを出すのは大変なのです。随意飛行とまでは言わなくても、コントローラーでは飛べるようにしてください』

「うるせーよー！ウィンドウ出すのがめんどいならー、喋ればい

ーだろうがー！」

上から広げられるウィンドウ（どうやらアレ、画面の広さや文字の大きさも自由自在らしく、下から見上げる俺にもよく見える）に怒鳴り返しながら、疾走する。と、上に気を取られたせいで足元がおろそかになり、若干ふらつく。『軽業（アクロバット）』スキルによるバランス補正がなければ派手に転倒していただろう。全く、いつまでたっても慣れないな。もう一ヶ月以上経つってのに。

そう、俺は今、移動中だ。ちなみに、走って。

そこそこ…写真撮影に支障を（あまり）来さない程度にはコントローラーを使えば飛行できる様にはなったものの、やはり飛行は恐怖心が勝り、まともな速度が出せない。随意飛行よりも最高速度で劣るコントローラー飛行でも限界速度まで達するのはムリだ。そして、走ったほうがよっぽど速い。

まあ、それはいい。今は、関係無い話だ。

寧ろ問題は、今俺が移動している理由の方だ。まあ、一言で言おう。

傭兵代わりにとアリシャに呼ばれた、シルフ・ケットシー同盟の会談へと行くためだった。

◆

猫妖精（ケットシー）領首都、フリーリア。

その賑やかな街に着いた俺達は、結構派手に迎えられた。それは

別に俺達が特別有名な人気者だから、ではない。

「待ってたヨ、シドく～ん！」

最重要人物である領主、アリシャ・ルーが俺達を出迎えやがったからだ。所謂ＶＩＰである彼女には、側近（本人が言うには腐れ縁らしい）である数人が護衛代わりについており、また人気者の宿命として周囲には一目見ようと集まった暇人共が人だかりを作っている。

全く。

（今日が極秘の会談の日だ、って分かってんのかコイツ……）

相変わらず危機感に欠けた女だ。領主であるという自覚をもうちょっと持ってほしいものだ。

「イヤ～、来てくれないかモ、と思ったヨ！」

「…まさか。今日は大事な……「商談の日」だからな。ちゃんと来るさ」

別に来たくは無かったがな…という言葉は飲み込む。そのくらいの分別はあるさ。

喋りながら、ウィンドウを操作する。パーティー用の一時預かり用ストレージにアイテム…行商で扱うような、俺達は装備出来ないがなかなかに高価な武器防具達、珍しい効果をもつマジックアイテムの数々を、二人に渡しておく。これから行く先を考えると、あまり高価なものは持っていきたくない。

「それじゃあ、一旦領主館に行こうカ！いろいろと準備しないとネ！」
「…あいよ。んじゃあ、」
「ん、了解～！頑張ってきてね～！」
『アイテム、確かに預かりました。私は今日は宿にずっと居ますので、いつでも連絡ください』
「ああ、頼むな」

連絡するような事態には、まあならんと思うし、ならんに越したことは無いんだがな。
画面内で一時預かりウィンドウからアイテムが消滅、恐らくブロッサムが引きだしたのだろうことを確認して、頷く。軽装戦士な上に拳闘士な俺は、装備品が極端に少ない。魔法強化された革のコートに、対魔効果の高いネックレス。後は体術スキルにボーナスのある紅色の革グローブとブーツ。いずれも安物では無いが、俺の扱う商品に比べればいくらかランクは落ちる、か。

（…ま、金属鎧は重すぎて装備出来ねえし、あんまガッツリ武装して行っても、な）

今回、ケットシーとシルフの会談に傭兵として参加はさせて貰うものの、はっきり言って単なる会談である以上、武装していくことに特別の意味は無い。それに、ケットシーの面々も一緒に行く俺がいつでもＰＫ出来る様に完全武装で領主の周りをうろつくのもいい気分はしないだろうしな。この世界では領主殺しってのは相当に大事らしいし。

…とまあ、そんなことを考え、俺は気楽に構えていた。だが、この時俺はもっと真剣に考えておくべきだったのだ。「傭兵」というものは、完全武装しているからこそ抑止力として働くのだし、非武

装の傭兵なんて役立たずもいい所なのだから。

果たして。

俺のこの準備不足と見通しの甘さは、やっちまったと言わざるを得なかったのだった。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　会議の席　『勇者』の底力２

（……マジかよ…）

感じた違和感を確かめて、俺は心の中で頭を抱えた。

気付いた時は、事態は既に手遅れだった。少なくとも、俺はもう無理だと思った。《トリック・クラウンズ・シェイド》によって猫（ケ）妖精（ツトシー）に化けた（といっても、カーソルをフォーカスすれば俺が音楽（プ）妖精（ーカ）であることはすぐにばれてしまうのだが）俺の頭の三角耳が、絶望に落ち込んだ気持ちを表してかぺたりと伏せられる。

ああそう、俺の外見は今、ケットシーだ。つまり、誠に不本意ながら、俺の頭には三角耳が生えていてケツからは尻尾が伸びている。外見を確認することは、していない。断固したくない。だが、「スッゴ～イ、カワイ～！」とわめきやがったアリシャは許さん。側近がいなければチョークスリーパーの刑だ。

まあ、そんなことはどうでもいい。心の底から、どうでもいい。

今急遽対処するべき問題は。

「……皆、すぐに武装してくれ。近くから、かなり多くのプレイヤーが接近している。ここのメンバーを狩りに来ているのは明らかだ。急げっ！！！」

つつがなく終わりそうだった調印式。その会議に、一気に緊張感が走る。

（くそっ、油断していたな…）

俺の既にマスターとなっている《索敵（サーチング）》スキルをしっかり発動していれば、もっと早くに察知できていただろう。そうしていなかったのは、完全に俺の落ち度だ。シルフもケットシーも知らない仲ではないらしく（俺は知らんが）調印式は和やか、何かが起こるとは思えなかったから、気が緩みきっていた。

慌てて反応した会議の参加者、総勢十四人がそれぞれの武器を構えた頃には、既に、

「ちっ、さ、火妖精（サラマンダー）…なんて数だ…っ！」

「な、なんでここが……っ！？」

大挙して押し寄せてくる赤い輝きが目視できる程になっていた。その数、五十を優に超えるだろう。こちらも相当に精鋭だろうが、流石に戦力差は圧倒的だ。そしてそのスピードからして、今から全力で随意飛行で逃走を図ったところで、逃げ切ることは恐らく不可能と思われる。

それが分かったのだろう、参加者の数人が絶望的な呻きを挙げる。

逃がさなければ。

俺が咄嗟にそう考えて、あらかたのアイテムを渡してきてしまったストレージを開く。どうする。遠距離攻撃も、目晦ましも、陽動も、できそうなアイテムは無い。当然、俺の生身ステータスでは、どれも実行できるわけが無い。

（くっそ、っ！？）

だが。

（……？…なんだ？）

直後、なおも続く《索敵》と俺の鍛えられた聴覚が、もう一つの羽音を捕えた。

◆

サラマンダーの無数の羽音に紛れた、一際強い弦楽器のような高音は確か、シルフのもの。もう一つ、管楽器に似た響きは、スプリガンのそれだったはず。これだけの激しく高い羽音、『随意飛行』の更に限界に近いレベルの速度だろう。

そんな音には気付けない皆が、強張った顔でサラマンダーの大群を睨みつける中で。

その響きが、近づいて。

一人の妖精の黒い影が、近づいて。

「っ！！？」

巨大な爆音と共に地面に衝突し、派手に土煙を上げた。

「双方、剣を引け！！！」

同時に聞こえる、バカでかい声。

この世界ではＳＡＯの世界とは違って、声は向こうの世界の自分と一致するものではないし、プーカに至っては歌うために設定で弄ることさえできる。そりゃそうだ、こっちの世界の外見とあっちの世界の外見が一致するとは限らないしな。ただし俺の声が、こっちの世界の姿形に非常にマッチしたそれなのは頂けないが。

だから、この声は、聞き覚えは無い。

聞き覚えは無い、はずなのに。

俺はそれが、誰の声か、確信を持って断言できた。

誰にも聞こえない、小さな声で呟く、その名は。

「…キリト…！」

懐かしい、『勇者』の名だった。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　会議の席　『勇者』の底力３（前書き）

ヤ○チャ視点。そしてやっぱり原作の場面は書きにくい…。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　会議の席　『勇者』の底力３

（……すげえ奴だぜ、ホントによ…）

心の底から、そう思う。

エギルに俺が写真を渡したのは、まだほんの三日前のことだ。つまりエギルが本人の言葉通りに翌日に写真とパッケージを渡したとしても、二日しか経っていない。二日。たったの二日で。

（あれだけの速度での『随意飛行』、それを制御できる精神力、その速度で派手に着地できる身のこなしを、身に付けた、ってことかよ……）

俺が一ヶ月以上かかって未だに為し得ないことを、既に完璧に身につけてしまった。全く、凄まじいまでのゲーム勘…いや、ＶＲワールドへの適応力だ。成程これこそ、『勇者』の力だ。堂々と声を張り上げるそのクソ度胸も健在らしく、嬉しい限りだ。

その馬鹿な言動か、それとも迫力に押されたか。

五十人以上のサラマンダーの強襲部隊が道を開けた。ゆっくりと開く人垣の中から出てくるのは。

「おっと、ユージーンの旦那か…」

俺がこのＡＬＯを旅した中で、最強のプレイヤー。その屈強な体を、俺が売った古代武具（エンシェント）級の重金属鎧に包み、背中には豪奢な大剣、《魔剣グラム》。俺と戦った時よりも更に装備を充実させ、周囲の

大人数を統率して悠然と進みでる。コイツが指揮官、ということはこの部隊、本気も本気のお遊びなしだな。

対するキリトは、…相変わらず黒いなコイツは。髪が真っ黒で肌も浅黒い影妖精（スプリガン）である上に、服装は黒の上下に黒革のコート。背中に背負った巨大な剣まで真っ黒だ。まあ、それはいいが、装備の質は流石にユージーンと比べれば見劣りする。

だがそんなことは全く気にする様子も無く、キリトが堂々と赤い巨漢を見やり。

それに対して、不敵な笑みをユージーンが浮かべ。

「オレの攻撃を三十秒耐えきったら、貴様を大使と信じてやろう」

おや、ユージーン。三十秒でいいのか？そいつは、俺より強いぜ？

「随分と気前がいいね」

応えるキリトは、飄々としたもの。音高く抜き放たれた《魔剣グラム》にも恐れる様子なく、こちらも背中に背負っていた巨大な両刃の黒剣を構える。いかにも実用性一本の簡素な剣は、かつての奴の愛剣の一つ、《エリュシデータ》を彷彿させる。

向かい合ってホバリングを始める二人を、周囲の面々が固唾をのんで見守る。

「サラマンダー領主、モーティマーの弟…リアルでも兄弟らしいがな。知の兄に対して武の弟、純粋な戦闘力ではユージーンのほうが上だと言われている。サラマンダー最強の戦士…ということは…」

「全プレイヤー中最強…？」

「ってことなるかな…。とんでもないのが出てきたもんだ」
「……キリト君……」
その横から聞こえる声は、先程まで対談していたシルフ領主サクヤと、キリトが連れてきたシルフの少女…ってなんだ、リーファじゃないか。なるほどあれだけの熟練した空戦の使い手である彼女なら、先程のキリトとの超高速飛行も頷ける。
マントを若干高く上げ、口元まで顔を隠すのは、反射的にだ。俺の顔…先日共に旅したプーカと同じ顔に気がついてカーソルを向けられれば、俺の正体がばれてしまう。勿論ここまで一緒に来たケットシーの面々は俺のことを知っているが、出来れば今は俺のことを勘付かれたくない。
特に、キリトには。
気を取り直して、再び対峙する二人を見つめ。
（さあ、見せてみろ！お前の力を！！！）
その視線の先で、赤と黒、二つの姿が激しく交錯した。
◆
（はやい……っ！）
サラマンダーという種族、そして自身の巨体を生かした重突進。相当の努力の積み重ねの上にあるだろう、完璧かつ俊敏な『随意飛行』。俺の跳躍すらも上回らんばかりの速度での、ユージーンの剣

戟。そして、それに対するキリトの素早く剣を構えた受けの動作。

いずれも、俺の地上戦に匹敵する速度。それを、地上よりも体の扱いの遥かに難しい、空中でだ。

（……『勇者』の力は健在、か……だが、）

甘い。

俺の心の中の声が聞こえたかの様なタイミングで、紅い《魔剣グラム》がその刀身を薄く揺らめかせ。

「――――!?」

キリトの構えた剣をすり抜け、その体を鋭く薙いだ。

凄まじい衝撃音を響かせて胸の中央を鋭く切り裂いた刃は、そのままキリトを地面に叩きつける。

《魔剣グラム》のエクストラ効果、『エセリアルシフト』。

物質を透過するその剣戟は、キリトの様に大剣といった重武器、或いは重武装の相手に非常に効果的だ。俺の様に何も持たずにただ回避するならともかく、あれだけの重しを抱えて広範囲への薙ぎ払いを避けるのは例えキリトでも相当に難しい。ましてや、これは空戦。体のこなしは、地上より何倍も困難だ。

地面へと衝突したキリトの、轟音を立てての派手に土煙。

（そんなもんか？キリト）

捲き上げられた土埃の中にむけて、心の中で呟く。が、同時に、それがありえないことも、心のどこかで理解していた。案の定、煙

が晴れるのすら待たずに黒い影が矢の様に飛びだす。ホバリングするユージーンへ一直線で突進、そして。

「なんだよさっきの攻撃は！」

叫び、巨剣を続けざまに叩きつける。ＳＡＯの頃に勝るとも劣らないその強烈な衝撃音を響かせる斬撃は、俺ならクリーンヒットを一撃受ければそれだけでＨＰ全部持っていかれるだろう。重装備のユージーンでも、かなりのダメージだろう。だが、

（だが、それだけじゃ、ユージーンは落とせねえぜ？）

繰り出される剣戟を、ユージーンが確実に迎撃する。俺との戦闘であれだけの身のこなしを見せただけあって、その防御にも隙は無い。抜群のパワーとスピードを誇るキリトの剣も、そうそう簡単にはそのガードを貫けない。

再び繰り出される、『エセリアルシフト』の斬撃。削られるキリトのＨＰ。

このままでは、ジリ貧だ。伝説級（レジェンダリー）の性能の差とはいえ、紛れもない敗北。

（……そんなものでは、世界樹の上には行けないぜ）

接近戦での打ち合いを不利と見てか、キリトが素早く一旦距離を取ってランダム飛行する。各地を転々と旅した俺から見ても、五本の指に入る練度の『随意飛行』。だが、ユージーンもそれを追随するだけの実力者。赤い帯を引いてのスライスで一気にその距離を詰め、力強く斬りかかる。

さあ、キリト。このままでは負けるぞ。
どうする。お前の力は、そんなものではあるまい。
あるだろう。お前があの世界で培った、その《片手剣》の更に上が。

俺の声が、聞こえたのか、キリトが動いた。
突き出された右手から迸る、幻惑系範囲魔法の目晦まし呪文の黒煙。
そこからの一瞬の動作は、まるで写真に切り取ったように俺の記憶に焼き付いた。

横から聞こえる、短いリーファの悲鳴。
叫ぶユージーン。唱えられる解呪スペル。
走る赤い光に、切り裂かれる黒煙。

そして。

「まさか、あいつ、逃げ…」
「そんなわけない！！！」

力強い、リーファの叫び。そうだ、その通りだ。あいつは、逃げないさ。
『勇者』は、決して逃げないもんだ。少なくともお姫様を助けるまではな。
そうだろ？キリトよ。

呼びかけは、空へ。
俺の高すぎる《索敵》スキルは、奴の動きをしっかりと捉えている。
空に輝く、最強の発光オブジェクト、太陽から突っ込んでくる、

勇壮な一つの影。

俺には見える。

その手に携えられた、あの世界の『勇者』の証たる、二本の剣が、

はっきりと。

ｅｐｉｓｏｄｅ６　会議の席　『勇者』の底力４

その繰り出される剣は、とてつもなく鋭く、速く、重く、何より美しかった。

神速で振われる二本の剣。右の黒剣の輝きと、左の白刃の煌き。

目で追うのすら困難な剣戟がユージーンの鎧を次々と打ち、魔剣の『エセリアルシフト』は二段構えの弾き（パリィ）で弾いていく。針の穴を通すような完璧なタイミングでの防御は、流石かつてあの世界で《武器防御》スキルマスターだった男の腕前だ。

「お…おおおぁぁああっ！！！」

力強く声をあげながら繰り出される連撃に、徐々に、徐々にユージーンが押され出す。だが、奴も伊達にＡＬＯ最強と呼ばれている訳ではない。なんとか押し返そうと『エセリアルシフト』で応戦、既にかなり減少しているキリトのＨＰを削りきろうと反撃する。そして、

「ぬ…おおおっ！！！」

野太い咆哮と共に、その全身から真っ赤な炎の壁が半球体状に放たれ、キリトを押し返す。俺の売った鎧のエクストラ効果だ。相手の連撃を強制的にブレイク、更には数メートルを不可侵領域として押し返すという一発技。その無理矢理作ったブレイクポイントを生かして、《魔剣グラム》が大上段に振りかぶられる。だが、

（……見せてやれ、お前の、『二刀流』を！！！）

その大上段に構えた剣が振り下ろされるより先に滑り込んだキリト。その左手の長刀が鋭く閃き、紅い剣の側面を弾く。『エセリアルシフト』を発動する前に弾かれた剣はその軌道をずらされ、キリトの左肩を掠めるにとどまる。

その隙に、キリトの右手が大きく引き絞られる。懐かしいその構えは。

（…単発重攻撃、《ヴォーパルストライク》…！）

繰り出された強烈な突きが、ユージーンの鎧の胸の中央を貫く。激しいダメージエフェクトが迸り、ＨＰが凄まじい勢いで減少していく。ユージーンがなんとか体勢を立て直そうとする…が、もう遅い。俺には分かる。キリトの左腕の、その構え。

（…四連撃、《バーチカルスクエア》、だよな！）

繰り出される美しい四連撃が虚空に二重の十字を描き出す。ゼロになる、ユージーンのＨＰ。その顔が驚愕に歪み、上体が二つにズレる。だが直後に生じた真っ赤なエンドフレイムが、その姿を一気に覆い隠してしまい、一瞬後にはもう小さなリメインライトだけが残った。

勝った。

キリトの、勝利。

その間違いなくこの世界でも最高の勝負に捲き起る拍手の中、俺はゆっくりと目頭を拭った。

◆

「いっちゃったネ…」
「ああ。こちらもすぐにフリーリアに向かおう」

キリトは、嵐のように去っていった。

――――世界樹の上に行きたい……ある人に、会うために。

その言葉だけを残して。いや、それだけではないか。アリシャの抱え持つ、大きな袋…可視化された金貨の山も一緒に残していきやがった。十万を表すミスリルの硬貨がぎっしりと詰まったその袋に、領主二人が目を丸くして中を何度も覗きこむ。その様子を見ながら俺は、

（……ってか、アレ、そんなに多かったのか…。…やべえ、俺の方が持ってる……）

内心で冷や汗をかいていた。

そう言えばエギルに説明を忘れていたが、見たところのキリトの熟練度からするに恐らく奴も謎のＳＡＯデータ引き継ぎを受けたのだろう。とすれば、この巨額の金もキリトがあっちの世界で稼いだ金だったということだ。

が、俺は知っている。アイツは実は結構浪費家で、アヤシげな剣や胡散臭い食いモンに次々金を使いまくるタチだ。その上ソロプレイ。そう考えるとゲーム終盤にエギルからなかなかの大金を受け取り、尚且つギルドの金額まで加算されていた俺の方が金額が多いの

も頷ける。

（ま、ばれなきゃいいか……）

とりあえず内心の汗を拭って、ケットシーの首都、フリーリアに向かって飛び始める一団を飛行して追う。有難いことに『随意飛行』が出来ないメンバーも（ごくわずかとはいえ）いるようでその速度は超絶飛行苦手野郎の俺でも辛うじてついていける。ついていける、はず。…正直、きつい、が。だが。

確認しないといけないことがある。

「おい、アリシャ」

「ん、なにかナ？シドくん？」

編隊を組んでの飛行の先頭を行くアリシャに（死力を振り絞ってなんとか）追いついて声をかける。いや、不意打ちしようとかそういうわけじゃないから側近の諸君、武器はしまってくれたまえ。

「キリトから貰った金額で、軍資金は足りそうか？」

「ンー…ケットシー用の装備は多分足りるんだけど、ネ……」

言葉を濁すアリシャ。やっぱり、と内心で舌打ちする。仕方ない。口を開きながら同時にウィンドウでメッセージを打ち込む。何かあったらいつでも連絡を、って言われていたし、今連絡しても大丈夫だろう。

「分かった。《竜鎧》の分の金は、俺が立て替えておく。すぐに準備に取り掛かってくれ」

「っ！？立て替えておく、って、トンデモない金額だヨ！？そん

な金額どこに、」

「奢らねーぞ？出世払いだからちゃんと返せよ？」

驚くアリシャの講義を、若干ずれた回答で誤魔化す。そんな金があるんだよ、申し訳ないことに。まあ俺の力で手に入れた金では無いので、この辺で使うのが一番正しかろう。しかし出世払いって。コイツもう既に領主だぞ、これ以上どう出世しろってんだ、と自分で自分に突っ込みを入れてしまう。

「帰り次第、《天牛車》でレプラコーン領まで向かう。確か今いる飛竜は全部で十頭、あれだけの巨大な金属鎧なら流石に運搬手段が無いと困るだろうしな。多分一日そこそこあれば『虹の谷』を経由してそのままアルンに入れるはずだ。そっちも準備が出来たら向かってくれ」

「《天牛車》はいいけド、…い、一日ダヨ？一晩中ログインするつもり！？」

「んなくらい、なんともねーよ」

何ともない。あの世界で俺は二年ログインしていたのだ。たかが一晩など論じるまでもない。

それに、キリトのこともある。さっきはそれほどでもなかったが、あいつはあのキリトなのだ。アルンに着いたらよほどのことがない限り一気に世界樹へと突っ込んでいくだろうことは、想像に難くない。出来れば何とかして誰か一日ほど足止めしてほしいものだが、今更そうも言えない。

（リーファが、一日休もうとか言ってくれればな……）

キリトと行動を共にしていたシルフの少女に想いを馳せるが、そ

れもまあ今更だ。

とにかく、今は急ぐしかない。やるべきことは多い。

送ったメッセはすぐに帰ってきた。流石ブロッサム、タイプが速いな。

『了解しました。急ぎであるならこちらで先に《天牛車》を借りて出発致しましょう。貴方は途中の中立村で追いついて貰う方がいいかもしれません。モモカさんも喜んで同行してくれるそうですので、道中は問題ないでしょう』

よし。「了解」とだけ書いたメッセージを返す。

ブロッサムはステータス構成は典型的な魔法使い（メイジ）だが、初めて俺と会った日に見せたその身のこなしと杖を使った打撃もそれなり…いや、かなりのレベルだ。モモカの音楽での支援があれば、道中のＭｏｂやそこらの雑魚ＰＫ野郎達には遅れは取らないだろう。

そして、心配そうにこちらを見るアリシャに一礼して、徐々に高度を落としていく。そのまま。

「おおおっ！！！」

足を使ってスピードを保ったまま着地、勢いそのままに走りだし、一気に加速。やっぱり俺にはどうもこっちの方が性に合っているらしい。限界までスピードを振り絞っている訳ではない上空のケットシー・シルフ混合部隊よりも速い速度で駆けだし、彼らを置き去りにしていく。

「お、おいっ、大丈夫なのかーっ！？」

「こ、ココー、『蝶の谷』のＭｏｂもーっ、弱くは無いヨーっ！？」

後ろから聞こえる、領主二人の声。その慌てた問いかけに、俺は。

「全部避けてく！トレインしてたらスマン！！！」

振りかえらずに、叫び声だけを返した。

episode6　決戦　空飛ぶ狩人

『それにしても、思ったより早かったですね』

「…あ〜ー、結構急いだんだよ……」

《天牛車》の上で、俺は大の字に転がって肩で息をしていた。この世界では数値的な疲労は見えないが、それでもわんさか湧き出るＭｏｂ共を紙一重でかわしつつ全力疾走を続ければ、体は疲れずとも脳味噌が結構なレベルで疲れる。なにせ俺が《天牛車》に追いついた時は既に猫妖精領（ケットシー）を過ぎて音楽妖精領（プーカ）に入っていたのだ。

それにしても、こうも疲れていると、こうして牛車の上で寝られるのは正直有難い。横を飛ぶブロッサムのメッセージウィンドウにも、寝たまま応える。既に土妖精領（ノーム）に差しかかろうというところだが、俺は追いついてから殆どこの寝心地のいい布天井から体を起していない。

運搬用アイテム、《天牛車》。

ＳＡＯの世界にも《馬車》、《牛車》といった大容量のアイテム運搬用動物は存在したが、この《天牛車》は実にＡＬＯらしいそれらの上位置換だった。荷車を引く勇壮な牛達の足に美しい光の毛並みがたなびいており、なんと空中を駆けることが出来るのだ。その速さはプレイヤーの飛行には到底及ばない速度だが、それでもかなりの長時間飛行できることで、今回のような長時間の旅であれば効率面で上回る。

時刻は、既に深夜をとうに回っている。

追いついてすぐに一度ログアウトして、速攻で自宅に帰ったことで俺の接続ハードはアミュスフィアに変わっている。体の動きは若干心もとないが、それは言っても仕方あるまい。まさか一晩ネカフェに泊って、翌朝牡丹さんに（ないとは思うが）失踪扱いされる…というのもぞっとするしな。

まあ、今のところ行軍は順調と言わざるを得ない。

その原因は。

『それにしても、見事なものですね。《魔譜演奏》だということを忘れてしまう美しさです』

「ホントに、な…。練習したら出来るようになるもんなんかね、アレ」

荷車の上から、下に揺れるショッキングピンクの髪を見つめる。

そう、牛車の御者用の席に座って演奏を続ける、モモカのおかげなのだ。今演奏してる曲は、《日陰者の小夜曲（セレナーデ）》。プレイヤー相手にこそ効果のない（音楽が聞こえるので当然だ）ものの、Ｍｏｂに対しては高い隠蔽（ハイディング）効果を持つ上に移動中にも使用可能、更には範囲全体を隠すことができる優れモノだ。これのおかげで俺達が襲われた回数は、まだ数えるほど。本当に楽させてもらっている…のだが。

俺は一応これでも学習する人間だ。

ついさっきのミスを、油断を、忘れてはいない。

だから。

「……モモカ。すぐにログアウトしろ。ブロッサム、《天牛車》

を地面に卸してくれ」

隙なく続けていた、既にマスターの《索敵（サーチング）》が、敵の接近を素早く知らせてくれた。

◆

「えっ！？で、でも、その、」

「モモカ。時間が無い。今ならまだログアウトして隠れれば何とかなるだろ」

この世界では、ログアウトは一瞬で可能なものではない。簡単に出来ては逃げるために即落ちというのが出来てしまうために当然だが、それでも急げば場合によっては間に合わなくもない。俺の無駄に広い索敵範囲からすれば、敵が慎重を期している今ならまだ可能性はある。

この戸惑った女に、無理にでもログアウトさせるには。

「…モモカ。一緒に来てくれて、良かった。ここからは、俺がやる。今のこれは、俺の問題なんだ」

ゆっくりと、呼びかける。

モモカとブロッサムには、今の俺の急ぐ理由を何一つ話していない。「《竜鎧》を取りに行く」と言っただけで、世界樹攻略のことも、キリトのことも、ＳＡＯのことも…勿論、「彼女」のことも。それでも俺と一緒に来てくれる彼女らには、正直感謝している。聞

いたらモモカは「だって仲間だもん」と言って笑ってくれた。そんな彼女を、これ以上俺のわがままに巻き込むわけにはいかない。ましてや。

「俺のわがままのせいで、モモカの楽器を落とす（ドロップする）なんて、絶対に駄目だ」

「っ、で、でも…」

「速く！もう時間が無い！」

「っ……」

強く、その肩を掴んで言う。モモカの分厚い丸眼鏡の奥の目が、驚きに見開かれる。一瞬の戸惑い、しかしなんとか納得してくれたらしい。怯えたような、躊躇うような動きで手が動いて、ウィンドウが操作される。よかった、ログアウトしてくれるようだ。

「…モモカ。ありがとう。《風の啼く岬》での歌、俺は一生忘れないよ」

「っっ！！！」

最後の一言にモモカの顔が泣きそうに歪んで…そのまま牛車の中に入って待機姿勢を取った。ログアウトした証拠だ。後はこの《天牛車》を、彼女が完全にログアウトするまで守りきればいい。…恐らく俺では、勝ち目はないだろうから。

《索敵》で分かる敵の数は、なんと三十に届こうかという数だった。獲物を待ち受けるかのように半円形に広がっていたその陣形から考えて、間違いなくＰＫギルド。その半円は既にその端を閉じて、俺達を包囲しつつある。

《天牛車》の御者をモモカから代わっていたブロッサムは俺がこ

れからすることを良く分かってくれているようで、《天牛車》は深い針葉樹林の前に降り立ち、そのまま中へと入っていく。さすがノーム領、この雪原は真っ直ぐで細長い針葉樹林が多くて助かるぜ。

そこまでの操作を見届けて、ブロッサムにも声をかける。

「…ブロッサムも、すぐに落ちてくれ。いいな？」

『いやです』

「……オイ」

が、返答は予想外のものだった。コイツ、俺とモモカのやりとり見てんだろうが。イライラといいかえそうと俺が口を開く前に、ブロッサムが素早くウィンドウを俺に突き付ける。

『私の最終セーブポイントは鍛冶妖精（レプラコーン）領です。このまま死んで領地に「死に戻り」すれば今より早く辿り着くことが出来ます。寧ろ今は好機です。高価なアイテムを多数持つ、貴方が先にログアウトするべきです』

「……ブロッサムのアイテムも、手作りの作品が多いだろ。いらない、なんてふざけたこと言うなよ」

『確かに私の持つ製作アイテムも安価な素材では作れない高級品です。ですが、今のこの行進とどちらが大切かという問題です。私はこちらの方が重要だと考えています』

打ち込まれるウィンドウに、ぐ、と言葉が詰まる。細い切れ長の目が、「これ以上の反論は認めません」とばかりに更に細められる。正論だ。確かに今のコレは既に領主達の行軍と合わせているために遅れさせるわけにはいかない。だが、一切それは説明していないはずなんだがな。

睨みあう。勿論、俺は落ちる気はない。
更に睨みあう…必要はなかった。

「…待った。もう手遅れだな」
『の様ですね。既に敵の羽音が聞こえます。この羽音は、ノームとケットシー、ということは』
「ああ」

間違いないだろう。ここら一帯を縄張りにする、ＰＫ集団、『空飛ぶ狩人（フライングハンター）』。
プーカ狩りを主に活動している…実に一ヶ月近くぶりの、俺の仇敵だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0265x/

ソードアート・オンライン　～無刀の冒険者～

2011年12月24日10時51分発行